彦崎貝塚2

― 範囲確認調査報告書 ―

2007年3月

岡山市教育委員会

猪牙製ペンダント（縄文時代中期）

骨角器（縄文時代前期～晩期）

彦崎貝塚2

ひこざきかいづか

― 範囲確認調査報告書 ―

2007年3月

岡山市教育委員会

序

55年ぶりとなる学史上著名な彦崎貝塚の発掘調査が実施されたのは、平成15年度・平成16年度の２年間でした。その成果は、2006年３月に刊行され、関係各方面から大変な反響を呼んだことは記憶に新しいことです。しかし、その報告書は、僅か７ヶ月間程度の作成期間しかなく、諸分野の分析を十分に行うためには極めて時間的に困難なものでした。そのため、内容的に本遺跡を多角的に評価できていませんでした。

本書は、前作に時間的制約から掲載できなかった分析等を中心に彦崎貝塚範囲確認調査報告書のシリーズ２としてまとめたものです。

人間の社会自体が多様性を帯びていることを我々は、日常的にあまり意識していませんが、いざ、数千年も前の人たちの生活の址を目の前にすると実に人間社会の多様性とともに彼らの巧みな知性を実感させられます。時間の経過と共にその当時の形や色、状況は変化してきますし、文化遺物以外は極めて残りにくいのが世の常です。気持ちや感情といった無形のものは数千年も経過すると全く違う意味に解釈される可能性もあります。そうしたことを、当時の彼らの状況に近づけるためにさまざまな専門家の先生による解析が必要となります。

温故知新という諺があらわすように、我々は過去を振り返り、それを現代的視点から解釈し、将来へ活用しなければなりません。本書が、前作とあわせてそうしたことの一助になれば望外の幸です。

終わりになりますが、本書を作成するに当たり、多くの皆様方からご協力を賜りましたことに深甚の謝意を表します。

平成19年３月31日

岡山市教育委員会
教育長　山根 文男

例　言

1．本書は、先の報告書の補遺及び継続して実施しているフローテーション成果の一部、昭和24年の池葉須試掘分の縄文時代以降の資料、考古学・自然科学的考察からなる。彦崎貝塚範囲確認調査報告書のシリーズ２である。

2．出土遺物の分類は、基本的に田嶋正憲編2006『彦崎貝塚範囲確認調査報告書』に準ずるものである。

3．本シリーズの遺物のうち、先の報告書において未掲載であった石器と骨角器に関しては、掲載番号を改めているが、遺物観察表では対象できるように明記している。

4．本書を刊行するに当たって、発掘調査機関中及び報告書作成期間からご教示をいただくとともに、次の先生方より玉稿を頂戴した。こころより厚くお礼申し上げます。

・出土人骨の人類学・考古学的分析（島根大学法文学部　山田康弘）

・動物遺存体の分析（京都大学大学院生　石丸恵利子・岡山理科大学総合情報学部　富岡直人）

・魚類炭素・窒素同位体分析（京都大学大学院生　石丸恵利子・東京大学大学院　米田　穣・独立行政法人国立環境研究所　柴田康行・独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所　松井　章・京都大学　生態学研究センター　陀安一郎）

・出土石器の自然科学分析（岡山理科大学　自然科学研究所　白石　純）

・昭和23年・24年実施彦崎貝塚発掘調査の思い出（元岡山市立犬島中学校 校長　池葉須藤樹）

5．出土遺物の整理は、田嶋正憲が担当した。

6．本書の編集・構成、本報告書掲載出土遺物の写真撮影は田嶋が行った。

7．附章４における分析試料の提供に関し、立岡和人氏、中村豊氏、小倉徹也氏、渡辺今日子さん各氏お手を煩わせました。厚くお礼申しあげます。

8．本書の執筆は、第１章から第４章まで田嶋が行った。附章は、執筆者を明記している。

9．掲載された図面類と遺物は、岡山市教育委員会（岡山市大供１－１－１）において保管している。

10．英訳は田嶋が行った。また、点検・修正を金田善敬氏（岡山県教育庁文化財課）に依頼した。

11．本契約に基づいて作成された印刷物の著作権は、岡山市に帰属する。

凡　例

1．報告書掲載の遺物には、以下の遺物について略記号を用いている。

石製品：S　土製品：C　骨角貝製品：B

2．掲載遺物の縮尺は、以下のように統一している。

土器（S=１／２）　石製品（S＝１／１）　土製品（S=１／２）　骨角貝製品（S=１／１・２／３）

3．スクリーントーンの表示は、2006年３月刊行の彦崎貝塚１に準ずる。但し、本書では、赤色顔料についてのみ二色刷（赤）で表示した。

本文目次

第１章　報告書作成の経緯と体制・・・

表　目　次

第１表　彦崎貝塚調査研究史略年表（１）
第２表　彦崎貝塚調査研究史略年表（２）
第３表　彦崎貝塚調査研究史略年表（３）
第４表　彦崎貝塚出土骨角貝製品集計表
第５表　西日本縄文時代釣針出土遺跡一覧
第６表　計測値比較一覧表

挿入図目次

第１図　彦崎貝塚出土遺物（１）（Ｓ＝１／２）
第２図　彦崎貝塚出土遺物（２）（Ｓ＝１／２）
第３図　彦崎貝塚出土遺物（３）（Ｓ＝１／２）
第４図　彦崎貝塚出土遺物（４）（Ｓ＝１／２）
第５図　彦崎貝塚出土遺物（５）（Ｓ＝１／２）
第６図　彦崎貝塚出土遺物（６）（Ｓ＝１／２）
第７図　彦崎貝塚出土遺物（７）（Ｓ＝１／２）
第８図　彦崎貝塚出土遺物（８）（Ｓ＝１／２）
第９図　彦崎貝塚出土遺物（９）（Ｓ＝１／２）
第10図　彦崎貝塚出土遺物（10）（Ｓ＝１／１）
第11図　彦崎貝塚出土遺物（11）（Ｓ＝１／１）
第12図　彦崎貝塚出土遺物（12）（Ｓ＝１／１）
第13図　彦崎貝塚出土遺物（13）（Ｓ＝１／１）
第14図　彦崎貝塚出土遺物（14）（Ｓ＝１／１）
第15図　彦崎貝塚出土遺物（15）（Ｓ＝１／１）
第16図　彦崎貝塚出土遺物（16）（Ｓ＝１／１）
第17図　彦崎貝塚出土遺物（17）（Ｓ＝１／１）
第18図　彦崎貝塚出土遺物（18）（Ｓ＝１／１）
第19図　彦崎貝塚出土遺物（19）（Ｓ＝１／１）
第20図　彦崎貝塚出土遺物（20）（Ｓ＝１／１）
第21図　彦崎貝塚出土遺物（21）（Ｓ＝１／１）
第22図　彦崎貝塚出土遺物（22）（Ｓ＝１／１）
第23図　彦崎貝塚出土遺物（23）（Ｓ＝１／１）
第24図　彦崎貝塚出土遺物（24）（Ｓ＝１／１）
第25図　彦崎貝塚出土遺物（25）（Ｓ＝１／１）
第26図　彦崎貝塚出土遺物（26）（Ｓ＝１／１）
第27図　彦崎貝塚出土遺物（27）（Ｓ＝２／３）
第28図　彦崎貝塚出土遺物（28）（Ｓ＝２／３）
第29図　彦崎貝塚出土遺物（29）（Ｓ＝２／３）
第30図　彦崎貝塚出土遺物（30）（Ｓ＝２／３）
第31図　彦崎貝塚出土遺物（31）（Ｓ＝２／３・１／１）
第32図　彦崎貝塚出土遺物（32）（Ｓ＝１／２）
第33図　池葉須試掘調査出土遺物（１）（Ｓ＝１／２）
第34図　池葉須試掘調査出土遺物（２）（Ｓ＝１／２）
第35図　池葉須試掘調査出土遺物（３）（Ｓ＝１／２）
第36図　新聞掲載記事（１）
第37図　新聞掲載記事（２）
第38図　新聞掲載記事（３）
第39図　西日本縄文時代釣針出土遺跡分布図
第40図　縄文時代瀬戸内周辺出土釣針集成（１）
第41図　縄文時代瀬戸内周辺出土釣針集成（２）
第42図　計測地点位置図

巻頭図版

巻頭図版１　猪牙製ペンダント（縄文時代中期）
巻頭図版２　骨角器（縄文時代前期～晩期）

巻末図版

図版１　１．平成16年度Ｔ23調査風景（北から）
　　２．平成15年度Ｔ14Ｄ区ニホンジカ検出状況（彦崎Ｋ２式期、北西から）
図版２　１．平成15年度Ｔ15炉５検出状況（彦崎Ｚ１式期、北東から）
　　２．平成15年度Ｔ14Ａ区灰・焼土面検出状況（彦崎Ｚ１式期、北東から）
図版３　１．前・中期土器（表）
　　２．前・中期土器（裏）
図版４　１．後・晩期土器（表）
　　２．後・晩期土器（裏）
図版５　１．後期無文土器①
　　２．後期無文土器②
図版６　１．土器底部
　　２．不明土製品
図版７　１．石器①
　　２．石器②
図版８　１．骨角貝製品
　　２．池葉須試掘調査出土遺物（縄文時代以降）

第1章　報告書作成の経緯と体制

第1節　経　　緯

平成17年度に刊行した『彦崎貝塚範囲確認調査報告書』（以下、彦崎貝塚1とする）は、国庫・県補助を受けて平成15年度・16年度に実施した範囲確認調査の成果としてまとめたものであった。しかし、市町村合併によって、当該事業の開始時期は、平成17年7月1日となり、年度当初から3ヶ月ほど遅れた日程的に厳しい状況での整理、報告書作成事業であった。そのため、現地調査以外の自然科学分析やフローテーションなど残された時間内では、到底全ての報告をできないことは確実であった。したがって、先の報告書の自然科学分析の中うち、現在まで継続して分析が進められてきた研究がある。そして、今回、多忙にもかかわらず玉稿を賜った先生方に厚くお礼申し上げます。

今回は、継続して進められてきた分析の報告のほか、新たに考察が加えられた研究も掲載されている。さらに、フローテーション成果の追加報告もなされている。縄文時代の貝塚の調査は、現地調査よりも、その後の整理のほうに費やされる時間のほうがはるかに長い期間に及ぶ場合がほとんどである。それは、経験的に現場と整理を当初から両立させて進行しても、圧倒的に整理のほうに時間がとられる。ひとつの遺跡を客観的にしかも多角的に解析するには、考古学と自然科学が諸分野で建設的な関係を築くことが重要である。また、どのような形をとろうとも継続したデータの公開ということも重要な公務であり、持ち帰った全ての資料（試料）の分析が完了するまで継続させなければならない。こうしてこのシリーズ2を刊行したのである。したがって、分析が完了するまで継続して本遺跡に関する資料（試料）解析の成果は、その都度条件が整いしだい公表される予定である。

第2節　体　　制

本書作成のための整理作業は、主として平成18年4月～12月にかけて岡山市埋蔵文化財センターにおいて田嶋が行ったものである。

指導・助言

文化庁　　坂井秀弥（文化庁記念物課主任文化財調査官）
　同　　水ノ江和同（文化庁記念物課文化財調査官）
岡山県教育庁　高畑知功（文化財課長）
　同　　光永真一（文化財課総括副参事）
　同　　小林利晴（文化財課主任）

事業主体　岡山市教育委員会教育長　山根文男

彦崎貝塚確認調査対策委員（五十音順）
委　員　　稲田孝司（岡山大学教授）

同	亀田修一（岡山理科大学教授）
同	肥塚隆保（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長兼任京都大学大学院人間科学部教授）
同	小林博昭（岡山理科大学教授）
同	西川　宏（日本考古学協会会員）※平成19年１月31日逝去
同	間壁忠彦（倉敷考古館館長）
事務局	平松省三（岡山市教育委員会文化財課長）（平成18年４日１日から）
	出宮徳尚（岡山市教育委員会文化財課参与）
	神谷正義（岡山市教育委員会文化財課文化財副専門鑑）
	草原孝典（岡山市教育委員会文化財課主任）
調査員	田嶋正憲（岡山市教育委員会文化財課文化財保護主事）
経理員	柿本貴子（岡山市教育委員会文化財課主事）
出土遺物整理等事務員	上地洋子　大山知子　中川智子　西本尚美　服部悦子　細川祐希　山田信子　和田大作（平成17年度）

本書を作成するに当たり、次の方々と諸機関にご教示をいただくとともに、資料実見、文献検索等において便宜を図っていただきました。厚くお礼申し上げます（順不同、敬称略）。

大下　明　犬飼徹夫　立岡和人　渡辺今日子　中村　豊　岡田憲一　千葉　豊　冨井　眞　大野　薫　小倉徹也　池葉須藤樹　間壁葭子　神原英朗　高橋　護　広島大学大学院文学研究科考古学研究室　古瀬清秀　竹広文明　建部町教育委員会（平成19年１月22日市町合併により、現岡山市教育委員会建部分室）　倉敷埋蔵文化財センター　福本　明　鍵谷守秀　小野雅明　藤原好二　藤原憲芳　岡山大学文学部考古学研究室　松本直子　加藤賢二　小濱　学　岡山県古代吉備文化財センター　鈴木康二　財団法人かながわ考古学財団　和歌山県教育委員会　徳島大学埋蔵文化財調査室　紀の川市教育委員会　財団法人大阪府文化財センター　山陽新聞社　岡山県立図書館　古市秀治　増野晋次　北浦弘人　大塚達朗　中村友博　中村利至久　安田幸永　大西雅也

第２章　出土遺物の概要

第１節　範囲確認調査出土遺物

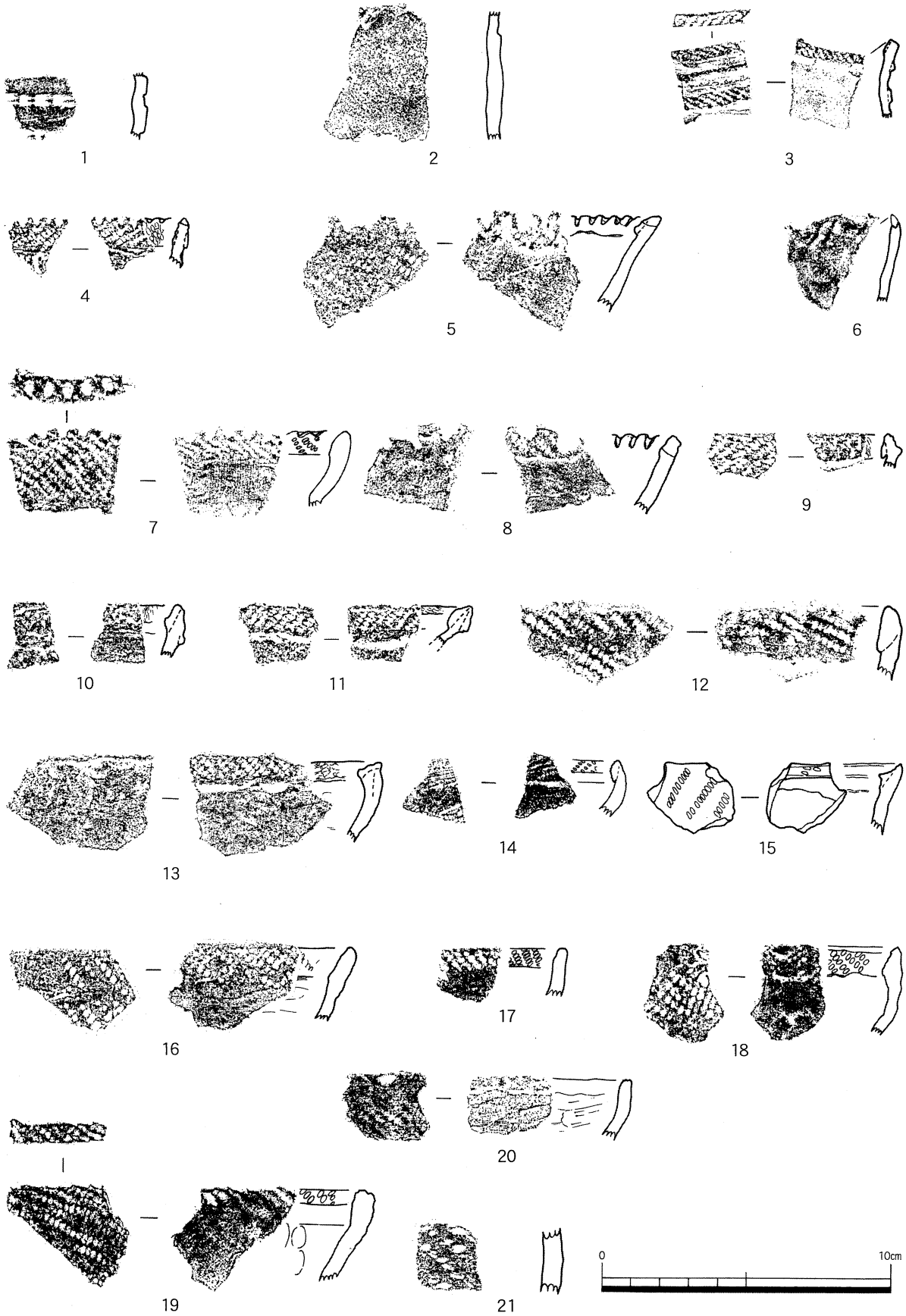
前章で述べたとおり、本書では、彦崎貝塚１に時間的な制約から掲載することができなかった遺物を可能な限り掲載した。

（１）縄文時代前期の土器（第１図・第２図）

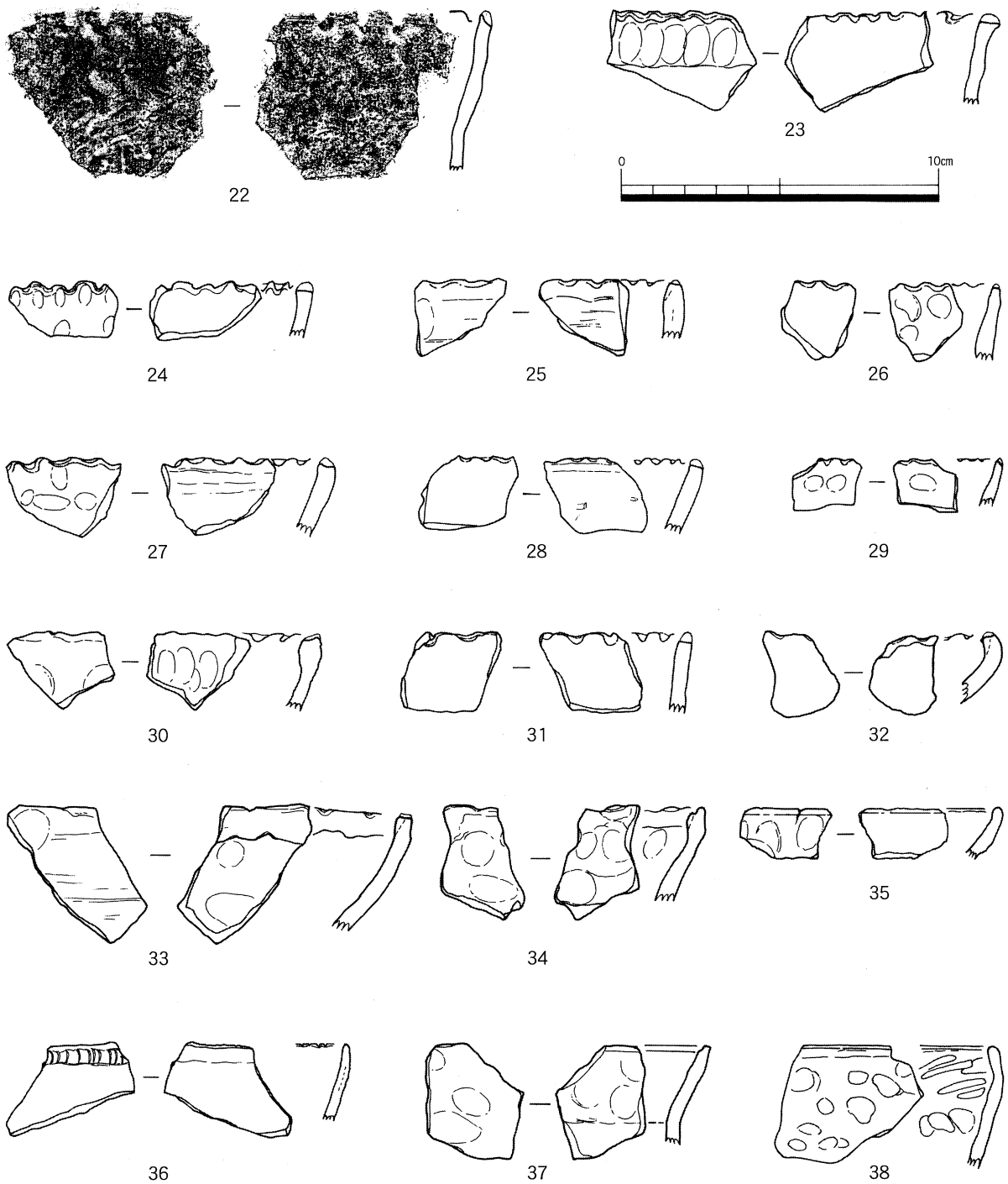
１・２は、前期Ⅲ群土器である。３～４㎜の薄い器壁で、内外ともナデ調整である。内面は、外面に比べ指頭圧痕が顕著である。１の外面には、浅い生爪痕跡が認められる。１は、口縁部外面に横位の連続押引刺突を施し、２は、下弦の連弧状に連続押引刺突を施す土器である。２点とも口縁端部を欠損しているが、紛う事無き彦崎Ｚ１式土器である。

３～38は、前期Ⅳ群土器である。３～21は、縄文が施文されるもので、22～38は無文土器である。３～15は、明確に粘土紐の貼付け痕跡が確認できるものである。３は、Ｔ27の間土層にめり込む形で検出されたものである。器壁は３㎜程である。黄褐色の器形は、すらりと伸びたやや外反する波状口縁を呈し、胴部でやや張るスレンダー形である。内外面はナデ調整である。外面には、生爪痕が認められる。紋様は、無文地に口縁部から幅広で高さのない粘土帯と幅狭の粘土紐を貼り付け、口唇部からのＬＲと口縁部外面のＲＬが二本撚りの小さく良く整った節の縄文施文による羽状の効果を狙っている。粘土帯間の粘土紐は、幅狭の竹管で押引きを施さない。口唇部をシャープに角型に仕上げることと幅広で低い粘土紐を施す点、口縁部外面に集約して施文されること、生爪痕が見られることは第Ⅲ群土器からの親和性を感じられる。前期Ⅳ群３類土器である。４～８は、口唇部にキザミが施されるものである。比較的等間隔で丸棒状の工具（竹管など）を口唇部に対して並行に押し当てたものである。その時に、口唇部の両側に飛び出した粘土の余分を丁寧に処理するもの（４・６・７）とそのままにしておくもの（５・８）がある。６のように口径の大きい工具を使用する事例も見られる。９～20は、口唇部にキザミが施されない平口縁のタイプである。９～11は、口縁部内外面に粘土紐を貼り付けるタイプ。粘土紐と器壁の成す角度は、鋭角なもの（９）と鈍角なもの（10・11）がある。５類土器。12～15は、口縁部内面に粘土帯が貼り付けられ、縄文が施されるものである。６類土器である。縄文には、ＬＲ、ＲＬ両方認められる。三本撚りは見られず、二本撚りのものがほとんどである。ただ、施文に際して15のように条間を広くして施文されるものも若干認められる。16～20は、明確な粘土紐の貼り付け痕跡が観察できにくいものであるが、貼付けはなされている。16・17は、丁寧なナデ調整が見られる７類土器である。16の外面に施文された縄文は、口唇部から２cm下がったところで、施文の工程で何らかの不具合が生じたのだろうか、いったん手を休めてから施文作業を再開していることがわかる事例である。

口縁部のプロポーションには、外反するもの（３～５・15・16等）、キャリパー状を呈するもの（７・９・13・14等）、口縁端部で短く直立気味に立ち上がるもの（19・20）が見られる。



第１図　彦崎貝塚出土遺物（１）（Ｓ＝１／２）



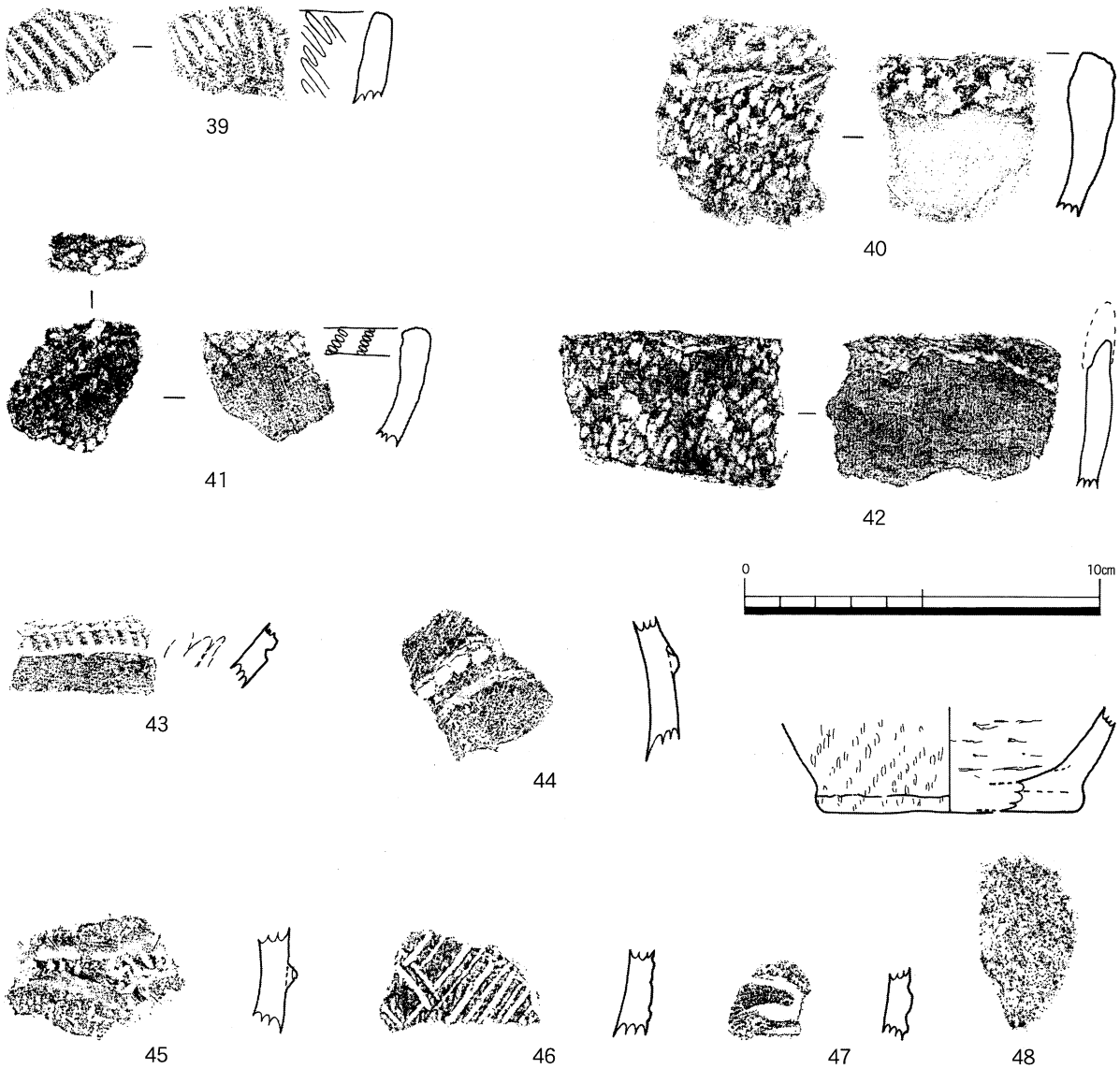
第２図　彦崎貝塚出土遺物（２）（Ｓ＝１／２）

22～38は前期Ⅳ群の無文土器である。大きく口唇部にキザミをもつもの（22～36）とキザミを持たないもの（37・38）に分けられる。キザミには、丸棒状の工具を割りと狭い間隔で均等に施すもの（23～32）とヘラ状工具で広い間隔で均等に鋭く浅く施すもの（33～36）がある。口縁部のプロポーションには、有文土器と同様に外反するもの、キャリパー状を呈するもの、口縁端部で短く直立あるいは内曲するものが見られる。36は、Ｔ27の間土層にめり込む形で検出されたものである。外面には口唇部直下に右手人差し指による生爪痕が、あたかも竹管の爪形文のように施された事例である。竹管様にスムースな施文具の移動軌跡でないのは、指の力加減をうまく操作できなかったからである。

（２）縄文時代中期の土器（第３図）

今回報告する縄文時代中期の土器は、一緒に水洗した試料中では、他の時期に比べて検出点数が少なかった。また、トレンチ調査という規制を受けているので、この検出点数が彦崎貝塚の縄文時代中期における実態を示しているとは到底考えられない。残余の試料の水洗と各種資料・試料の分類と同定を急ぎ、継続して公表する必要がある。

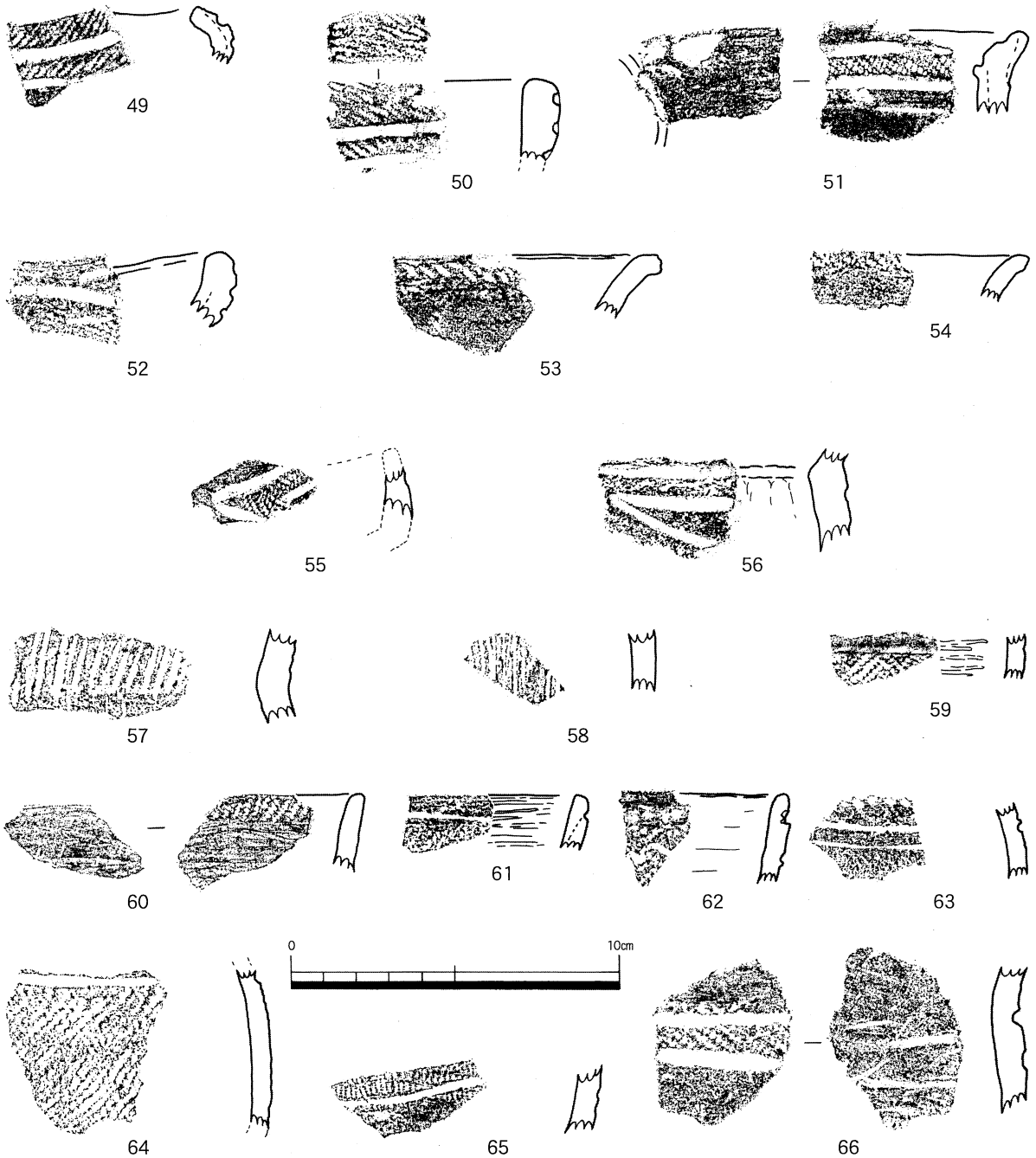
39は、中期Ⅰ群３類土器である。口縁部内外面に無節のＲの縄文を施し、やや厚めの器壁の土器である。40～45は中期Ⅱ群土器である。40～42は縄文だけのもの、43～45は、地文に縄文を持たないのもので、竹管で直接器壁に施文するものである。40は複節。46は、中期Ⅲ群土器である。船元Ⅲ式土器に特徴的に見られる縄文地に竹管状工具による沈線文で意匠が飾られるものである。47は、小破片であるが、外面に太い沈線で紋様が描出され、摩消縄文で飾られるものである。備前市の長縄手遺跡に類例が知られている[1]。中期Ⅵ群土器である。48は、底部である。硬い繊維の縄文である。



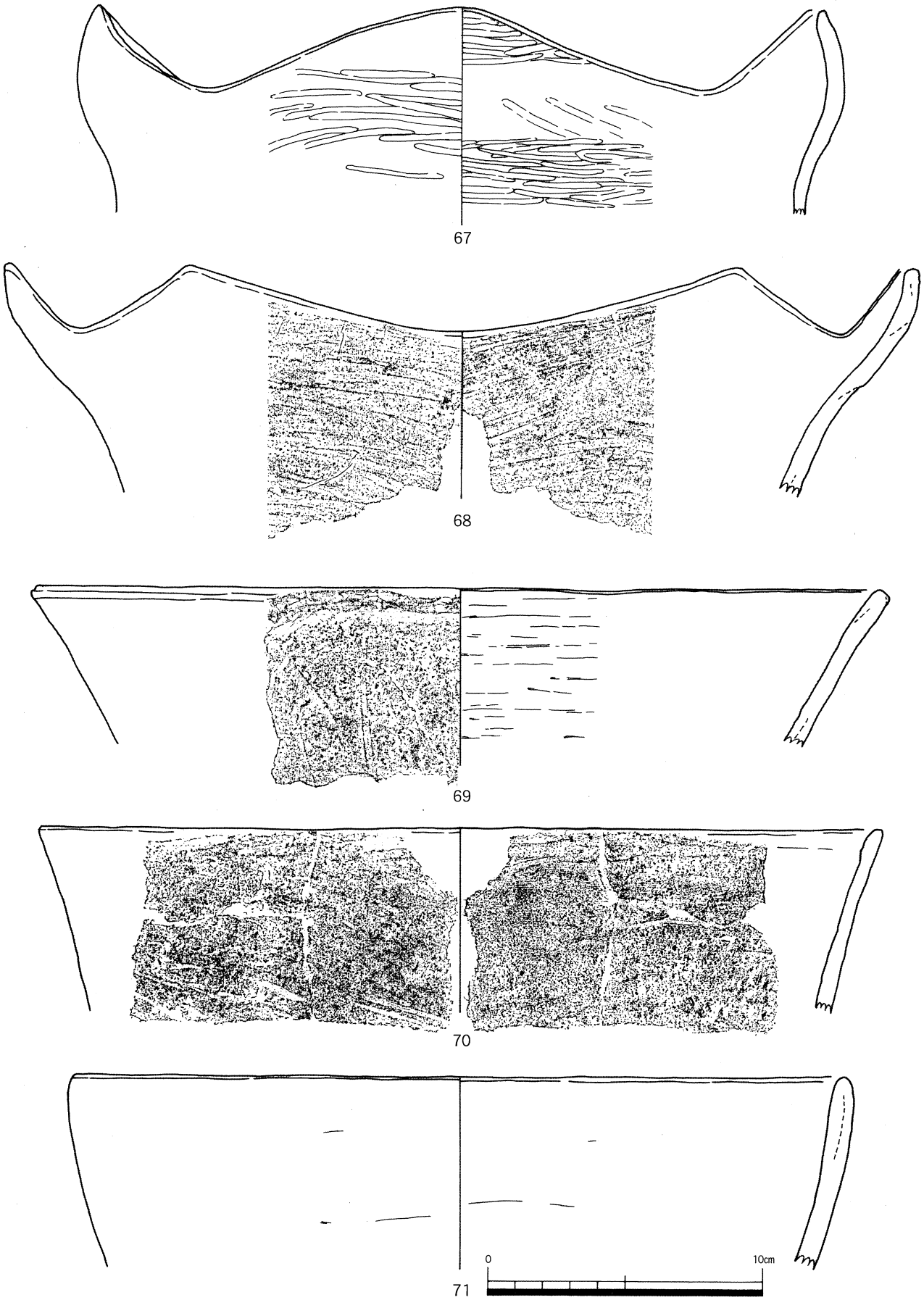
第３図　彦崎貝塚出土遺物（３）（Ｓ＝１／２）

（３）縄文時代後期の土器（第４図～第８図）

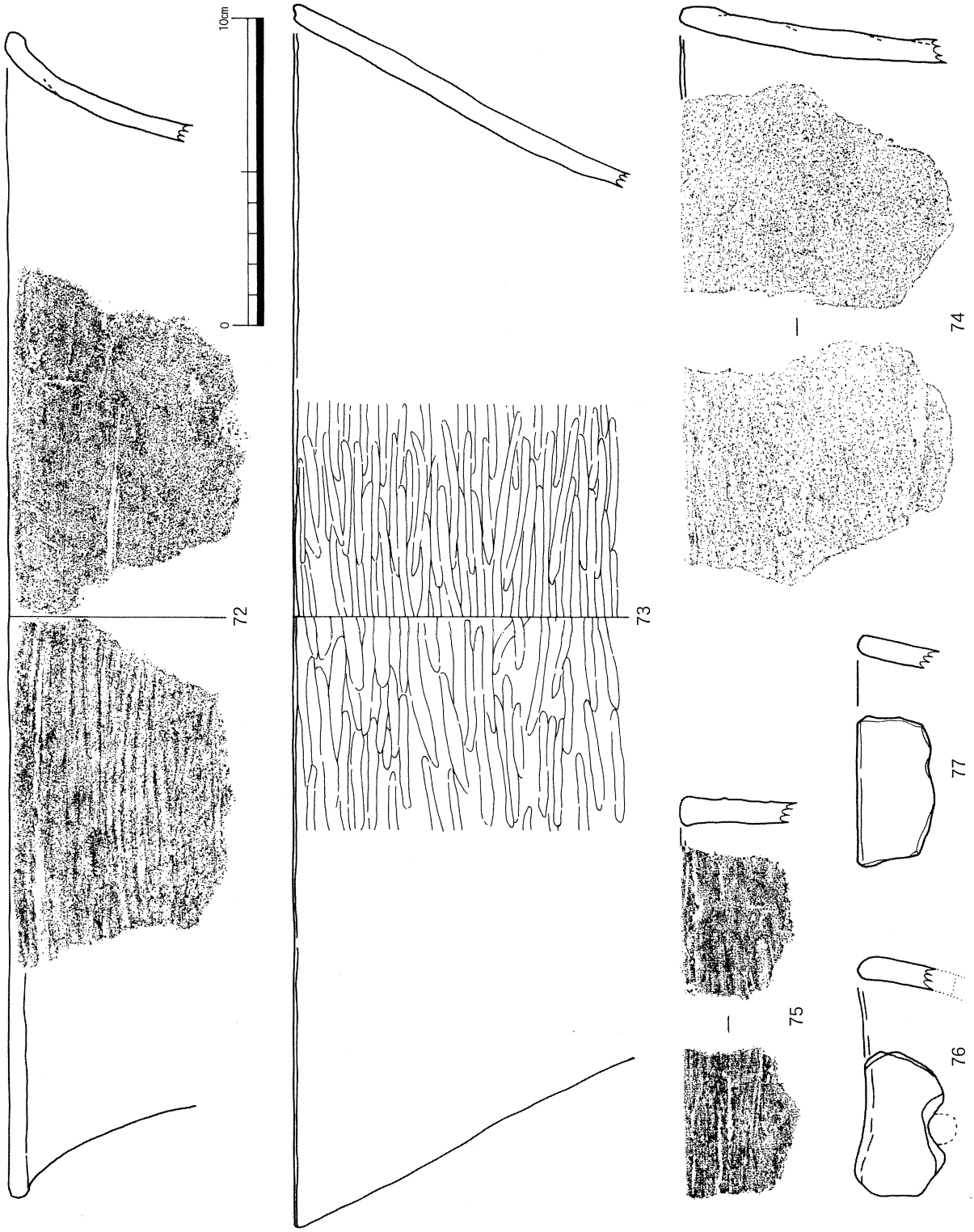
49～59は後期Ⅲ群土器である。49は、やや内曲する小波状口縁の深鉢型土器である。外面には、太い沈線を口縁部に沿って観察できるだけで二本施した後に、節の小さい比較的整ったＬＲ縄文を施す。波頂部には区画文（例えば同心円文や連続弧文など）が施されるものである。比較的丁寧なつくりである。50は、器壁がやや厚く口縁部外面に、太い沈線を口縁に沿って二本施したあと、節の小さいよく整ったＲＬ縄文で充填する。口唇部と第一沈線との間には、短沈線による副次的な加飾が認められる。また、口唇部にも同様のＲＬ縄文が丁寧に施されている。沈線の乱れもほとんどなく洗練された感じ。



第４図　彦崎貝塚出土遺物（４）（Ｓ＝１／２）



第５図　彦崎貝塚出土遺物（５）（Ｓ＝１／２）



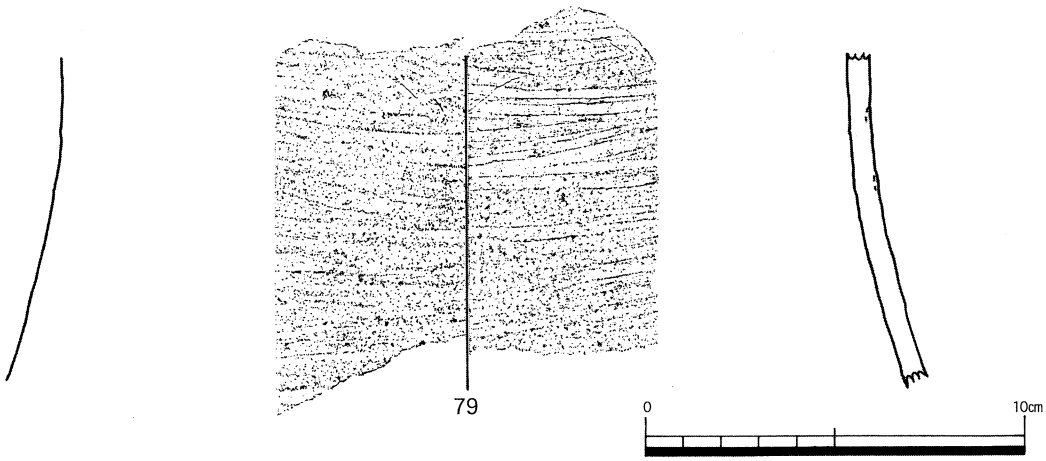
第６図　彦崎貝塚出土遺物（６）（Ｓ＝１／２）

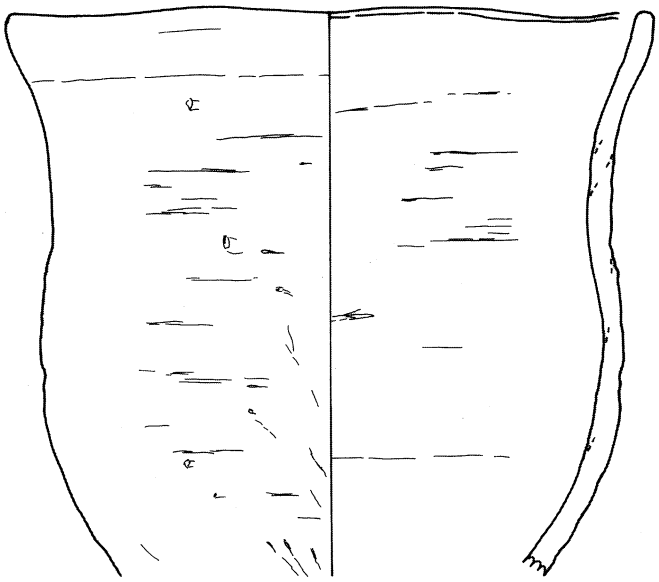
51は、直線的に外反する口縁部から屈曲した胴部に連なる器形の深鉢型土器の破片である。口縁部内面には口縁に沿って二本太い沈線が施され、その後に小さく節の整ったＲＬ縄文が充填される。おそらくこの意匠は区画文の構図をとるものと考えられる。口縁部外面には、同心円文か弧状線文が施

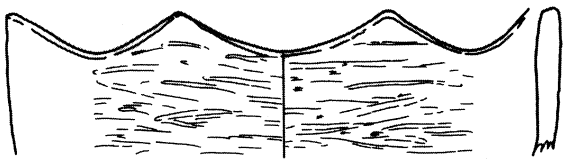
されているものと考えられる。このタイプの器形と意匠が施された土器は、従来から彦崎Ｋ１式土器の特徴として挙げられている[2]。ただ、外面に施文されるものは少ないように思われる。52は、小波状を呈する短い口縁を持つ深鉢型土器の口縁部破片である。50と同様な沈線を口縁に沿って施し、その上下に短沈線で副次的な加飾するものでその後に小さいが節が整ったＲＬ縄文を施すものである。口唇部がやや丸みを持つことと縄文が施文されないことから別固体であることは間違いない。また、49・50・52は、これまでの彦崎貝塚の調査では多くは検出されていない土器群である[3]。53・54は、大きく外反する口縁をもつ土器である。口縁端部のやや短く屈曲した口唇部にＲＬ縄文が施される。器形は、51のように外反した口縁部に屈曲する胴部がつくもので、胴部の文様にはＲＬ縄文を方向転換させながら施文し、羽状縄文的文様効果を狙ったもの（59）も多い。55は、波状口縁の破片である。太い沈線で菱形文を描出し、そこを摩消縄文で充填するものである。沈線は途切れずに連続して施されている特徴がある。彦崎貝塚１所収の108頁第82図666の土器と同一個体と考えられる。56は、やや厚い器壁で、短く外反する口縁部からやや丸みをもって張る胴部へとつながる器形の深鉢形土器の破片である。残存部分では、太い沈線で連続三角文を描出し、そこを摩消縄文で充填するものである。想像をたくましくすれば、左の方向にはもう少し連続した三角文が伸び、そのある部分に鈎状文が連結するものと推定される。こうした土器で想起されるのは、西四国地域の平城式や東部九州地域の小池原上層式土器である[4]。この点は、以前から指摘されていたことでもある[5]。57・58は、口縁部内外面と胴部に垂下条線が多用される土器である。器形は、51のように直線気味に外反し、胴部との境に明瞭な屈曲部を有するものとなろう。これらの土器は、当該期に特徴的に認められる土器である。

60～102は、彦崎Ｋ２式を主体とした後期Ⅳ群土器である。60は、広く外反する深鉢口縁部の破片である。口縁部内面にＬＲ縄文を施文する。口唇部は丸みをもつ。61～64は、受け口口縁の深鉢である。このタイプには、縄文を施文した後に、一本ないし二本の沈線でその部分を区画するもの（61・64）や結節縄文を施すもの（62・63）、擬似縄文を施すもの（65）がある。62の口縁部外面の刺突文は、ヘナタリ等の小巻貝殻頂先端を折り取ったもので施文されている。刺突内に円筒状の粘土の隆起が器表に届かない距離で観察される。また、このタイプの深鉢胴部には、66のような太い沈線に連結して下方に伸びる巻込文が施文されるものも存在するようである[6]。なお、沈線で区画するものの内、沈線を施す際に飛び出た器壁上面の粘土カスを丁寧に処理するものと除去せずにそのままにしている個体が認められる。管見による限り、前者に丁寧なミガキが施されている場合が多いようである。

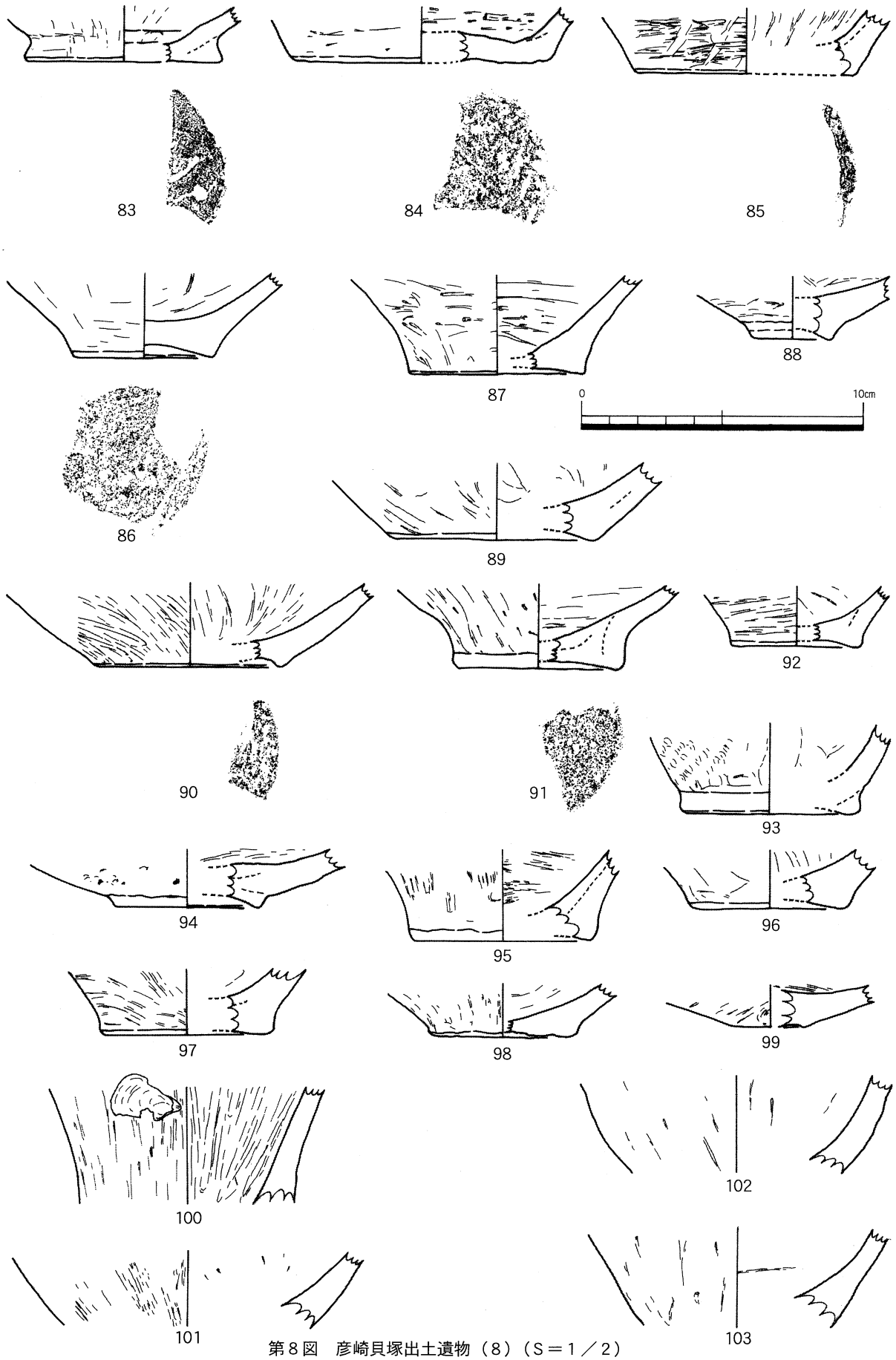
67～81は、無文土器である。67・68は、受け口口縁をなす波状口縁の深鉢形土器である。67は、有文土器でない点を除くと、丁寧なミガキを内外面に施すなどその他の諸属性はまったく有文土器と等質である。類例は少ないが今後注意しておく必要のある土器と考えられる。68は、条痕調整ののちナデである。69・70・72～77は外反するタイプである。口縁端部の作出にややバリエーションがある。すなわち、面取るもの（69・75～77）、肥厚するもの（70・72・74）、内湾するもの（71）である。この造作も有文土器と連動していると考えられる。76には補修孔が認められる。73は40cmを超える大口径である。78・79は内窄まりぎみに立ち上がる深鉢である。80～82は鉢である。80・81は波状口縁である。83～103は底部である。大きく平底のもの（83～85）、上げ底のもの（86～89）、高台状の突起及び突出部のあるもの（90～99）に分けられる。底部の拓本を掲載しているものには種子の圧痕が認められるものである[7]。調整は、縄文施文（93）のほか、ケズリやミガキ、ナデ調整のものが認められる。100には、マガキが付着しているので廃棄されてからある期間海中にあったことになる。







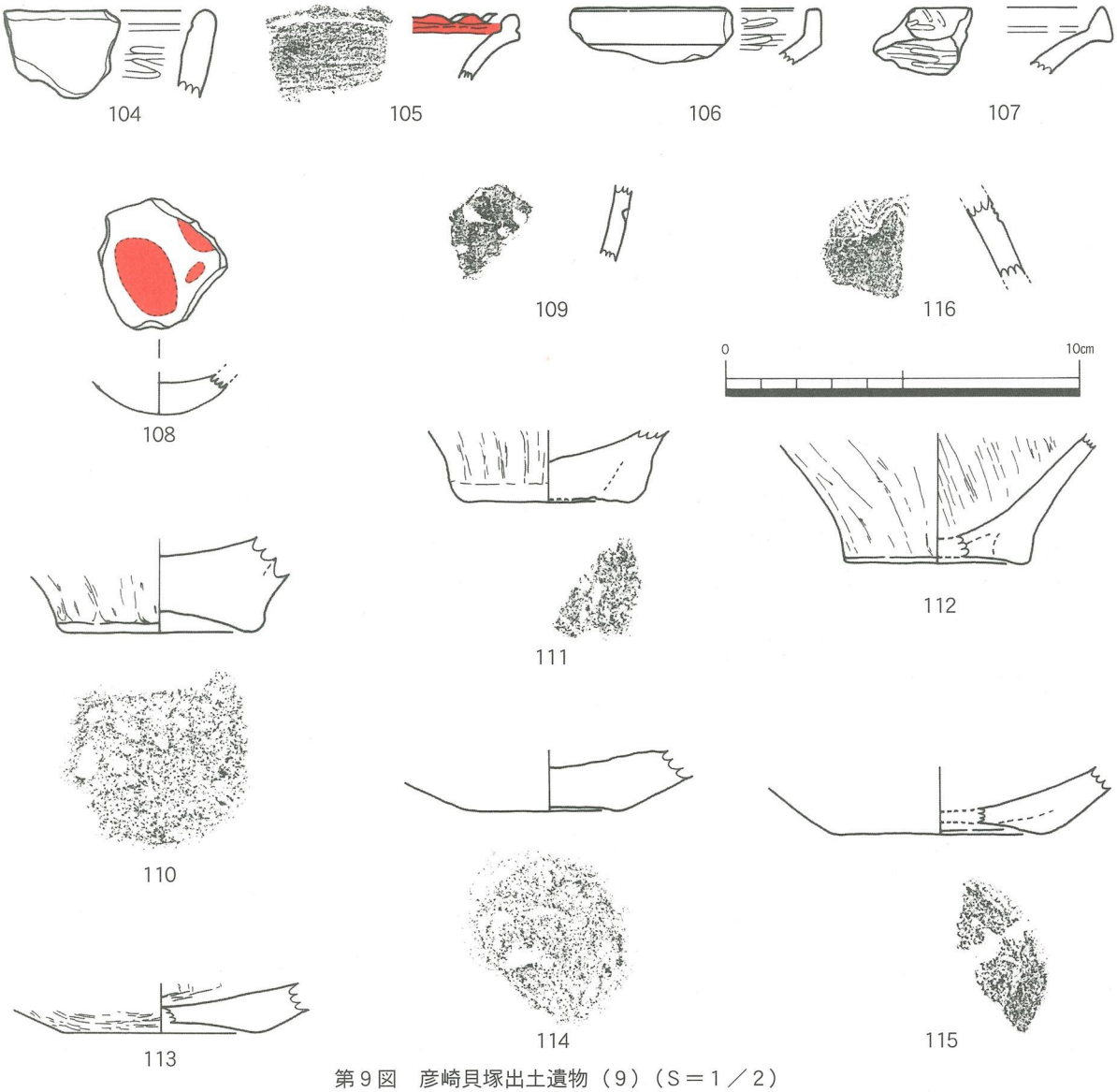
第７図　彦崎貝塚出土遺物（７）（Ｓ＝１／２）



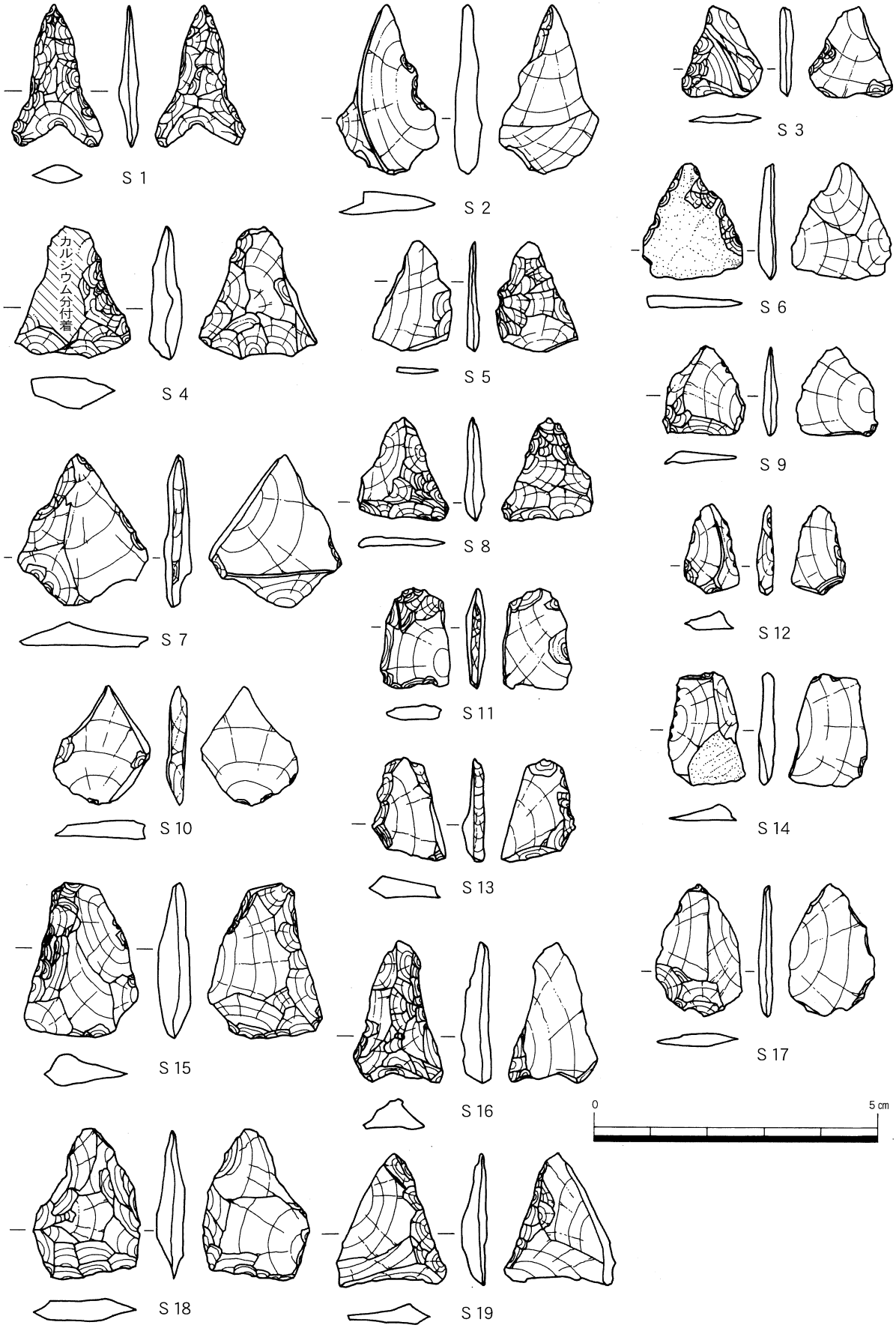
第８図　彦崎貝塚出土遺物（８）（Ｓ＝１／２）

（４）縄文時代晩期の土器（第９図）

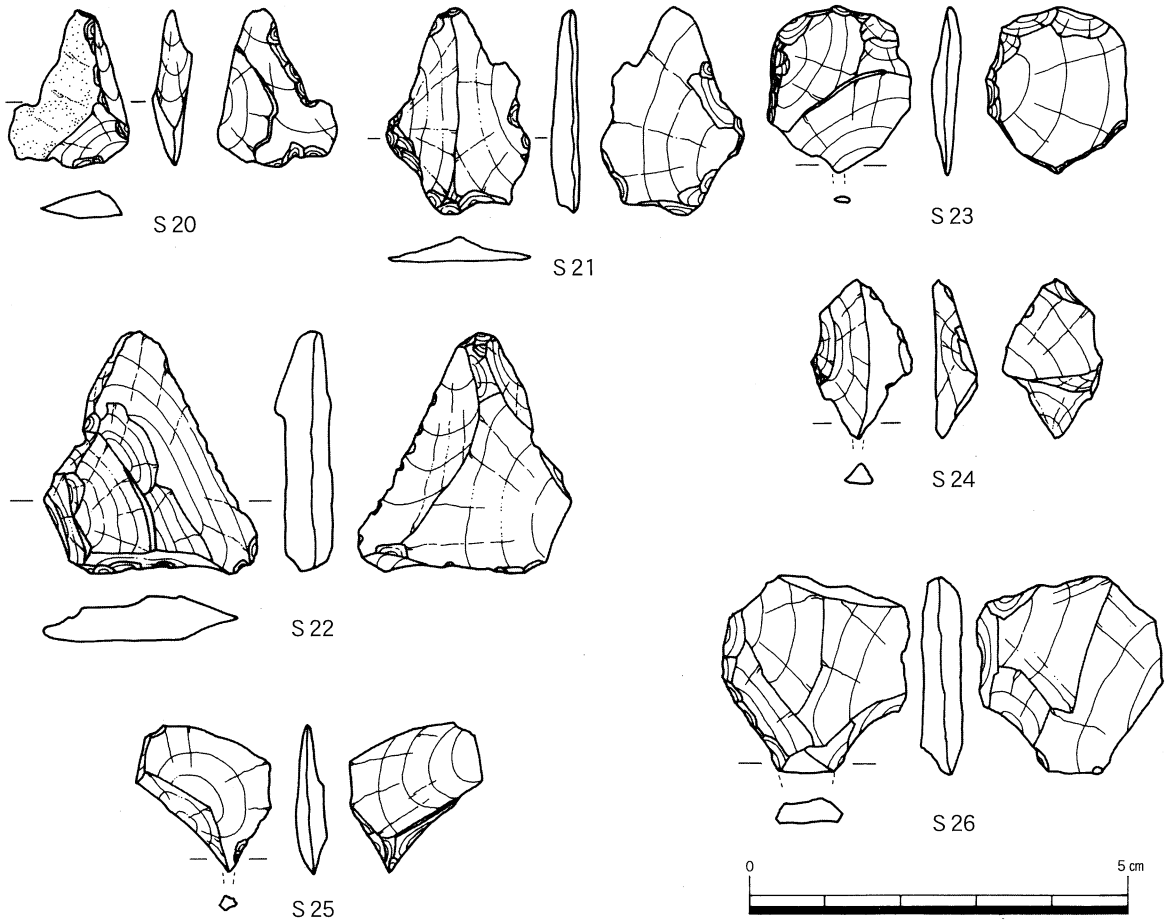
104は、内外面に浅い条痕調整を残す粗製の深鉢形土器の口縁部である。口縁部内面には、ヘラ状工具等による浅い沈線様の文様が認められる。109も粗製の深鉢の破片である。横位に小型の爪形文が施されているもので、晩期中葉の頃であろう。平成18年10月26日から11月９日まで実施した調査でも包含層から検出されている[8]。105～107は浅鉢である。いずれも丁寧なミガキ調整である。105は、波状口縁のもので口縁端部内外面に各々細沈線が一本ずつ施される。また、内外面には赤色顔料が部分的に付着している。106は、口縁端部が上方に屈曲するもの、107は、断面三角形で内面の沈線がもはや凹線状に退化したものである。108は、小型の鉢の底部で内面に赤色顔料の付着が三ヶ所で認められる。110～115は底部である。平底（111）、上げ底（110・112）は少なく、碁笥底（113～115）のものが多い。調整は、二枚貝条痕調整のものが多数を占めるようになる。底部の拓本を掲載しているものは、種子の圧痕が認められたものである[9]。116は、流水文がある弥生中期の壺の破片である。



第９図　彦崎貝塚出土遺物（９）（Ｓ＝１／２）



第10図　彦崎貝塚出土遺物（10）（Ｓ＝１／１）



第11図　彦崎貝塚出土遺物（11）（Ｓ＝１／１）

（５）縄文時代の石器[10]

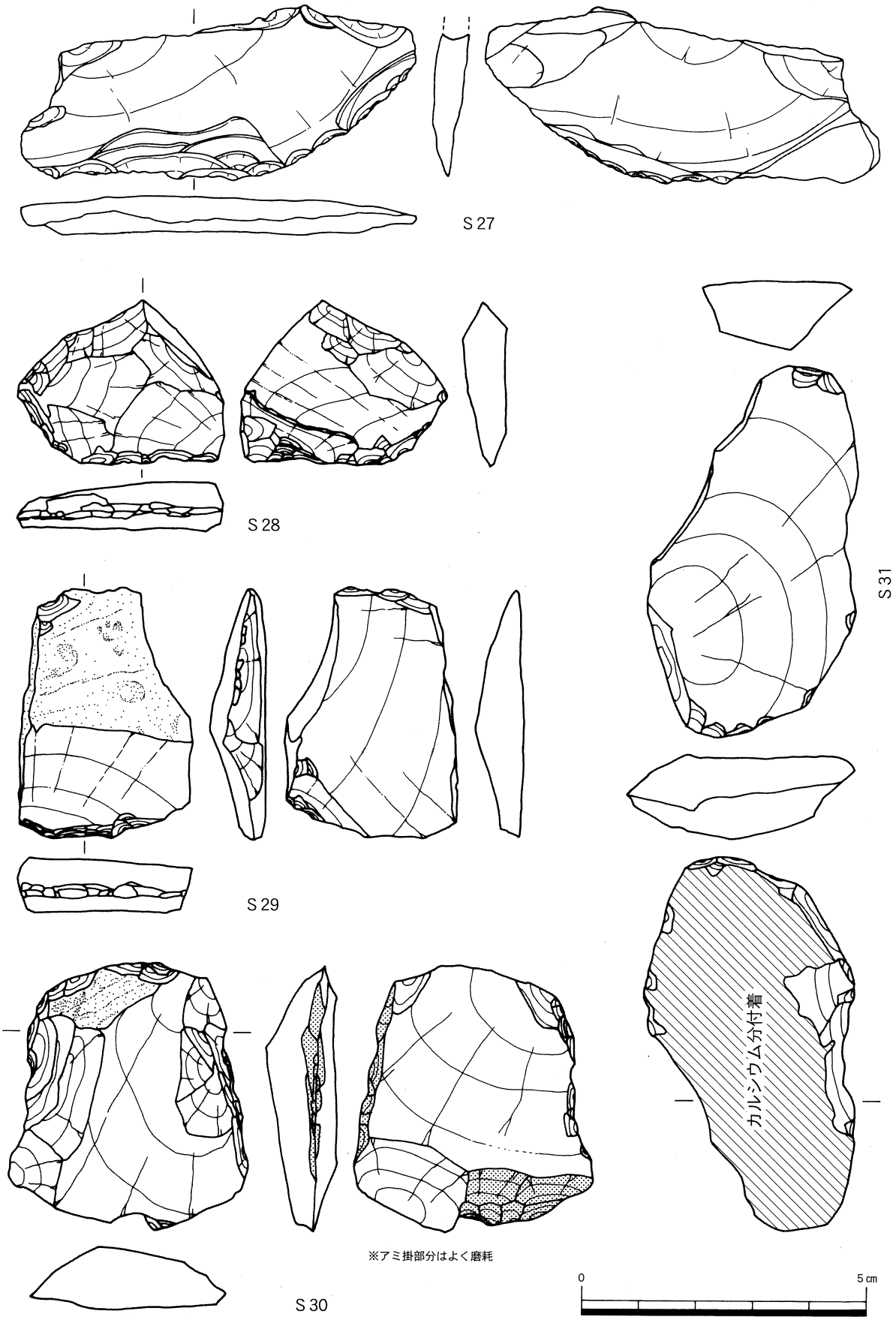
Ａ）石鏃・石錐（第10図・第11図）

Ｓ１～Ｓ22は、石鏃及びその未製品である。先ず、話を進めるに当たり基部の形態によって５つに大分類する。ここでは、石器論を展開しようというわけではなく、実態を把握するための一助としてあくまで大まかな分類に基づいた事実の記載を目的としたい。

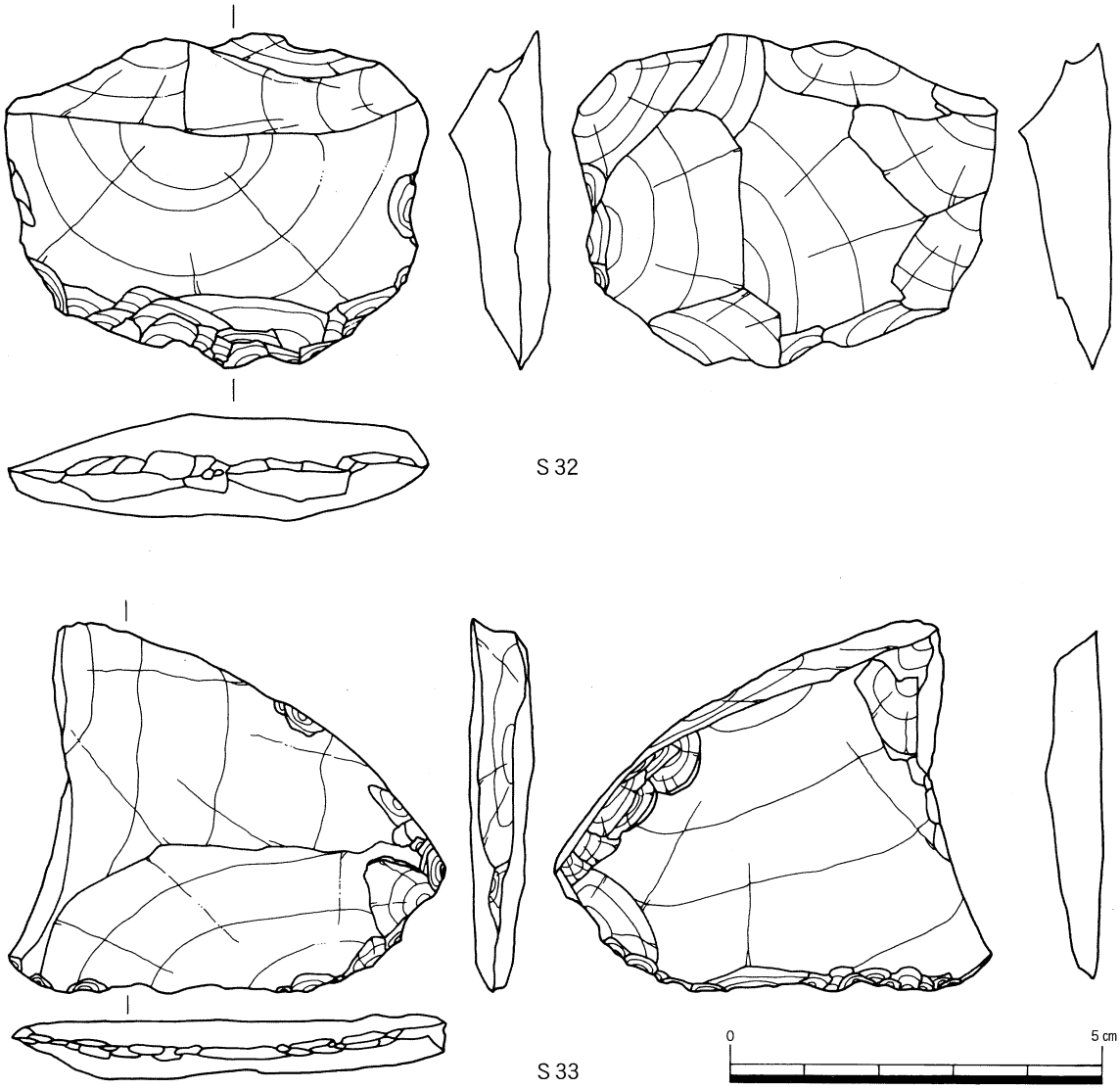
①平基タイプ・・・・・平面的に見た時に石鏃の基部が主軸線に対して直線的な形状のもの
②凹基タイプ・・・・・平面的に見た時に石鏃の基部が主軸線に対して下弦の弧状をなすもの
③尖基タイプ・・・・・平面的に見た時に石鏃の基部が主軸線に対して上弦の弧状をなすもの
④多角タイプ・・・・・平面的に見た時に多角形をなすもの
⑤変形タイプ・・・・・①～④のタイプに当てはまらないもの

以下、石鏃のタイプを示す場合には、丸数字でタイプを示すこととする。

概して、製品と未製品はその厚さに違いが見られる。Ｓ１・Ｓ２は、前期Ⅳ群に属する。Ｓ１は、②である。主軸と基部の付け根の交点に最大厚がくるものである。両面とも丁寧で細かい押圧剥離を加え、調整している。鏃先端が擬宝珠のように少しだけ飛び出している。このような造作は、磯の森

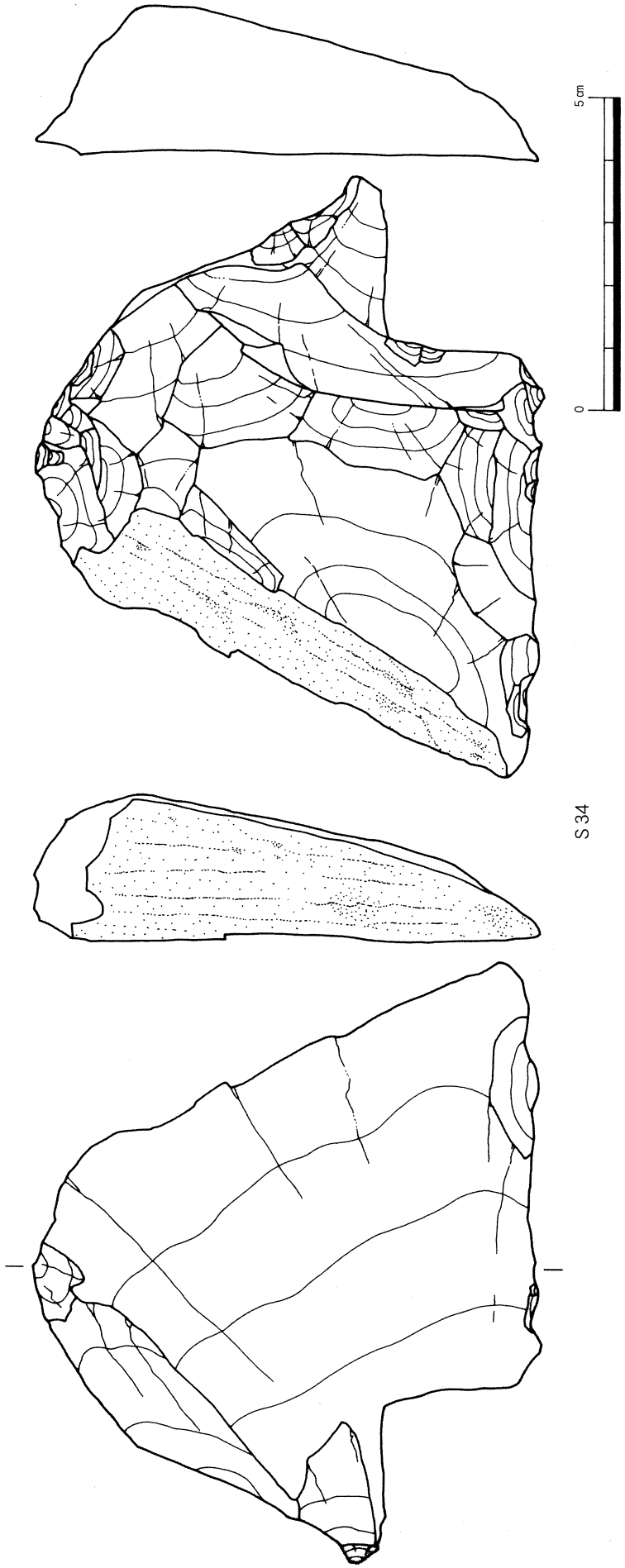


第12図　彦崎貝塚出土遺物（12）（Ｓ＝１／１）

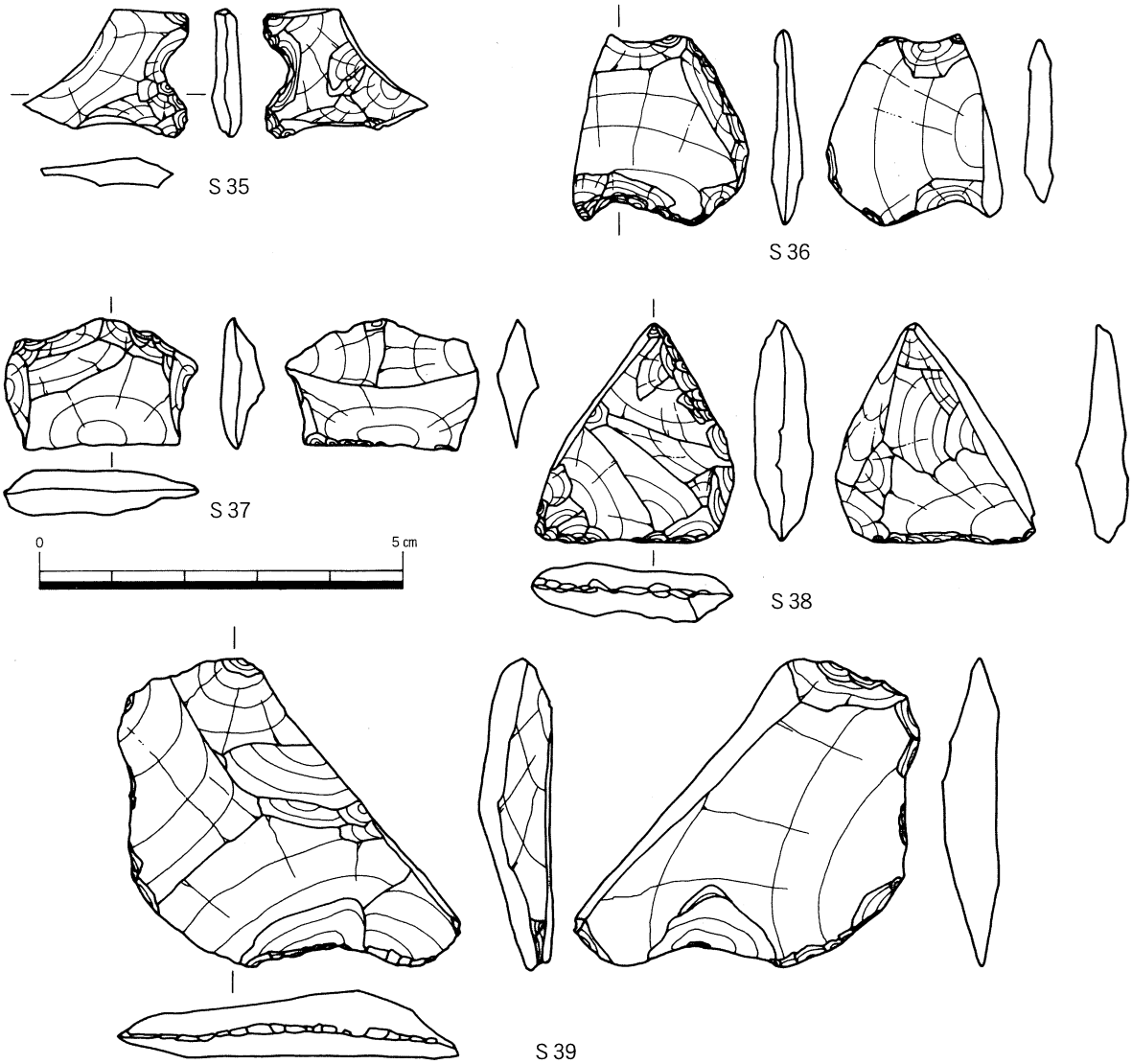


第13図　彦崎貝塚出土遺物（13）（S＝１／１）

式や彦崎Ｚ１式の石鏃で認められる特徴である。Ｓ２は、両面共に主要剥離面を２枚持つもので、先端近くと基部近くを調整しようとして止めたものである。基部近くにヒンジフラクチャーが認められ、ここに硬い石理が走るので折れたものである。③を志向したものだろう。S3・S4は、中期前半に属するものである。主要剥離面を両面とも１～３枚とってその後に細かい押圧剥離を求心的に加える。Ｓ３は②で、Ｓ４は①である。Ｓ５～Ｓ７は、後期Ⅲ群を主体とするものである。同様に主要剥離面を１～３枚用意し、次に押圧剥離を加えていくものである。Ｓ５は②、Ｓ６は①、Ｓ７は③である。なお、Ｓ６の片面には自然面が残る。Ｓ８～Ｓ19は、後期Ⅳ群を主体とするもので、Ｓ８・Ｓ９は①、Ｓ10は③、Ｓ11・Ｓ12は①、Ｓ13は②、Ｓ14・Ｓ15は①、Ｓ16は②、Ｓ17は③、Ｓ18は④、Ｓ19は②である。Ｓ14の片面には自然面が残る。Ｓ20～Ｓ23は、晩期前半に属するものである。Ｓ20・Ｓ22は①、Ｓ21は⑤である。Ｓ21のようなタイプの石鏃は過去の調査でも検出されている[11]。Ｓ22は、大型鏃である。Ｓ23～Ｓ26は石錐である。把手を作り全面を加工するもの（Ｓ23・Ｓ26）と剥片の一端を錐部にするもの（Ｓ24・Ｓ25）がある。Ｓ１～Ｓ26は全てサヌカイト製。



第14図　彦崎貝塚出土遺物（14）（S＝1／1）



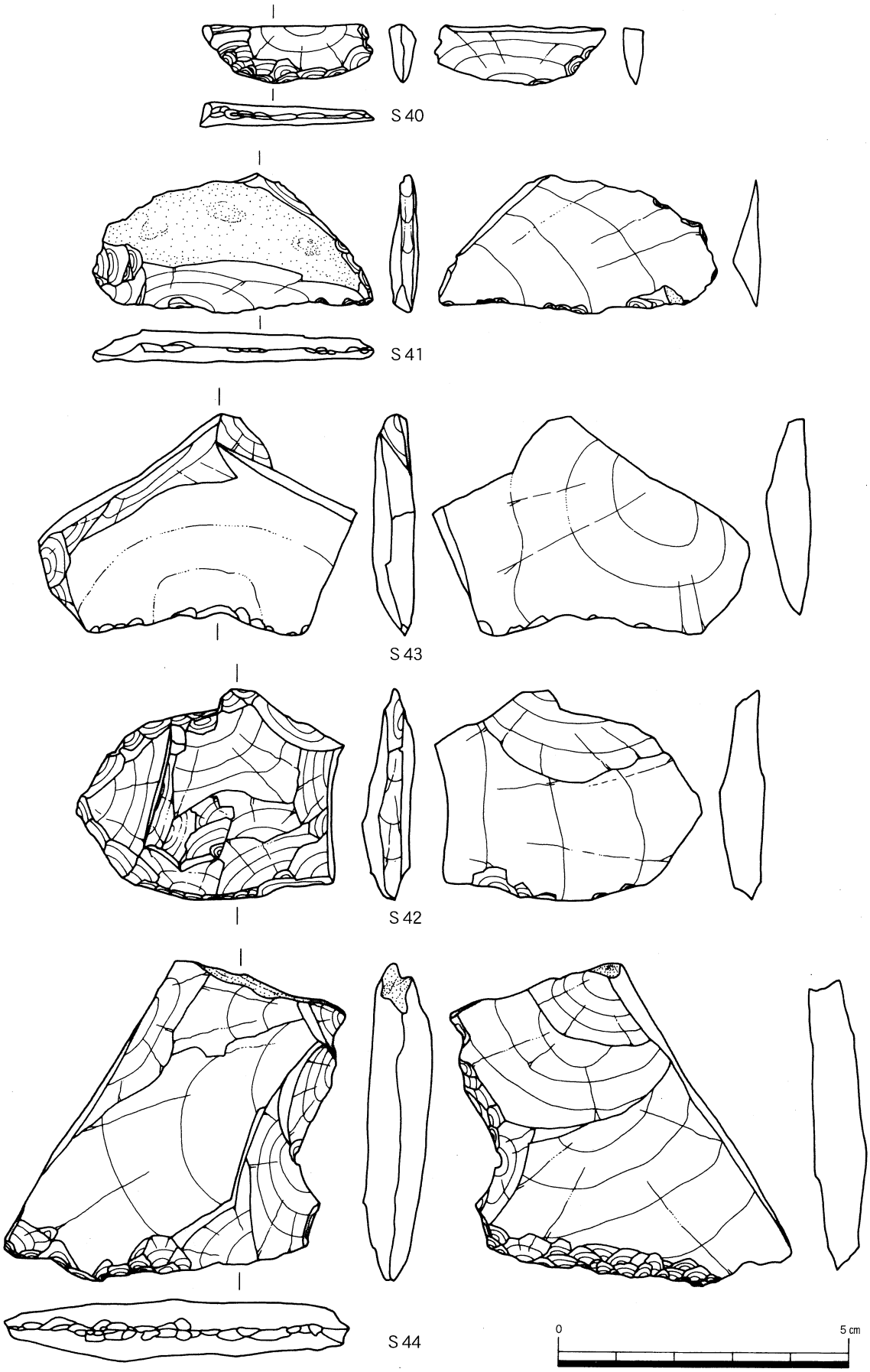
第15図　彦崎貝塚出土遺物（15）（Ｓ＝１／１）

Ｂ）削器・楔形石器類（第12図～第20図）

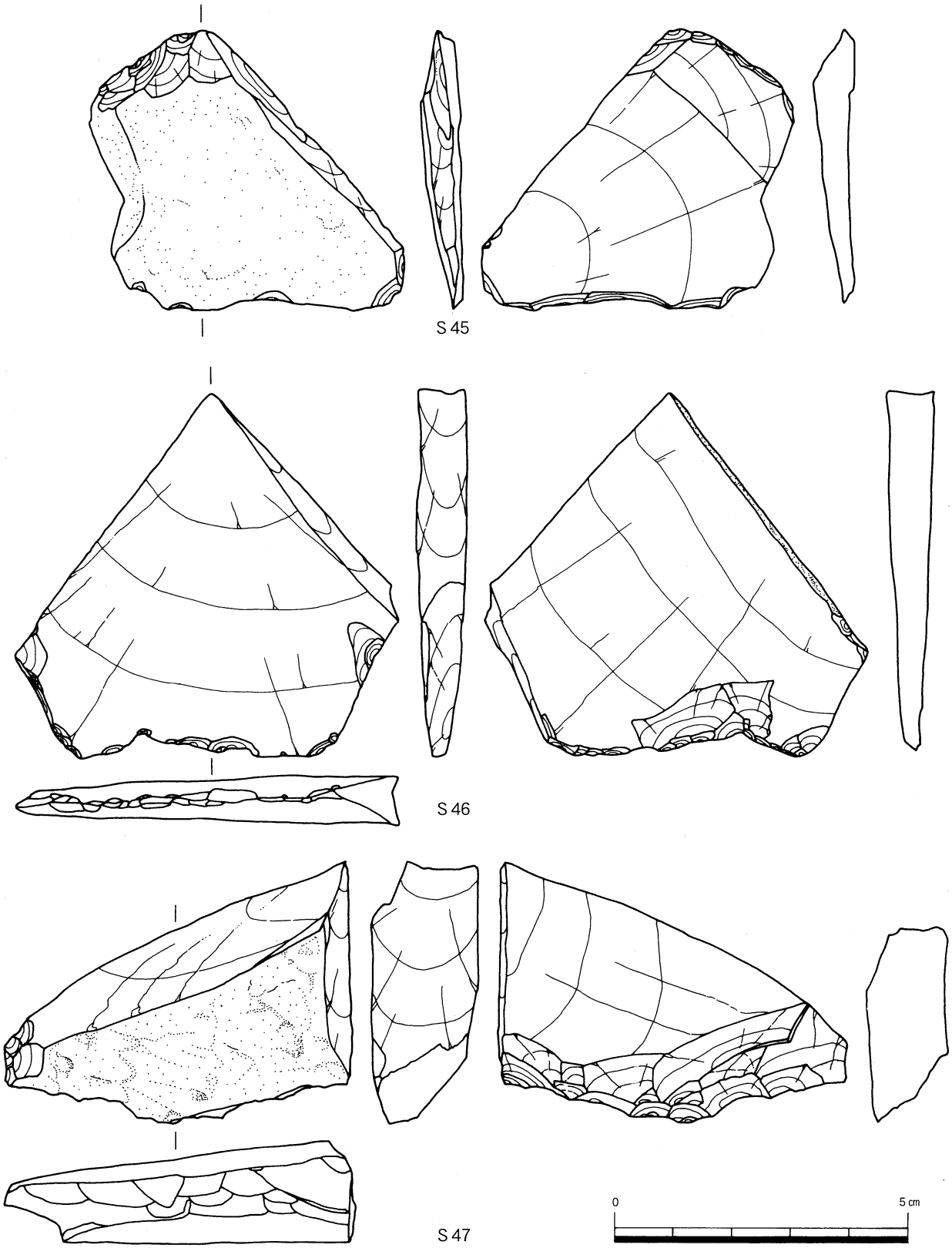
Ｓ27～Ｓ48は削器類である。連続する刃部をもつものをこの類とした。また、調整が素材剥片の全周に施されるものを①類、素材剥片の一辺あるいは二側縁、三辺に施されるものを②類、二次加工のある剥片を③類、使用痕のある剥片を④類、その外のものを⑤類として大分類しておく。大きさは形状の３cm以下が小型、３cm～５cmが中型、５cm以上が大型と便宜的に区分する。

Ｓ27～Ｓ32は、前期Ⅲ群に属する石器である。Ｓ27は、結晶片岩製の二次加工のある剥片である。削器と認定してもよいと思われるが、刃部の調整が規則的ではないのでＲＦと認定した。一部欠損している。主要剥離面を両面ともに１枚用意している。今回の報告には、サヌカイトの産地推定とともに結晶片岩混入土器の結晶片岩と他地域の試料との比較を行っている。附章３にて白石氏より詳細な報告が行われているので参照してほしい。必要に応じてその成果を適宜援用することにする。

形態的には統一的なものは見られず、縦長の台形（Ｓ29・Ｓ30）、横長の台形（Ｓ28・Ｓ31・Ｓ32）に分類できる程である。ただ、主要剥離面を同一方向から作りだすものが多い傾向にあるが、対向す

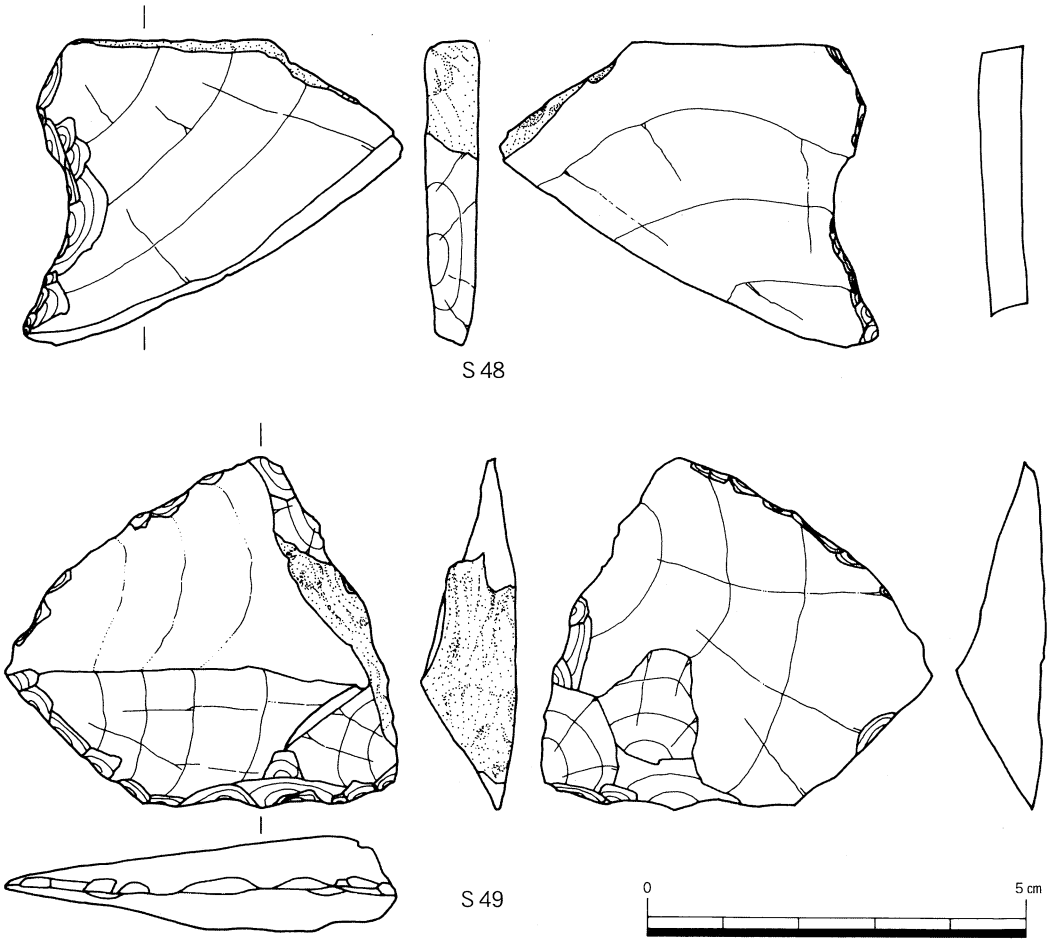


第16図　彦崎貝塚出土遺物（16）（Ｓ＝１／１）



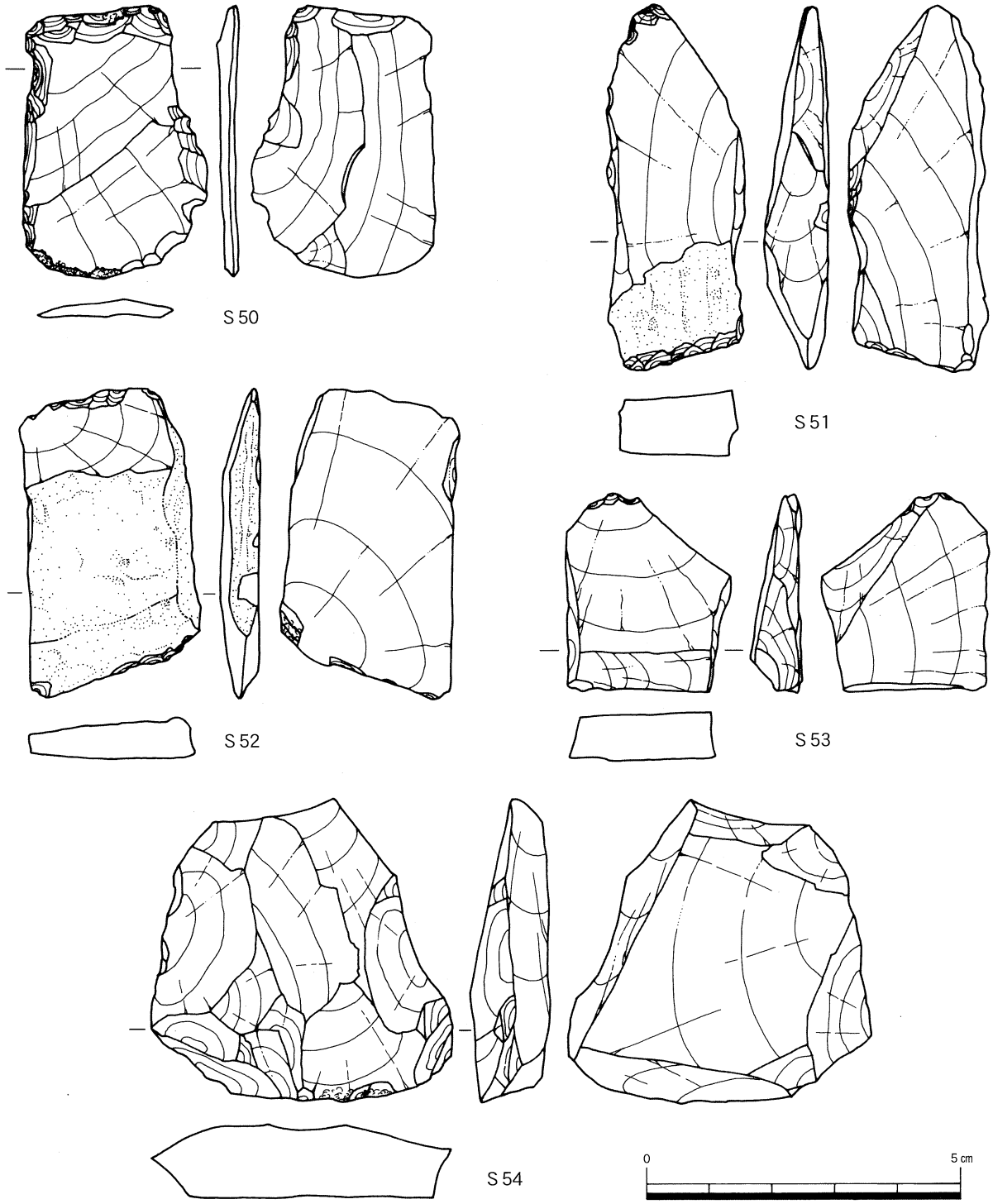
第17図　彦崎貝塚出土遺物（17）（S＝１／１）

るものもあり一様ではない。S 29・S 30の一部には自然面が残る。S 31の背面には貝のカルシウム分が付着している。S 32・S 33は②類である。S 33は前期Ⅳ群に属する。S 34は、③類である。全



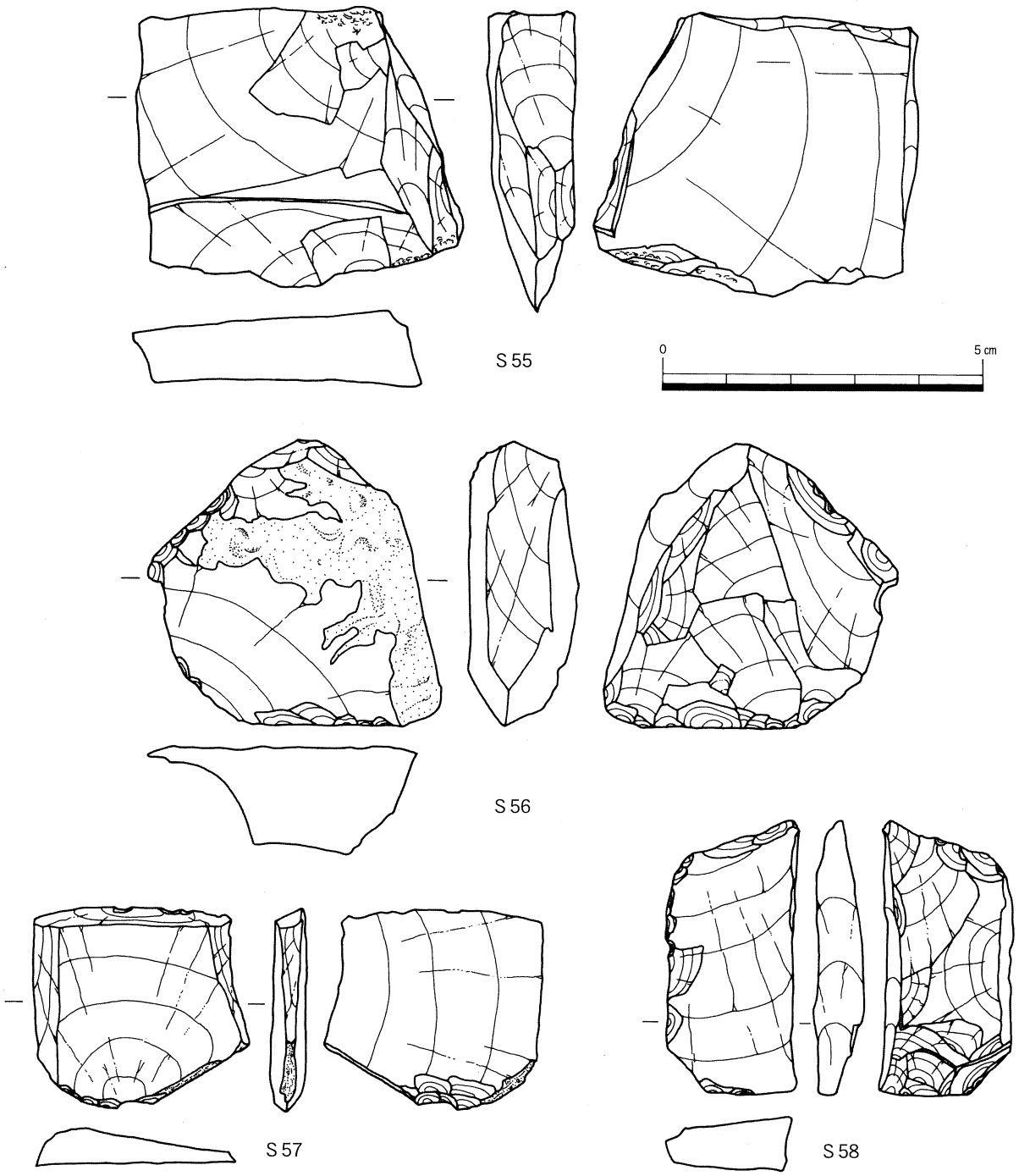
第18図　彦崎貝塚出土遺物（18）（S＝１／１）

体的によく風化している。側辺部に明瞭に自然面を残している。S 35は、両端に抉りのある小型の削器と推定される。異形石器にするか抉入削器に認定するか微妙であるがスクレイパー類に集計した。後期前半に属する。S 36も同様に一部が新しい折れによって器種認定が難しいものであるが、部分的に残存する石器の軌跡から描くイメージは石匙か抉入削器になるようであり、石匙で集計した。S 37は③類、S 38は②類、S 38・S 39は②類である。S 37～S 39は、後期前半に帰属する。S 40は、長さ約30㎜、幅約10㎜、厚さ約５㎜の小型品である。S 40・S 41は②類。S 42は④類。S 43・S 44は②類である。S 42は、刃こぼれして摩滅痕が観察されるものである。S 40～S 42が後期Ⅳ群、S 43が後期前半、S 44が後期Ⅳ群に帰属する。S 41の背面には自然面が一部残る。S 45は③類。S 46・S 47は②類。S 45・S 47の背面には一部自然面が残る。S 47は、厚さが約20㎜で均一である。切断面が見られることから、板状剥片を分割していく工程の中で、その最初の作業段階あるいは最後の段階で板状剥片の一番端に近い部分を折り取ったものと推定される[12]。また、この石器は、動物遺存体埋納土器３に近接して検出されている。動物の扱われ方と板状剥片の扱われた方が最終的に廃棄された状況で近接していることに意味があるとすれば、背景として素材の違いこそあれ、そこに一定程度の彼らの共通認識が作用した可能性も考えられよう。S 45～S 47は、後期Ⅳ群に帰属する。S 48・S 49は②類である。S 49は、三辺に調整が加えられたもので、見方によっては鏃様に走る稜線を基軸に上下に据えれば石槍の切先様にも見える。S 48・S 49の側面の一部には、自然面が観察される。



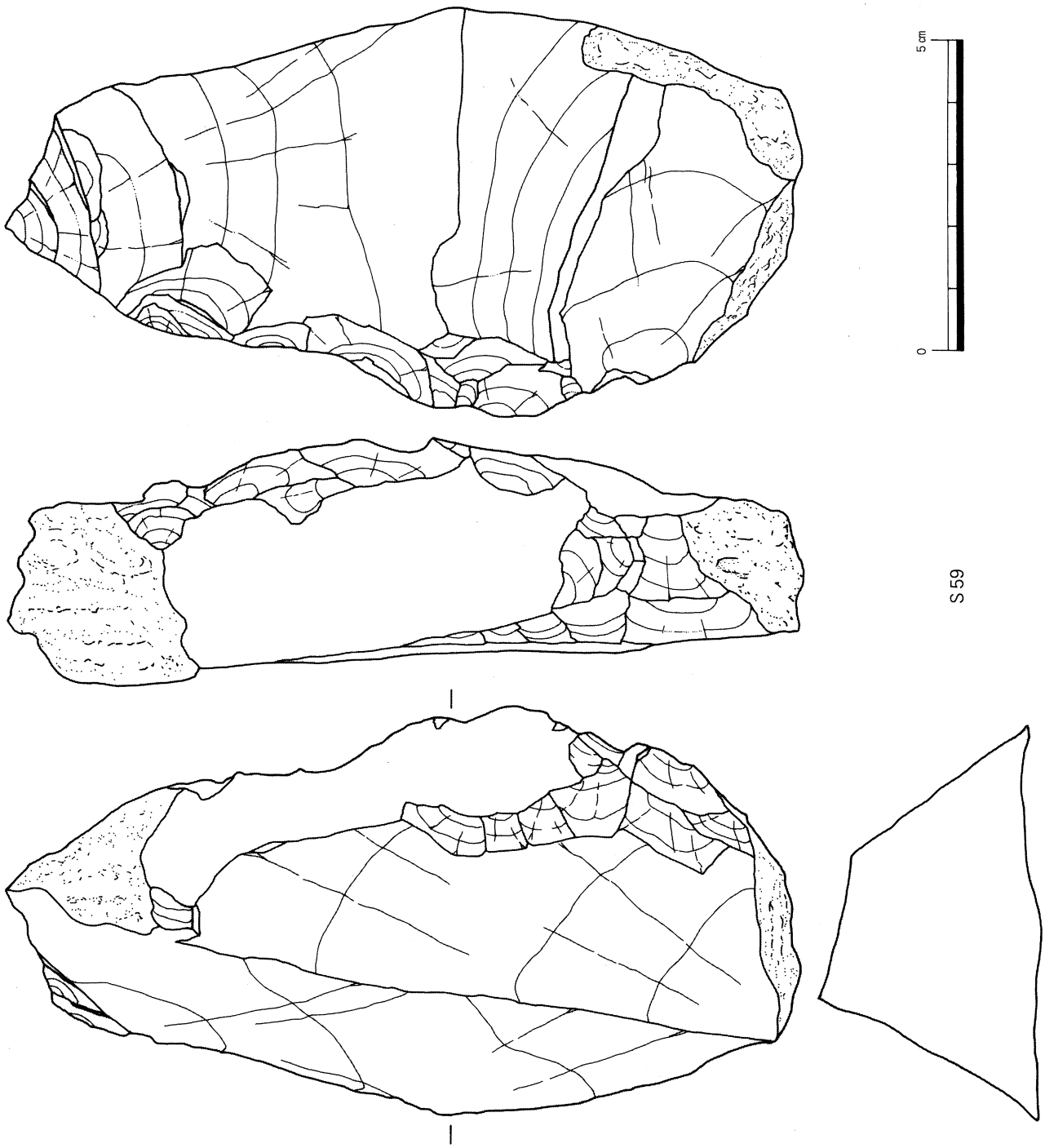
第19図　彦崎貝塚出土遺物（19）（S＝１／１）

いずれも晩期前半に帰属する。S 28～S 49はサヌカイト製である。S 50～S 58は楔形石器である。形状的には、長方形を呈するもの（A）と台形を呈するもの（B）がある。Aは、長幅比によってさらに３種に類別される。すなわち、短辺：長辺が約１：２のものを①類、短辺：長辺が約１：３のものを②類、それ以外のものを③類とする。S 50は、両面ともに主要剥離面を２枚用意している。両極打撃によって上下量端に階段状剥離が認められる。素材剥片自体は厚さが薄い。A－①類である。S 51



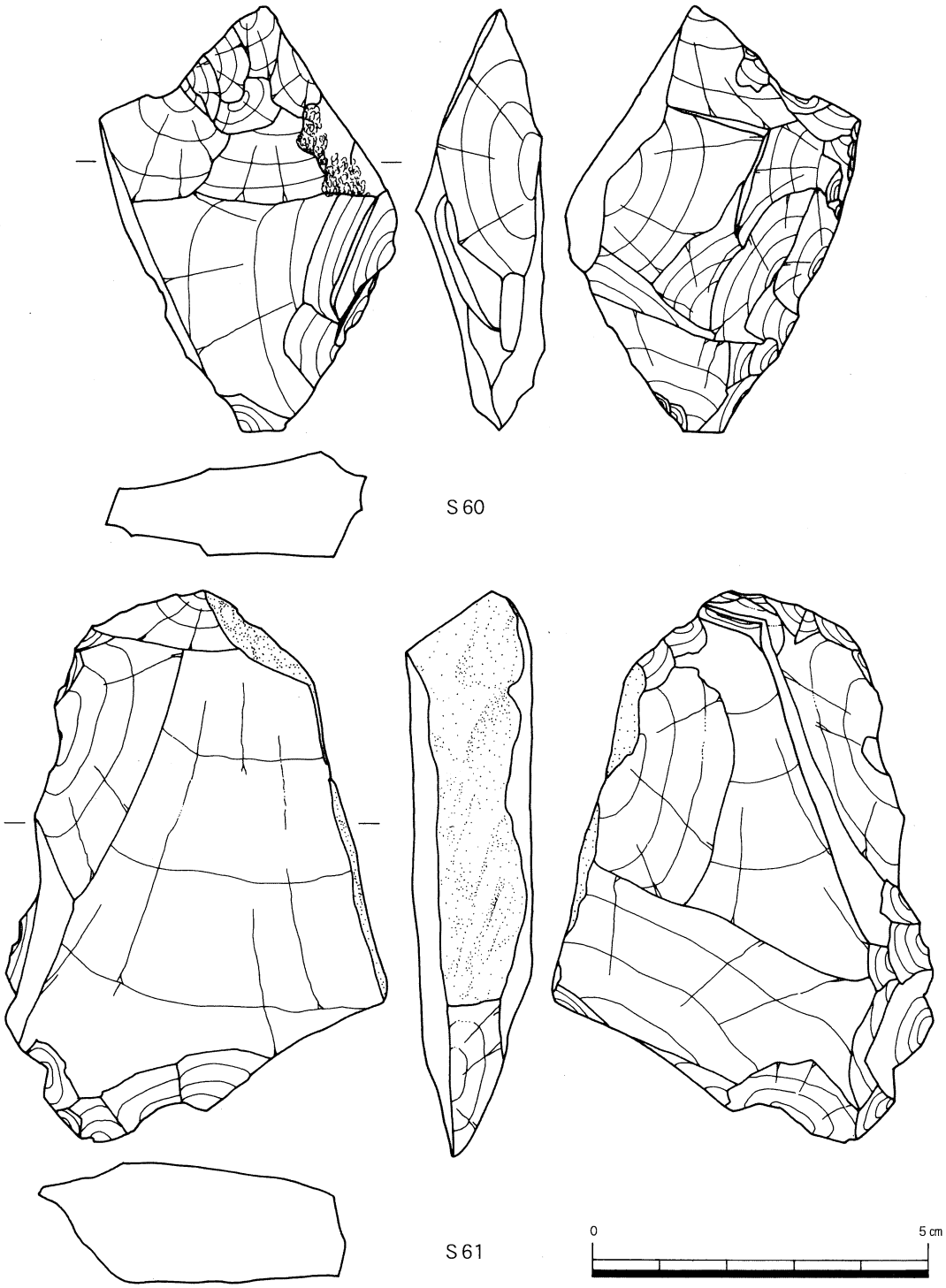
第20図　彦崎貝塚出土遺物（20）（S＝１／１）

も両面に主要剥離面を１枚と２枚用意している。同様に上下両端に階段状剥離が認められる。上端部側辺の半分は折れ飛んでいる。下端部に一部自然面が残存する。A－②類である。S50・S51は前期Ⅳ群に帰属する。S52・S53は、中期前半に帰属するものである。S52は、A－①類である。側縁部と裏面の一部に自然面を残す。S53の形状はAではあるが、加撃によって上端側縁と下端部が折れ飛んでいるのでタイプは不明である。S54の形状はBである。上端は折れ飛んでいるが、下端部では階段状剥離が見られ、一部明瞭なつぶれ部分が観察される。厚さが約10㎜と厚いのが特徴である。S55も形状はBである。同様に上端部が折れ飛んでいるので不明であるが、下端部には階段状剥離が



第21図　彦崎貝塚出土遺物（21）（Ｓ＝１／１）

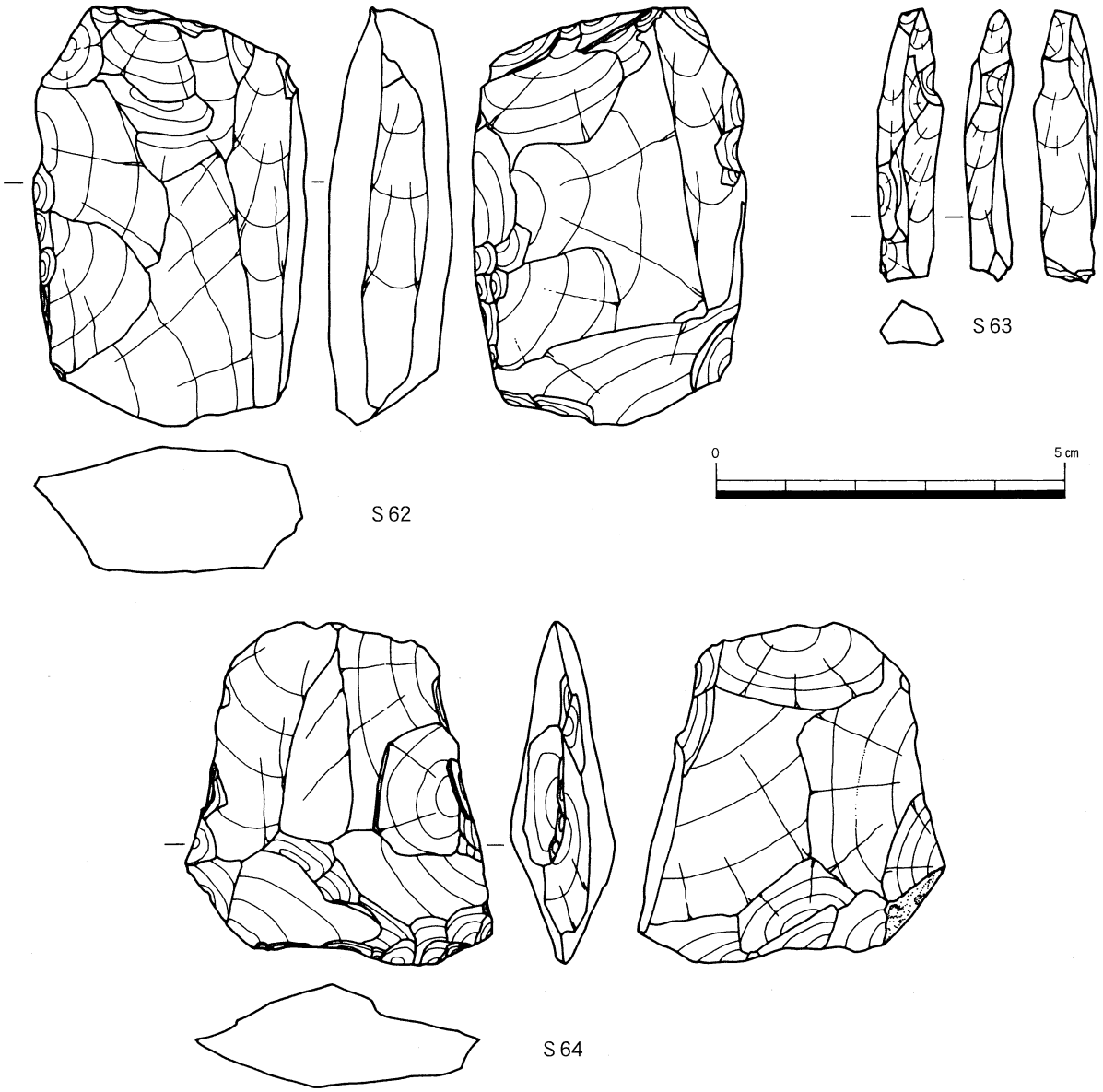
見られる。厚さ約15㎜。Ｓ56の形状はＢである。上端部の側辺が折れて飛んでいるので全体は不明であるが、下端部には階段状剥離が見られ、一部つぶれている。厚さは約20㎜ある。裏面の一部には自然面が残存している。Ｓ54～Ｓ56は、後期Ⅳ群に帰属する。Ｓ57・Ｓ58は、晩期前半に帰属するものである。形状はいずれもＡである。Ｓ57は、上端部が加撃によって折れ飛んでしまっているが、下端部には階段状剥離が認められる。Ｓ58は、Ａ－①類である。両側辺は折れ飛んでいる。上下両端には階段状剥離が見られる。いずれも、厚さ約５㎜と７㎜で薄い。楔形石器は、全てサヌカイト製。



第22図　彦崎貝塚出土遺物（22）（Ｓ＝１／１）

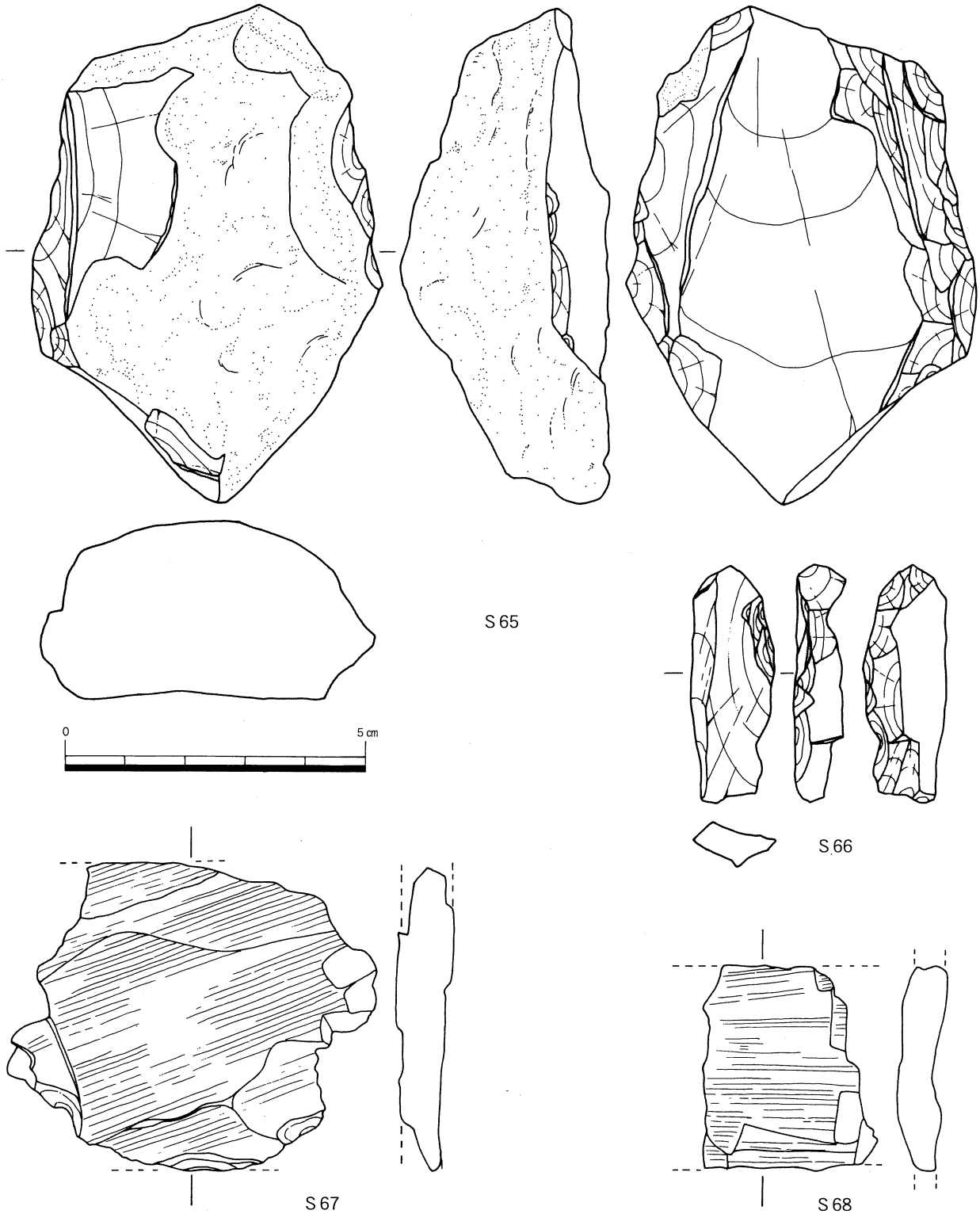
Ｃ）石核・剥片類（第21図～第26図）

石核も形態によって大中小に大別する。長幅のいずれかが10cm以上で厚さが３cm以上のものを①類、長幅のいずれかが５cm以上10cm未満で、厚さが１cm以上３cm未満のものを②類、長幅のいずれかが５cm未満で、厚さが１cm未満のものを③類とする。Ｓ59は、土坑２出土で中期初頭の船元Ｉ式Ｂ類期に帰属するものである。礫状の原石を荒割した早い段階のものである。いわゆる原材石核片



第23図　彦崎貝塚出土遺物（23）（S＝1／1）

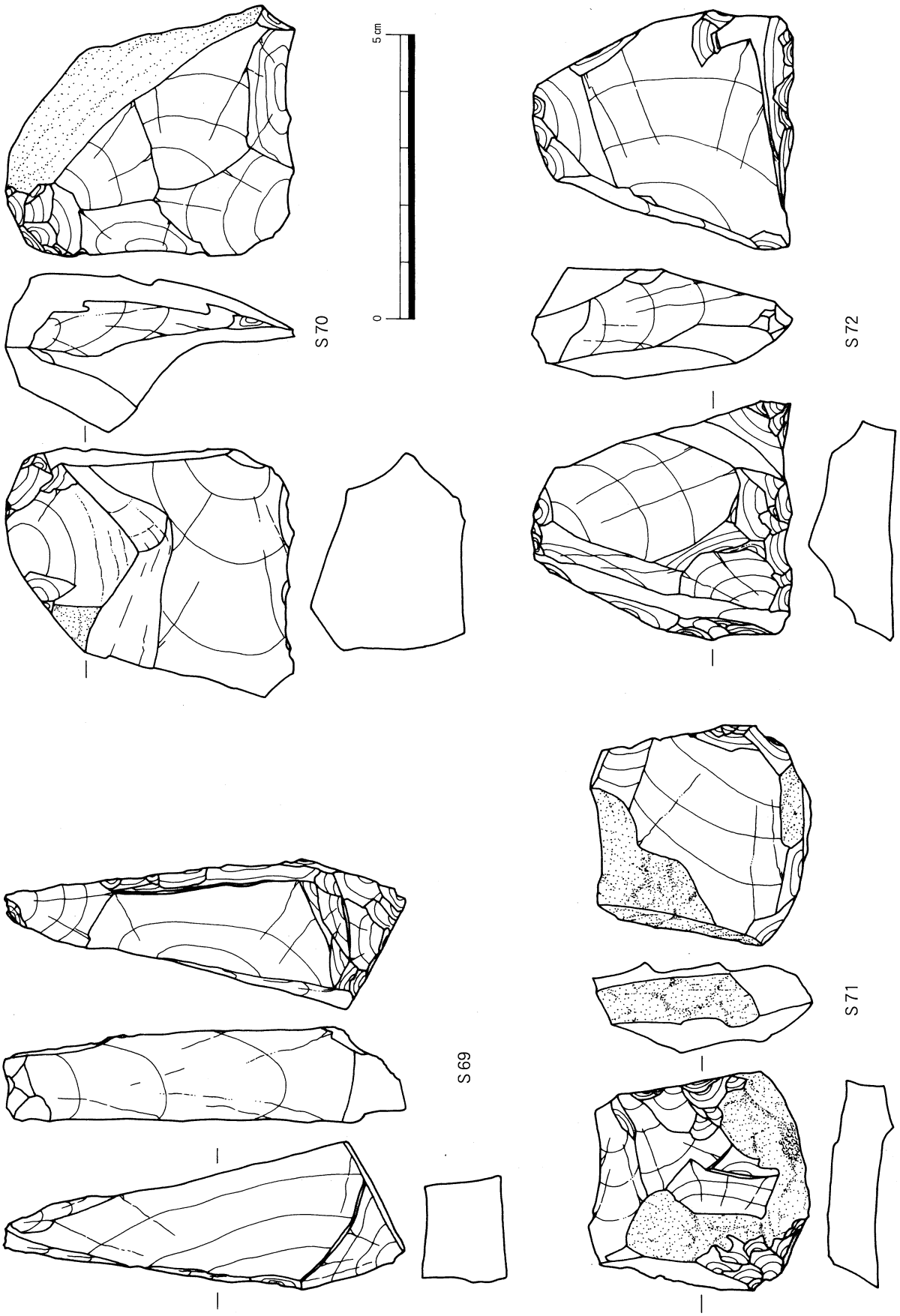
と称されるものである。上下端部と側片の一部に自然面が残存している。長さ12.8cm、幅７cm、厚さ3.5cmの①類である。S60・S61は、中期後半に帰属する。いずれも②類である。S62～S65は後期後半に帰属する。S62・S64は②類、S63は③類である。S62は楔状をなす。S65は、長さ80mm、幅60mm、厚さ30mmの①類で、腹面以外は自然面を残している。原石と認定してもかまわないものだが石核に集計した。S66は、③類で石核片である。S59～S66は全てサヌカイト製。剥片も大小に分類する。長さ５cm以上、厚さ２cm以上のものを①類、長さ５cm未満で厚さ２cm未満のものを②類、それ以外を③類とする。S67・S68は②類、結晶片岩製。S69・S70は、板状剥片である。動物遺存体埋納土器４、３から出土した。いずれも①類。S71は②類、自然面が上下端と側辺の一部に残存。S72は②類。S73は②類。S74は①類。S74は、左側辺に階段状剥離を有しているが、その前段階の調整の時に石理の関係で意図しない方向に剥がれている。S67が前期Ⅲ群、S68～S70が後期Ⅳ群、S71・S72が後期前半、S73が後期Ⅳ群、S74が晩期前半に帰属する。



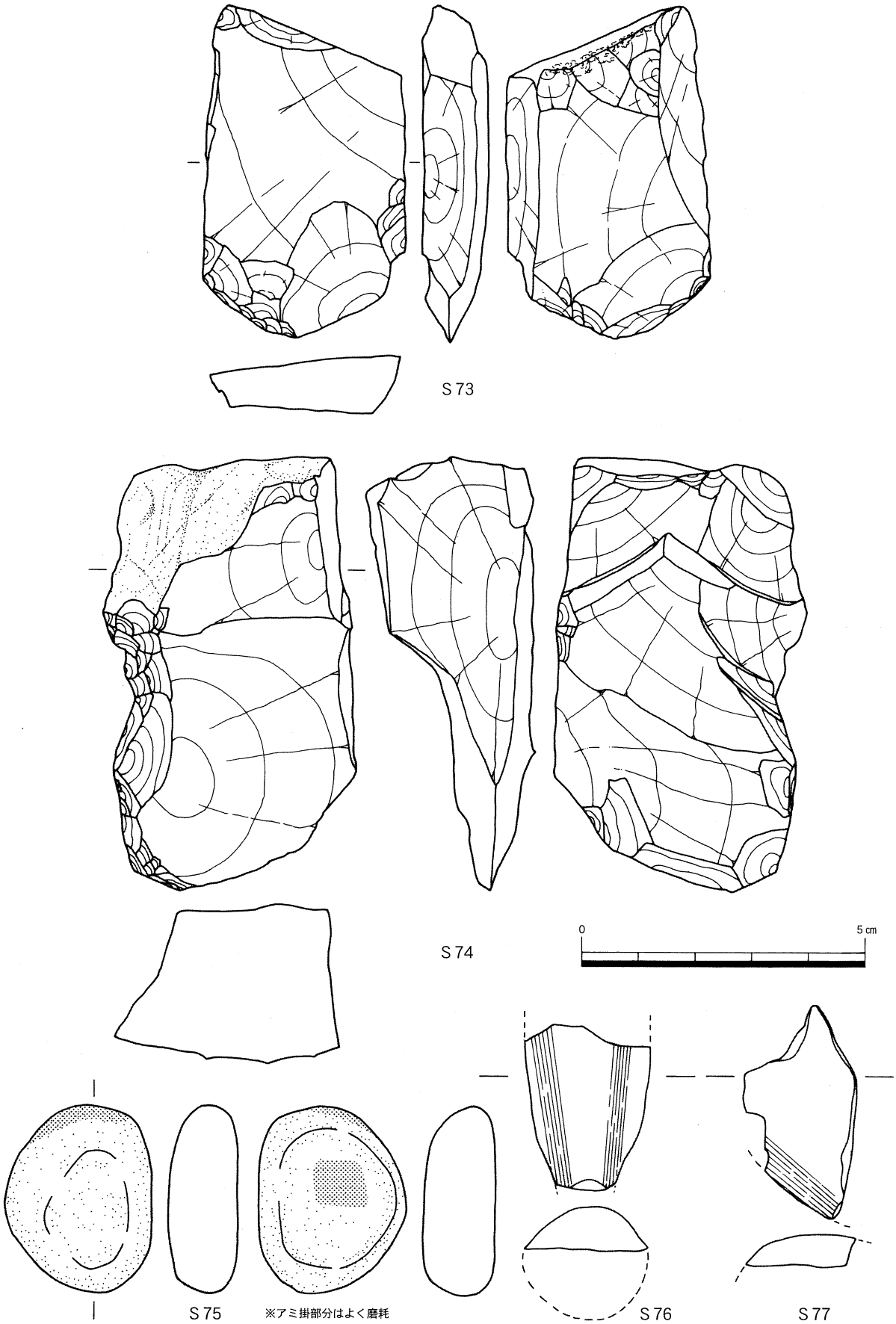
第24図　彦崎貝塚出土遺物（24）（S＝１／１）

D）その他の石器（第26図）

Ｓ75は、流紋岩製の磨石である。長さ約３cm、幅約２cm、厚さ約１cmである。先端部に摩滅痕が見られる。後期後半に帰属。Ｓ76・Ｓ77は安山岩製の磨製石器片である。いずれも擦痕が明瞭に認められる。破片のため全体の形状と器種は不明。Ｓ76は後期後半、Ｓ77は前期Ⅳ群に帰属する。



第25図　彦崎貝塚出土遺物（25）（Ｓ＝１／１）



第26図　彦崎貝塚出土遺物（26）（Ｓ＝１／１）

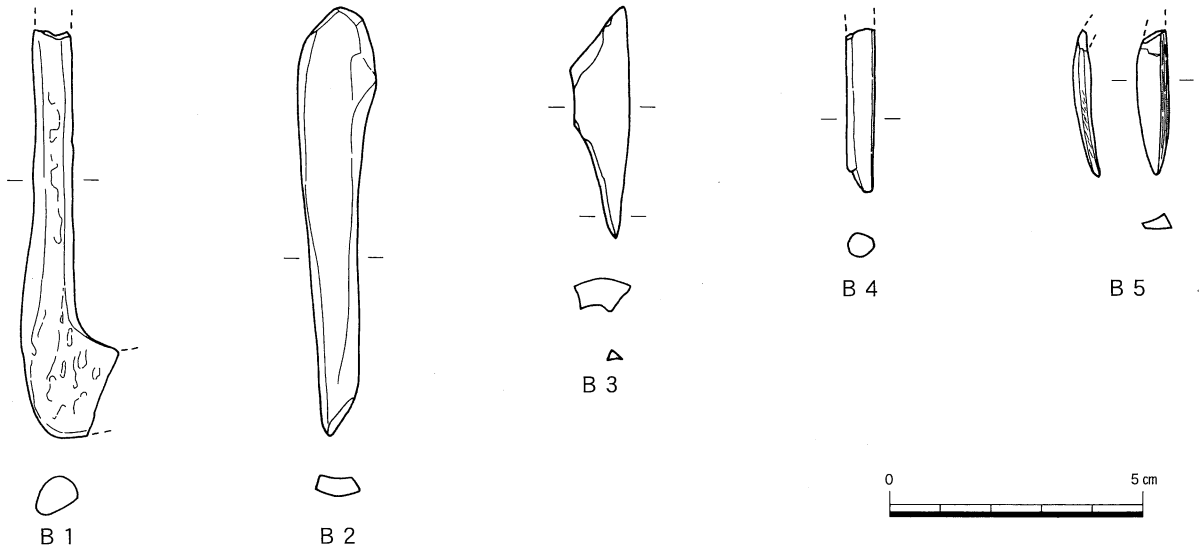
（６）骨角貝製品

Ａ）釣針・刺突具（第27図）

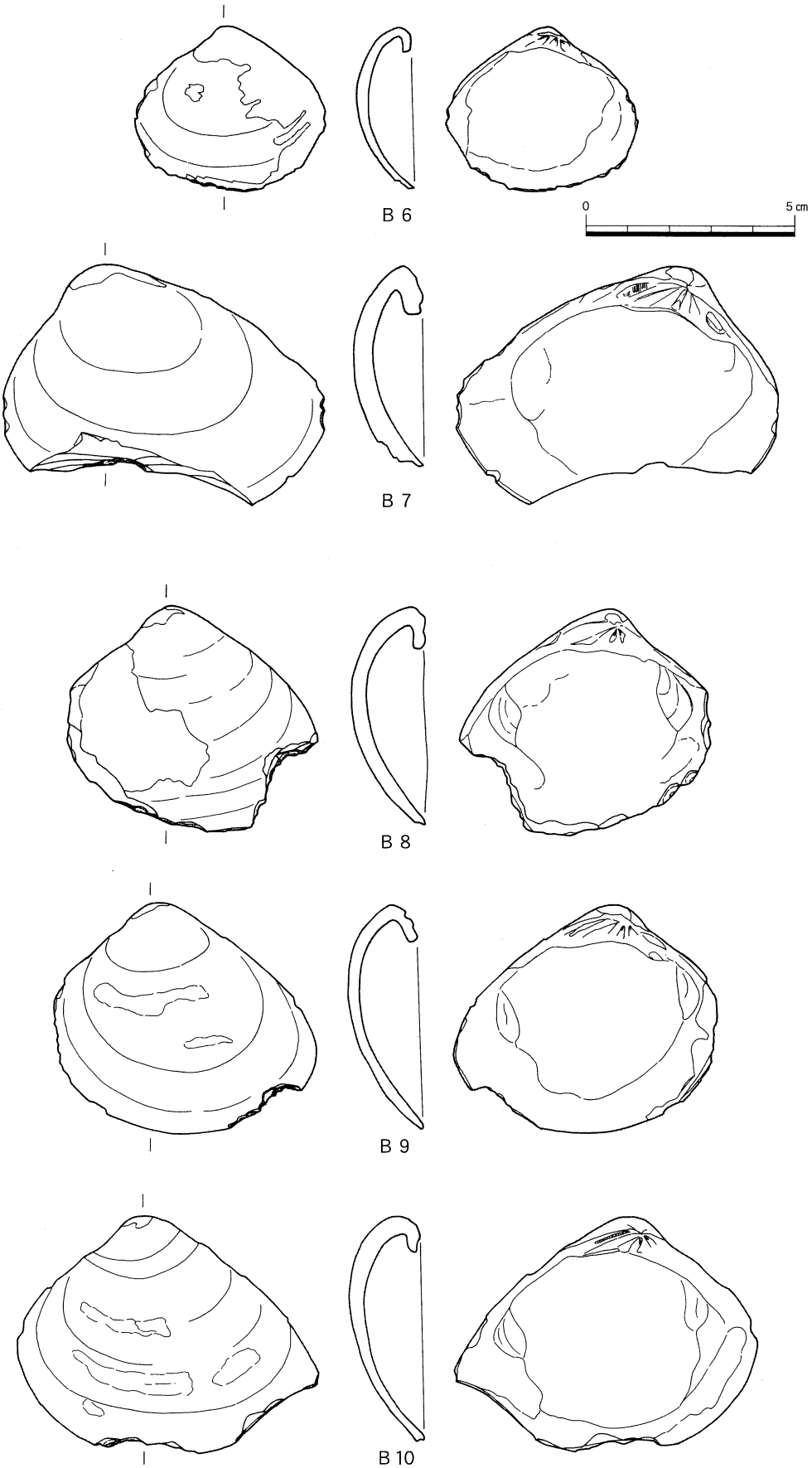
Ｂ１は、鹿角製の単式釣針である。逆頭と針先を欠損している。軸部が約10cm近くになると推定される大型品である。ふところが深く、「し」の字状を呈するものであろう。また、逆頭は、過去の東大の調査例から丸型を呈するものと推定される[13]。軸部の断面は長卵形を呈し、約１cmを測る。鹿角の幹角部を使用し、研磨して作出しているが、表面には、鹿角の加工前の表面の状態を浅く留めている部分が認められる。Ｂ２は、刺突具である。全長約8.5cm、最大幅約1.5cm、厚さ５mmを測る。ニホンジカの中足骨を六分の一程度に分割したものを使用し、それを研磨して作出したものである。内外面は平滑に仕上げている。軸部上端は、突部にくらべて幅広でやや丸みをもたせている。突部は両側から鋭く削ぎ落として成形したあとに研磨している。削ぎ落とし方は、左側から落とす動作が先行する。軸部断面は半弧状を、突部断面は三角形を呈する。前期Ⅲ群に帰属する。Ｂ３は、刺突具である。ニホンジカ中足骨を四分の一程度に分割したものを使用し、それを研磨して作出したものである。外面は平滑に仕上げているが、内面は研磨が及ばない部分があってガサガサしている。全長約５cm、最大幅２cm、厚さ6.5㎜を測る。短い軸部を左から削ぎ落とし突部をつくる。突部の断面は三角形を呈する。軸部は折れておらず、このサイズで完形品と考えられる。中期初頭のものである。Ｂ４は、鹿角製のヤス状刺突具と推定されるものである。上下とも先端は欠損している。残存長約３cm、直径約５㎜である。断面は、円形を呈する。鹿角の枝幹先端を折り取り、削りだしたあとに研磨して仕上げたものである。表面には、明瞭に擦痕が観察される。後期Ⅳ群に帰属する。Ｂ５は、猪牙製の刺突具である。上端を少し欠損している。残存長約３cm、幅5.8㎜、厚さ3.3㎜を測る。猪の切歯を半截して研磨している。表面には光沢が認められる。

Ｂ）貝刃（第28図・第29図）

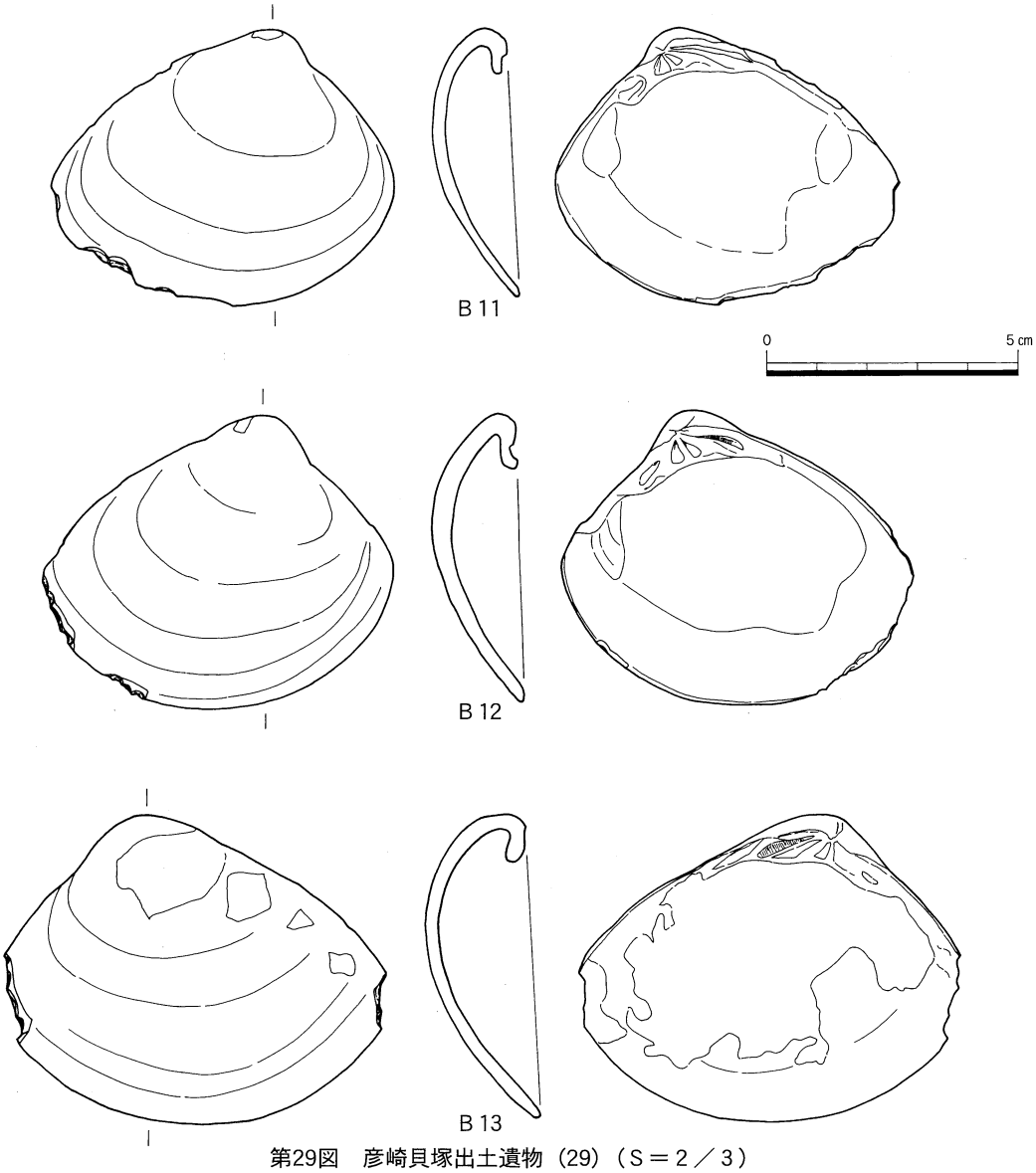
Ｂ６～Ｂ13は、貝刃である。全てハマグリを素材として使用している。刃部をつける位置に違いが



第27図　彦崎貝塚出土遺物（27）（Ｓ＝２／３）

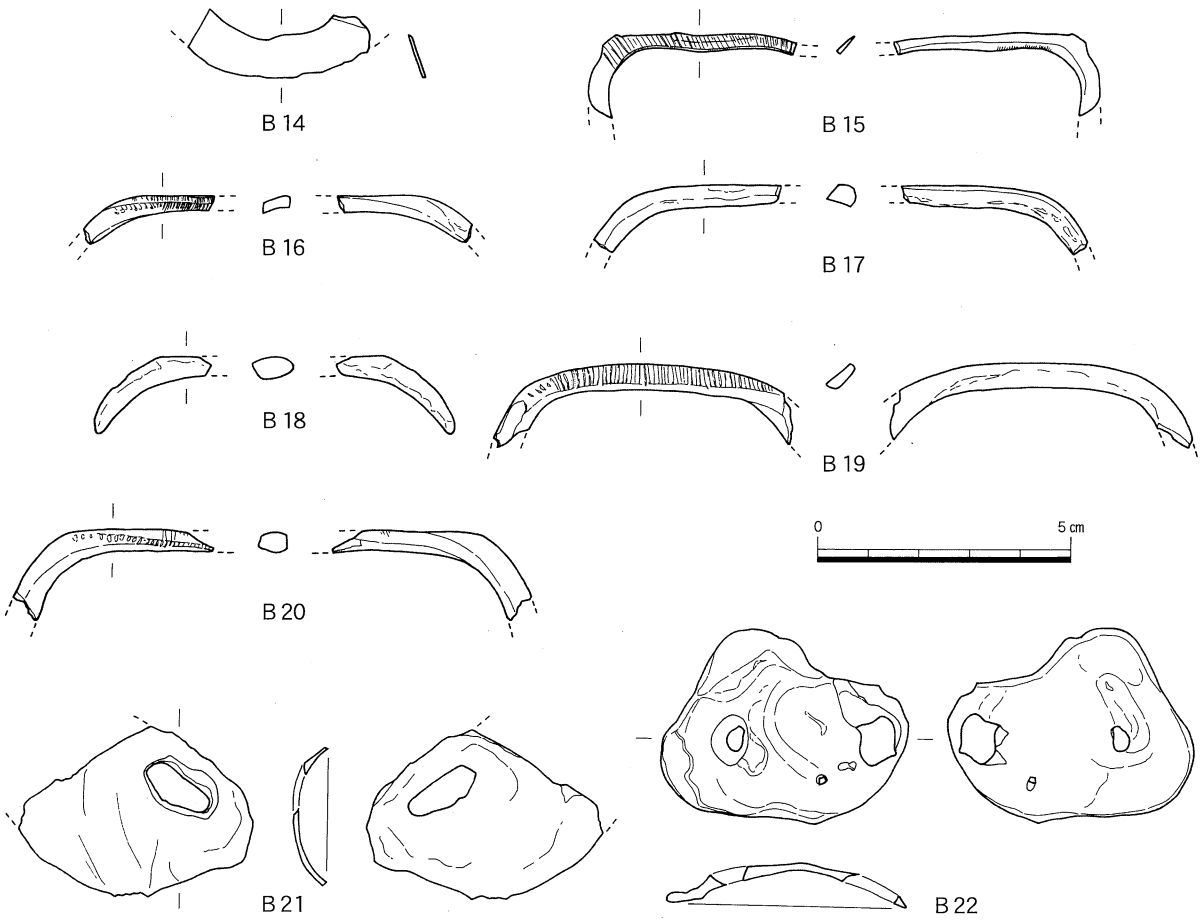


第28図　彦崎貝塚出土遺物（28）（Ｓ＝２／３）



第29図　彦崎貝塚出土遺物（29）（Ｓ＝２／３）

認められる。Ｂ６は、長さ3.98cm、幅4.55cmの小型品である。殻嘴中央部に連続した細かい調整を加え、刃部を作出している。Ｂ７は、長さ5.65cm、幅7.62cmを測る。殻嘴中央部を内側から打欠いて、その部分にやや大きい調整を加え、刃部を作出している。刃部は内湾。Ｂ８は、長さ5.42cm、幅5.92cmを測る。殻嘴部右端を内側から打欠き、その部分に細かい調整を連続して加え、刃部を作出している。刃部幅は、約３cm。Ｂ９は、長さ5.45cm、幅6.35cmを測る。殻嘴部右端を少し内側から打欠き、そこに細かい調整を加え、刃部を作り出す。刃部幅は約２cmである。B10は、長さ5.72cm、幅7.18cmを測る。殻嘴部中央と右端に内側から少し打欠いた部分をもうけ、そこに細かい調整を加え、刃部を作出したものである。刃部幅は、中央部が２cm、右端が1.5cmである。B11は、長さ5.45cm、幅6.78cmを測る。殻嘴部左端に連続した調整を加え、刃部を作り出している。刃部幅約２cm。B12は、長さ5.9cm、幅6.93cmを測る。殻嘴左端部に連続した調整を加え、刃部を作り出している。刃部幅は約３cm。B13は、長さ6.05cm、幅7.5cmを測る。殻嘴部の左右両端を少し打ち欠いて、そこに細かい調整を加え、刃部を作り出している。刃部幅は、左端が約２cm、右端が約１cmを測る。これら13点は、全て前期Ⅲ群に帰属する。



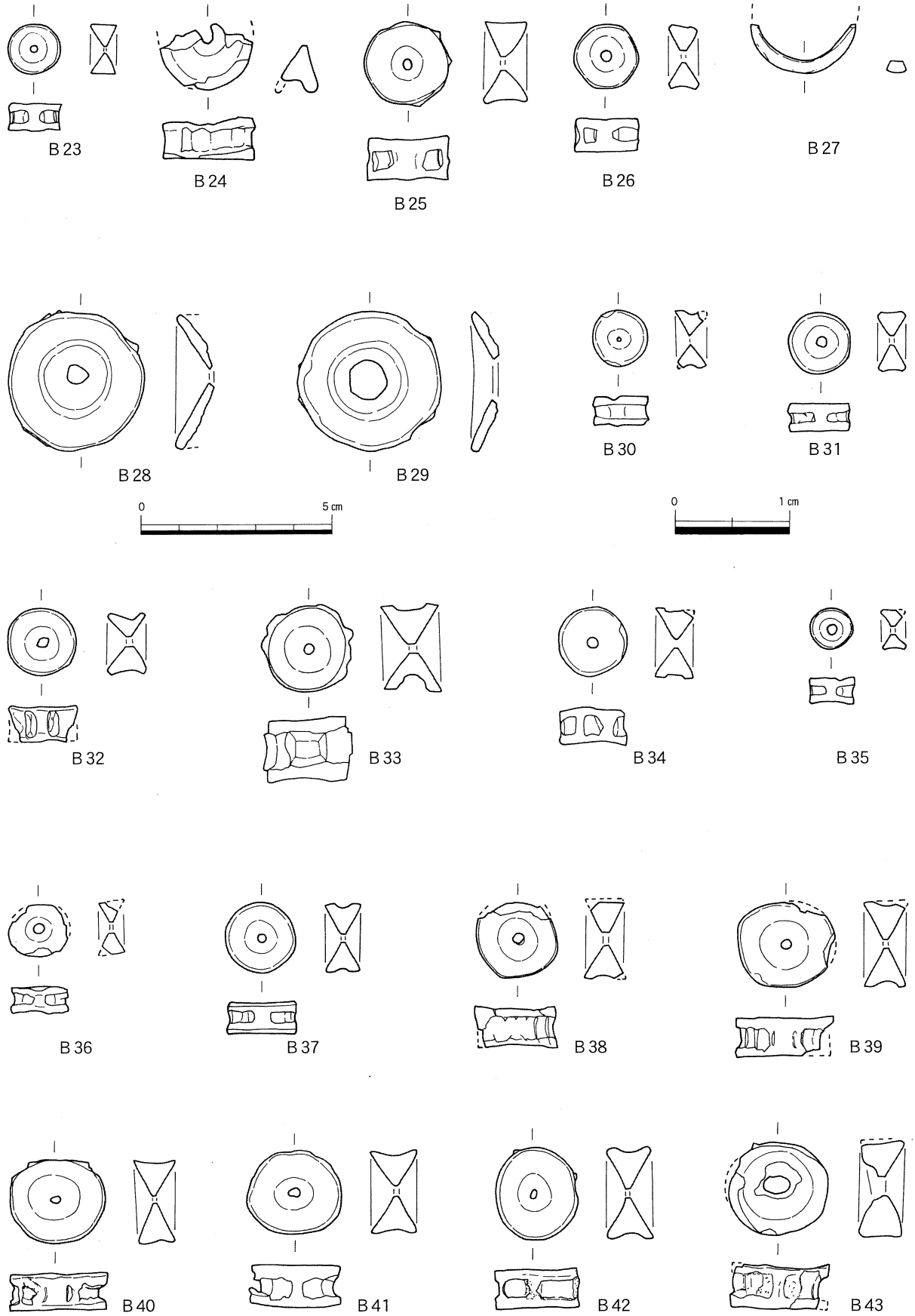
第30図　彦崎貝塚出土遺物（30）（Ｓ＝２／３）

Ｃ）貝輪・有孔貝製品（第30図）

B14～B20は、貝輪である。完形品はない。B14が殻唇部以外は、全て殻頂部付近が残存したものである。B18のハイガイ製以外は、アカガイやサルボウ等を素材としたものである。B14・B15・B19は、肋が見えなくなるほど研磨して特に薄く仕上げてある。B14・B15が前期Ⅲ群、B16が前期Ⅳ群、B17～B19が中期後半、B20が後期前半の時期にそれぞれ帰属する。B21・B22は、有孔貝製品である。B21は、マガキの左殻である。殻長約３cm、殻高は残存長で約４cmを測る。孔は、長さ約２cm、幅６mmの偏長楕円形にマガキの内側から穿たれている。穿孔個所の風化度は、他のマガキと同様の程度であり、マガキの廃棄前に穿孔されたものである。殻頂部が欠損しているので、他に孔が存在したかどうかは不明である。B22は、イタボガキ製である。殻長約３cm、殻高約５cmを測る。殻を90度横にして、殻唇部と殻頂部各々一箇所、内側から穿孔する。穿孔の仕方にやや違いがある。殻唇部の方が丁寧に擦切るのに対し、殻頂部は、一撃で穿孔している。あとは両方とも研磨している。いずれも用途は不明であるが、過去の東大の調査でも検出されている遺物である[14]。

Ｄ）垂飾（第31図）

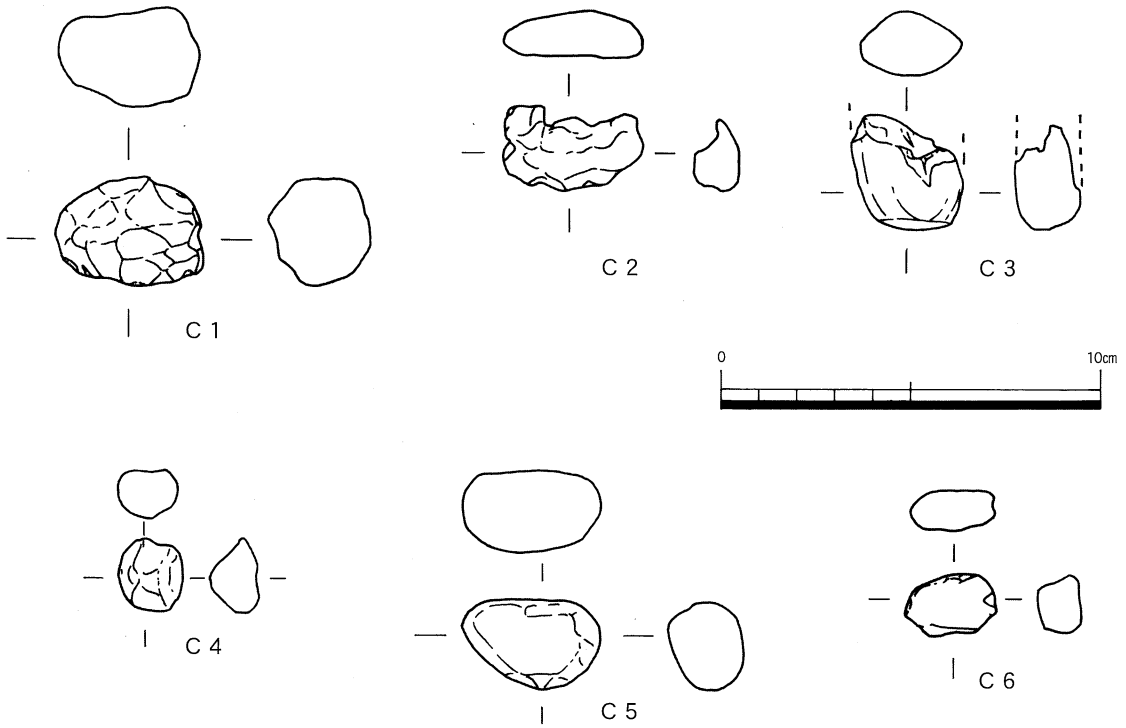
B23～B43は、サメ・エイ類椎骨製垂飾である。全体的に見た目を重視した調整が施されている。中央部穿孔や側面内研磨以外に、表裏両面の肩の微突出部分も丁寧に削り、研磨している。大は直径３cm以上、中は直径1.5cm前後、小は１cm未満であるが、一定程度の計画的な種の選択性は認められるようである。



第31図　彦崎貝塚出土遺物（31）（Ｓ＝２／３・１／１）

（７）土製品（第32図）

Ｃ１～Ｃ６は、用途不明の土製品である。今回一部を図化したに過ぎないが、同様のものは、前期から晩期までの各時期にはかなり多く見られる。Ｃ１は、Ｔ８出土の羽島下層式期に帰属するものである。長さ3.8cm、幅2.9cm、厚さ2.6cm、重さ21.8gの変形楕円状を呈する。焼成は良好で、重量感がある。表面は溝あるいは襞状に小さく凸凹している。Ｃ２は、Ｔ５出土の彦崎Ｚ１式期に帰属するものである。残存長3.6cm、残存幅2.2cm、厚さ約1.2cm、重さ8.4gを測る。焼成はややあまく、脆い感じがする。あまり、手で圧縮した感じではなく、薄い粘土を何枚か重ねて手で練り合わせただけのものである。したがって、うねった状態で焼成しているので層状に剥がれ易い。Ｃ３・Ｃ４は、T23出土の彦崎Ｚ１式期に帰属するものである。Ｃ３は、平面形態は、胴の張る太鼓状を呈するものと推定される。焼成は良好である。残存長３cm、幅2.7cm、厚さ1.7cm、重ささ6.4gを測る。断面は、角の尖らない菱形をしている。同様に、力をこめて粘土を練り合わせていないので、その合わせ目から小破片に剥がれ落ちた状態を残している。Ｃ４は、平面形は円形を呈し、長さ1.8cm、幅1.6cm、厚さ1.2cm、重さ2.8gを測る。他に比べて小型であるが、焼成は良好でよくしまり、硬質感がある。Ｃ５は、T11出土の後晩期に帰属するものである。長さ3.6cm、幅2.3cm、厚さ２cm、重さ14.9gを測る。全体的に焼成は良好で堅緻である。正面には擦痕が認められるので砥石状のもので研磨されたものと考えられる。Ｃ６は、T14出土の晩期前半のものである。残存長2.4cm、幅1.6cm、厚さ1.1cm、重さ４gを測る。やや平坦な板状をなす。焼成は良好でよく締まる。このように、形状と成形、焼成にはバリエーションがある。あまり注目される遺物ではないが、近隣では、里木貝塚（岡山県倉敷市）や江口貝塚（愛媛県今治市）等で出土例が知られる。しかし、いずれの事例でもその成因や用途は不明と報告されている[15]。



第32図　彦崎貝塚出土遺物（32）（Ｓ＝１／２）

第２節　池葉須試掘調査出土遺物

はじめに

彦崎貝塚の第二回発掘調査が、東京大学理学部人類学教室によって昭和24年８月１日から17日まで実施された後、灘崎中学校教諭池葉須藤樹氏は、社会科授業の一環として酒詰先生の試掘溝に接して、１ｍ×1.3mの調査区を設定して試掘調査を実施した。そして氏は奉職中の灘崎中学校に調査で得た資料を保管していたが、その後、旧灘崎町文化財保護委員会のご尽力によって旧灘崎町教育委員会に移管され、そのまま保管されていた。2002年、試掘調査時の資料のうち、縄文時代に属する遺物の一部が図化・公開された(16)。今回報告するものは、縄文時代以降の遺物である。縄文時代の遺物量に比べその出土量は少ない。それは、各時期の集落の中心が別地点にあるからである。なお、遺物の出土層位は明確ではない。

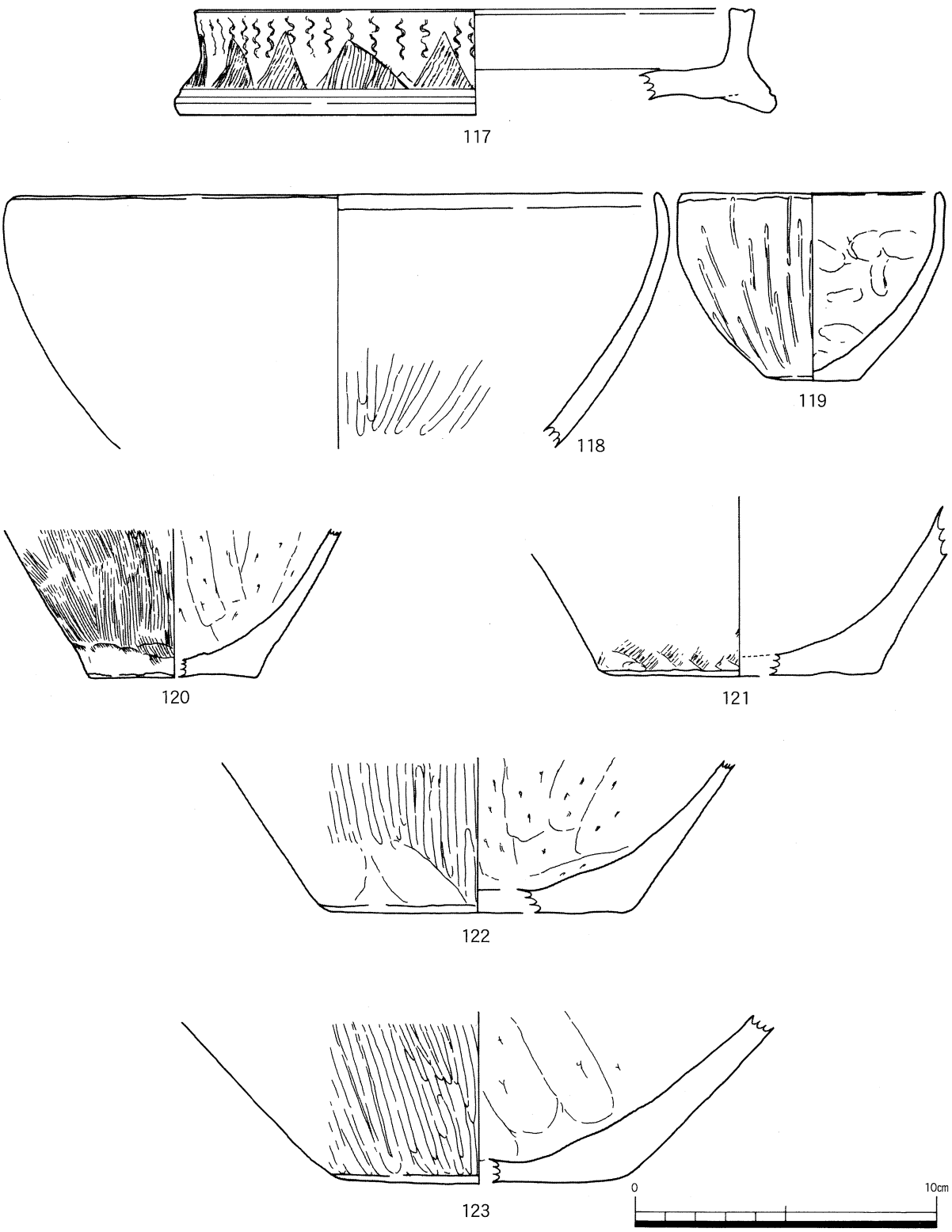
（１）弥生時代の遺物（第33図）

117～123は、弥生時代後期後半に帰属するものである。117は、壺形土器の口縁部破片である。復元口径約18cmを測る。口縁端部外面に垂下帯を有し、そこに沈線を一条入れる。口縁部は直立し、外面には下端部にヘラによって不整形な連続三角文を充填し、その上方に貝殻腹縁による刺突を縦位に施文する。焼成は良好で、砂粒を含む。118・119は、鉢形土器である。口径には大小ある。調整は、ヘラミガキが主体。120～123は、底部である。底径は７㎝～10㎝を測る。内面はヘラケズリであるが、外面調整は、刷毛目のもの（120・121）とヘラミガキのもの（122・123）がある。

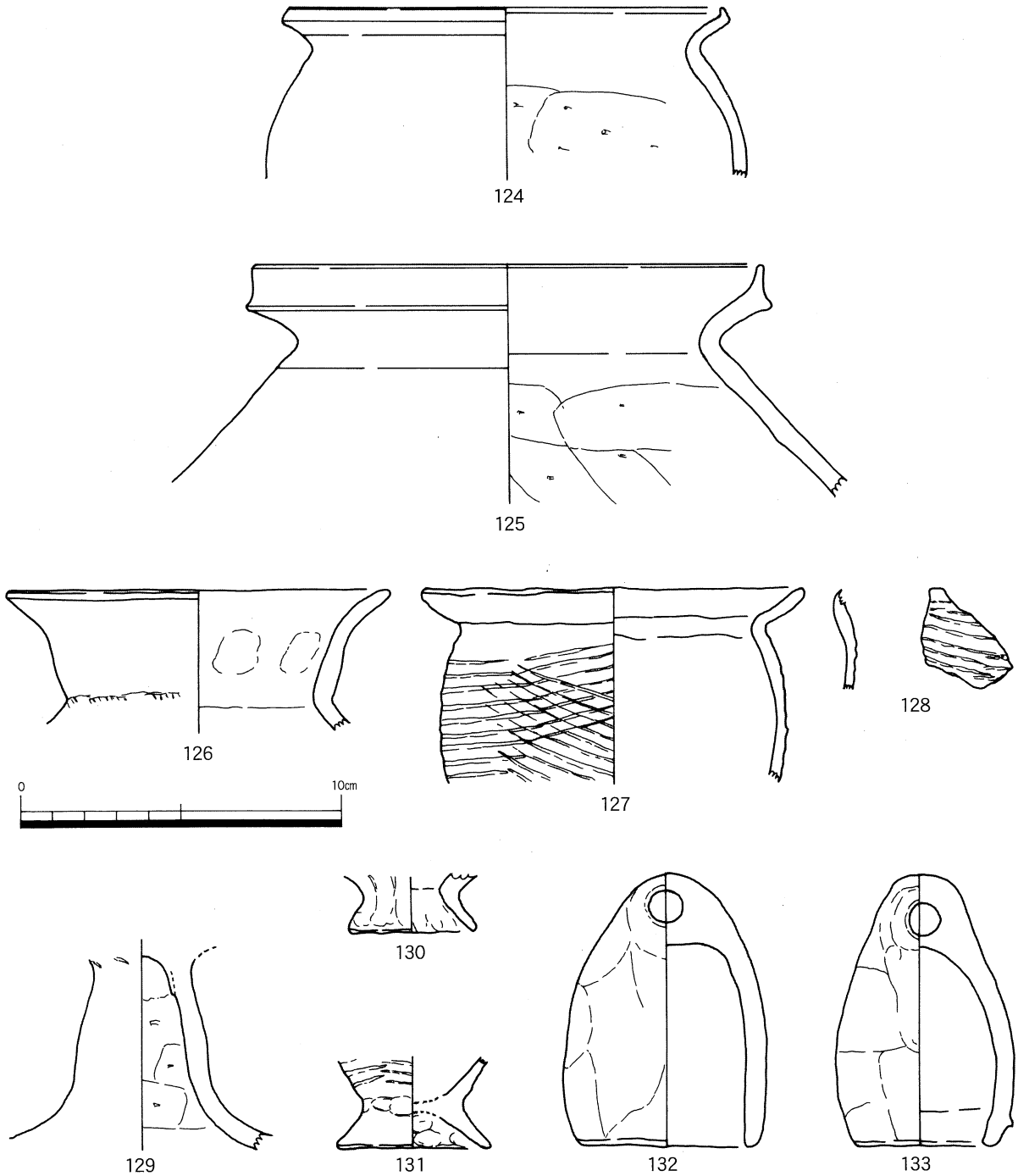
（２）古墳時代の遺物（第34図・第35図）

124～136は、古墳時代の遺物である。124・125は甕・壺形土器である。124は、短く屈曲する口縁部でその端部が上方に極めて短く立ち上がるものである。胴部は肩付近が一番張るタイプ。125は、同様に短屈曲して上方に外反気味に立ち上がる口縁部である。内面はいずれも、幅が太いヘラケズリ調整である。126は、古墳時代でもやや新しい時期の土師器の壺形土器破片である。127・128は、外面に叩き目が入る甕形土器である。126は、口径約10cmを測る小型のものである。外面の叩きは左下方から右上方に施したあと右下方から左上方へ叩きを施す。見た目には叩きがクロスするようになる。129は、高杯の脚部である。杯部と脚部の連結は後から粘土を充填していることがわかる。焼成は良好で精緻な胎土である。130・131は、台脚付粗製土器の脚部破片である。いわゆる製塩土器である。脚部の口径が萎縮してくるとともに高台が短くなることから脚台が付かない製塩土器出現の直前の時期くらいに該当しようか。132・133は、蛸壺である。明確な時期否定は難しいのであるが、古墳時代全般あるいは、それ以降と推定される。134～136は、須恵器である。134は、杯身である。口径10cm、器高４cmを測る。平坦な底部から体部が斜め上方に立ち上がり、受部でやや内掘して口縁端部にいたる。口縁は、２cmほどで長い。口唇部には明瞭な段がつく。調整は、外面が強いヘラケズリで、内面は丁寧なナデ調整である。色調は暗青灰色を呈し、焼成は硬緻である。底部外面には、井下駄状

のヘラ記号が施されている。TK208段階に相当すると思われ、児島では古い時期の須恵器である。135・136は、胴部破片である。136は、内面の青海波叩きを丁寧にナデ消している。



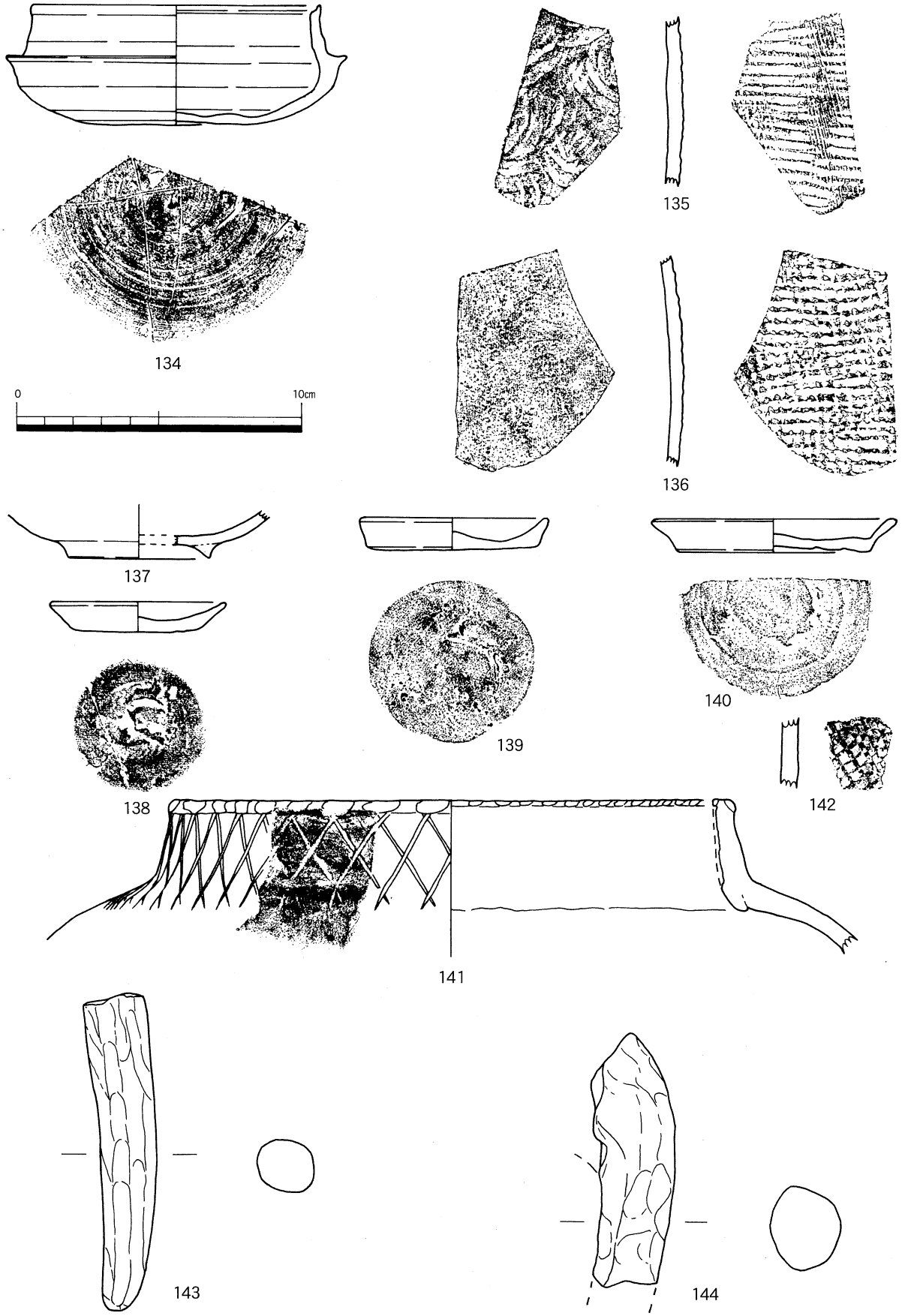
第33図　池葉須試掘調査出土遺物（１）（Ｓ＝１／２）



第34図　池葉須試掘調査出土遺物（２）（Ｓ＝１／２）

（３）中世の遺物（第35図）

137～144は、中世に属する遺物である。137は、底径約５cmの土師器椀である。高台の断面は三角形を呈する低いものである。焼成は良好で乳白色を呈する。13世紀末～14世紀代に該当しようか。138～140は土師質小皿である。口径は、４cm～８cmで、器高は1.5mm程を測る。底部外面は、ヘラケズリ痕が明瞭に残る。141は瓦質の羽釜である。口径約20cmを測る。口縁部外面には、ヘラ状の工具で右下がりの斜線を描いた後、左下がりの斜線をその上に施す。出来上がりは、菱形文を三角文が



第35図　池葉須試掘調査出土遺物（３）（Ｓ＝１／２）

挟む形になる。また、口唇部内外面には、竹管状の工具の凸部で押圧し、浅い刻み様の調整を施している。142は、亀山焼き甕の破片である。143･144は、土師器の三足鍋の脚である。焼成は良好で指頭圧痕が顕著である。今回報告した遺物は、東大の調査でも極少量検出されている。中世集落の中心は、より西（左古谷遺跡付近）だと思われる。

第２章注

（注１）亀山行雄 2005『長縄手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告189　岡山県教育委員会

（注２）鎌木義昌・木村幹夫 1955「中国地方の縄文式土器」『日本考古学講座』３ 河出書房

（注３）広島大学大学院文学研究科考古学研究室に所蔵されている彦崎貝塚資料（池田次郎氏調査分）中には、当該土器が数個体分保管されている。ご好意により実見させていただいた。

（注４）ａ千葉　豊 1992「西日本縄文後期土器の二三の問題－瀬戸内地方を中心とした研究の現状と課題－」『古代吉備』第14集　古代吉備研究会

ｂ水ノ江和同 1992「小池原上層式・下層式土器に関する諸問題－福岡県築上郡大平村所在、土佐井遺跡出土土器の位置づけ－」『古文化談叢』第27集　九州古文化研究会

（注５）注４に同じ。

（注６）この特徴は、平井勝氏が設定された四元式にも認められるものであり、彦崎貝塚から出土した彦崎Ｋ２式を彦崎Ｋ２式と規定するならば四元式の一部が同じ内容で彦崎Ｋ２式に包摂される可能性があると思われる。

（注７）全てを同定していないが、雑草種子や堅果類等も見られるようである。

（注８）現在、整理中であるが、包含層中資料は、当該遺物を中心とするようである。

（注９）種子であることは間違いないが、同定は実施してない。

（注10）基本的な器種認定は、先の報告書に準じている。田嶋正憲 2006『彦崎貝塚範囲確認調査報告書』岡山市教育委員会

（注11）岡山市教育委員会建部分室に保管されている戦前の表採資料（江坂コレクション）には、土器や骨角貝製品とともに石鏃が71点採集されている。この中には、同様の五角形を呈するものがある。ご好意により実見させていただいた。

（注12）財団法人滋賀県文化財保護協会の鈴木康二氏のご教示による。

（注13）池葉須藤樹1971『岡山県児島郡灘崎町大字彦崎貝塚調査報告』（私家版）

（注14）東京大学総合研究博物館の諏訪　元先生のご好意より実見させていただきました。

（注15）ａ間壁忠彦・間壁葭子 1971『里木貝塚』倉敷考古館研究集報第７集　倉敷考古館

ｂ宮本一夫編 1993『江口貝塚Ⅰ－前中期編－』愛媛大学法文学部考古学研究室

ｃ宮本一夫編 1994『江口貝塚Ⅱ－後晩期編－』愛媛大学法文学部考古学研究室

（注16）田嶋正憲2002「彦崎貝塚出土の縄文時代遺物－灘崎町歴史文化資料館収蔵資料の紹介－」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』（上）古代吉備研究会

第３章　彦崎貝塚の調査と研究の歴史

はじめに

平成18年３月に刊行した『彦崎貝塚１』では、紙幅の都合によりある程度端折った研究史の紹介にとどまった。今回は、特に戦前戦後の地元文献を中心に検討し、新たに知り得たことと発掘調査等によるその成果がどのように公表されてきたかを簡潔に記しておきたい。なお、この章を執筆するにあたって、日頃よりご指導いただいている間壁忠彦・葭子両先生に入手困難な文献を数多くご提供いただくとともにご教示を賜りました。厚くお礼を申し上げます。したがって、本文中や略年表中での誤謬は、執筆者の咀嚼力の無さに起因しており、その全責は田嶋にあることを最初にお断りしておきたい。なお、文献と略年表は対応する。

第１節　大正10年（1921）～昭和22年（1947）

彦崎貝塚が登場する最も古い記載は、昭和10年（1935）２月５日に発行された、末永雅雄編『本山考古室要録』（その実測・製図は、小林行雄が主に担当）中に岡山県児島郡灘崎村彦崎馬場貝塚と紹介され、大正10年（1921）11月20日発掘とあり、石匙、石鏃、土製品一括と記しているが、図や写真はない。また、文献的により古いものは、昭和４年（1929）４月発行の水原韻泉「岡山県下ノ貝塚地名表」『吉備考古』第一号岡山考古会に児島郡灘崎村彦崎縄文式土器と記載あるものである。さらに、昭和５年（1930）に刊行された永山卯三郎『岡山県通史（上編）』の石器時代地名表では、児島郡灘崎村大字彦崎貝畑・土器としている。これは、東京帝国大学編昭和３年（1928）『日本石器時代遺物発見地名表（第五版）』岡書院刊行から岡山県分のみを抄録したものであろう。

さて、『本山考古室要録』に見える大正10年の発掘調査であるが、大毎社長であった本山彦一は、明治後半期から児島湾干拓事業を行った藤田組の社長藤田傳三郎の代理などを務めた関係から、旧児島湾の村々とは地縁ができていたと思われる。大阪の国府遺跡の調査にかかわり、東京大学の長谷部言人の岡山県津雲貝塚発掘調査を援助していた本山のもとへ彦崎貝塚の採集品があっても不思議ではない。

次に、児島郡日比村（現、玉野市日比）に在住していた佐藤美津夫は、岡山県で『弥生式土器聚成図録』などとの関係により小林行雄と面識のあった数少ない人物で、そうした縁で『本山考古室要録』を入手できたものと推定される。当時、岡山の学校に在籍していたと思われる佐藤は、この本で学校と自宅の途中にある彦崎貝塚のことを知った可能性が高く、昭和10年９月20日から11月16日までの間に6回調査を行っている。10月22日の試掘調査以外は、全て表面採集である。そして、同年12月10日、この成果を『備前児島郡灘崎村大字彦崎貝塚調査概報』（私家版）として纏めた。限定15部の非売品であった。また、付録として「児島郡石器時代地名表」を掲載している。この書物刊行後、同月、水原岩太郎が踏査を実施している。また、伊東忠志も調査を実施した。佐藤は、その頃の吉備考古会の若い主要会員、水原は、同会主催者で灘崎村に近い児島湾岸の八浜町大字八浜出身、伊東も、八浜町大字見石に住んだ同会の古くからの会員であった。そして、佐藤、水原、伊東は、成果報告や資料紹介をその都度おこなった（佐藤1937、水原1938、伊東1938、年表参照）。伊東の調査による昭和13年（1938）段階で、彦崎貝塚からは、押型文土器が検出されていたようである。こうした戦前の記録が残った背景には、岡山県を中心に活動をしていた吉備考古

会の存在が大きいと考えられる。機関誌『吉備考古』には県内の遺跡に関する情報が多く記録されている。こうした記事を熟読すると、ハイキングや巡検、踏査等を頻繁に実施していたことがわかるのである（略年表１参照）。ただ、戦前に調査され出土した遺物の所在調査は、今後の課題である。また、大正時代に岡山県内で精力的な調査を実施した京都大学の清野謙次が、彦崎貝塚のことを記していない。彦崎貝塚が、本格的に知られるようになった時が、清野が岡山県内での縄文時代人骨調査に熱中したときよりも少し後だったことによるのだろう(1)。

これ以降、終戦まで、彦崎貝塚に関する記事は特に見つからない。戦争末期という社会的状況も色濃く反映されていたのだろう。ただ、昭和42年（1967）学生社刊、酒詰仲男著『貝塚に学ぶ』では、その頃の岡山での状況が若干触れられている。静枝夫人の実家のある岡山県児島郡灘崎村片岡（町制は、昭和24年４月１日施行）に疎開していて、県内の貝塚の調査や巡検を行っていたようであるが具体的ではない。池葉須氏によると彦崎貝塚の状態の良さを直感的に認識されていたらしい。その後、昭和22年（1947）の秋頃に若林酒造株式会社が地所内にある敷地（畑）を樽干し場拡幅のために掘削したところ、厚さ２ｍを超す貝層が露出し、人骨や土器、石器、骨角器等多量の遺物が現れたらしい。そして、その掘削時の土は、国鉄宇野線彦崎駅脇の造成土として使用されたらしい。その造成土の中には、多量の遺物が含まれており、不特定多数の興味ある人たちが早々に持ち去ったようである(2)。現在でも、消防機庫の敷地内には、雑草に紛れマガキやハイガイ、ヘナタリ等の小片を肉眼で確認できる。いうまでもなく、この酒造会社の拡幅工事が東大による発掘調査につながる直接的な契機となったようである。

第２節　昭和23年（1948）～現在（2007）

昭和23年（1948）５月30日・31日に東京大学理学部人類学教室の酒詰仲男、清心学園の平田英文、灘崎中学校の池葉須（当時の旧姓、二部野）藤樹らによって、試掘調査（第１回発掘調査）が実施された。この調査を含めた地元対策や宿舎の手配等は、内田保男灘崎中学校初代校長と池葉須藤樹教諭の尽力が大きい。また、戦後の新しい歴史教育の実践という社会的背景が生の教材による学習という学術調査の実施に好条件であったのだろう。この試掘の成果として、特殊な埋葬形態である焼けた骨の上に三個の頭蓋骨を納めた穴を発見し、多量の土器も検出した。土器は、山内清男によって上層が後期、下層が前期と鑑定された。また、鈴木尚人類学教室主任助教授は、この埋葬人骨になみなみならぬ関心を示され第２回目の発掘調査を計画される契機となったようである。

第２回発掘調査は、東京大学理学部人類学教室鈴木尚、中島寿雄、酒詰仲男、清心学園平田英文、灘崎中学校池葉須藤樹らによって昭和23年（1948）11月12日から11月26日まで実施された。この中には、武田（現姓：間壁）葭子ら多くの中高生、教職員の参加があった。この時は、一区～四区までの発掘調査が実施され、埋葬人骨８体と多量の土器、石器を得て調査を終了した。11月17日に中島寿雄は、電探を実施した。この調査の模様は、11月19日付の山陽新聞に紹介され、見出しは、「石器前期の資料期待－彦崎貝塚、東大教授ら発掘－」である。参加者は、上記の方以外に、岡山医科大学の浦良治教授や吉備考古学会員の名がある。第１回・第２回発掘調査の概要は、酒詰仲男によって昭和26年（1951）日本考古学協会発行、「岡山県児島郡彦崎貝塚」『日本考古学年報１（昭和23年度）』として学会に紹介された。

第３回発掘調査は、東京大学理学部人類学教室（鈴木尚、酒詰仲男、中島寿雄、渡辺直経、田辺義一）、灘崎中学校池葉須藤樹らで昭和24年（1949）８月１日から８月17日まで実施された。この時は、武田（現姓：

間壁）葭子・高橋護ら多くの近隣の中高生、教職員、研究者（池田次郎等）が調査に参加協力している。また、武田（現姓：間壁）葭子は、この時酒詰先生から記録係を任され、詳細に記録を取っている。この調査では、五区～十四区を発掘し、10体以上の埋葬人骨のほか、前回より多量の土器、石器、骨角器を得た。この調査は三回の調査の中で最も規模の大きな調査であり、また、鈴木などが町民の身体測定等データ収集を積極的に行ったことや地元での講演等の普及啓発も作用して、町民やマスコミに広く周知されていたようである。池葉須氏によると現在と違って現地説明会が一般化していない社会状況の中、埋葬人骨が検出された時には、夜遅くまで多くの人たちが懐中電灯をもって見学に来たそうである。そのことを示すように、山陽新聞には、７月31日、８月12日、８月14日、８月16日、８月19日、８月22日付の新聞で取り上げられ、池葉須氏提供で掲載新聞社名が不明のもの（岡山日報か北児島新聞のどちらかの可能性がある）には、８月某日付に掲載されたようである。さらにNHK岡山ラジオ第一放送では、９月22日午前７時15分から30分まで「児島湾岸における貝塚と古代人の生活」として調査の模様が放送された。その後、灘崎中学校池葉須藤樹と広島大学の池田次郎が小試掘を実施した(3)。その後すぐ、遺跡の重要性を鑑み池葉須は旧灘崎町役場の幹部に保存措置を講ずるよう申し入れを行ったが、具体的処置が実施されることはなかったようである。

昭和25年（1950）４月から12月初旬まで、池葉須藤樹が国内留学生として岡山県教育委員会から東京大学理学部人類学教室に派遣され、彦崎貝塚出土遺物の整理に従事した。指導教官は山内清男。12月５日、人類学談話会で池葉須は、彦崎貝塚の遺物についてまとめたレポートを発表した(4)。これより前の７月には酒詰と連名で、土曜会刊、「児島湾南岸の諸貝塚」を『貝塚』第25号に発表した。

昭和26年（1951）４月26日、第三回原始文化研究会で山内清男が岡山県の縄文土器編年を口頭発表し、縄文前期彦崎Ｚ1式、Ｚ2式、縄文後期彦崎Ｋ1、Ｋ2式を基準資料として設定した(3)。これ以降、文献に登場することが多くなる（酒詰1951、竹安1952、平田1951・1952、鎌木・木村1955等）。昭和31年（1956）には、平田英文『灘崎町史』が刊行された。（山内1964）では、全国的な編年網の中で位置づけが示された。

東大の発掘調査のあと間もなく酒詰仲男は、東大を去って同志社へ移り、昭和40年（1965）に亡くなった。考古学資料を整理・管理していた山内清男も定年退官し、教室主任の鈴木尚にも報告書刊行の意志が無かったようである。その間、東京大学人類学教室からは、報告書の刊行もないまま時が過ぎていった。彦崎貝塚の報告書刊行はいよいよ期待できない。これを憂慮した池葉須は、山内清男に手紙を書き、自身が昭和25年（1950）12月に東大に提出したレポートを報告書の体裁にして世に出したい旨を伝えた。山内は、本来人類学教室員がやるべきことだが異動や死亡等で報告書刊行の計画は無いので自由にやってよかろうと返事をしたらしい。しかし、発掘調査時の写真と図面類がほとんど手元にない池葉須は当時のレポートをそのまま刊行することしか術がなかった。また、池葉須は、この遺跡の重要性と公共性を鑑み文化財保護の意図があってこの出版計画を当時の灘崎町長であった三宅八十一（池葉須とともにかつて灘崎中学校で教鞭をとっていた同僚）に相談したが、援助は得られなかった。しかし、この機会を逸した場合、今後いつ形あるものにできるかわからない状況を判断して池葉須は自費出版を決断した。そして、昭和46年（1971）４月１日、池葉須藤樹著『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告』が上梓された。出版の模様は、昭和46年８月23日付の山陽新聞で紹介されている。

池葉須の著作は、正式報告書がない現在でもその有効性は変わらないが、その中で分類された土器が、山内清男設定の型式をそのまま示していないと考えられる事例があり、若干注意を要する。しかし、動物遺存体の種別同定の報告は生業を概観するにはたいへん有効であった。

同年７月には、倉敷考古館が発掘調査を実施した里木貝塚の報告書が刊行された（間壁1971）。この成

果によって、西日本縄文土器編年の空白部部分をほとんど無理なく説明できるようになった。特に彦崎貝塚に関する見解として、このなかで、間壁は、磯の森式と彦崎Ｚ１式土器の関係に触れ、層位的事実から地域差ではなく、時間的前後関係があると結論付けた。また、それを（藤田ほか1975）でも追認した。

一方、これまで基準の土器に注目されることが多かったが、昭和54年（1979）には、東京大学総合研究資料館から縄文人骨の型録が刊行され、人類学の分野でもあらためて注目される遺跡となった（遠藤1979）。昭和58年（1983）には、（鈴木1983）が刊行された。また、（鎌木・高橋1965）、（間壁1980）、（高橋1981・1985）、（平井1987）、（千葉1989・1992）等では、彦崎貝塚の基準資料である土器に焦点を絞った論考、前後の土器との連続性を考察した研究、集落論、他地域の土器との比較検討、地域での位置づけの検討も発表され、現状（発表当時）での認識とその課題が提示されてきた。その中には、昭和23年・24年の発掘調査資料を再実測し、提示された論考もあり、少しずつではあるが基準資料が公開されてきた。

しかし、結局のところは、論理の展開上、正式報告書の未刊行に根本的な原因があるので、別の方向からのアプローチを模索せざるを得なかった。

昭和60年（1985）７月18日、史跡と考古資料の部門で灘崎町指定重要文化財に指定された。池葉須の申し入れから実に35年も経過してからようやく法的保護措置が講じられたのである。

平成に入り、彦崎貝塚の発掘調査の契機となった若林酒造株式会社（若林本家）が、周辺での大規模宅地造成の影響で酒作りを止めてしまった。町内から作り酒屋が無くなった。平成７年（1995）、間壁は「彦崎貝塚と灘崎の大昔」と題して市民対象に講演をおこなった。

平成８年（1996）には、旧灘崎町で初めてとなる文化財専門職員が採用され、文化財保護行政が強化された。同年（間壁1996）が刊行された。縄文時代の遺跡が多い倉敷市で、標識遺跡を数多く調査された先生方によって的確に解説されている。彦崎貝塚も児島の中の遺跡として取り上げられ、前期の彦崎Ｚ１式から後期の彦崎Ｋ２式まで紹介された。

平成８年（1996）～平成12年（2000）まで、彦崎貝塚の南側にあたる地点で約90,000㎡に及ぶ宅地造成に先立つ埋蔵文化財の調査が実施された。この間に起こった事件（開発事業主の倒産）等が影響したかどうかは定かではないが、彦崎貝塚の地権者の方から保存活用についての相談を受け始めるようになり、おりしも行政的に平成10年（1998）には、灘崎町第三次総合計画（ウェルネスプラン）の中で、彦崎貝塚を中心とした文化財の保護・保存・活用の意思が明確に示された。市民への普及啓発として昭和23年・24年の東大発掘資料の写真化とその一般公開、池葉須試掘調査縄文時代資料の公開（田嶋2002）、歴史入門講座や現地研修等が実施され周知が図られた。

平成15年（2003）６月、倉敷考古館長の間壁忠彦を委員長とした彦崎貝塚範囲確認調査指導委員会（現、彦崎貝塚発掘調査対策委員会）が組織され、国庫・県補助を受託し、55年ぶりに保存と指定範囲を明確化する確認調査が平成16年度までの２年間実施された。その間、（山崎2003・2004）では、東大の発掘調査による基準資料の一部が再実測され提示されている。２ヵ年の発掘調査期間中、国内外から多くの研究者・愛好家が訪れた。また、文化庁調査官の現地視察・指導が３回実施された。

平成17年（2005）年３月22日には、市町村合併によって新生岡山市となった。（田嶋2005）では、２ヵ年に及ぶ範囲確認調査の概要報告が行われた。そして、平成18年（2006）３月には、待望の範囲確認調査報告書が刊行された。その成果は、展示会等で一般公開を実施している。同年９月に文化庁調査官の現地視察と指導があり、10月末～11月初旬に範囲確認調査を実施した。また、現在、報告書の継続的な刊行（2007・2008）とともに指定と保存活用のため建設的に地元および関係諸機関と調整を図っている。

第１表　彦崎貝塚調査研究史略年表（１）

年号	西暦	調査・踏査・保存・活用関係等	文献・論文・資料紹介等
大正10年	1921	11月20日 発掘	
昭和3年	1928		東京帝国大学編『日本石器時代遺物発見地名表（第五版）』岡書院が刊行される。
昭和4年	1929		水原韻泉「岡山県下ノ貝塚地名表」『吉備考古』第一号岡山考古会において児島郡灘崎村彦崎　縄文式土器と紹介している。
昭和5年	1930		東京帝国大学編『日本石器時代遺物発見地名表（第五版）補遺一』岡書院が刊行される。
昭和5年	1930		永山卯三郎『岡山県通史』（上編）の石器時代地名表に掲載。彦崎貝塚の名称では記載されておらず灘崎村大字彦崎　貝畑・土器として紹介されている。東京帝国大学編1897『日本石器時代遺物発見地名表』が底本になっている。
昭和8年	1933		末永雅雄編『本山考古室図録』が刊行される。図版作成は、小林行雄がかかわる。
昭和9年	1934		末永雅雄編『本山考古資料目録』が刊行される。図版作成は、小林行雄が主に担当。
昭和10年	1935		2月5日、末永雅雄編『本山考古室要録』が刊行される。本書は、先の『本山考古室図録』と『本山考古資料目録』が合本されたものである。この記録によると大正10年11月20日に発掘、と目録番号949として石匙石鏃土製品一括　備前国児島息郡灘崎村彦崎馬場貝塚と記されている。また、番号959として弥生式皿形土器一個　口径三寸五分　深さ一寸一分　備前国児島郡灘崎村彦崎城山と記載されている。
昭和10年	1935	9月20日から11月16日までの期間に6回調査。10月22日の小発掘以外は、全て表面採集。人骨片、土器、黒曜石製石槍等採取。上層では、弥生土器・須恵器・中世土師器等採集。青銅製品も採取。	12月、佐藤美津夫『備前児島郡灘崎村大字彦崎貝塚調査概報』が著された。内容から保存状態が良好であることがわかる。付録として「児島郡石器時代地名表」を掲載。
昭和10年	1935	12月、水原岩太郎が踏査実施。遺物等表面採集。『吉備考古』第33号吉備考古会	
昭和12年	1937		佐藤美津夫「本山考古室資料に於ける岡山県考古学関連遺物」『吉備考古』第33号吉備考古学会　番号949「石匙石鏃土製品」一括紹介。遺跡名は彦崎馬場貝塚として紹介されている。
昭和12年	1937		佐藤美津夫「岡山県下石器時代遺跡地名表」『考古学』第8巻2号東京考古学会に彦崎貝塚を紹介。
昭和13年	1938		水原韻泉「岡山県下の貝塚の概説」『吉備考古』第36号吉備考古学会　彦崎貝塚が縄文貝塚として以外に弥生貝塚との認識もされていた様子がわかる。
昭和13年	1938		佐藤美津夫「児島地方の縄文土器」『吉備考古』第36号吉備考古学会　本山彦一・水原岩太郎・伊東忠志が踏査した地点と貝層露出地点を図示。口絵に彦崎貝塚で表面採集された船元Ⅱ式土器の模写図が掲載。
昭和13年	1938		伊東忠志「押型文土器を出せる備前黒島遺跡」『考古学』第9巻3号東京考古学会　岡山県下における押型文土器発見地として彦崎貝塚等を紹介。
昭和14年	1939	松浦隆三郎「貝塚報告」『吉備考古』第41号吉備考古会　昭和13年12月22日に行われた彦崎貝塚、舟津原貝塚、磯の森貝塚、船元貝塚等の踏査報告。同号の雑報でも紹介されている	
昭和16年	1941	水原岩太郎「雑報」『吉備考古』第50号　吉備考古会　4月3日に実施された吉備考古学会のハイキングで彦崎貝塚を訪れた際の記録。	
昭和20年	1945	8月15日終戦	
昭和22年	1947	秋、酒造会社が地所内にある彦崎貝塚の一部を酒樽干し場の拡幅のために掘削する。厚い貝層、人骨、土器や石器など多量に出土。	
昭和23年	1948	5月30日・31日酒詰仲男、平田英文、池葉須藤樹によって彦崎貝塚の試掘調査が実施された。	
昭和23年	1948	吉備考古学会で10月17日に粒江・彦崎の見学。結局時間がなくて彦崎貝塚は次回に。『吉備考古』第76号吉備考古学会	
昭和23年	1948	東京大学理学部人類学教室による彦崎貝塚第1回発掘調査が酒詰仲男・平田英文・池葉須藤樹らを中心として11月12日から28日まで実施された。間壁（旧姓武田）葭子ら多くの中高生や教職員が参加。	
昭和24年	1949	平田英文が1月16日（日）午後1時から3時まで玉井伊三郎宅で開催された1月例会で彦崎貝塚の発掘調査の概況を報告。B4プリントを1枚配布している。『吉備考古』第76号吉備考古学会	
昭和24年	1949	東京大学理学部人類学教室によって彦崎貝塚第2回発掘調査が8月1日から17日まで実施された。高橋護・間壁（旧姓武田）葭子ら多くの中高生や教職員が参加。最も規模の大きい調査。	
昭和24年	1949		同年8月の彦崎貝塚第2回発掘調査の模様は、9月22日午前7時15分～30分、NHK岡山ラジオ第一放送で「児島湾岸における貝塚と古代人の生活」と題して放送された。多和和彦1959『児島産業史の研究－塩と繊維－』児島の歴史刊行会に全文が所収。
昭和24年	1949	東大調査後、池葉須藤樹（灘崎中学校）と池田次郎（広島大学）が試掘調査を実施した。	10月20日、大本琢寿『吉備地方先史時代遺物発見地名表』を著す。木戸口（彦崎）貝塚の記載有。
昭和25年	1950	4月～12月初旬まで池葉須藤樹が国内留学生として岡山県教育委員会から派遣され東京大学理学部人類学教室で彦崎貝塚の遺物整理等に従事。山内清男に直接指導を受ける。	
昭和25年	1950		7月に酒詰仲男・池葉須藤樹「児島湾岸の諸貝塚」『貝塚』第25号土曜会にて彦崎貝塚の概説を行う。
昭和25年	1950	12月５日。池葉須藤樹が東大理学部第３号館で行われた人類学談話会で彦崎貝塚の遺物についてまとめたレポートを発表した。レポートは留学中の成果として東大に提出。	
昭和26年	1951	1月7日に岡山医科大学第三講義室で開催された岡山県学生考古学会1月総会で池葉須藤樹が彦崎貝塚出土の縄文土器の編年について発表した。池葉須藤樹「足跡　彦崎貝塚について」『遺跡』第2号岡山県学生考古学会	
昭和26年	1951	1月14日の吉備考古学会新年会で池葉須藤樹が昨年11月まで東大に国内留学してまとめた彦崎貝塚の遺物整理報告を行った。藤原琴一「例会記事」『吉備考古』第81・82合併号吉備考古学会	
昭和26年	1951		4月26日第3回原始文化研究会で山内清男博士が岡山県の縄文土器編年を口頭発表し、彦崎Z1・Z2式、彦崎K1・2式を設定した。
昭和26年	1951		酒詰仲男「岡山県児島郡彦崎貝塚」『日本考古学年報1（昭和23年度）』日本考古学協会にて、彦崎貝塚の試掘調査（5月）と第1回発掘調査（11月）の概要報告を行った。
昭和27年	1952		竹安雄太郎「彦崎貝塚の自然遺物」美濃判二ページ半のプリント作成。発行年の詳細不明。酒詰仲男「新刊紹介」『貝塚』第40号土曜会。
昭和27年	1952		平田英文「三備地方貝塚地名表」『遺跡』第5号岡山県学生考古学会で彦崎貝塚を紹介。
昭和28年	1953		平田英文「彦崎貝塚発見石器について」『遺跡』第14号岡山県学生考古学会
昭和30年	1955		鎌木義昌・木村幹夫「中国地方の縄文式土器」『日本考古学講座』4河出書房で、彦崎貝塚出土の彦崎Z1・Z2、彦崎K1・2式土器の解説を行った。
昭和31年	1956		平田英文『灘崎町史』灘崎町役場が刊行された。第1章にて彦崎貝塚の調査とその概要を記載。調査当時の貴重な写真類もあわせて掲載。また、鎌木義昌が激励の辞を序章に添えている。
昭和39年	1964		山内清男編『日本原始美術』1縄文式土器が講談社から刊行される。彦崎貝塚出土土器の広域編年の中での位置づけが示される。
昭和40年	1965		鎌木義昌・高橋護「瀬戸内」『日本の考古学』Ⅱ河出書房新社が刊行される。彦崎K1式とK2式の間に未命名型式の存在が指摘された。

第２表　彦崎貝塚調査研究史略年表（２）

年号	西暦	調査・踏査・保存・活用関係等	文献・論文・資料紹介等
昭和42年	1967		酒詰仲男『貝塚に学ぶ』が学生社から刊行される。岡山での活動状況が若干記されている。
昭和46年	1971		4月に池葉須藤樹『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告』が自費出版された。東京大学理学部人類学教室による彦崎貝塚の発掘調査後22年経って、ようやく出土品の一部が実測図と写真で公開された。その中には、国内留学のことや山内清男からの激励の手紙等も紹介されている。
昭和46年	1971		7月、間壁忠彦・間壁葭子『里木貝塚』倉敷考古館研究集報第7集倉敷考古館が刊行された。前期～晩期の遺物が多量に出土し、西日本縄文土器編年の空白部分をかなりの部分で明確化した。磯の森式と彦崎Z1式の関係を調査成果から地域差ではなく、時間差であると結論付けた。
昭和50年	1975		11月、藤田憲司・間壁忠彦・間壁葭子「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』第11集倉敷考古館が刊行された。昭和25年の同館が初めて実施した調査において、彦崎Z1式が多量に出土した。ここでも、里木貝塚の調査成果を援用し、磯の森式と彦崎Z1式との関係を再度時期差であることを追認した。
昭和54	1979		遠藤美子・遠藤萬里『東京大学総合研究資料館収蔵日本縄文時代人骨型録』東京大学総合研究資料館において、昭和23年・24年に調査され、検出された1号～22号、1区貝層下人骨が登録されている。
昭和55年	1980		間壁忠彦「縄文後期彦崎K2式（竹原式）をめぐって」『倉敷考古館研究集報』第15集倉敷考古館が発表され、現状での彦崎K2式の実体整理を行い、その位置づけを周辺土器群との関係性を検討して提示した。
昭和56年	1981		高橋護「近畿・中国・四国地方」『縄文土器大成』2中期講談社が発表された。彦崎Z1式、彦崎Z2式から中期初頭土器群の出現契機等を簡潔に解説。
昭和58年	1983		鈴木尚『骨から見た日本人のルーツ』岩波新書220　岩波書店が刊行された。その中で、比較資料として彦崎貝塚の埋葬人骨のデータが掲載された。
昭和60年	1985	7月18日、史跡と考古資料の部門で彦崎貝塚が旧灘崎町の文化財としての指定を受ける。	
昭和60年	1985		高橋護「彦崎貝塚」『岡山県史　考古資料』岡山県の中で、東大が昭和23・24年に調査した資料を使って彦崎Z1・Z2式土器の一部が再実測図として提示された。
昭和61年	1986		平井勝「縄文時代」『岡山県の考古学』吉川弘文館が刊行された。岡山県の縄文文化の研究史とともに池葉須藤樹が1971年に報告した東大資料を使用して代表的な遺跡として紹介。平井氏原図の石錘も紹介。
平成元年	1989		千葉豊「縁帯文土器群の成立と展開－西日本縄文後期前半期の地域相－」『史林』第72巻6号京都大学史学研究会の中で、中部瀬戸内の縁帯文土器の流れとして津雲A式→彦崎K1式→（＋）→彦崎K2式という時間的変遷案が提示された。
平成4年	1992		千葉豊「西日本後期土器の二三の問題-瀬戸内地方を中心とした研究の現状と課題-」『古代吉備』第14集古代吉備研究会において、縄文後期彦崎K1・K2式土器（東大昭和23・24年調査資料）の一部再実測図を提示。津雲A式と彦崎K1式には時間差があるということと彦崎K2式の細分案が提示された。
平成6年	1994	彦崎貝塚の発掘調査の契機となった若林本家が酒造会社の経営（作り酒屋）に終止符。地権者側からの保存の機運が起こる。	
平成7年	1995	彦崎保育園遺跡の一部が破壊される。縄文後期の土器等出土したとされる。	9月3日、間壁忠彦が「彦崎貝塚と灘崎の大昔」と題して灘崎町中央公民館で講演を行った。その中で、集落規模は10人程度であろうと述べた。
平成8年	1996	4月1日。旧灘崎町（現岡山市教育委員会）において初めてとなる文化財専門職員が採用となる。	3月、1995年に間壁らが行った講演が記録冊子『彦崎貝塚・綿』備南地域の地方史講座2として灘崎を知る会が発行した。
平成8年	1996	7月～12月。彦崎貝塚の南に位置する稲荷山の丘陵一帯で大規模宅地造成工事が計画され、それに伴う範囲確認調査が実施された。後期旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが判明した。遺跡名は左古谷遺跡。	間壁忠彦編『新修　倉敷市史』1考古　倉敷市役所が刊行された。その中で、羽島貝塚出土の彦崎Z1式土器等が掲載されるとともに、通観するなかで個性的な土器として紹介されている。
平成10年	1998	3月～7月。左古谷遺跡の本発掘調査。縄文土器は出土せず、わずかに石器のみ。第三次旧灘崎町総合計画（ウェルネスプラン21）に彦崎貝塚などの文化財の保存・保護活用の方針が明記された。	
平成12年	2000	左古谷遺跡の原因者である民間会社がメインバンクの破産により、会社更生法の適用を申請し、事実上の倒産。報告書の印刷製本費を旧町費で賄う羽目になり、議会では厳しい説明を求められた。また、こうしたした事件が引き金となったかどうかは不明であるが、この頃より、旧町時代の文化財保護委員に、彦崎貝塚の地権者から保存・活用の相談が寄せられ始める。	
平成13年	2001	彦崎貝塚の地権者からの保存保護の要望を行政として明確に認識し、その機運が庁内や地元で高まる。「なださき歴史入門講座」スタート（平成15 年度まで三年間実施）。	
平成14年	2002		昭和24年の池葉須試掘調査で出土した考古資料のうち、縄文時代に属する遺物（早期～晩期）の一部が図化・公開された。田嶋正憲「彦崎貝塚出土の縄文時代遺物－灘崎町歴史文化資料館収蔵資料の紹介－」『環瀬戸内海の考古学-平井勝氏追悼論文集－』古代吉備研究会
平成14年	2002	10月、昭和23年・24年に東京大学人類学教室が実施した発掘調査の際に出土した縄文人骨と遺物を東京大学総合研究博物館と国立科学博物館新宿分館で許可を得て旧灘崎町教育委員会（現岡山市教育委員会）が写真による記録を行った。	
平成15年	2003	3月15日、灘崎歴史文化資料館にて特別展「よみがえる彦崎貝塚写真パネル」展として、2002年10月に撮影したものを市民に初めて実物の写真による公開と啓発を開始した。6月までの会期であったが、2000人以上の市民が見学に訪れた。その後、一部を常設展示している。7月5日なださき歴史入門講座で池葉須藤樹が「彦崎貝塚から見た縄文人」と題して講演を行う。	山崎真治「高知県の縄文時代石器の実相－器種構成の変化と非在地系石材の動きを中心として-」『第14回中四国縄文研究会　中四国地域における縄文時代石器の実相』中四国縄文研究会において昭和23・24年に東大人類学教室によって実施された調査資料のうち、石器の一部が再実測され提示された。
平成15年	2003	6月、彦崎貝塚範囲確認調査指導委員会（現岡山市彦崎貝塚範囲確認調査対策委員会）結成（委員長：倉敷考古館長　間壁忠彦）。国庫補助・県補助を受託し、旧灘崎町教育委員会（現岡山市教育委員会）が55年ぶりに保存と指定範囲を明確化するための第一次確認調査（トレンチ調査）を実施した。9月～平成16年3月まで。9月と11月に文化庁調査官現地視察。	山崎真治「彦崎貝塚と瀬戸内海をめぐる遺跡群の動向」『縄文社会をめぐるシンポジウムⅡ-景観と遺跡-（予稿集）』縄文社会研究会にて、昭和23・24年に東大人類学教室によって実施された調査資料のうち、山内清男設定の標識資料の土器の一部（前期～後期）が最実測され提示された。
平成16年	2004	国庫補助・県補助を受託し、旧灘崎町教育委員会（現岡山市教育委員会）が55年ぶりに保存と指定範囲を明確化するための第二次確認調査（トレンチ調査）を実施した。6月～12月まで。2月に文化庁調査官現地視察。	
平成17年	2005	3月、旧岡山市、灘崎町、御津町が合併新生「岡山市」となる。7月から彦崎貝塚発掘調査事務所において本格的な報告書作成事業が開始された。	田嶋正憲（岡山市教育委員会）「岡山県彦崎貝塚の発掘調査」『第71回日本考古学協会発表要旨集』日本考古学協会にて学史とともに55年ぶりの調査成果の概要を将来的保存活用も含め報告した。
平成18年	2006		3月、岡山市教育委員会『彦崎貝塚範囲確認調査報告書』として2年間にわたる範囲確認調査の成果が公刊された。

第３表　彦崎貝塚調査研究史略年表（３）

年号	西暦	調査・踏査・保存・活用関係等	文献・論文・資料紹介等
平成18年	2006	9月に文化庁調査官現地視察。10月25日～11月8日まで、彦崎貝塚周辺(T28から西に約30mの地点)において岡山市教育委員会が試掘調査(トレンチ1.5m×10m)を実施。調査区をT40とした。上から中世遺物包含層2枚、弥生時代中期～終末の遺物包含層1枚、弥生時代中期の遺構面1枚、縄文時代晩期中葉の遺物包含層1枚、縄文時代晩期前半の遺構面1枚を確認した。貝層は無し。遺構と遺物包含層は周辺にも広がることが予想されると共に、保存状態が良好であり、晩期段階の居住区を想定可能な成果が得られた。晩期遺構面は、彦崎貝塚晩期ハイガイ層からの比高約1.5～1.7mである。海岸段丘上の崖上にあたる。従来の彦崎貝塚の部分が崖下に相当する。12月25日、文化庁と協議。	
平成19年	2007		3月、岡山市教育委員会『彦崎貝塚範囲確認調査報告書2』刊行。前号に掲載できなかった遺物と自然科学分析を掲載。
平成20年	2008		3月、岡山市教育委員会『彦崎貝塚範囲確認調査報告書3』刊行予定。平成18年10月末から11月初旬に実施したトレンチ調査(T40)の成果報告書。

第３章注

（注１）清野の岡山での発掘調査関連論文中に高取輝雄という人物が道先案内人的存在でたびたび登場する。この人物について若干記しておく。この人は、当時、児島郡灘崎村片岡（現、岡山市灘崎町片岡）に在住していた考古篤志家であったようである。弟の基（もとい）氏とともに活動をしていたようである。清野の津雲・原・粒江貝塚等の調査に協力をしている様子が窺える。また、輝雄氏は、大正５年（1916）には、東京考古学会の会員になっている。さらに、大正９年（1920）頃は、吉備考古会発起者会のメンバーでもあったようである。また、同年９月25日雑誌『考古』初号が同会より発行され、輝雄氏は、研究として「吉備郷土史料書目」を執筆している。創刊の辞は、渡辺頼母、祝辞には、鳥居龍蔵、本山彦一、松本彦一郎、長谷部言人、沼田頼輔等が寄せている。しかし、清野も記しているように、輝雄氏は昭和元年（1926）頃若くして亡くなった。また、弟の基氏も昭和元年（1926）10月に30歳で亡くなっている。聞き取り調査に関しては、高取忠之氏を始めとする片岡地区の皆様と高取基氏の御親族にお世話になりました。厚くお礼申し上げます。また、御船恭平1956「吉備考古のあゆみ」『吉備考古』第91号終刊号吉備考古学会も参考にした。

（注２）当時中学生の考古学少年であった高橋護氏によると、知らせを受けて駆けつけた時には、ほとんどの遺物が持ち去られていたという。また、この時、頭蓋骨を採集したが、この分は、昭和23年５月に実施された酒詰氏らの試掘時に渡されたそうである。現在、この人骨は、国立科学博物館新宿分館に保管されており、上層人骨との標記がある木箱に収納されたものがそれに該当するという。東京大学大学院博士課程山崎真治氏のご教示による。

（注３）池葉須藤樹氏試掘調査出土品は、灘崎中学校で保管されたあと旧灘崎町教育委員会（現岡山市教育委員会）に移管され、保存されている。縄文時代の遺物は（田嶋2002）で公表されている。池田次郎氏調査出土品は、現在、広島大学大学院文学研究科考古学研究室に保管されている。古瀬清秀先生のご好意で実見させていただいた。厚くお礼申し上げます。羽島下層～刻目突帯文までの縄文土器が約1600点ある。その他に、石器（製品・剥片）、骨角器、動物遺存体、貝類が約100点収蔵されている。彦崎貝塚ではなく、西土井貝塚の遺跡名称で同研究室のデータベースには登録されている。

（注４）このレポートは、昭和46年（1971）にそのままの形で自費出版されるのであるが、昭和25年12月当時、池葉須氏によるとレポートは山内自身が目を通し、修正すべき点は修正したそうである。また、型式名の表記数字については山内は、何も言わなかったとのことである。

（注５）山内清男が設定した彦崎Ｚ１・Ｚ２・Ｋ１・Ｋ２式の数字の表記については、ローマ数字表記とアラビア数字表記の二通り見られるが、1950年に山内清男の指導の下、彦崎貝塚出土資料を整理した池葉須は、1950年12月に東大へ提出したレポートでローマ数字表記を採用している。しかし、同年12月５日に行われた人類学談話会における酒詰仲男の池葉須発表分へのメモには、当該型式が両方で表記されている。東京大学総合研究博物館諏訪元先生のご好意で『酒詰日誌』を実見させて頂きました。厚くお礼申し上げます。また、山内清男の指導をうけた（鎌木・木村1955）でもローマ数字表記を採用している。したがって、岡山では、現在でもローマ数字表記が普及していて馴染みがある。ところが、矢野健一編2004『岡山県高島黒土遺跡資料山内清男考古学資料14』奈良文化財研究所史料第66冊奈良文化財研究所では、1950年以前に山内がアラビア数字で表記した当該型式を含む西日本縄文土器編年試案メモが見つかり、一部が公開された。また、加納実1999「第３回原始文化研究会の岡本勇先生のメモ－山内清男博士の岡山県後・晩期編年をめぐって－」『土曜考古』23号によれば、1951年の第三回原始文化研究会の発表でもアラビア数字表記のようである。さらに、鈴木保彦編2000「山内清男　縄文講義ノート－於：東京大学理学部人類学教室（昭和28～29年）－」『縄文時代』第11号では、1953～1954年にかけて東京大学理学部人類学教室の山内研究室で行われた「縄文講義」においても当該型式名はアラビア数字表記である（しかし、前期を示す‘Ｚ’というアルファベットは付されていない）。山内清男編1964『日本原始美術』１．縄文式土器　講談社もアラビア数字表記を採用している。このようなことから総合的に判断するとアラビア数字表記が本遺跡の標識土器の表記では最も古い明文化されたものであることから爾後アラビア数字表記に統一したい。

東大教授ら貝塚調査に瀬崎町へ

今春五月前後二回にわたり東大人類学教室、酒詰講師一行が來瀬、兒島郡瀬崎町馬場地域の貝塚を発掘、約四千年以上と推定される人骨体のほか土器、ヤジリなど多数を携えて帰京、その後これが研究をつゞけていたが

今回さらに本格的調査を行うことになり、八月一日から向う一週間の予定で同教室、鈴木教授酒詰講師一行四名が來町して拡大発掘を行う

山陽新聞 昭和24年 ７月31日付　　山陽新聞社提供

東大教授ら講演

彦崎で貝塚発掘成果を

兒島郡瀬崎町彦崎馬場地内の貝塚を発掘し、日本最古の人骨体や世界にまれな異形石器などを発見し、学界に貴重な資料を提供した東大人文学教室、鈴木教授一行は引つゞいて活躍中であるが、現在までの研究結果について十四日午後八時から同町彦崎共同事務所で発表講演会を開く

山陽新聞 昭和24年 ８月14日付　　山陽新聞社提供

第36図　新聞掲載記事（１）

鈴木博士帰京

既報、四日以來兒島郡瀬戸町馬場地内から東大人類学教室、鈴木教授一行によつて四千年以前の人骨や縄紋石器時代の遺物、土形石器など多数が発掘され、先史学、考古学上大きな成果をあげたが、十六日さらに四、六歳と思われる同時代の幼兒骨も発見され、本年五月の第一回発掘と合せて計二十二体を得たが

一方現住民五十名の計測は従來の考古学説をくつがえす有力な根拠がつかめたわけで、大体拡大発掘の目的を達した鈴木博士は二週間の長期調査を終つて十七日夕帰京、酒誌講師はさらに鹿屋市本郷町船小台古墳の「組合せ石棺群」の調査研究に十八日出発した

山陽新聞 昭和24年 8月19日付　　山陽新聞社提供

古代人の楽天地

貝塚発掘にみる生活の跡

既報の通り瀬戸町馬場地内のさつまいも畑で東大人類学教室が発掘中の貝塚は同教室講師伊東信雄氏によつて昨日今迄発見されたもののうち最古のものと鑑定が下されたが、この他にも鹿屋市下祓井戸第二の貝塚が出られ、昨秋瀬戸内海沿岸が古代人の発祥地であつたことが想像されている、ことに瀬戸町の貝塚は当時の状態をそのまま残存している点で珍重され、昨秋四体の人骨が出られた八体の人骨は穴を掘つて立ヒザの形で埋葬されたもの、その遺骸しまた住居跡の中からは古代の食生活を物語る貝殻等が出てつている

現在瀬戸町の瀬戸貝塚は学術調査の対象から数キロ、海岸線大谷の山手で発掘は同教室講師中学、東京帝大の生徒らが昨日から瀬戸中学、瀬戸中学の生徒らが昨秋発掘した貝塚の西隣から数十メートル離れた地点で発掘中で、多くの貝殻と混つているところから貝塚が二時をたして第五から二層下に第一の貝塚があり、さらに二層掘り下げれば第三の貝塚が出ることから第一層と第二層の時代差は約千年とされ古代人が数千年に亘つて同一地点で暮らしたことを物語つてゐる

（写真は炎天下に弁当を食べる中学生）

池葉須藤樹氏 提供
詳細不明（推定 昭和24年８月）

第37図　新聞掲載記事（２）

23年ぶりに報告書

岡山・桑田中の池葉須教諭　資料を自費出版

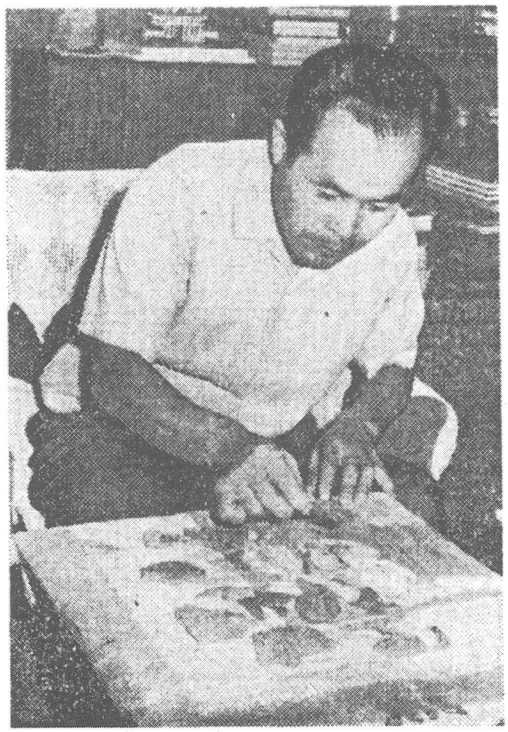
"生き返った"彦崎貝塚（灘崎町）

昭和二十三、四年に東京大学理学部人類学教室が行なった彦崎貝塚（児島郡灘崎町）の発掘資料は現在、同教室の倉庫に収められたままになっているが、このままでは、貴重な郷土の資料が死んでしまう！と「彦崎貝塚発掘調査報告書」を自費出版した人がいる。彦崎貝塚は縄文（じょうもん）時代の典型的な遺跡。同時代の土器歴史を知るうえでも貴重なもので"二十三年ぶりに彦崎貝塚が生き返った"と考古学関係者から喜ばれている。

この人は、岡山市立桑田中学校で社会科を担当している池葉須藤樹さん(28)＝岡山市田中。池葉須さんと彦崎貝塚の出会いは昭和二十二年、灘崎中で教べんをとっていたとき。研究のため同地を訪れた東大の酒詰仲男人類学教室講師（当時）を案内したのがきっかけ。このとき試掘的な坪掘りが行なわれたが、人骨三体、土器多数が出たため二十三年、二十四年にかけて人類学教室が大規模な発掘を行ない、約五十箱分の出土品が採集された。このとき池葉須さんも灘崎中の生徒たちと発掘調査に加わった。

採集された遺物は、ほとんどすべてが東大に持ち帰られたが、二十五年、池葉須さんは東教委から派遣されて東大理学部人類学教室に国内留学、幸運にも彦崎貝塚資料と再会、学生として研究する機会に恵まれた。留学は九カ月ほどだったが、その間に、ほとんどの資料を分類整理し、研究ノートをつくりあげた。

それから二十年、当時、人類学教室に籍をおいて発掘調査に加わった人は、転勤、死亡などでほとんどいなくなったが、池葉須さんの心に残りつづけたのは、彦崎貝塚の調査報告書が出ていないこと。出土物だけは同教室倉庫にあるものの、記録写真などは、研究した人が持ち帰っているため四散の状態。報告書が出される可能性は全くなくなってしまった。このため池葉須さんは、昨年八月、自分が研究したノートをもとに報告書を自費出版することにした。それから報告書づくりのための原稿書き、さし絵かき、写真の整理をし、このほど報告書の印刷を終えた。報告書はA5判八十五ページ、写真、さし絵が多く入れられている。彦崎貝塚から出土した土器は、現在、彦崎ZI、ZII彦崎KI、KII式と呼ばれる標準土器とされ、瀬戸内文化の分布状態、文化交流の手がかりとされている。この報告書を受け取った考古学関係者たちは、"この報告書は、縄文時代研究の大事な資料として活用できる"と池葉須さんの業績を高く評価している。



手元に残っている彦崎貝塚の出土品を調べる池葉須さん

山陽新聞 昭和46年 8月23日付　　山陽新聞社提供

第38図　新聞掲載記事（3）

第4章　ま　と　め

第1節　出土遺物と自然科学分析について

（1）土器

掲載した遺物は、前期から晩期のものである。土器については、前期Ⅳ群土器と後期Ⅲ群とⅣ群及び無文土器、底部を主体に掲載した。前期Ⅳ群土器の無文土器には、口縁端部にキザミをもつものと持たないものがあり、キザミをもつものは前期Ⅲ群と同様のヘラあるいは竹管状工具を原体として使用したものもあるが、それを変則的に使用して生まれるバリエーションの豊富さ、器表に見られる生爪痕とともに内外面の指頭圧痕が一段と顕著になることは前段階から継承された属性の一つと言えよう。有紋土器と同様に強くキャリパー状をなす無文土器の存在も重要である。この形態は前期Ⅲ群土器の無文土器には見られないプロポーションである。後期の土器については、後期Ⅲ群土器の中に東大の調査や池葉須氏試掘調査、池田氏試掘調査においてあまり検出されていない有紋土器が注意される。破片のため全体の形状が判然としないが他地域との並行関係を追う上でよい架け橋となるだろう。また、後期Ⅳ群土器の無文土器も重要で有文土器とプロポーションが連動するものが多いけれども直線的に内傾する口縁をもつ土器は有紋土器には見られないものである。その連動性は、深鉢だけに限られない現象である。有紋土器と加飾装置以外は全く同じ調整で最終的に仕上げている土器の存在もこの後期Ⅳ群期くらいから増加する傾向にある。また、後期の土器は、大型の破片もおおくその中には何らかの種子と推定されるその圧痕が観察された。さらに、種子自体が土器胎土中に観察されるものもある。調査員は、そのうちの一つを貯蔵穴から検出されたイチイガシと形態的に大変よく似ているのでそれではなないかと判断しているが、今後は、こうした土器片を抽出してその圧痕の種子同定作業を実施し、また、ボーリング調査とともに彦崎貝塚周辺の古環境・古生態系を推定・復元してみる必要がある。

（2）石器

今回は、主として製品以外に未製品及びその剥片石器が製作される途中で生ずる石器も掲載した。時期別の器種の出土傾向は、前回提示した一覧表と大きく変更される点はない[1]。しかし、細かく注意してみると早期～晩期までの石器群（今回は前期から晩期まで掲載である。）は、その剥片石器の製作過程において時期ごとに若干の相違点が見られる。その点について簡単に触れておこう。

まず、その原材料についてであるが、彦崎貝塚において使用された石材は、約95%がサヌカイトと安山岩系である。それ以外の石材[2]は、主に礫石器として使用されている。サヌカイトは、前期～晩期までのフレイク140点を蛍光X線分析と顕微鏡観察による自然科学分析を実施したところ全て香川県金山東産であることが結論された（白石2007）。本遺跡に持ち込まれたサヌカイトはほとんどが対岸の金山東産であることが判明したが、残る安山岩中には明らかにその色調と節理のきめ細かさに違いが見られるものがあり、二上山系であるとされるものが少なからず存在する（田嶋2006）。この石材は、後晩期にのみ認められるものであるが、製品は無く石核とフレイクである。また、黒曜石製品も過去の調査で出土しており重要である[3]。近辺では、大橋貝塚、溝落遺跡で姫島産が検出されている[4]。

器種毎の使用石材みると、石鏃は、頁岩製１点、ガラス質流紋岩製の未製品１点以外は、全てサヌカイト・安山岩製である。石槍・石錐・楔形石器は全てサヌカイト製。削器・刃器類・剥片類は、結晶片岩製が数点以外は、全てサヌカイト・安山岩製である。打製石斧・磨製石斧には、サヌカイト・安産岩製は少なく、遺跡近辺の明石山山麓に岩盤があるフォルンフェルスやヒン岩、流紋岩製が目立つ。石皿・台石、叩石・磨石、凹石も砂岩、花崗岩、流紋岩製である。石棒は、結晶片岩、多孔質安山岩製である。

次に、剥片石器に限ってみた場合、石核は全てサヌカイト・安山岩製である。原材料そのものの搬入は、小型のものが晩期に１点見られるだけであるが、前中期には、原石から最初に剥ぎ取った自然面を残す大型の剥片が多く見られることと石核も本書分類の①類が多い傾向にある。一方、後晩期には、石核は小さい剥離面をたくさん残すもので②類、③類が増加傾向にある。また、後晩期には、楔形石器、一定方向節理に截断面のある剥片の増加も指摘できる。部分的な発掘調査からの推定になるが、本遺跡での剥片石器製作石材の搬入形態は、前中期は、礫状または大型の剥片の形で、後晩期には、小型の原石あるいは板状の剥片の形で搬入されたものと推定される。また、この児島の西側に位置する縄文遺跡群の中には、サヌカイト原石や食パン様の板状剥片を持つ遺跡があり、製品を多く持つ本遺跡を含む各遺跡群との関係が問題になろう[5]。また、そのサヌカイトの獲得経路については、前期の例（田嶋 2006 第 154 図 197 頁参照）であるが、現在の瀬戸大橋が架かっているルートと偶然にもほぼ一致している。土器もそれを連結する島々から検出されている。このことは、現代的で科学的視点からの安全な高架橋の建設術と数千年前の彼らの経験的な生活から導き出されたであろう安全な航海術の軌跡が瀬戸内海という自然を相手にした場合に、その当時、相互に現実的に実践しえた方法論と技術の違いを超えた同じ予測によった結論にたどり着いた実態を示してはいないかと想像を逞しくするのである。勿論、帰属時期の確定できた資料を用いた集落検証が必要であることは言うまでもない。

（３）骨角貝製品

第４表は、（田嶋 2006）の集計表に今回の分を加算し、出土点数を集計したものである。

本遺跡で最も古い土器は、押型文土器であるが、この時期に貝層は形成されていない。したがって、当該期の動物遺存体と骨角貝製品は未検出である。次の羽島下層式期も貝層は形成されていないが、サメ・エイ類椎骨製の垂飾（小玉）が１点検出されている。次の磯の森式になって本遺跡では貝塚の形成が始まる。しかし、小規模な貝塚であると共に調査範囲の規制から当該遺物の検出はできなかった。一定程度量の遺物が検出されるのは彦崎Ｚ１式期からである。この時期（新・古の二段階があると層位と遺物の検討により把握している）は、マガキ主体の貝塚を二箇所に形成し、貝層のない台地中央部付近が集落址（居住区・作業区）と推定され、炉址や土坑、ピッ

第４表　彦崎貝塚出土骨角貝製品集計表

時期	貝刃	貝輪	刺突具	釣針	垂飾	鹿角製品	その他	合計
羽島下層	0	0	0	0	1	0	0	1
彦崎Z1	8	10	2	1	1	1	1	24
彦崎Z2	1	6	2	1	6	0	1	17
中期前半	0	11	1	0	8	0	1	21
後期前半	0	1	0	0	5	1	0	7
後期後半	1	3	1	3	26	2	0	36
晩期前半	0	0	0	0	10	0	0	10
時期不明	0	1	1	0	7	0	0	9
総計	10	32	7	5	64	4	3	125

ト群が検出された（田嶋 2006）。当該遺物は、総数24点の遺物が検出された。漁撈具としては、刺突具と単式釣針、貝刃が、装飾品としては貝輪、垂飾が検出された。また、打欠石錘も4点検出された。検出魚種は、クロダイ・スズキ・マダイが主体を占め内湾岩礁砂泥底性、外洋性を示す。また、カニ類やコチ属、ボラ等も検出されており干潮時の海岸部で捕獲されたものと推定される（富岡・石丸 2006、2007）。マダイには50㎝を超える大型の体長に復元可能なものもある。次の彦崎Z２式期も貝層が形成される。マガキが90％を占めていた彦崎Z１式期に比べ他種の占める割合が増加する特徴が指摘できる。総数17点検出された。当該期でも刺突具、単式釣針、貝刃、貝輪、垂飾が検出されている。検出された魚種は、前時期とほとんど同じであるが板鰓類の増加が見られる。打欠石錘は３点検出された。当該期は墓地が形成されたが、貝輪と垂飾の占める割合が増加していることと無関係ではないと考えられる。

中期前半は、総数21点検出された。漁撈具として刺突具が、装飾品として、貝輪11点、垂飾８点（イノシシ下顎製も含む）が検出された。検出された魚種は、先の３種に主体は変わらないが、僅かながらスズキが増加してくるようである。貝塚の貝種も前時期に比して他種の割合が増加する。当該期も墓地が形成されたが、明らかに彦崎Ｚ２式期の墓地から外れた位置にそれを形成し、墓地間には遺構の少ない空間を用意してある。しかも、それが計画的な配置の可能性が高いと推定されるのである。中期後半から後期前半にかけての文化遺物や遺構の検出は今回の調査では他時期に比して少なかったが、動物遺存体からみてみると集落の性格の違いを反映した可能性も考えられる。確かに、児島周辺では当該期の遺跡数が少なくなる。中期後半では、当該遺物は未検出である。

後期前半では、総数７点で、貝輪１点、垂飾５点である。しかし、動物遺存体を見てみると文化遺物や当該製品の少なさとくらべて、全時期を通した本遺跡での獲得魚類の最小個体数が26と最多を示す。そして、クロダイ・スズキ・マダイの３種ほぼ同率で占めていた主要魚種にスズキが突出する組成に変化した。このことは、児島湾の浅海化の進行を反映しており、岩礁性の地形が少なくなってきたことを示している。それは、貝塚を形成する貝種組成にも同様に反映されている。打欠石錘は未検出である。後期後半では、総数36点検出された。漁撈具として、刺突具１点、単式釣針３点、貝刃１点が、装飾品として貝輪３点、垂飾26点が検出されている。検出された魚種は後期前半と同様である。貝塚の貝種もほぼ同様であるが、オキシジミ等汽水性貝種も増加する。当該期の貝塚の調査区が最も広かったので文化遺物とともに検出点数も多い。石錘は６点検出されている。当該期の釣針は、軸長が10cm近くに復元できる大型のものがあり、動物遺存体では推定復元体長１ｍ以上のオオニベが当該期に検出された。こうした魚種が釣漁の対象であったと推定される。晩期は、調査区の規制のため総数10点に留まる。全て装飾品である。動物遺存体では、スズキやハモ類が検出されており、前時期と同様の魚種が対象であったようであるが、貝塚の主体貝種が前時期までのマガキが一転し、約80％がハイガイに変化する。よって海岸線が遠のき、岩礁性の魚介類は捕獲ができにくくなったことが予想される。陸生動物は、イノシシとニホンジカが前期から晩期まで主体をしめ、全身骨が検出されているが、彦崎Ｚ１式期のニホンジカに関しては特にイノシシに比して少ないようである。さらに、動物遺存体には特殊廃棄があり、狩猟対象種における祭祀装置が考えられる。また、後晩期の墓地は明確でない。しかし、山田（山田 2007）が指摘するように、本遺跡での墓地の位置づけは、時期ごとの集落形態と密接に関係しており、後晩期のように居住区近くに墓が検出されていないから存在しないとは言えない。こうしたことは、埋葬方法や装飾品の採用等に顕在化した主体的習俗に起因している可能性を示すが、今後は、継続的に墓地を含め居住形態や生業を総合的に分析する必要がある。

第２節　瀬戸内地域における縄文時代の釣針について

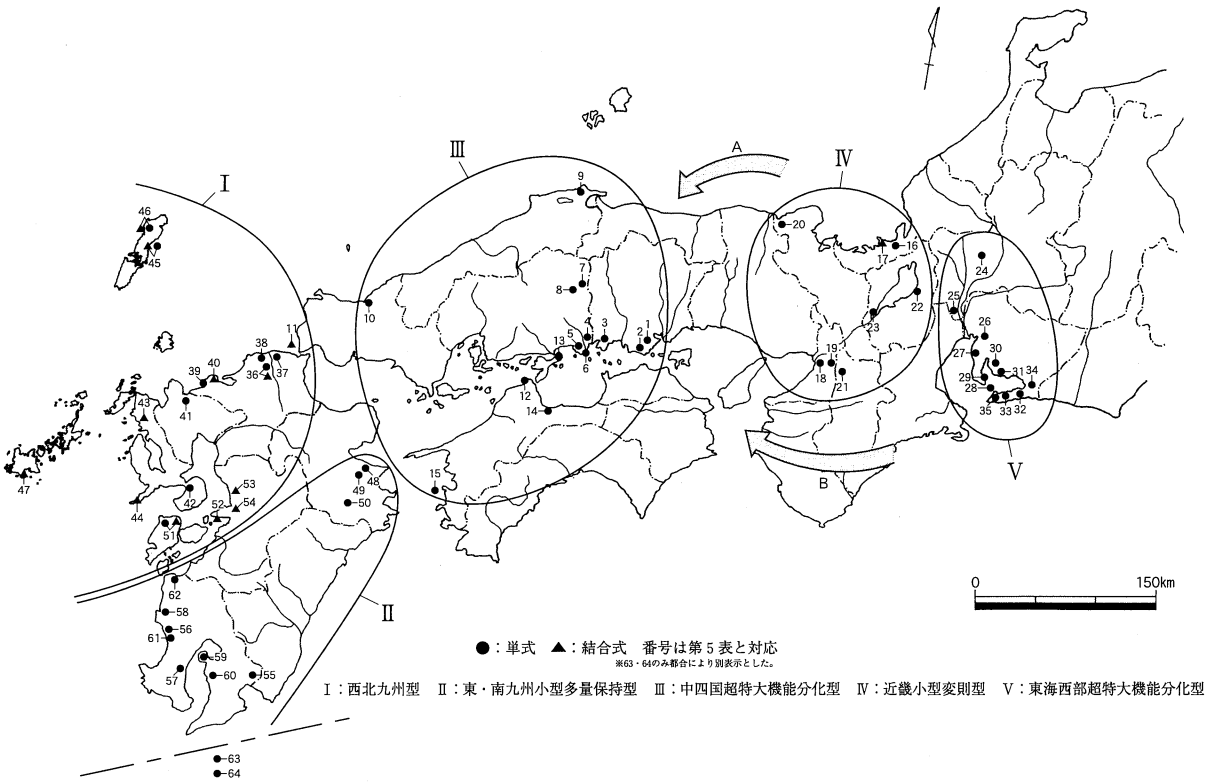
はじめに

縄文時代の漁撈活動の存在を示す直接的な証拠は、遺跡内からの魚類遺体の検出であるが、それは、一連の消費サイクルの最終結果をあらわしているものである。そこにいたる捕獲行動を推測させる主な考古遺物として、石錘、土錘（土器片錘）、骨角製漁撈具等がある。本章では、瀬戸内地方における縄文時代の漁撈具のうち骨角製漁撈具の一つである釣針について考えてみたい。また、比較検討のため東海地方（愛知・岐阜）から西（九州まで）を対象とした（以下、当該地域という）。

（１）分布と時期ごとの特徴

管見によれば、当該地域では、現在までに64以上の遺跡で100本以上の釣針が検出されている（第39図～第41図・第５表参照）。いずれも、原材料の脆弱性から貝塚や低湿地遺跡の集中する地域での検出例が多い傾向にある。また、釣針は、構造的に単式（A類）と結合式（B類）に分類されていて、両類ともいくつかのバリエーションがある（渡辺1973）。当該地域の九州では、前中期はB類が優勢、後期は両者が拮抗するようである。中国・四国地域と近畿・東海地域では全時期を通しA類が優勢のようである。しかし、共通しているのは後期段階から前時期と比して格段に検出点数が増加することである。

次に原材料をみてみると、大きく鹿角製と猪牙・獣・鳥骨製（稀にヤコウガイ製）がある。第５表をみてみると九州地域では、鹿角製が少ない傾向である。一方、中国・四国地方と近畿・東海地方では、鹿角製



第39図　西日本縄文時代釣針出土遺跡分布図

第５表　西日本縄文時代釣針出土遺跡一覧

点数左側の※は前時期と跨る、？は帰属時期不明、△は結合式、□は逆T字型、他は単式
右側の◎は、猪牙・獣鳥骨製、×はヤコウガイ製、無印は鹿角製、●は鹿角＋猪牙、○は存在を示す。
番号は、第39図と対応する。

番号	所在地	遺跡名・出土地点	早期	前期	中期	後期	晩期	総数
1	岡山県	彦崎貝塚		3		8		11以上
2	岡山県	福田貝塚				1		1
3	岡山県	津雲貝塚					※7	7
4	広島県	大門貝塚				？1		1
5	広島県	洗谷貝塚				1		1
6	広島県	福山市引野埋立地				？1		1
7	広島県	油木町出土				？1		1
8	広島県	帝釈観音堂洞窟	1					1
9	島根県	小浜洞窟				1		1
10	山口県	白潟遺跡					1	1
11	山口県	六連島遺跡				△1●		1
12	愛媛県	江口貝塚				1		1
13	愛媛県	萩の岡貝塚					1	1
14	愛媛県	西条市禎瑞					？1	1
15	愛媛県	宇和島市日振島					？1	1
16	福井県	立石遺跡				1		1
17	福井県	鳥浜貝塚		△1				1
18	大阪府	森の宮貝塚				2	※2 ※1◎	5
19	大阪府	讃良川遺跡			○			○
20	京都府	浜詰遺跡				2◎		2
21	奈良県	橿原遺跡					1	1
22	滋賀県	滋賀里遺跡					2	2
23	滋賀県	入江内湖遺跡				※6◎		6
24	岐阜県	九合洞穴					※1	1
25	岐阜県	羽沢貝塚					1	
26	愛知県	雷貝塚					1	1
27	愛知県	東畑（大草南）貝塚					1	1
28	愛知県	神明社貝塚					8	8
29	愛知県	天神山遺跡		※1				1
30	愛知県	八王子貝塚				※1		1
31	愛知県	枯木宮貝塚					6	6
32	愛知県	吉胡貝塚					※8	8
33	愛知県	伊川津貝塚					※4	4
34	愛知県	五貫森貝塚					1	1
35	愛知県	保美貝塚					※2	2
36	福岡県	新延貝塚			1	△※2●		3
37	福岡県	山鹿貝塚		2◎	1◎	1◎		4
38	福岡県	榎坂貝塚				1◎		1
39	福岡県	天神山貝塚				2◎		2
40	福岡県	桑原飛櫛貝塚				△1●		1
41	佐賀県	菜畑遺跡		△4◎				4
42	長崎県	有喜貝塚				1◎		1
43	長崎県	下本山岩陰遺跡				△1●		1
44	長崎県	脇岬貝塚				△1●		1
45	長崎県	佐賀貝塚				6◎ △19●		25
46	長崎県	志多留貝塚				□3◎ △4●		7
47	長崎県	宮下貝塚				1 △4●		5
48	大分県	小池原貝塚				1◎		1
49	大分県	横尾貝塚				1◎		1
50	大分県	竜宮洞穴				2◎		2
51	熊本県	沖ノ原貝塚				3 △2●		5
52	熊本県	浜ノ洲貝塚				△1●		1
53	熊本県	若園貝塚				△1●		1
54	熊本県	西岡台貝塚				△1●		1
55	鹿児島県	片野洞穴				1◎		1
56	鹿児島県	市来貝塚				30◎		30以上
57	鹿児島県	草野貝塚				28◎		28
58	鹿児島県	麦之浦貝塚				1◎		1
59	鹿児島県	武貝塚				1 3◎		4
60	鹿児島県	柊原貝塚				2 10◎		12以上
61	鹿児島県	川上貝塚				10◎		10
62	鹿児島県	江内貝塚				2◎		2
63	鹿児島県	犬田布貝塚				1×		1
64	沖縄県	室川遺跡				□1◎		1

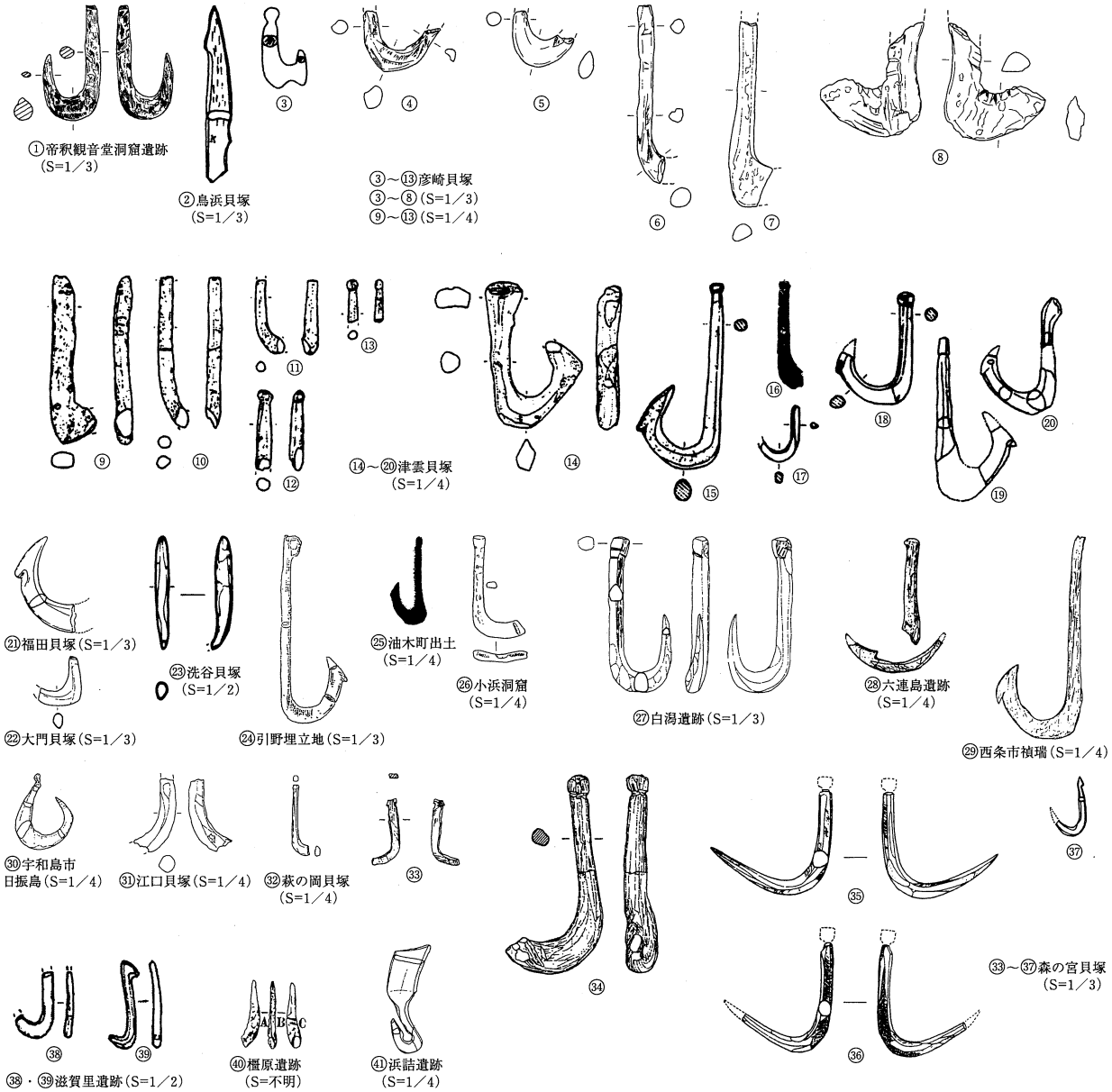
が全時期を通じて優勢である。東日本の場合でも鹿角製よりは骨製のほうが優勢のようであり、原材料の選択性や獲得経路あるいは、もっと大きくその背後にある集落間の認識の違いを反映している可能性がある。

一方、当該地域で最も古い釣針は、中国地方の帝釈観音堂洞窟遺跡の早期末のもの１点（A類）である。現在のところ、当該地域ではこれをさかのぼる釣針は確認されていない。しかし、釣針の検出は無いが、早期前半には石錘が出土しており、釣漁以外の獲得行動が実践されていたことが推定される。また、注目されるのは、この遺跡が内水面・河川漁業による漁獲活動を実践していたことである。さらに、早期末前期初頭は、貝殻条痕文土器群が東から進入して来る時期でもあり、東海地域から琵琶湖沿岸を経由して日本海側から中国地方にもたらされた可能性がある（第39図Aルート）。繊維混入土器群は、中国山地沿いでは、しばしば見られるが、瀬戸内沿岸で検出されることは稀で、管見では彦崎貝塚で少量検出された例しか知らない（田嶋2006）。

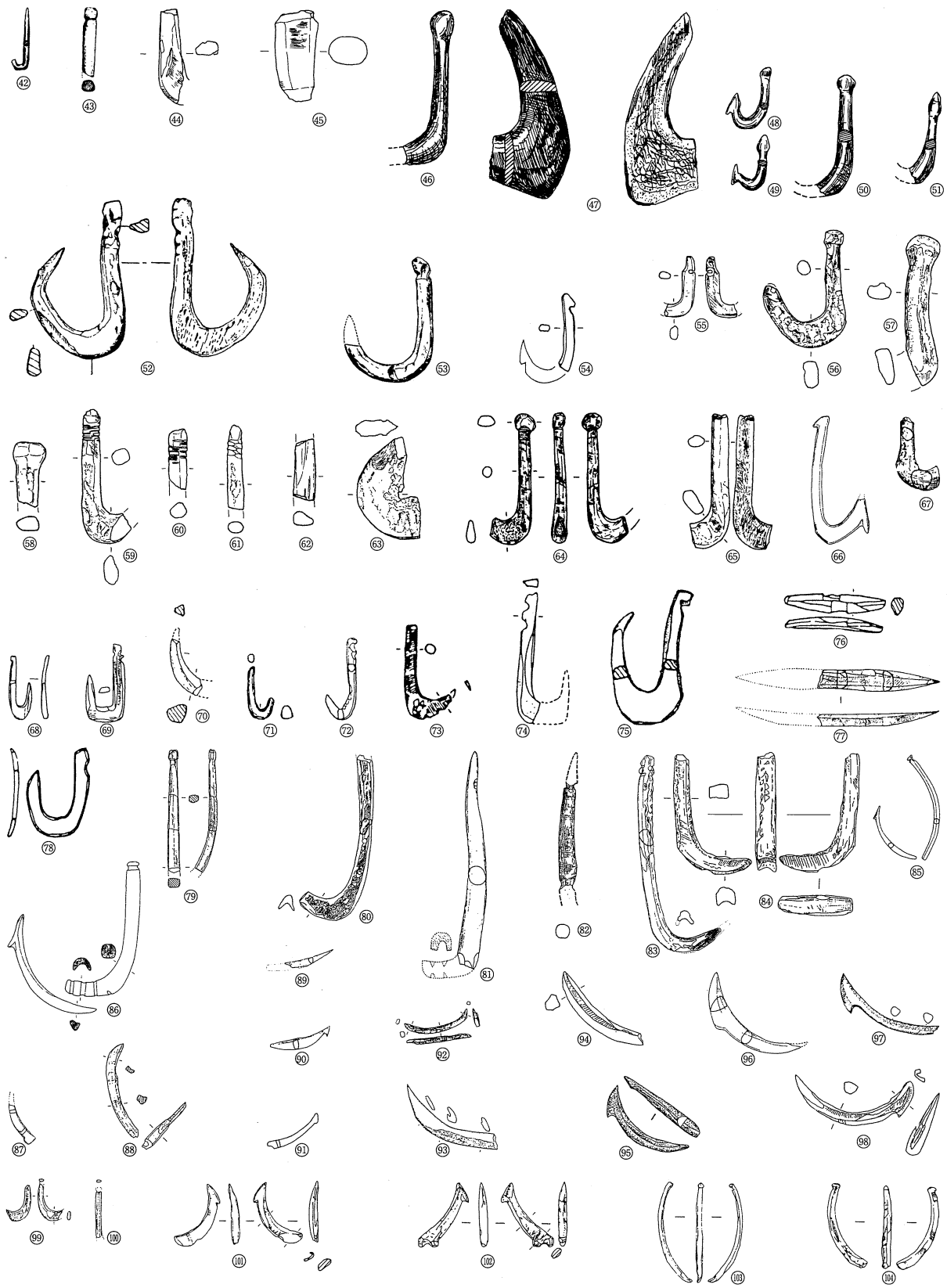
前期になると彦崎貝塚、鳥浜貝塚、天神山遺跡、山鹿貝塚、菜畑遺跡で確認される。検出点数は、菜畑遺跡４点（B類）、彦崎貝塚３点（A類）、

鳥浜貝塚１点（B類）、山鹿貝塚２点（A類）、天神山貝塚１点（A類）である。天神山遺跡が前期前半である以外は、ほとんどが前期後半に該当する。原材料は、彦崎貝塚、天神山遺跡、鳥浜貝塚が鹿角製である以外は、骨製である。当該期は、本格的に貝塚が形成され始め、前時期に比べ漁撈活動の割合も実益的に向上したと推定されるが、組織的・専業的釣漁の様相は窺えない。そのことは、釣針等の検出点数を見ても遺存のしにくさ（使用時の破損や経年経過の脆弱性）、材料確保と製作の手間という規制を受けてそれ自体が稀少品であり一型式間に大量生産は望めないし、船舶技能を要する協業作業には非効率と推定されるからである。彦崎Z１式期には、本遺跡では、広範囲な地域間交流の証が出土遺物に認められるが、釣針は単式のみ出土であり、A、B両ルートからの伝播が予想される。また、無鐵が多い中、彦崎貝塚例（③）は、外鐵が作出されている。逆頭は、丸摘み状を呈するものが多い。

菜畑遺跡例は、西北九州型結合式釣針の古いもので曽畑式期に帰属する。このタイプは、縄文早期にあたる韓国オサンリ遺跡出土のもの（オサンリ型）が伝播して在地化したものである。石製軸に猪牙製針が付



第40図　縄文時代瀬戸内周辺出土釣針集成（１）



㊷九合洞穴(S=1／4)　㊸天神山貝塚(S=1／3)　㊹･㊺八王子貝塚(S=1／3)　㊻～㊷吉胡貝塚(S=1／3)　㊸東畑(大草南)貝塚(S=1／3)　㊹雷貝塚(S=1／3)
㊺～㊸神明社貝塚(S=1／3)　㊹羽沢貝塚(S=1／3)　㊺保美貝塚(S=1／3)　㊻五貫森貝塚(S=1／4)　㊼伊川津貝塚(S=1／4)　㊽･㊾草野貝塚(S=1／2)
㊿新延貝塚(S=1／2)　(71)梶尾遺跡(S=1／2)　(72)小池原貝塚(S=1／2)　(73)有喜貝塚(S=1／2)　(74)沖の原貝塚(S=1／2)　(75)片野洞穴(S=1／2)　(76)室川遺跡(S=1／2)
(77)志多留貝塚(S=1／2)　(78)犬田布貝塚(S=1／2)　(79)新延貝塚(S=1／4)　(80)下本山岩陰遺跡(S=1／4)　(81)沖の原遺跡(S=1／4)　(82)･(95)宮下貝塚(S=1／4)
(83)浜ノ洲貝塚(S=1／4)　(84)沖の原貝塚(S=1／4)　(85)･(86)脇岬貝塚(S=1／4)　(87)･(89)･(90)･(96)志多留貝塚(S=1／4)　(88)新延貝塚(S=1／4)　(91)桑原飛櫛貝塚(S=1／4)
(92)菜畑遺跡(S=1／4)　(93)･(94)･(97)･(98)沖の原貝塚(S=1／4)　(99)･(100)天神山貝塚(S=1／4)　(101)～(104)佐賀貝塚(S=1／4)

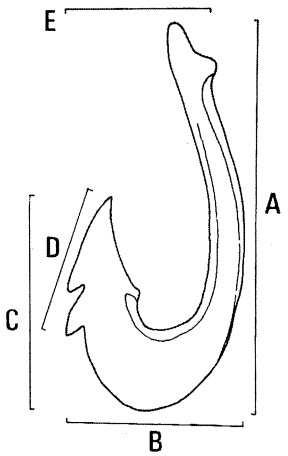
第41図　縄文時代瀬戸内周辺出土釣針集成（２）

くのがオサンリ型、軸が主に鹿角に変化したものが西北九州型とされている（渡辺1985、江坂・渡辺1988）。熊本県大矢遺跡では、オサンリ型の石製軸が出土している（正林1994）。曽畑Ⅲ式（東北部九州）、月崎下層Ⅱ式（西部瀬戸内・山陰）、彦崎Ｚ１式（中部瀬戸内）は、島根県中ノ坪遺跡で共伴事例があるけれども彦崎Ｚ１式の分布の中心である中部瀬戸内では、曽畑式土器と系統的親縁性があるのに曽畑式の侵入（九州的漁撈具を含む）を許さないようである[6]。中期は、讃良川遺跡（類不明）、新延貝塚（A類）、山鹿貝塚（A類）の類例くらいで、西日本では、当該期の釣漁は低調のようである。

後期は、当該地域全64遺跡の約66%にあたる42遺跡で釣針が確認され、晩期も含めると60遺跡約94%となる。九州29遺跡、中四国14遺跡、近畿6遺跡、東海西部11遺跡である。釣針に関しては、その検出点数の急激な増加と地域性の顕在化から一つの画期と認めることができる。B類は、六連島遺跡が分布の東限で、瀬戸内・近畿・東海西部には鳥浜貝塚例を除けば、基本的に分布しないようである。また、晩期には九州ではほとんど釣針が見られなくなる。そして、単式釣針の原材料は、九州では猪牙・獣骨・鳥骨が主要だが、瀬戸内から東海西部では鹿角が主体を占め、森の宮貝塚と浜詰遺跡で猪牙・獣骨製が見られる程度である。また、逆頭は、九州では直方型、鈎型で一、二条の溝を逆頭部とその周辺に施すものが多く、瀬戸内・近畿では丸摘み型・直方型が、東海西部では、丸摘み型・剣先型・鈎型（穿孔有）が認められる。概して九州では素材を薄く製作する傾向があり、瀬戸内から近畿・東海西部にかけては厚薄二分化して、バリエーションが多いようである。原材料選定及び製作工程に違いが認められ、捕獲対象種の違いを示している可能性が高い。当該期の鐵形態は、無鐵を除けばA・B類含めて六連島遺跡の内鐵１点以外は全て外鐵である。また、第５表をみると瀬戸内の彦崎貝塚、津雲貝塚、近畿・東海西部の森の宮貝塚、吉胡貝塚、九州の佐賀貝塚、市来貝塚、草野貝塚など当該期になって多量に釣針を保有する遺跡が出現することも特徴である。さらに、九州では、弥生時代中期には鉄製釣針を導入するが、瀬戸内や山陰では、依然として鹿角製・骨製の単式釣針（前期～後期）、結合式釣針（西川津遺跡・前期、真弧谷貝塚、紫雲出山遺跡・中期）、軸鐵釣針（西川津遺跡・前期）、銛頭（郡貝塚・中期）等が使用されるように漸進的な東西両文化の波及状況が認められる（渡辺1989、行橋市2003）。しかし、総合的に弥生文化の成立を考えてみると当該期瀬戸内地域の重要性がうかびあがり、ベーシックな地域性として把握できる。

（２）単式釣針の属性比較

次に、属性を計測し、当該地域の中での特性を基礎数値として見てみたい。瀬戸内地域では、結合式は検出点数が少ないので単式釣針を対象とする。先ず、計測地点は第42図のとおりである。渡辺・松田によれば（江坂・渡辺1988、松田2005）、軸長から凡その釣針の規模が復元可能という。そこで、便宜上の分類基準を決めておく。A値３cm以下を小型、３cm～５cmを中型、５cm～７cmを大型、７cm以上を超大型とする（第６表参照）。



第42図　計測地点位置図

A値：瀬戸内地域では、平均6.8cmの大型を示す。小型１本、中型５本、大型７本、超大型９本である。早期は大型、前期は中型、後晩期は、大型主体の特大・大・中に機能分化している。近畿地方では、平均4.5cmの中型を示す。小型３本、大型２本、超大型１本である。全て後晩期に帰属する。東海西部

第6表　計測値比較一覧表

( )内は計測点数　　単位:cm

地域	A値(最小・平均・最大)	B値(最小・平均・最大)	C値(最小・平均・最大)	D値(最小・平均・最大)	E値(最小・平均・最大)
中四国	2.9<6.8<12(22)	1.3<3.52<5.8(16)	1.9<3.78<5.2(12)	1<1.96<3.2(10)	1.2<2.67<4.9(12)
近畿	2<4.5<8.7(6)	0.8<2.85<5.2(6)	0.5<1.5<2.3(4)	―	0.6<2.63<4.5(4)
東海西部	2.9<6.2<9.5(16)	1.8<3.03<4.8(7)	0.7<2.83<5.6(7)	1<1.65<2.8(4)	0.8<2.5<3.6(7)
九州	1.8<3.11<4.6(7)	0.75<1.38<2.5(6)	0.8<1.58<3.8(6)	0.9(1)	0.4<0.91<1.7(6)

は、平均6.2㎝の大型を示す。後期特に晩期に盛行するが、小型1本、中型4本、大型5本、超大型5本である。大型を主体に特大・大・中と機能分化している。九州では、平均3.11cmの小型に近い中型を示す。小型が4本、中型が3本である。小型はほとんどが後期に帰属する。

B値：平均で中四国は3.52cm、近畿は2.85cm、東海西部は3.03cm、九州は1.38cmである。A/B平均指数は、中四国1.93、近畿1.56、東海西部2.05、九州では2.25となる。概して中四国・東海西部・九州では、軸長の二分の一が針幅になる場合が多く、近畿では二分の一より大きい針幅になる場合が多いことを示す。

C値：平均で中四国3.78cm、近畿1.5cm、東海西部2.83cm、九州1.58cmを示す。A/C平均指数は、中四国1.80、近畿3、東海西部2.29、九州1.97となり、特に近畿の事例では、針長が短いものが多いことを示す。また、逆に中四国などでは懐が深い釣針が多い傾向を表しているであろう。

D値：平均で中四国1.96cm、近畿は事例なし、東海西部1.65cm、九州0.9cm（1例）である。これは、鐖の作出という構造面から見た場合、地域性を示している。どの地域も無鐖が多い中、中四国では前期から晩期まで外鐖付きの釣針が採用された（特に後晩期）ことは、地域的な特性として指摘できると思われる。

E値：平均で中四国2.67cm、近畿2.63cm、東海西部2.5cm、九州0.91cmである。これは、針外側から軸内側までの距離である。中四国・近畿・東海西部は、ほぼ2.5cm付近に集中する傾向があるが、九州では軸との距離が短い傾向にあることがわかる。C/E平均指数は、中四国1.42、近畿0.57、東海西部1.13、九州1.74である。これは、軸長と針部の成す内角の違いを表しており、九州→中四国→東海西部→近畿の順で鋭角から鈍角に近づく傾向をしめしている。また、この部分は捕獲時に構造的に負荷が一番かかる部分であり、そのことは、遺跡出土の実物をみればこの部分で破損している事例が多いことからもわかる。

（3）現生魚類からの検討

彦崎貝塚から出土した魚類遺体がどのような方法で捕獲されたのかを推定するために、現生種の体長と開口部分の最高長幅を計測し、先の釣針の平均指数と比較検討してみたい。ただし、今回は、時間的制約と季節柄純粋に瀬戸内海で捕獲されたものが計測種の全てではないので、推定のための参考資料としたい。将来的には、一定量を魚類遺体から体長復元をし、瀬戸内海産魚類を鹿角製釣針を作成して実験的に釣り上げ、破損やその魚類の比較検証をする必要があると考えている。計測にあたっては、安田幸永氏の全面的な協力をいただいた。X：最大開口部長、Y：最大開口部幅、Z：体長とする。

1.セイゴ（スズキの若魚）X：3cm　Y：2.5cm　Z：40cm
2.クロダイ　X：2.5cm　Y：2cm　Z：25cm
3.マダイ　X：1.5cm　Y：1cm　Z：15cm
4.メダイ　X：4.5cm　Y：2.5cm　Z：40cm
5.アジ　X：2.5cm　Y：1.5cm　Z：30cm
6.サバ　X：5cm　Y：2.5cm　Z：35cm

0.5X/Y 指数：1.セイゴ 0.6、2.クロダイ 0.63、3.マダイ 0.75、4.メダイ 0.9、5.アジ 0.83、6.サバ 1.0 となる。先の釣針の属性比較において C/E 指数を重要視し、あえて釣漁で捕獲可能か否かを考えた場合、近畿地域の釣針であれば可能であるが、そのほかの地域では積極的に釣漁では捕獲しなかった可能性が高いと推定される。ただし、遺跡立地・海流によって主な対象種がおのずと異なってくることは十分予想される。

（4）彦崎貝塚における漁撈活動

瀬戸内最古の釣針は帝釈観音堂洞窟出土の早期末の事例である。早期前半に石錘も見られることから内水面・河川漁業で使用されたと推定され、対象魚種はコイが有力であるが盛行しない（石丸 2006）。A ルートで中国山地に入ったものと推定される。彦崎Ｚ１式期には、本遺跡で大きい貝塚が形成される。過去の調査や平成 15・16 年度の調査で、本遺跡では、マダイ、サワラ、エイ、ブリ（東大調査）、マダイ、クロダイ、スズキ、エイ・サメ類、ナマズ、コチ属、ハモ属、ボラ科、ヒラメ、ギマ、ハタ科、ニベ科、フグ科、カニ類（平成 15・16 年度）等が検出された（富岡・石丸 2006、2007）。前期（彦崎Ｚ１・２）には、貝刃、釣針（中型）、刺突具、石錘が検出されており、釣漁（主対象マダイ・クロダイ・スズキ・ヒラメ）・刺突漁（主対象ボラ・ズズキ・クロダイ）・網漁（主対象マダイ・クロダイ・スズキ・ハモ属・コチ属）の存在が推定される。中期（船元式）も貝塚を形成するが、後半期には積極的な活動は影を潜める。検出魚種と遺物は前時期と同様であり、釣漁・刺突漁・網漁の存在が推定されるが当該期よりスズキの検出量がやや増加し始めることから、海域や生態系の変化が小周期で繰り返されたことが予想される。当該期の釣針は、北陸・日本海の沿岸部経由あるいは、近畿・東海西部の沿岸部を経由してもたらされた可能性が高い。前期後半から中期前半期までは、居住区（推定）や墓域の形成から狩猟・漁撈・食物加工に生活の基盤をおいた定着性の高い遺跡として性格付けられる。また、前期は釣漁史上で鐵の装備と増加指向から第一の画期である。

後期（彦崎Ｋ１・２）になると、再び大きな貝塚が形成され、特に彦崎Ｋ２式期には、最多の検出魚類とともに釣針や石錘が大型化・重量化する。釣針は、他地域比べてその規模は格段に大きくなり、晩期までみられるのが瀬戸内の特性である。また、外鐵付が多いのも特徴で、瀬戸内の春の名物であるマダイ・サワラやスズキ・クロダイ・オオニベ等 60cm から１m 超クラスの大型魚種を対象とした専用釣針の可能性が高い。また、当該期は低地部に貝塚を伴わない遺跡が児島周辺でも増加することから集落内における分業化が予想され、釣漁・刺突漁・網漁等の前時期からの発展（技術・性能・機能）が検出点数と集落数の増加から窺える。また、船舶技術の発達も誘因となったと考えられる（瀬口 2006）。彦崎Ｋ１式期は、本遺跡でもっとも魚類の最小個体数が多く検出される時期であるが漁撈活動を示す遺物は多く検出されていない。漁撈具だけ別地点に保管していた可能性も残されるが、漁撈活動に重点をおいた遺跡形成と言える。彦崎Ｋ２式期は、居住区（推定）、墓域（推定）、貯蔵区が認められることと谷全体に遺跡が広がることからも狩猟と漁撈、食物加工に基盤をおいた定着性の高い遺跡として把握できる。晩期は調査面積が狭小でデータが少ないが、基本的には後期と変わらないと推定されるが、貝塚の主体貝種が前期から後期までのマガキ（彦崎Ｚ１式期は 90%）からハイガイに変化することが大きな相違点である。しかし、漁撈活動は、海域の後退によって獲得方法に制限は加わったであろうが検出魚類の存在から、主な獲得方法が何かは不明だが継続されていたはずである。また、全時期を通して、干潮時の追込み漁や浅瀬での手づかみ漁等の比較的道具と労力を必要としない方法も存在していたものと推定される。さらに、出土遺物の検討から、直接あるいは間接漁撈（交換等）の行動圏も三海（日本海、瀬戸内海、太平洋）にまで及んだものと考えられる（田嶋 2006）。

当該地域の釣針の出現は、早期末にあり、前中期で試行・改良され、後期にいたって釣針の性能向上と機能分化（a：外洋用と内湾用、b：種ごとの大中小）、漁法の技術的発展（分業化・専業化）が達成され、地域性が顕在化した（西北九州型、東・南九州小型多量保持型、中四国・東海西部超特大機能分化型、近畿小型変則型）。そしてほとんどの地域がそのまま晩期まで継続される（東海西部では特に盛行する）が、九州では何らかの外的要因で晩期には釣漁が衰退するようである。この後期段階の多様性のある第二の画期の背景には、東日本からの影響による集落構造の複合的な転換が予想されるが、それは一律的ではなく伝統的な地域性と伝播の浸透の強弱が作用したものと考えられる。

第４章注

注１）フローテーション作業が完了していないため、全点数の確認にはいたっていないが継続して実施している。

注２）彦崎貝塚出土の土器（田嶋 2006 第 27 図 157、第 42 図 177、第 47 図 259・260 等）胎土中には、結晶片岩が含有していた。製品や剥片とともに産地を推定したが、分析時間の制約から附章３白石論文では、中間報告となった。平成 19 年度刊行『彦崎貝塚』3 では、全ての分析結果が掲載できると思う。なお、本遺跡出土土器とモチーフがよく似た土器をもつ三重県山添遺跡出土の何点かの土器とは胎土が一致しなかった。しかし、山添遺跡出土土器中にも結晶片岩を含むものがあり、注意しておきたい。

注３）佐藤美津夫 1935『備前児島郡灘崎村大字彦崎貝塚調査概報』（私家版）によれば、黒曜石製（姫島産？）の石槍が出土している。

注４）瀬戸内市大橋貝塚では石鏃、倉敷市溝落遺跡では剥片が検出されている。馬場昌一氏、福本　明氏のご教示による。

注５）倉敷市広江・浜遺跡、同溝落遺跡等が該当する。児島における石材獲得経路と需給分配関係を知る上で極めて重要である。

注６）益田市教育委員会渡辺友千代氏のご好意で実見させて頂きました。

【図版出典】

第 40 図１石丸恵利子 2004「帝釈観音堂洞窟遺跡出土の骨角器　その１」『広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群調査年報』Ⅹ Ⅷ広島大学大学院文学研究科考古学研究室　同２田中祐二 2006「福井県の木器・骨角器」『第７回関西縄文文化研究会　関西縄文人の生業と環境』関西縄文文化研究会　同３池葉須藤樹 1971『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告（私家版）』同４～８田嶋正憲 2006・2007『彦崎貝塚』『彦崎貝塚２』岡山市教育委員会　同９～20 山崎真治 2004「彦崎貝塚と瀬戸内海をめぐる遺跡群の動向」『縄文社会をめぐるシンポジウム「－景観と遺跡－（予稿集）』縄文社会研究会　同 21・第 41 図 66・67 渡辺誠 1973『縄文時代の漁業』雄山閣　同 22・23 小都隆 1971『洗谷貝塚』福山市文化財保護協会　同 24 渡辺誠 1985「西北九州の縄文時代漁撈文化」『列島の文化史』2 日本エディタースクール出版部　同 25 広島県立歴史民俗資料館 1994『ひろしまの縄文土器』同 26・29・30・32・71～76・79～81・83～94・96～98 金子浩昌・忍澤成視 1986『骨角器の研究Ⅰ・Ⅱ』慶友社　同 27 山口県 2000『山口県史』資料編考古１　同 28 小野忠凞1961「六連島遺跡」『山口県文化財概要』第四集山口県教育委員会同 31 宮本一夫編 1993『江口貝塚Ⅰ－前中期編－』愛媛大学考古学研究室　同 33～65 関西縄文文化研究会編 2006『第７回関西縄文文化研究会　関西縄文人の生業と環境』第 41 図 68・69 鹿児島県教育委員会 2006『先史・古代の鹿児島』（通史編）（資料編）同 70・77 坂田邦洋 1977『対馬の考古学』縄文文化研究会　同 78・88 九州大学文学部考古学研究室編 1980『新延貝塚』福岡県鞍手町教育委員会　同 82・95 内藤芳篤編 1971『宮下遺跡（解説編）』長崎県文化財調査報告９集長崎県教育委員会　同 99・100 坂田邦洋 1971『天神山貝塚』同調査委員会　同 101～104 正林護編 1989『佐賀貝塚』峰町文化財調査報告書第９集長崎県峰町教育委員会

【参考・引用文献】

山鹿貝塚調査団 1972『山鹿貝塚－福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚の調査－』
渡辺誠 1973『縄文時代の漁業』雄山閣
唐津市教育委員会 1982『菜畑遺跡』唐津市文化財調査報告第５集
渡辺誠 1985「西北九州の縄文時代漁撈文化」『列島の文化史』2 日本エディタースクール出版部
金子浩昌・忍澤成視 1986『骨角器の研究Ⅰ・Ⅱ』慶友社
江坂輝彌・渡辺誠 1988『装身具と骨角製漁具の知識』東京美術
渡辺誠 1989「西川津遺跡出土漁具の文化史的背景」『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ（海崎地区３）』島根県教育委員会
泉　拓良 他 1991「桜島における縄文人の生活と火山災害－桜島武貝塚の発掘調査－」『京都大学防災研究所年報』第 34 号京都大学防災研究所
北九州市立考古博物館 1994『九州の貝塚－貝塚が語る縄文人の生活－』
正林　護 1994「南北市羅以前－縄紋時代対馬海峡の文物往来－」『九州の貝塚－貝塚が語る縄文人の生活－』北九州市立考古博物館
中四国縄文研究会 2003『第 14 回中四国縄文研究会　中四国地域における縄文時代石器の実相』
行橋市歴史資料館 2003『海の幸を求めて－古代の漁具－』
松田光太郎 2005『縄文時代後期前葉の東京湾における漁撈活動の様相」『神奈川考古』第 41 号神奈川考古同人会
石丸恵利子・富岡直人 2006「彦崎貝塚の動物遺存体」『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会
石丸恵利子 2006「中国地方の動物遺存体」『第7回関西縄文文化研究会　関西縄文人の生業と環境』関西縄文文化研究会
鹿児島県教育委員会 2006『先史・古代の鹿児島』（通史編）（資料編）
関西縄文文化研究会編 2006『第７回関西縄文文化研究会　関西縄文人の生業と環境』
瀬口眞司 2006「暮らしを変えた縄文丸木船」『丸木船の時代－琵琶湖と古代人－』財団法人滋賀県文化財保護協会。また第５表の入江内湖遺跡の教示を得た。
田嶋正憲 2006『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会
石丸恵利子・富岡直人 2007「彦崎貝塚における動物資源の利用－彦崎ＺⅠ式期からＺⅡ式期の様相－」『彦崎貝塚２』岡山市教育委員会
白石　純 2007「彦崎貝塚出土石器石材について」『彦崎貝塚２』岡山市教育委員会
田嶋正憲 2007『彦崎貝塚２』岡山市教育委員会
山田康弘 2007「中国地方における縄文時代の墓制－彦崎貝塚出土例を墓制論上に位置づけるために－」『彦崎貝塚２』岡山市教育委員会

縄文土器観察表１

掲載番号	整理番号	トレンチ・区	遺構・層位	器種	計測値（cm）			色調	形態・手法・調整の特徴など	備考
					口径	底径	器高			
1	FP11	T23	7	深鉢	不明	不明	不明	10YR6/3	内：ナデ　外：連続押引刺突	前期Ⅲ群
2	FP12	T23	7	深鉢	不明	不明	不明	2.5Y5/3	内：ナデ　外：連続押引刺突	前期Ⅲ群
3	FP1	T14　A区	7	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/2	内：ナデ・指頭圧痕・生爪痕　外：粘土帯・粘土紐貼付後羽状縄文	前期Ⅳ群
4	18－76	T14　A区	7	深鉢	不明	不明	不明	7.5YR5/2	内：ナデ　内外：粘土紐貼付後RL縄文　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
5	18-70	T14　H区	8	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/2	内：ナデ・粘土紐貼付後RL縄文　外：RL縄文　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
6	FP4	T14　H区	8	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/2	内：指頭圧ナデ　無節のL　外：指頭圧ナデ　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
7	18-96	T14　G区	8	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/3	内：ナデ　粘土紐貼付後RL縄文　外：RL縄文　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
8	18-69	T14　Ⅰ区	9	深鉢	不明	不明	不明	7.5YR5/2	内：ナデ　粘土紐貼付後RL縄文　外：ナデ　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
9	18-73	T14　E区	10	深鉢	不明	不明	不明	7.5YR5/2	内：ナデ　粘土紐貼付後LR縄文　外：粘土紐貼付後LR縄文	前期Ⅳ群
10	18-73	T14　Ⅰ区	9	深鉢	不明	不明	不明	7.5YR6/2	内：ナデ　粘土紐貼付後LR縄文　外：粘土紐貼付後LR縄文	前期Ⅳ群
11	18-74	T14　J区	9	深鉢	不明	不明	不明	10YR8/2	内：ナデ　粘土紐貼付後LR縄文　外：粘土紐貼付後LR縄文	前期Ⅳ群
12	FP3	T14　H区	8	深鉢	不明	不明	不明	7.5YR6/4	内：ナデ　粘土紐貼付後RL縄文　外：RL縄文	前期Ⅳ群
13	18-72	T14　I区	8	深鉢	不明	不明	不明	10YR4 /2	内：ナデ　粘土紐貼付後RL縄文　外：ナデ（RLナデ消し）	前期Ⅳ群
14	18-97	T14　G区	8	深鉢	不明	不明	不明	10YR4 /2	内：ナデ　外：LR縄文を部分的にナデ消し	前期Ⅳ群
15	18－84	T14　G区	8	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/2	内：ナデ　粘土紐貼付後LR縄文　外：LR縄文後ナデ	前期Ⅳ群
16	18-71	T14　G区	8	深鉢	不明	不明	不明	7.5YR5/3	内：ナデ・ケズリ　RL縄文　外：RL縄文　口唇部ナデ	前期Ⅳ群
17	18-100	T14　J区	9	深鉢	不明	不明	不明	10YR4/2	内：ナデ　RL縄文　外：ナデ　口唇部無文	前期Ⅳ群
18	18-102	T14　J区	9	深鉢	不明	不明	不明	10YR4/2	内：ナデ　RL縄文　外：ナデ	前期Ⅳ群
19	18-98	T14　H区	9	深鉢	不明	不明	不明	10YR4/2	内：指頭ナデ　RL縄文　外：口唇部ともRL縄文	前期Ⅳ群
20	18－103	T14　H区	8	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/3	内：ヘラケズリ　外：RL縄文を上から1.5cmだけナデ消し	前期Ⅳ群
21	18-29	T14　E区	土坑2埋土	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/2	内：ナデ　外：付加条のRL縄文？	前期Ⅳ群
22	18-77	T14　J区	9	深鉢	不明	不明	不明	7.5YR6/4	内：指頭ナデ、外：指頭ナデ、ケズリ　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
23	18-92	T23	7	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/3	内：ナデ　外：指頭ナデ、ナデ　口唇部キザミ	前期Ⅲ群
24	18-95	T14　I区	9	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/2	内：ナデ　外：指頭ナデ	前期Ⅳ群
25	18-88	T14　A区	7	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/3	内：ナデ　外：ナデ　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
26	18-89	T14　H区	8	深鉢	不明	不明	不明	10YR3/2	内：ナデ　外：指頭ナデ　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
27	18-94	T14　J区	9	深鉢	不明	不明	不明	7.5YR6/4	内：ナデ　外：ナデ　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
28	18-91	T14　F区	10	深鉢	不明	不明	不明	10YR4/1	内：ナデ　外：ナデ　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
29	18-90	T14　F区	10	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/2	内：ナデ　外：ナデ　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
30	18-85	T14　H区	8	深鉢	不明	不明	不明	7.5YR5/2	内：ナデ　外：ナデ　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
31	18-93	T14　E区	10	深鉢	不明	不明	不明	5YR6/6	内：ナデ　外：ナデ　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
32	18-81	T14　E区	10	深鉢	不明	不明	不明	10YR4/2	内：ナデ　外：ナデ　口唇部キザミ　カルシウム分付着	前期Ⅳ群
33	18-82	T14　E区	10	深鉢	不明	不明	不明	10YR4/3	内：ナデ　外：ナデ　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
34	18-83	T14　A区	7	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/3	内：ナデ　外：ナデ　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
35	18-87	T14　F区	8	深鉢	不明	不明	不明	7.5YR5/2	内：ナデ　外：ナデ　口唇部キザミ	前期Ⅳ群
36	18-86	T14　A区	12（灰土面）	深鉢	不明	不明	不明	10YR6/4	内：ナデ、カルシウム分付着　外：ナデ、刺突状圧痕、口唇部キザミ	前期Ⅲ群
37	18-80	T14　I区	9	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/2	内：ナデ　外：ナデ	前期Ⅳ群
38	18-79	T8	2	深鉢	不明	不明	不明	2.5Y4/1	内：ナデ、ケズリ　外：指頭ナデ	前期Ⅳ群
39	18-101	T14　J区	5	深鉢	不明	不明	不明	7.5YR5/4	内外とも無節RL縄文	中期Ⅰ群
40	FP2	T14　G区	5	深鉢	不明	不明	不明	10YR6/3	内：ナデ　複節RL縄文　外：ナデ　複節RL縄文　口唇部複節RL縄文	中期Ⅱ群
41	18-99	T14　E区	4	深鉢	不明	不明	不明	10YR7/3	内：ナデ　LR縄文　外：LR縄文　口唇部LR縄文	中期Ⅱ群
42	18-77	T14　H区	5	深鉢	不明	不明	不明	10YR4/1	内：ナデ　擬口縁　外：LR縄文	中期Ⅱ群
43	18-23	T17	1	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/2	内：ナデ　外：幅広連続刺突爪形文	中期Ⅱ群
44	18-24	T17	1	深鉢	不明	不明	不明	2.5Y7/1	内：ナデ　外：幅広連続押引	中期Ⅱ群
45	18-21	T14　E区	5	深鉢	不明	不明	不明	10YR4/1	内：ナデ　外：沈線、押引	中期Ⅱ群
46	18-8	T11	3	深鉢	不明	不明	不明	7.5YR5/3	内：ナデ　外：RL縄文地に竹管状工具による沈線	中期Ⅲ群
47	18-7	T14　D区	5	深鉢	不明	不明	不明	10YR7/3	内：ナデ　外：蛇行太沈線、摩消縄文	中期Ⅵ群
48	18-55	T14　D区	5	深鉢	不明	7	不明	5YR6/4	内：ナデ　外：硬い繊維のLR縄文	中期Ⅰ群
49	18-1	T14　D区	4	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/3	内：ナデ　外：太沈線後LR縄文	後期Ⅲ群
50	FP5	14　H区	4	深鉢	不明	不明	不明	10YR7/3	内：ナデ　外：沈線、刺突、RL縄文充填	後期Ⅲ群
51	18-3	T14　D区	4	深鉢	不明	不明	不明	10YR4/1	内：ナデ、太沈線間をRL縄文で充填　外：ナデ、沈線で同心円（渦）文	後期Ⅲ群
52	18-17	T9	3	深鉢	不明	不明	不明	10YR6/4	内：ナデ　外：太沈線、短沈線、RL縄文充填	後期Ⅲ群
53	18-14	T14　A区	4	深鉢	不明	不明	不明	10YR6/4	内：ナデ　外：ナデ、RL縄文	後期Ⅲ群
54	18-13	T14　A区	4	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/2	内：ナデ　外：ナデ、RL縄文	後期Ⅲ群
55	18-6	T14　D区	4	深鉢	不明	不明	不明	10YR4/2	内：ナデ　外：菱形に太沈線後摩消縄文	後期Ⅲ群
56	18-4	T14　D区	4	深鉢	不明	不明	不明	10YR6/3	内：ナデ　外：三角形状に太沈線のち摩消縄文	後期Ⅲ群
57	18-28	T14　C区	4	深鉢	不明	不明	不明	10YR4/3	内：ナデ　外：櫛状工具の垂下条線	後期Ⅲ群
58	18-5	T14　D区	4	深鉢	不明	不明	不明	10YR4/3	内：ナデ　外：櫛状工具の垂下条線	後期Ⅲ群
59	18-2	T14　D区	4	深鉢	不明	不明	不明	10YR7/3	内：ミガキ　外：LR縄文施紋方向転換で羽状効果	後期Ⅲ群
60	18-15	T14　C区	3	深鉢	不明	不明	不明	10YR7/4	内：ミガキ、LR縄文　外：ミガキ	後期Ⅳ群
61	18-19	T14　C区	3	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/2	内：ミガキ　外：LR縄文地に1から2本の沈線で区画	後期Ⅳ群
62	18-20	T14　C区	3	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/2	内：ナデ　外：LR縄文地後沈線で区画、沈線内刺突、縄結目回転	後期Ⅳ群
63	FP9	T14　J区	3	深鉢	不明	不明	不明	7.5YR5/2	内：ナデ　外：結節縄文地後2本の沈線で区画	後期Ⅳ群
64	18-26	T14　C区	3	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/3	内：ナデ　外：LR縄文地後2本沈線で区画	後期Ⅳ群
65	18-25	T14　C区	3	深鉢	不明	不明	不明	7.5YR5/4	内：ナデ　外：擬似縄文後沈線で区画	後期Ⅳ群
66	18-27	T9	3	深鉢	不明	不明	不明	10YR7/3	内：ヘラ状工具でナデ　外：二本沈線で区画後RL縄文充填	後期Ⅳ群
67	18-40	T14　D区	3	深鉢	26.6	不明	不明	2.5Y5/2	内：ミガキ　外：ミガキ	後期Ⅳ群
68	18-31	T14　D区	3	深鉢	33	不明	不明	10YR5/2	内：二枚貝条痕　外：二枚貝条痕	後期Ⅳ群
69	18-33	T14　C区	3	深鉢	30.6	不明	不明	10YR5/3	内：ナデ　外：ヘラケズリ	後期Ⅳ群
70	18-10	T14　D区	3	深鉢	30.6	不明	不明	10YR4/1	内：二枚貝条項、ケズリ　外：ケズリ	後期Ⅳ群
71	18-37	T14　D区	3	深鉢	28	不明	不明	10YR6/3	内：ナデ　外：ナデ	後期Ⅳ群
72	18-9	T20	20	深鉢	38	不明	不明	10YR6/2	内：二枚貝条痕ナデ消し　外：二枚貝条痕	後期Ⅳ群
73	18-39	T14　H区	3	深鉢	40	不明	不明	2.5Y6/1	内：ミガキ　外：ミガキ　口唇部やや凹む	後期Ⅳ群
74	18-36	T14　D区	3	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/2	内：ヘラケズリ後ナデ　外：ヘナタリ条痕	後期Ⅳ群
75	18-12	T14　D区	3	深鉢	不明	不明	不明	10YR3/1	内：二枚貝条痕後ナデ　外：二枚貝条痕ナデ消し	後期Ⅳ群
76	18-11	T14　C区	3	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/3	内：丁寧なナデ　外：ナデ　補修孔あり	後期Ⅳ群
77	FP6	T14　J区	3	深鉢	不明	不明	不明	2.5Y6/3	内：ナデ　外：ナデ	後期Ⅳ群
78	18-32	T14　D区	3	深鉢	25.2	不明	不明	10YR4/2	内：ケズリ後ナデ　外：二枚貝条痕後ケズリ　補修孔あり	後期Ⅳ群
79	18-35	T14　D区	3	深鉢	不明	不明	不明	10YR4/2	内：二枚貝条痕　外：二枚貝条痕	後期Ⅳ群
80	18-34	T14　D区	3	鉢	18.6	不明	不明	10YR5/2	内：ケズリ　外：ケズリ	後期Ⅳ群
81	18-30	T14　H区	3	鉢	14.4	不明	不明	10YR6/2	内：ミガキ後ナデ　外：ミガキ	後期Ⅳ群
82	18-38	T14　G区	3	鉢	19.4	不明	不明	10YR5/2	内：二枚貝条痕後ナデ　外：二枚貝条痕ナデ消し、ミガキ	後期Ⅳ群

縄文土器観察表２

掲載番号	整理番号	トレンチ・区	遺構・層位	器種	計測値（cm）			色調	形態・手法・調整の特徴など	備考
					口径	底径	器高			
83	18-46	T14 C区	3	深鉢	不明	6.6	不明	10YR6/2	内：ナデ　外：ナデ　底外面に種子圧痕あり	後期Ⅳ群
84	18-51	T14 H区	3	深鉢	不明	9	不明	7.5YR6/3	内：ケズリ　外：ケズリ　底外面に種子圧痕あり	後期Ⅳ群
85	18-53	T14 E区	3	深鉢	不明	7.55	不明	10YR5/4	内：ケズリ　外：RL縄文ナデ消し、ケズリ	後期Ⅳ群
86	18-50	T14 F区	3	深鉢	不明	4.8	不明	7.5YR5/3	内：ナデ　外：ナデ	後期Ⅳ群
87	18-58	T14 H区	3	深鉢	不明	6	不明	7.5YR5/4	内：ケズリナデ消し　外：ケズリ	後期Ⅳ群
88	18-68	T14 F区	3	深鉢	不明	2.73	不明	7.5YR5/2	内：ミガキ後ナデ　外：ナデ	後期Ⅳ群
89	18-61	T14 H区	3	深鉢	不明	6.8	不明	10YR4/2	内：ナデ　外：ケズリ後ナデ	後期Ⅳ群
90	18-54	T14 D区	3	深鉢	不明	6.45	不明	7.5YR5/3	内：ナデ　外：縄文ナデ消し後ミガキ　底部外面に種子圧痕あり	後期Ⅳ群
91	18-56	T4	9	深鉢	不明	5.6	不明	7.5YR6/4	内：ミガキ　外：ケズリ	後晩期
92	18-59	T14 F区	3	深鉢	不明	4.6	不明	10YR5/3	内：ナデ　外：ヘラケズリ後ナデ	後期Ⅳ群
93	18-66	T14 F区	3	深鉢	不明	5.85	不明	10YR5/2	内：ケズリ後ナデ　外：LR縄文後ナデ	後期Ⅳ群
94	18-67	T14 H区	3	深鉢	不明	5	不明	10YR5/3	内：ナデ　外：RL縄文後ナデ消し	後期Ⅳ群
95	18-64	T14 F区	3	深鉢	不明	6.1	不明	7.5YR5/4	内：二枚貝条痕ナデ消し　外：二枚貝条痕ナデ消し	後期Ⅳ群
96	18-62	T14 H区	3	深鉢	不明	5.1	不明	7.5YR5/3	内：ナデ　外：ナデ　-	後期Ⅳ群
97	18-65	T14 H区	3	深鉢	不明	5.4	不明	10YR5/3	内：ナデ　外：二枚貝条痕ナデ消し	後期Ⅳ群
98	18-63	T14 D区	3	深鉢	不明	4.6	不明	10YR4/2	内：ナデ　外：ナデ	後期Ⅳ群
99	18-44	T14 F区	3	深鉢	不明	2.4	不明	7.5YR6/4	内：二枚貝条痕後ナデ消し　外：ケズリ	後期Ⅳ群
100	18-41	T14 H区	3	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/2	内：ミガキ　外：ケズリ　マガキ付着	後期Ⅳ群
101	18-43	T14 D区	3	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/3	内：ナデ　外：二枚貝条痕ナデ消し	後期Ⅳ群
102	18-45	T14 E区	3	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/2	内：ナデ　外：ケズリ	後期Ⅳ群
103	18-42	T14 D区	3	深鉢	不明	不明	不明	10YR5/3	内：ナデ　外：ケズリ	後期Ⅳ群
104	FP8	T14 J区	2	深鉢	不明	不明	不明	10YR6/3	内：二枚貝条痕、沈線　外：二枚貝条痕後ナデ	晩期前半
105	18-18	T9	3	浅鉢	不明	不明	不明	10YR6/2	内：ミガキ、沈線1本、赤色顔料付着　外：ミガキ、沈線1本、赤色顔料付着	晩期前半
106	FP10	T14 J区	2	浅鉢	不明	不明	不明	10YR3/1	内：ミガキ　外：ミガキ	晩期前半
107	FP13	T14 J区	2	浅鉢	不明	不明	不明	2.5Y5/2	内：ミガキ、細凹線　外：ミガキ	晩期前半
108	18-16	T17	1	浅鉢	不明	不明	不明	10YR6/4	内：ナデ、赤色顔料付着　外：ナデ	晩期前半
109	FP7	T14 J区	2	深鉢	不明	不明	不明	2.5Y4/1	内：ナデ　外：爪形文2段	晩期中葉
110	18-49	T20	8	深鉢	不明	5.1	不明	10YR7/3	内：ケズリ、外ケズリ、底外面種子圧痕あり	晩期前半
111	18-47	T17	1	深鉢	不明	4.5	不明	5YR5/4	内：ナデ　外：二枚貝条痕　底外面種子圧痕あり	晩期前半
112	18-57	T14 F区	3上	深鉢	不明	4.95	不明	7.5YR5/3	内：二枚貝条痕ナデ消し　外：二枚貝条痕後ナデ	晩期前半
113	18-60	T14 H区	2	深鉢	不明	5.23	不明	10YR5/3	内：二枚貝条痕　外：二枚貝条痕ナデ消し	晩期前半
114	18-48	T9	3	深鉢	不明	3.9	不明	5YR5/4	内：ナデ　外：ケズリ　底外面種子圧痕あり	晩期前半
115	18-52	T14 F区	3上	深鉢	不明	5.65	不明	10YR5/3	内：ナデ　外：ナデ	晩期前半

弥生土器観察表

掲載番号	整理番号	トレンチ・区	遺構・層位	器種	計測値（cm）			色調	形態・手法・調整の特徴など	備考
					口径	底径	器高			
116	18-22	T14 A区	1	壺	不明	不明	不明	10YR6/4	内：ナデ　外：櫛描流水文	中期
117	I-9	池葉須試掘	不明	壺	18.6	不明	不明	10YR7/3	内：ナデ、ミガキ　外：ナデ、ミガキ、貝殻腹縁刺突、連続鋸歯文	後期
118	I-8	池葉須試掘	不明	鉢	21.2	不明	不明	2.5Y7/3	内：ミガキ　外：ミガキ、丁寧ナデ	後期
119	I-6	池葉須試掘	不明	鉢	7.8	3.2	6.3	2.5Y7/3	内：ユビオサエ　外：ミガキ	後期
120	I-3	池葉須試掘	不明	甕	不明	5.6	不明	2.5Y5/1	内：ケズリ、外：ハケメ、黒斑	後期
121	I-1	池葉須試掘	不明	甕	不明	9.4	不明	10YR6/4	内：ユビオサエ、ナデ　外：ハケメ	後期
122	I-2	池葉須試掘	不明	甕	不明	10.6	不明	2.5Y5/1	内：ケズリ、外：ミガキ、ナデ	後期
123	I-7	池葉須試掘	不明	甕	不明	9.8	不明	2.5Y6/1	内：ケズリ　外：ミガキ	後期

土師器・須恵器観察表

掲載番号	整理番号	トレンチ・区	遺構・層位	器種	計測値（cm）			色調	形態・手法・調整の特徴など	備考
					口径	底径	器高			
124	I-17	池葉須試掘	不明	甕	13.6	不明	不明	2.5Y5/2	内：ケズリ　外：調整不良	古墳前期
125	I-16	池葉須試掘	不明	甕	16	不明	不明	2.5Y7/2	内：ケズリ　外：調整不良	古墳前期
126	I-10	池葉須試掘	不明	壺	12	不明	不明	10YR7/3	内：ユビオサエ、擦痕　外：ナデ、ハケメ	古墳前中期
127	I-11	池葉須試掘	不明	甕	12	不明	不明	2.5Y6/3	内：ナデ　外：タタキ	古墳前中期
128	I-12	池葉須試掘	不明	甕	不明	不明	不明	2.5Y6/3	内：ナデ　外：タタキ	古墳前中期
129	I-15	池葉須試掘	不明	高杯	不明	不明	不明	2.5Y6/2	内：ナデ　外：ナデ、透孔、補修痕跡あり	古墳前中期
130	I-5	池葉須試掘	不明	台付鉢	不明	3.8	不明	2.5YR6/6	内：ナデ、ユビオサエ　外：ユビオサエ	古墳前中期
131	I-4	池葉須試掘	不明	台付鉢	不明	4.8	不明	2.5YR5/2	内：ナデ、ユビオサエ　外：タタキ、ユビオサエ	古墳前中期
132	I-13	池葉須試掘	不明	蛸壺	5.3	―	8.6	10YR6/4	内：ナデ　外：ナデ　マガキ・フジツボ付着	古墳以降
133	I-14	池葉須試掘	不明	蛸壺	3.8	―	8.2	10YR4/2	内：ナデ　外：ナデ　マガキ・フジツボ付着	古墳以降
134	I-18	池葉須試掘	不明	杯身	10.2	5	4.25	5G4/1	内：ナデ　外：ケズリ、ナデ、ヘラ記号	古墳中期
135	I-20	池葉須試掘	不明	甕	不明	不明	不明	7.5Y5/1	内：同心円文　外：タタキ目、カキ目	古墳中期
136	I-19	池葉須試掘	不明	甕	不明	不明	不明	7.5Y5/1	内：同心円文ナデ消し　外：タタキ目	古墳中期

中世土器観察表

掲載番号	整理番号	トレンチ・区	遺構・層位	器種	計測値（cm）			色調	形態・手法・調整の特徴など	備考
					口径	底径	器高			
137	I-26	池葉須試掘	不明	椀	不明	5	不明	10YR7/3	内：ナデ　外：ナデ、高台断面三角	13～14世紀
138	I-23	池葉須試掘	不明	小皿	6.2	4.3	1.1	10YR6/3	内：ナデ　外：ナデ、底部ヘラ切り	13～14世紀
139	I-22	池葉須試掘	不明	小皿	6.7	6	1.1	10YR6/2	内：ナデ　外：ナデ、底部ヘラ起し	13～14世紀
140	I-21	池葉須試掘	不明	小皿	8.6	6.6	1.2	2.5Y7/3	内：ナデ　外：ナデ、ヘラ切り	13～14世紀
141	I-24	池葉須試掘	不明	羽釜	20	不明	不明	2.5Y7/3	内：ナデ　外：ナデ、ヘラ状工具による交互斜行沈線（瓦質）	13～14世紀
142	I-25	池葉須試掘	不明	甕	不明	不明	不明	10YR6/3	内：ナデ　外：格子目タタキ（亀山焼）	13～14世紀
143	I-28	池葉須試掘	不明	鍋脚	不明	不明	不明	10YR6/4	指頭ナデ	13～14世紀
144	I-27	池葉須試掘	不明	鍋脚	不明	不明	不明	10YR6/3	指頭ナデ	13～14世紀

石器観察表（整理番号のｕは彦崎貝塚１の整理番号と同一）

掲載番号	整理番号	トレンチ・区	遺構・層位	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	現存重量 (g)	備考	時期
S1	f1	T14 H区	3	石鏃	サヌカイト	24.7	15.8	3.2	0.7		後期Ⅳ～Ⅵ群
S2	u966	T14Jベルト	9	石鏃	サヌカイト	29.5	16.8	4.2	1.40	未製品	前期Ⅳ群
S3	u1404	T3	埋土	石鏃	サヌカイト	15.7	13.6	1.6	0.40	未製品	中期Ⅰ～Ⅳ群
S4	u1367	T14	埋土(フルイ)	石鏃	サヌカイト	21.1	18.6	5.3	1.90	未製品	中期Ⅰ～Ⅳ群
S5	u1207	T14HIベルト	3	石鏃	サヌカイト	18.8	12.3	1.7	0.50	未製品	後期Ⅰ～Ⅲ群
S6	u1027	T14 H区	3	石鏃	安山岩	20.2	16.8	2.4	0.90	未製品	後期Ⅳ～Ⅵ群
S7	f2	T14IJベルト	4	石鏃	サヌカイト	26.5	23.3	4.3	2.1	未製品	後期Ⅰ～Ⅲ群
S8	u1350	T14 F区	3	石鏃	サヌカイト	17.6	16	2.7	0.60		後期Ⅳ～Ⅵ群
S9	u1143	T14	埋土(フルイ)	石鏃	サヌカイト	15.4	13.1	2.4	0.50	未製品	後期Ⅳ～Ⅵ群
S10	u1385	T14J区	3	石鏃	サヌカイト	19.2	14.3	3	1.10	未製品	後期Ⅳ～Ⅵ群
S11	u1211	T14A区(旧2・3区)	埋土(フルイ)	石鏃	サヌカイト	17.4	12	2.8	0.80	未製品	後期Ⅳ～Ⅵ群
S12	u501	T14	埋土(フルイ)	石鏃	サヌカイト	15.5	8	3.2	0.40	未製品	後期Ⅳ～Ⅵ群
S13	u849	不明	埋土	石鏃	サヌカイト	18.3	11.5	3.7	0.90	未製品	不明
S14	u1093	T14	埋土(フルイ)	石鏃	サヌカイト	19	12.5	2.3	0.70	未製品	後期Ⅳ～Ⅵ群
S15	u1180	T14	埋土	石鏃	サヌカイト	26.9	20.3	6.1	2.80	未製品	後期Ⅳ～Ⅵ群
S16	u894	T14 J区	3	石鏃	安山岩	24.8	15.9	5.8	1.80	未製品	後期Ⅳ～Ⅵ群
S17	u1405	T14 H区	3	石鏃	サヌカイト	22	14.5	2	0.70	未製品	後期Ⅳ～Ⅵ群
S18	u1183	T14 H区	3	石鏃	サヌカイト	25.8	19.1	4	1.90		晩期Ⅰ～Ⅳ群
S19	u1388	T14	旧東大埋土	石鏃	サヌカイト	23.4	18.9	3.9	1.30	未製品	後期Ⅳ～Ⅵ群
S20	f11	T14 J区	2	石鏃	サヌカイト	22.6	15.8	3.2	0.9	未製品	晩期Ⅰ～Ⅳ群
S21	u1110	T14	2(フルイ)	石鏃	サヌカイト	26.7	18.6	3.4	1.40	未製品	晩期Ⅰ～Ⅳ群
S22	u356	T14Jベルト	2(フルイ)	石鏃	サヌカイト	34.3	273	7.5	5.10	未製品	晩期Ⅰ～Ⅳ群
S23	u507	T3	埋土	石錐	サヌカイト	18.5	15.5	4.6	1.20	摘み部作出	中期Ⅰ～Ⅳ群
S24	u1412	T14 A区	旧東大埋土	石錐	サヌカイト	21	12.2	4.4	0.90		後期Ⅳ～Ⅵ群
S25	f4	T14GHベルト	3	石錐	サヌカイト	20	17.6	4	0.9		後期Ⅳ～Ⅵ群
S26	u1259	T14 C区	3	石錐	サヌカイト	126.1	24.9	4.6	3.90		後期Ⅳ～Ⅵ群
S27	u1454	T9	4	RF	結晶片岩	69	28	5.5	14.20		前期Ⅲ群
S28	u831	T5	5・6	スクレイパー	サヌカイト	32.2	30	8.4	9.50		前期Ⅲ群
S29	u85	T9 C区	4	スクレイパー	サヌカイト	45	29.7	9.05	15.80		前期Ⅲ群
S30	u52	T9東トレンチ	4	スクレイパー	サヌカイト	46.15	41.95	9.05	20.10	刃部の一部磨耗	前期Ⅲ群
S31	u38	T23	7	スクレイパー	サヌカイト	67	36.8	11	29.30	背面カルシウム分付着	前期Ⅲ群
S32	u705	T9東トレンチ	4	スクレイパー	サヌカイト	57	46.2	13.1	34.30		前期Ⅲ群
S33	u3	T14ABベルト	7	スクレイパー	サヌカイト	55.8	47.9	8.5	28.40		前期Ⅳ群
S34	u74	T9	4	RF	サヌカイト	95.2	78.7	30.4	121.50		前期Ⅲ群
S35	f6	T14 E区	4	異形石器	サヌカイト	19.9	22.9	4.1	1.2		後期Ⅰ～Ⅲ群
S36	u766	T14	3・4	石匙	サヌカイト	26	23.2	4.5	2.80	抉入削器	後期Ⅳ～Ⅵ群
S37	f8	T14HIベルト	4	RF	サヌカイト	18	27	5.6	2.2		後期Ⅰ～Ⅲ群
S38	u597	T14 G区	3・4	スクレイパー	サヌカイト	33.1	27.2	11.4	6.90		後期Ⅳ～Ⅵ群
S39	u91	T20	17	スクレイパー	サヌカイト	80.7	17.1	7.4	14.60		後期Ⅰ～Ⅲ群
S40	f9	T14GHベルト	3	スクレイパー	サヌカイト	29.2	10.1	3.2	1.4		後期Ⅳ～Ⅵ群
S41	f7	T14IJベルト	3	スクレイパー	サヌカイト	48.5	24.1	4.9	6.1	一部自然面残す	後期Ⅳ～Ⅵ群
S42	u110	T14IJベルト	4	スクレイパー	サヌカイト	44.8	36.4	8.1	15.00		後期Ⅰ～Ⅲ群
S43	u77	T14F区	3	UF	サヌカイト	53.5	39.5	8	15.40	よく摩耗、ハコボレ	後期Ⅳ～Ⅵ群
S44	f3	T14IJベルト	3	スクレイパー	サヌカイト	59.3	55.2	10.1	34	折れ　抉入削器？	
S45	u112	T14 D区	3	RF	安山岩	60.8	40.7	5.4	17.40		後期Ⅳ～Ⅵ群
S46	u8	T4	11	スクレイパー	サヌカイト	69.5	52.1	8.3	33.70		後期Ⅳ～Ⅵ群
S47	u44	T14 F区	動物遺存体埋納土器3	スクレイパー	サヌカイト	60.4	36.2	18.3	46.30	板状素材使用、自然面残す	後期Ⅳ群
S48	f5	T14 J区	2	スクレイパー	サヌカイト	50.8	41.1	8	17.2	一部自然面残す	晩期Ⅰ～Ⅳ群
S49	u47	T14 I区	2	スクレイパー	サヌカイト	46.9	45.	12.9	23.50	自然面残。3辺調整。	晩期Ⅰ～Ⅳ群
S50	u127	T14 D区	10	楔形石器	サヌカイト	3.6	29.4	3.1	5.30		前期Ⅳ群
S51	u205	T14 A区	7	楔形石器	サヌカイト	57.2	20.9	8.9	16.00	一部自然面残す	前期Ⅳ群
S52	u115	T3	埋土	楔形石器	サヌカイト	42.5	27.3	6.45	12.10	一部自然面残す	中期Ⅰ～Ⅳ群
S53	u979	T14 F区	5・6	楔形石器	サヌカイト	31.5	26.8	8.5	8.10		中期Ⅰ～Ⅳ群
S54	u119	T14 A区	埋土	楔形石器	サヌカイト	53.1	45.5	11.6	33.20		後期Ⅳ～Ⅵ群
S55	u22	T4サブトレンチ	11	楔形石器	サヌカイト	49.1	44	13.6	34.90		後期Ⅳ～Ⅵ群
S56	u102	T14F区	動物遺存体埋納土器3	楔形石器	サヌカイト	48	39.5	16	31.90	一部自然面残す	後期Ⅳ群
S57	u185	T14JKCS	2	楔形石器	サヌカイト	33	31.05	5.6	8.70		晩期Ⅰ～Ⅳ群
S58	u222	T28 E区	4	楔形石器	サヌカイト	42	20	8.6	9.50		晩期Ⅰ～Ⅳ群
S59	u7	T14	土坑2	板状剥片	サヌカイト	124.9	68.1	35.5	310.00	原材・石核片	中期Ⅰ～Ⅳ群
S60	u35	T14 F区	5	石核	サヌカイト	53.5	33.4	15.4	36.60	交互剥離	中期Ⅴ～Ⅵ群
S61	u37	T14 G区	5	石核	サヌカイト	70	57.8	17.3	105.10	交互剥離	中期Ⅴ～Ⅵ群
S62	u31	T14 C区	3	石核片	サヌカイト	59.2	35.8	18.5	56.40	楔形石器	後期Ⅳ～Ⅵ群
S63	u1017	T14 AC	3	石核片	サヌカイト	38.5	8.4	6.8	2.20		後期Ⅳ～Ⅵ群
S64	u54	T6	5	石核	サヌカイト	47.8	41.3	13.5	27.80		後期Ⅳ～Ⅵ群
S65	u1	T14IJベルト	2	石核	サヌカイト	82.6	59.4	29.4	149.80	原石としても認定可	晩期Ⅰ～Ⅳ群
S66	u599	T14 J区	2	石核片	サヌカイト	39.8	13.8	10.3	4.40		晩期Ⅰ～Ⅳ群
S67	u1455	T14 E区	5. 6	剥片	結晶片岩	61.6	51.2	9.4	35.30		中期Ⅰ～Ⅳ群
S68	u1456	T9	4	剥片	結晶片岩	33.8	28.8	8	11.60		前期Ⅲ群
S69	u56	T14 E区	動物遺存体埋納土器4	板状剥片	サヌカイト	66.6	23.3	16.5	32.60	原材・石核片	後期Ⅳ群
S70	u27	T14 F区	動物遺存体埋納土器3	板状剥片	サヌカイト	51.25	42.9	24.4	44.10		後期Ⅳ～Ⅵ群
S71	u96	T14DEベルト	4	剥片	サヌカイト	37.5	37.3	12.4	25.10	一部自然面残す	後期Ⅰ～Ⅲ群
S72	u33	T14DEベルト	4	剥片	サヌカイト	47.5	43.2	18.25	40.00		後期Ⅰ～Ⅲ群
S73	u23	T14 D区	3	剥片	サヌカイト	56.6	35.1	10.3	29.10		後期Ⅳ～Ⅵ群
S74	u26	T28 E区	4	剥片	サヌカイト	72.1	42.4	27.95	92.10		晩期Ⅰ～Ⅳ群
S75	f10	T14DEベルト	4	磨石	流紋岩	33.2	26	12.8	16.7		後期Ⅰ～Ⅲ群
S76	u449	T14 J区	3	磨製石器片	安山岩	27.7	22	8.1	6.70	よく研磨、擦痕	後期Ⅳ～Ⅵ群
S77	u527	T25	表採	磨製石器片	安山岩	37.7	19.9	6.7	4.80	よく研磨、擦痕	前期Ⅳ群

骨角貝製品観察表（整理番号のB78～B113は、彦崎貝塚１の掲載番号と同一）

掲載番号	整理番号	トレンチ・区	遺構・層位	種別	素材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	残存状況	備考	時期
B1	B87	T14GHベルト	3・4	単式釣針	鹿角	81.8	19.3	6.5	5.2	欠損	鹿角の表面が一方の面全体に残る	後期Ⅳ～Ⅵ群
B2	B83	T5	3・4	刺突具	哺乳類四肢骨	84.9	14.9	5.1	5.8	完形	両端部表面に噛み痕あり。	前期Ⅲ群
B3	B84	T14CDベルト	5・6	刺突具	哺乳類四肢骨	46.6	11.9	6.5	2.0	欠損	一方の先端のみ光沢あり	中期Ⅰ～Ⅳ群
B4	B85	T14FGベルト	9	刺突具	鹿角	32.4	5.6	4.9	1.0	欠損	全体的に表面平滑。一端は丸みを残す	前期Ⅳ群
B5	B86	T14F区	5・6	猪牙製品	イノシシ下顎犬歯	29.3	5.8	3.3	0.6	欠損	内側面の破片でエナメル質残す。	中期Ⅰ～Ⅳ群
B6	B124	T23	7	貝刃	ハマグリ	45.5	39.8	14	16	完形	左殻。全体に刃部調整	前期Ⅲ群
B7	B122	T23	7	貝刃	ハマグリ	56.5	76.2	22	41.3	完形	左殻。中央部に刃部調整	前期Ⅲ群
B8	B117	T23	7	貝刃	ハマグリ	54.2	59.2	17.5	25.2	完形	左殻。右側に刃部調整	前期Ⅲ群
B9	B125	T23	7	貝刃	ハマグリ	54.5	63.5	18	25	完形	左殻。右側に刃部調整	前期Ⅲ群
B10	B121	T23	7	貝刃	ハマグリ	57.2	71.8	17.8	26.9	完形	左殻。中央部と右側に刃部調整	前期Ⅲ群
B11	B119	T23	7	貝刃	ハマグリ	54.5	67.8	17	22.1	完形	右殻。左側に刃部調整	前期Ⅲ群
B12	B120	T23	7	貝刃	ハマグリ	59	69.3	18	31.4	完形	右殻。左側に刃部調整	前期Ⅲ群
B13	B118	T23	7	貝刃	ハマグリ	60.5	75	21.5	37.6	完形	左殻。左右に刃部調整	前期Ⅲ群
B14	B123	T23	7	貝輪	フネガイ科	36	9.2	1.92	0.7	欠損	殻唇部内面上方刃部調整。貝輪二次利用か？	前期Ⅲ群
B15	B116	T23	7	貝輪	フネガイ科	41	5.2	1.5	0.4	欠損	研磨。口唇部	前期Ⅲ群
B16	B78	T14G区	8・9	貝輪	フネガイ科	26.7	5.3	4.7	0.7	欠損	殻長側の蝶番部	前期Ⅳ群
B17	B82	T14HIベルト	5・6	貝輪	不明二枚貝	37.3	4.2	5.2	1.1	欠損	表面の調整は粗いが全体的に平滑	中期Ⅰ～Ⅳ群
B18	B79	T14E区	5・6	貝輪	不明二枚貝	25.8	7.6	4.3	0.8	欠損	表面摩滅顕著	中期Ⅰ～Ⅳ群
B19	B81	T14HIベルト	5・6	貝輪	サルボウ?	59.7	6.6	4.7	2.3	欠損	両端部表面の肋が若干残る	中期Ⅰ～Ⅳ群
B20	B80	T14D区	4	貝輪	フネガイ科	40.0	6.6	3.8	1.4	欠損	内外面ともに表面全体的に平滑。	後期Ⅰ～Ⅲ群
B21	B114	T23	7	有孔貝製品	マガキ	46.5	34.5	5.5	3.9	欠損	内側から一箇所穿孔	前期Ⅲ群
B22	B115	T27	2	有孔貝製品	イタボガキ	47	37.8	4.2	8.9	欠損	内側から二箇所穿孔	前期Ⅳ群
B23	B103	T14H区	8	装飾品	板鰓類椎骨	8.6	8.5	5.0	0.3	完形	中央穿孔。軟骨剥離あり	前期Ⅳ群
B24	B93	T14E区	10	装飾品	板鰓類椎骨	15.9	11.5	7.4	0.7	欠損	中央穿孔。半分欠損	前期Ⅳ群
B25	B90	T14E区	10	装飾品	板鰓類椎骨	14.2	13.8	8.1	1.2	完形	中央穿孔	前期Ⅳ群
B26	B92	T14GHベルト	3・4	装飾品	板鰓類椎骨	11.3	10.8	5.2	0.5	完形	中央穿孔。軟骨剥離あり	後期Ⅳ～Ⅵ群
B27	B111	－	－	装飾品	板鰓類椎骨	18.2	2.2	3.6	0.2	欠損	椎骨の縁辺破片。	不明
B28	B112	T14DEベルト	4	装飾品	ネズミザメ科椎骨	37.5	36.2	11.2	5.1	完形?	中央穿孔。星椎構造が残る	後期Ⅰ～Ⅲ群
B29	B113	T14F区	5・6	装飾品	ネズミザメ科椎骨	37.3	36.4	10.4	4.7	完形?	中央大きく穿孔。星椎構造が残る	中期Ⅰ～Ⅳ群
B30	B96	T14GHベルト	3・4	装飾品	板鰓類椎骨	9.1	8.7	5.1	0.2	欠損	一部擦痕が認められる	後期Ⅳ～Ⅵ群
B31	B108	T14CDベルト	4	装飾品	板鰓類椎骨	10.7	10.5	4.9	0.4	完形	中央穿孔。軟骨剥離あり	後期Ⅰ～Ⅲ群
B32	B106	T14F区	3・4	装飾品	板鰓類椎骨	11.8	12.0	6.9	0.2	欠損	中央穿孔	後期Ⅳ～Ⅵ群
B33	B91	T14DEベルト	3・4	装飾品	板鰓類椎骨	15.9	14.8	11.2	1.4	欠損	中央穿孔。側面の両縁辺欠損	後期Ⅳ～Ⅵ群
B34	B89	T14IJベルト	2	装飾品	板鰓類椎骨	11.6	11.5	6.3	0.5	欠損	中央穿孔。軟骨剥離あり	晩期Ⅰ～Ⅳ群
B35	B95	T14HI区	2	装飾品	板鰓類椎骨	7.3	7.1	4.3	0.1	欠損	中央穿孔。側面弓溝を中心に表面平滑	晩期Ⅰ～Ⅳ群
B36	B104	T14I区	2	装飾品	板鰓類椎骨	9.9	9.1	4.8	0.2	欠損	中央穿孔。側面の軟骨部平滑に調整あり	晩期Ⅰ～Ⅳ群
B37	B97	T14HIベルト	3・4	装飾品	板鰓類椎骨	11.7	11.7	5.5	0.6	完形	軟骨剥離あり	後期Ⅳ～Ⅵ群
B38	B109	T14I区	3・4	装飾品	板鰓類椎骨	14.0	13.2	7.5	0.8	欠損	中央穿孔。側面欠損顕著	後期Ⅳ～Ⅵ群
B39	B99	T14I区	3・4	装飾品	板鰓類椎骨	15.7	14.2	7.2	1.1	欠損	中央穿孔。軟骨剥離あり	後期Ⅳ～Ⅵ群
B40	B104	T14I区	3・4	装飾品	板鰓類椎骨	16.4	14.2	7.0	1.2	完形	中央穿孔。軟骨剥離あり	後期Ⅳ～Ⅵ群
B41	B88	T14I区	3・4	装飾品	板鰓類椎骨	16.2	14.3	7.6	1.2	完形	中央穿孔。軟骨部剥離あり	後期Ⅳ～Ⅵ群
B42	B100	T14I区	3・4	装飾品	板鰓類椎骨	14.9	13.7	7.7	1.1	完形	中央穿孔。軟骨剥離あり	後期Ⅳ～Ⅵ群
B43	B101	T14HIベルト	3・4	装飾品	板鰓類椎骨	17.1	15.3	8.1	1.3	欠損	中央穿孔(やや楕円形)	後期Ⅳ～Ⅵ群

土製品観察表

掲載番号	整理番号	トレンチ・区	遺構・層位	種別	素材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	残存状況	備考	時期
C1	C6	T8	13	不明土製品	粘土	38	29	26	21.8	欠損	焼成粘土塊？	前期Ⅰ群
C2	C5	T5	5	不明土製品	粘土	36	22	12	8.4	欠損	焼成粘土塊？	前期Ⅲ群
C3	C7	T23	7	不明土製品	粘土	30	27	17	6.4	欠損	焼成粘土塊？	前期Ⅲ群
C4	C8	T23	7	不明土製品	粘土	18	16	12	2.8	完形？	焼成粘土塊？	前期Ⅲ群
C5	C9	T11	3	不明土製品	粘土	36	23	20	14・9	完形？	焼成粘土塊？	後期～晩期
C6	C10	T14	2	不明土製品	粘土	24	16	11	4	欠損	焼成粘土塊？	晩期前半～中葉

附章１　中国地方における縄文時代の墓制

－彦崎貝塚出土例を墓制論上に位置づけるために－

山田　康弘（島根大学法文学部　准教授）

はじめに

中国地方における縄文時代の墓制を総括的に議論した研究は、これまでのところほとんど存在しなかったといってよい。このような状況の中、筆者は中国地方における縄文時代の墓地・墓域について、山間部と海岸部に留意しながら分析を行なった事がある（山田2004c）。これは当時筆者が把握できた中国地方の墓地・墓域のあり方をまとめたものである。しかし、2003年から翌年にかけて行なわれた彦崎貝塚の発掘調査により、新たな資料が追加された。さらにこの調査の詳細な報告書（田嶋編2006）が刊行されるにおよび、従来の知見についても再検討を行ない、あわせて中国地方の墓制について再論する必要が出てきた。そこで、本稿では彦崎貝塚における墓の状況を再検討しつつ、中国地方の墓制について言及することにしたい。

１．彦崎貝塚における墓地のあり方

人骨の出土状況

彦崎貝塚における人骨の埋葬状態は、過去に酒詰仲男や池葉須藤樹によって記述が行なわれている（酒詰1951、池葉須1971）。また、田嶋正憲はこれらの人骨の帰属時期について再検討を加えている（田嶋編2006）。ここではこれらの報告の記述を参考にしながら各人骨の出土状況を検討していくことにしよう。

東京大学人類学教室調査地点出土人骨

１・２・３号合葬例

池葉須によれば、地表より深さ80cmの所にあり、砂層に直径30cm、深さ23cmの円形の土壙を掘り、その中に頭蓋３個を巴状に配置してあったとされる。酒詰の記述では四肢骨を三角形に並べ、その上に頭蓋を３個鼎立させていたとされる。筆者も国立科学博物館において頭蓋および四肢骨を実見したが、大腿骨等は形状を保っており、直径30cm程度の土壙に入っていたとは考えにくい。本来はもっと大きな土壙が存在したと解釈すべきであろう。これらの頭蓋や四肢骨は被熱し、一部赤色化しているが、いわゆる焼人骨ではない。酒詰の記述によれば、炉址かと思い調査したところ人骨が出土したとされているので、おそらくは埋葬後になんらかの原因で土壙上部で強く火が焚かれ、それにより被熱したものであろう。１号は熟年期男性、２号は熟年から老年期の男性、３号は熟年期男性と推定される。また、これらのうち１号人骨と２号人骨には前頭縫合線が確認できること、また１・２・３号人骨にはラムダ縫合線小骨が確認できることなどから、これらの人骨はなんらかの血縁関係にあった可能性が想定できる。池葉須は前期の人骨としているが、層位関係を検討した田嶋によれば中期のものである可能性が高いとされている。

４号人骨

池葉須によれば、長径90cm、短径60cmの楕円形の土壙に埋葬されていたとされる。頭位方向はS24°Eで、埋葬姿勢は不明である。青年期から壮年期の女性だと思われる。この人骨の腸骨には浅いなが

らも前耳状面溝が確認でき、経産婦であったと推定される。池葉須は本人骨の帰属時期を前期としているが、田嶋によれば中期の所産である可能性が高いとされる。

５号人骨

長径75cm、短径50cmの土壙に右下側臥屈葬の形で埋葬されていた。頭位方向はS38°Eである。歯の残存状況は良好だが、抜歯は確認できない。腸骨稜のラインがまだ痕跡をとどめているものの、下顎のＭ３は萌出していることから、壮年期の男性と思われる。周辺の土は焼けていたとされる。

６号人骨

唯一貝層中より発見された人骨であり、埋葬施設等は確認されていない。左下側臥屈葬例であり、頭位方向はS34°Eである。熟年期の男性と思われる。池葉須によれば後期の人骨とされているが、下顎の第一および第二切歯が脱落、対応する歯槽が閉鎖していることから４Ｉ型抜歯を施された晩期人骨の可能性も存在する。

７号人骨

長径100cm、短径65cmの土壙に左下側臥屈葬の形で埋葬されていた。頭位方向はS20°Eで、熟年期の男性と思われる。上顎左右第２小臼歯が欠落、歯槽閉鎖しており、これが抜歯であった可能性も存在する。池葉須の報告では時期についての記載が存在せず、帰属時期は不明であるが、これが抜歯であるならば、本人骨の帰属時期はおそらく後期以降ということになるだろう。

８・９・10号人骨

池葉須の報告では散乱骨と認識され、スコップで掘り上げられたとされている。しかし、長径100cm、短径65cmの土壙内に一括して埋葬されていたようであることから、おそらくは１～３号人骨と同様に３体合葬複葬例であろう。頭蓋から見るかぎり、８号人骨は壮年期の女性、９号人骨も壮年期の女性であり、これは顎関節症を患っていた可能性がある。また、この２体には右ラムダ縫合線小骨が存在する。帰属は不明だが、非常に深い前耳状面溝を有する腸骨が確認できることから、経産婦の遺体が含まれていたと考えられる。10号人骨は、小児期段階の子供である。

11号人骨

５歳程度の幼児期段階の人骨である。直径60cm、短径50cmの土壙中に埋葬されていたが、保存状態が悪く、土ごと取り上げられたとされている。

12号人骨

８～10号合葬複葬例の下部、一部土壙が切合った形で検出されている。土壙の規模は長径100cm、短径80cmで、頭位方向はS28°Eである。埋葬姿勢は右下横臥屈葬らしい。熟年期の男性だと思われる。ただし、大腿骨のピラステル構造がほとんど発達していないこと、顔面頭蓋鼻根部が平坦であることなど、本人骨の形質には、いささか疑問点も存在する。また、右側大腿骨の後面側には骨膜炎の痕跡が観察できる。８～10号人骨埋葬例の下部より発見されたということは、本例が時期的に先行する可能性があるということである。しかし、下顎の右側第一・第二切歯および左側第二切歯が脱落、歯槽閉鎖しており、これを抜歯とみるならば、晩期以降の事例であると考えることもできる。その場合、８～10号人骨が何時の時点で複葬されたのかという点について再考を要することになるだろう。

13号人骨

池葉須による報告書の記載からは、具体的な埋葬姿勢を知ることができない。土壙規模も不明である。ただし、岡山市に残されている写真からは仰臥屈葬であったと思われる。右肘関節の角度は不明

だが、左は強く屈している。腰および両下肢も同様である。Ⅰ?a1に分類される（山田2001b）。頭位方向はS70°Wである。熟年期の男性人骨であり、抜歯は確認できない。

14号人骨

壮年期の女性人骨である。上下の智歯は萌出しているものの、腸骨稜や脛骨近位端の骨端線が完全に癒合せず残存していることから、年齢的には壮年前期の事例であろう。この女性人骨の寛骨腔内から胎児骨が出土している。胎児骨の四肢骨骨化長は右大腿骨で53㎜、右脛骨で48㎜、右上腕骨で46㎜であり、森田らの研究と照合した場合、胎児の週齢は第31週前後であったと考えることができる（森田 他1973）。腸骨には浅い前耳状面溝が確認できることから、出産前に亡くなった若い妊産婦の埋葬であろう。池葉須の記述では男性骨とされているが、間壁葭子の記述によれば、調査時点で妊産婦の埋葬例と判断されていたとのことであるから（間壁1987）、双方の記述には矛盾が存在する。土壙規模は不明であるが、頭頂部から骨盤までの測定値が85㎝であるから、それよりは大きな土壙に埋葬されていたのであろう。埋葬姿勢は右下側臥屈葬例である。写真から判断すると、右肘角度は不明、左はほぼ直角、腰もほぼ直角であるが両膝関節は強く屈している。Ⅱ?b2である。頭位方向は、脊柱の方位N0°Sとの記述があるものの、図では頭が南側に描かれていることなどから判断して、真南であったと思われる。なお、本人骨にともなってアカガイ製の貝輪が１点確認されている。池葉須によれば前期の事例とされている。抜歯は確認できない。

15号人骨

男性骨とされているが、筆者は本人骨を実見していない。右下側臥屈葬で埋葬された前期の事例だとされる。頭位方向はN0°Sとされるが、池葉須の図によれば、頭位はほぼ真南を向いている。

16号人骨

右下横臥屈葬で埋葬されていた、熟年期の女性人骨である。頭位方向はN90°Eである。下顎の左右第一切歯が脱落、歯槽閉鎖している。池葉須報告では前期とされているが、先の歯牙脱落が抜歯だとするならば、帰属時期を再考する必要が出てくるだろう。また、仙骨直上の椎骨２点が変形癒着しており、また腸骨と仙骨の関節面を変形していることから、圧迫骨折をしていた可能性もある。また左右の尺骨近位端部には変形関節炎が確認できた。

17号人骨

池葉須の報告では記載がないが、筆者が国立科学博物館で実見した資料中には存在した。壮年期の事例である。腸骨の大座骨切痕が狭いことから、男性骨と思われるが、後頭隆起があまり発達しておらず、四肢骨も華奢である。抜歯は存在しない。

18・19号人骨

２体合葬単葬例である。18号人骨は壮年期男性、19号人骨は壮年期女性である。両人骨とも抜歯は確認できない。19号人骨には浅いが前耳状面溝が観察できるので経産婦であった可能性がある。土壙の規模は長径95㎝、短径70㎝である。頭位方向は２体とも同じで、ほぼ真北である。埋葬姿勢は２体とも仰臥屈葬で、岡山市教育委員会が保存している写真からみる限り、右側に埋葬された18号人骨ではⅠAa1、左側の19号人骨ではⅠ?a?である。ただし19号の左関節の角度が鋭角であること、右膝関節の角度が同じく鋭角であることなどから、19号の埋葬姿勢も18号と同じⅠAa1であった可能性が高い。時期についての記載はない。

20号人骨

熟年期の男性人骨である。池葉須報告では右下屈葬例とされ、頭位方向はS25°Wである。岡山市に保管されている写真からは、左右の上肢下肢は強く屈しており、また腰も強く屈している。ただ側臥かどうかは判断できない。池葉須の報告と写真を総合すると埋葬姿勢はⅡAa1となるだろう。前期の事例とされている。

21号人骨

仰臥屈葬例で、頭位方向はほぼ真南らしい。国立科学博物館には該当資料がなかった。前期の事例とされている。

灘崎町調査地点出土人骨

１号人骨

平成16年度より灘崎町によって彦崎貝塚の発掘調査が行なわれたが、その時に出土した人骨である。頭蓋の大部分および四肢骨の一部が出土している。人骨は壮年後半から熟年前半の男性である。本例には明確な埋葬施設は存在せず、調査者の田嶋は散乱骨とするとともに、２次埋葬例であるともしている。頭蓋のみが埋葬されていた事例としては、愛知県稲荷山貝塚出土例や、千葉県西広貝塚出土例などが存在するが（山田2001f)、明確な埋葬施設を伴わない以上、本例におけるこの種の判断は難しい。この人骨にともなって、エイの椎骨製の玉が１点出土している。帰属時期は、中期船元Ⅳ式期と考えられている。

２号人骨

長径100cm、短径78cmの楕円形を呈する土壙中から出土している４歳程度の幼児期の人骨である。調査者の田嶋は人骨が土壙中央部より集中的に出土したことから複葬例である可能性を指摘しているが、概して子供の複葬例は稀有である。また、人骨の鑑定結果をみると少量ではあるものの四肢骨がそれなりに確認されていることから、単葬例であった可能性も否定はできないであろう。埋葬姿勢、頭位方向などは不明である。帰属時期は中期船元Ⅰ式期と考えられている。

３・４号人骨

３号人骨と４号人骨は同一の土壙内に埋葬されたと思われる合葬例である。土壙の規模は長径81cm、短径73cmでありほぼ円形のプランを呈する。

３号人骨は右寛骨と右脛骨のみであり、基本的に複葬例と考えられる。報告によれば成人男性のものとされる。

４号人骨は３号人骨の下層より出土した単葬例である。埋葬姿勢は仰臥屈葬であるが、東京大学人類学教室調査区出土人骨とは異なり、上肢を伸ばし腹部に乗せるⅠCa1である。頭位方向はN5°Wである。壮年後半から熟年前半の女性人骨であり、腸骨には前耳状面溝が確認され、経産婦であったと思われる。本例の帰属時期は中期初頭船元Ⅰ式期のものと考えられている。なお、土壙の最下層よりエイ椎骨製小玉が２点出土している。おそらくは４号人骨に伴う装身具であろう。形態的には１号人骨に伴ったものと同じものである。

彦崎貝塚出土人骨の埋葬属性

では、上述した各埋葬例をもとに、埋葬属性を検討してみよう。まず、埋葬形態であるが、単独単葬例が12例12体であり、基本的にはこれが埋葬例の大部分を占める。しかし合葬単葬例も１例２体存

在する。また、目立ったのが複葬例である。単独複葬例は、灘崎町調査２号人骨にその可能性が残るが確証はない。また、灘崎町３号人骨のように単葬例と合葬される場合も存在する。合葬複葬例は２例６体であり、本遺跡において特徴的な葬法となっている。

単葬例の埋葬姿勢について検討してみると、右下側臥屈葬例が６例と一番多く、その次が仰臥屈葬例が４例と続き、左下側臥屈葬例が３例となる。仰臥、側臥の区別をした場合、側臥例が９例と仰臥例を倍以上上回る。彦崎貝塚においては側臥屈葬が主体であったということができるだろう。また、肘・腰・膝の角度が鋭角である事例も多い。岡山市教育委員会が保管する写真で見るかぎり、例外は14号人骨であるが、これは妊産婦の埋葬例であることとも関係するのであろう。

頭位方向についても面白い傾向をみることができる。東京大学人類学教室が調査した人骨のうち、調査区の西側、１～５区にかけて出土した人骨の頭位方向はS20°EからS38°Eの範囲に集中する傾向があるのに対して、東側の６～９区より出土した人骨の頭位方向は、Sが３例、S25Wが1例と南に偏るものとS70Wと南西に向くもののほかNやN5Wなど、ややまとまりに欠ける。時期差が反映したものであろうか。しかし、人骨の出土地点（第２－２図）に注目してみると、頭位方向のあり方によってまとまりが存在するようにも見え、これらが埋葬小群を構成する一傍証となる可能性も否定できない。以下ではこれらの埋葬属性をもとに、彦崎貝塚出土人骨群を中国地方における墓制のあり方の中に位置づけてみることにしよう。

２．中国地方における墓地のあり方

墓の認定条件

考古学的に検出された遺構をいかにして墓と認定するのかという問題については、これまでにも梅沢太久夫氏や中村大氏らによって議論されてきている（梅沢1971・中村1998、註２）。筆者自身も、墓の認定には人骨を含めた遺体の痕跡を検出することが最も重要であると述べ、その基礎的な基準を作成するために人骨出土例を中心として埋葬姿勢のあり方やそれに対応する土壙の形態や規模について、実際に検討を行なってきた（山田1999a・2001bなど）。しかし、現実問題として土坑の調査者がどのような意識のもと調査を行ない、どのような証拠をもとに墓と認定したのかによって、報告される墓の数は大きく変動するだろうし、ましてや調査の当事者が土坑の性格について積極的に記載を行なうことは多くないという現状を踏まえた場合、墓と報告される事例数は実際の数よりも相当少ないと見積もってよい。このような状況において墓と認定されている事例を単純にそのまま一つ一つ数え上げたとしても、墓制ならびにその先の研究目的である社会構造等に関して、さほど意味のある議論ができるとは筆者には思えない。これらの点を踏まえ、先の中村大氏の認定条件を一部採用し、本稿ではすでに報告された中国地方の事例のうち、遺構内から人骨が出土したもの、人骨出土例と比較して土坑の規模や形状が墓として適当であると思われるもの、土坑の上部や開口部の周囲などに整った配石をもつもの、装身具や副葬品と推定される遺物が土坑内から出土したものを墓と積極的に認定することとし、地点的に集中する土坑群中に上記の認定条件を満たす事例がある場合、これらを一括して墓地（墓域）として捉えることにしたい（註3）。また、墓制を議論するためには、ある程度まとまった事例数を必要とすることから、以下では墓地を形成していると考えることのできる遺跡例を中心にとりあげていくことにする（第１図）。

代表的な墓地の事例

上記の認定条件のもと、墓地と考えることのできる事例について概観してみることにしよう。人骨がある程度の数まとまって出土するなどして、確実に墓地を形成していると判断できる遺跡としては、広島県大田貝塚（前期～中期？、第１図－18）（清野1969・潮見編1971）、同帝釈寄倉岩陰遺跡（後期、第１図－14・第７図－1）（戸沢他1976）、同帝釈猿神岩陰遺跡（晩期、第１図－15）（川越1978）、同帝釈名越岩陰遺跡（晩期？、第１図－16・第３図－４）（川越1976a）、同豊松堂面洞窟遺跡（後期、第１図－17・第２図－４）（川越1976b）、岡山県船元貝塚（中期？、第１図－22・第２図－１）（清野1969）、同津雲貝塚（後～晩期？、第１図－19・第４図－１）（清野1918）、同彦崎貝塚（前・後期、第１図－23・第２図－２）（池葉須1971）、同里木貝塚（中～後期、第１図－20・第２図－３）（倉敷考古館編1971）、同船倉貝塚（前期、第１図－21・第３図－６、第７図－４・５）（鍵谷編1999）、山口県御堂遺跡（晩期、第１図－１・第３図－５、第７図－６）（水島編1991）、同岩田遺跡（後～晩期、第１図－１・第３図－７）（潮見他1955・中越2000）などを挙げることができる。これらの遺跡は、帝釈峡遺跡群を除き、いずれも山陽地方瀬戸内側の沿岸部に所在する。これに対して帝釈峡遺跡群は、その位置から山間部にあるということができよう。また、人骨こそ出土してはいないが、土壙内から敷石が出土している広島県陽内遺跡（中期、第１図－13・第５図－２・第７図－３）（稲垣編1999）や土壙内から玉類が出土している岡山県久田原遺跡（後～晩期、第１図－26・第６図－２）（江見編2004）の事例なども山間部の墓地として考えられるだろう。

これに対して、日本海側の山陰地方沿岸部では、まとまった人骨出土例は報告されていない。わずかに島根県サルガ鼻洞窟遺跡と同小浜洞窟遺跡においてその可能性が知られるが（佐々木他1937・山本1967）、残念ながら考古学的な情報が欠落している。また、山陰地方の山間部においても、人骨出土例は今のところ報告されていない。先の認定条件と照合した場合、墓地と捉えることのできる事例としては、島根県板屋Ⅲ遺跡（晩期、第１図－８・第４図－２）（角田編1998）、同下山遺跡（後期、第１図－６・第３図－２）（深田編2002）、同宮田遺跡（後期、第１図－９）（西尾編1979）、同貝谷遺跡（後期、第１図－７・第６図－１）（神柱編2002）、同平田遺跡（後期、第１図－10）（坂本他編1997）、同ヨレ遺跡・イセ遺跡（後～晩期、第１図－５・第３図－３）（渡辺編1993）、同水田ノ上遺跡（後～晩期、第１図－４）（渡辺編1991）、同石ヶ坪遺跡（晩期、第１図－３）（渡辺編1990）、家の後Ⅱ・原田遺跡（後～晩期、第１図－11）、鳥取県上福万遺跡（早期、第１図－24・第５図－１・第７図－２）（長岡編1985）、同松ケ坪遺跡（晩期、第１図－25・第３図－１）（森下1996）などが挙げられる。鳥取県の二遺跡は、立地や当時の推定海岸線からみて沿岸部の遺跡とも山間部の遺跡とも言い難い位置にあるが、ひとまず便宜的に上福万遺跡を沿岸部、松ケ坪遺跡を山間部と捉えておくことにする。先に挙げた島根県内の遺跡はすべて山間部の遺跡と捉えて大過ないだろう。以上の遺跡の地域区分は多分に感覚的なものであるが、地図上に遺跡の位置を落としてみると海岸線からの距離を判断基準として、山間部の事例と沿岸部の事例を概ね区分することが可能である（第１図参照）。これらの事例を中心として、次節では埋葬属性にみられる傾向性について検討を行なうことにしよう。

埋葬属性にみられる傾向性

墓から得られる考古学的情報を総称して、これを埋葬属性と呼ぶ。ここでは埋葬形態や埋葬姿勢、頭位方向などの埋葬属性について概観してみることにしたい。

埋葬形態

遺体が埋葬されている施設、一施設内に埋葬されている遺体の数、遺体処理の回数といった埋葬のあり方に関する属性を埋葬形態と言う（山田1996）。

中国地方の場合、基本的には山間部沿岸部の両地域とも土坑墓内における単独・単葬例が多い。また、山間部の帝釈寄倉岩陰遺跡（第７図－１）や、帝釈猿神岩陰遺跡からは合葬・複葬例が確認されている。ただし、規模こそは小さくなるものの合葬・複葬例は彦崎貝塚からも出土しているし（第２図－２、１～３号および８～10号）、また、船倉貝塚と彦崎貝塚では複葬人骨と単葬人骨が同一の土壙内に合葬されている事例が出土しているなど（第７図－５）、個別に見た埋葬形態は両地域とも予想以上に複雑な様相を呈している。従来、アプリオリな形で山間部の洞窟・岩陰遺跡には複葬例が多いと考えられることが多かったが、中国地方においては必ずしもあてはまらないと言うことができるだろう。

土器棺墓と捉えることのできる土器埋設遺構は、島根県暮地遺跡（後期、杉原1981）や宮田遺跡、家の後Ⅱ遺跡、松ケ坪遺跡といった山間部に多くみることができる。その一方で、沿岸部の岩田遺跡（第３図－７、１～５号）や津雲貝塚（第４図－１、26号）においても土器棺墓が確認されている。これらの山間部および沿岸部の土器埋設遺構はそれぞれの地域ごとで系譜が異なるものであり（山田2001c）、その意味では地域的傾向性を示すものといえるだろう。ただその一方で、彦崎貝塚では土器内からイノシシが出土している事例も存在し、筆者が土器埋設遺構がすべからく土器棺墓であるとは考えていないことも強調しておきたい（山田前出）。

なお、山口県御堂遺跡からは木棺墓であることが確実な資料が検出されている（第７図－６）。しかし、現在のところ比較検討できる縄文時代の類例が中国地方にはなく、資料的に孤立している感がある。

埋葬姿勢

全国的な視野からの検討により、中国地方では膝を強く曲げた「屈葬」例（山田分類のa1・b1・c1）が卓越することが判明している（山田2001b、第８図参照）。大田貝塚出土例のように「伸展葬」例（山田分類のc1）が過半数を占める遺跡も存在するが（註４）、人骨出土例に関しては、基本的には全時期を通じて「屈葬」例が主流をなすようである。また、人骨が検出できなかった事例についても、全国的な土壙の形状や規模の傾向からみて（山田1999a、第１表参照）、埋葬姿勢は「屈葬」が主体であったと推定される。このことは、彦崎貝塚にもあてはまる。埋葬姿勢に関しては中国地方一般に見られる埋葬属性であると言えるだろう。

土壙の形状と規模

明確に土壙の形状や規模が記載されている事例は、さほど多くない。調査によって土壙の形状や規模が判明した事例では、楕円形ないし不整円形のものが多く、土壙長も1.0～1.6m程のものが多いことが判っている（山田1998）。これは、「屈葬」を主体とする埋葬姿勢が土壙の規模に反映されているためと考えることができるだろう（山田1999a）。彦崎貝塚の事例もこの範疇で捉えることができる。

一方、配石墓の中には、上福万遺跡の事例（第７図－２）のように土壙長が２mを超えるものも存在する。このような事例は、基本的に「伸展葬」例であったと考えることができるだろう（山田1999a）。大局的にみた場合、埋葬姿勢のあり方からもうかがうことができるように、山間部と沿岸部では土壙の形状と規模に関しては明確な差異は存在しないようである。

また、中国地方においても東日本の諸例と同様に、貯蔵穴が墓に転用された可能性について考慮しておく必要がある。例えば、船倉貝塚例のように土壙埋土の中層から人骨が出土し、人骨下位に大型の礫が複数存在するような事例は貯蔵穴が墓に転用された可能性がある（第７図－４）。だが、岡山県南方前池遺跡（近藤編1995）や島根県九日田遺跡（岡崎編2000）などの事例からも明らかなように、貯蔵穴も群在化する傾向があり、土坑内部ないし上部に配石を持つものも存在することから、現実的には人骨ないし植物遺存体が発見できなかった場合、形状と規模のみから土坑の性格を一律に推定することは難しいだろう。

上部構造

船倉貝塚、里木貝塚、帝釈峡遺跡群、貝谷遺跡、イセ遺跡など、山間部と沿岸部の両地域において、墓の上部構造としてあるいは遺体に接して何らかの形で配石がなされているものが確認できる。特に下山遺跡では、墓標としての立石を持つものが確認されている。また、土壙内埋土上部から多数の大型礫が出土する場合もあるが、これらの一部は遺体の腐敗消失にともなって土壙内に落ち込んだ上部配石とも考えることができるだろう。

上部構造とは言えないかもしれないが、土壙の上部で火を焚いた事例や、そのせいであろうか人骨自体が被熱している事例が瀬戸内側、特に岡山県域の沿岸部において散見されることは注目しておきたい。無論、彦崎貝塚においてもこのような事例は顕著である。複葬プロセスの一環として存在したのか、それともかつて清野謙次が指摘したような燔火の風習があったのであろうか（清野1946）。ただし、彦崎貝塚の場合、土層が非常に硬く焼き締まっており、場所によっては移植ゴテが通らないような場所も存在した。このことは、火が一回焚かれたというようなものではなく、比較的長期にわたって繰り返し着火されたという状況が推定できる。火を用いる葬送儀礼が繰り返し挙行されたのか、あるいは関東のハマ貝塚にみることができるような「貝処理」施設が偶然にも墓の上に設置されたのか、それとも墓と処理施設に有機的な関連があるのか、今後の検討が必要であろう。

墓地の構造・土壙相互の位置関係

墓地全体の形状については不明な部分が多い。しかし、遺跡によっては人骨の出土地点が特定箇所に集中する事例があることから、埋葬小群が存在したと推定することができる。これらの埋葬小群は、基本的には集塊状をなし、中には環状を呈すると思われる事例も存在する（山田1998・2000、第２図－３・第４図－１を参照）。下山遺跡では上部構造の形態によって埋葬小群を区分することができるとされ（角田2000）、これがなんらかの社会的な分節構造を表している可能性もある。このことは、彦崎貝塚においてもあてはまる可能性がある。

代表的な遺跡を通覧してみると、中国地方の縄文時代における墓地の構造は、山間部「海岸域」共に、基本的には塊状または環状配置をもつ埋葬小群が単独ないしは複数存在するというあり方を示すと考えられるだろう。なお、人骨の出土数からみて、大田貝塚や津雲貝塚（第４図－１）などのような大規模な墓地が瀬戸内側の沿岸部には存在するように思われるが、土壙や配石遺構の分布範囲という点からみれば、板屋Ⅲ遺跡（第４図－２）や下山遺跡（第３図－２）、水田ノ上遺跡といった山間部の墓地にも沿岸部の墓地に匹敵する広がりを持つものが存在するということは指摘しておきたい。

このような墓地は、上福万遺跡（第５図－１）に見られるように早期にはすでに形成されており、事例としては晩期に到るまで存続する。しかし、その一方で通常の遺跡内における個々の墓のあり方を考えた場合、群在化し墓地を構成するパターンよりも、貝谷遺跡などで見られるように住居跡に近

接した場所に単独ないし数基の墓が造られるといったパターンの方が多いのではないかとも予想される。その場合、単独ないし数基の墓がある遺跡と群在化した墓地のある遺跡の関係がどのようなものであったのか、今後考えて行く必要がでてくるだろう。

また、上記のような墓地のあり方は、弥生時代になり渡来系弥生人の墓制である列状配置墓が出現するに到って大きく山間部と沿岸部の二つの地域、すなわち縄文的墓制の残存する地域と弥生時代になって導入された新しい墓制をもつ地域に分割されるようになる（山田2000、註５）。弥生時代の始まりを考える上で興味深い現象である。

頭位方向

各遺跡に共通するような傾向性はないが、里木貝塚や津雲貝塚では近接する人骨の頭位がほぼ同じ方位を向くという事例も確認でき、これが逆に埋葬小群の抽出を可能としている。また、同様の傾向は、先に検討した彦崎貝塚出土人骨群や上福万遺跡の配石墓群においてもみることができる。ただし、頭位方向そのものが直接的に当時の社会構造を反映しているという保証は必ずしもなく（山田2003）、頭位が何を表しているのかという点については、今後さらなる検討が必要である。

装身具・副葬品

船倉貝塚からは、頭飾（耳飾？）を着装した前期の人骨が出土している。船元貝塚（中期？）と里木貝塚（後期）に腕飾（貝輪）着装例が存在する。津雲貝塚（晩期）などでは腕飾（貝輪）や腰飾、耳飾などの着装例が確認されている。中津貝塚（晩期？）からも腕飾（貝輪）と耳飾を着装した人骨が出土している（鎌木1955）。彦崎貝塚の場合、中期の埋葬例からエイ椎骨製の装身具が出土している。現在のところ、この種の小玉を着装していた人骨は、彦崎貝塚以外では見つかっていない。概して沿岸部の晩期の事例が多いが、山間部においても晩期のヨレ遺跡や、水田ノ上遺跡、原田遺跡、久田原遺跡などで玉類が出土しており、装身具の着装ないし副葬が必ずしもこの時期の沿岸部に偏るものではなさそうである（山田2001e）。また、副葬品については土壙内から出土した石器類などにその可能性を認めることができるが、厳密には判別しがたいものが多い（山田2004a）。有機物例の消失を考慮する必要があるが、全体的には両地域ともあまり発達するとは言えないだろう（山田前出）。

身体変工

抜歯のあり方およびそれと他の埋葬属性との関係については、すでに春成秀爾氏によって親族構造のあり方にまで踏み込んだ詳細な研究がなされているので、そちらを参照されたい（春成2002）。ここでは、河瀬正利氏が述べるように山間部の帝釈寄倉岩陰遺跡などから２C型の抜歯を施行された人骨が出土していることを指摘しておきたい（河瀬1988）。その場合、寄倉岩陰遺跡の合葬・複葬例の時期が本当に後期のものであるのかという点も含め、沿岸部と山間部ではこの時期同様の風習が存在したのか、それとも婚姻などによる移住者と考えるべきなのであろうかといった問題点が浮上する。いずれにせよ、両地域の交流のあり方を考える上で重要な資料となるだろう。

彦崎貝塚の場合、歯周病等による歯牙脱落の可能性が高いものの、抜歯をしている可能性も否定できない人骨が何例か存在した。今後、これらの人骨の帰属時期も含めて検討する必要があるだろう。

人類学的所見

彦崎貝塚や帝釈寄倉岩陰遺跡出土の合葬・複葬例には、前頭縫合などの頭蓋形態非計測的小変異を共有する事例がある（山田2001d）。通婚圏の検討が必要であり、決して過大評価することはできないが、考古学的なコンテクストと考え合わせた場合、何らかの血縁集団のあり方が墓制に反映されて

いる可能性については考慮してもよいだろう。

年齢段階による地点別埋葬については、これまで帝釈寄倉岩陰遺跡の合葬・複葬例（第７図－１）が大人と子供を区分している事例として挙げられてきたが（戸沢他1976・河瀬1988）、筆者が出土人骨を検討したところ、東京大学総合研究博物館に保管されている資料からは、そのような傾向は確認できなかった（山田2002b）。その一方で、津雲貝塚や豊松堂面洞窟では、子供の人骨の出土地点に偏りがあり（第４図－１・第２図－４）、遺跡によっては、年齢別に埋葬地点が定められていた可能性が存在する（山田1996）。

性別による埋葬地点の区分については、渡辺誠氏が津雲貝塚において、瀬川拓郎氏が船元貝塚においてその存在を指摘している（渡辺1973、瀬川1980）。しかし、渡辺氏の描いた性別区分による埋葬小群の境界線は非常に大きなものであり、これをそのまま埋葬小群の単位としてみることには躊躇を覚える。瀬川氏が描いた性別区分の境界線は、京都大学に保管されている人骨からは確認できなかった（山田2002b）。しかし、この地点から出土した人骨が女性に偏ることから（山田前出）、女性を中心とする埋葬小群が存在したことを裏付けるものとも考えることができ、逆にこの時期に性別による埋葬地点の区分が存在した可能性を指し示すものと考えることができるだろう。

この他、人骨そのものに含まれる炭素窒素同位体を分析することによって、山間部の帝釈寄倉岩陰遺跡と「海岸域」の津雲貝塚では当時の人々の摂取した食物が異なるというシミュレーション結果が公表されている（南川1995）。まだまだ分析事例数も少ないことから速断することは避けたいが、地域性を考える上で傾聴に値する指摘であろう。

３．中国地方の縄文墓制の中で彦崎貝塚出土例をどう捉えるか？

以上、中国地方の墓地を概観してきた。今度はこれらと先に述べた彦崎貝塚の墓地のあり方を比較してみることにしよう。

まず、大局的に見て、彦崎貝塚の墓地には血縁関係者を中心とした埋葬原理が存在したとみてよいだろう。これは、合葬複葬例のあり方や合葬単葬例が存在することからも傍証できるだろう。また、人骨の出土位置からみて、埋葬小群が存在する可能性も高い。その場合、埋葬小群中に含まれる遺体数は、多くても10体前後である。埋葬姿勢は屈葬が多く、単葬複葬ともに混在する状況にある。このようなあり方は、他の中国地方における墓地のあり方と比較して、必ずしもこれを極端に逸脱するものではない。その意味では、彦崎貝塚における墓地は、中国地方における標準的な資料であると言うこともできるだろう。しかし、その一方で彦崎貝塚では非常に保存状態の良い人骨が出土したからこそ、ここまで言及が可能であったということもできる。いずれにせよ彦崎貝塚の墓地および出土人骨群が縄文時代の墓制を語るうえで第一級の資料であることは間違いない。

筆者はこれまでにも中国地方の集落のあり方および居住形態や生業形態、墓地のあり方等について検討を行ない、中国地方の縄文集落は居住人口が10人を大きく超えるようなことはなく、住居も二～三棟程度の小規模なものであること、必ずしも資料的・時間的に重層化していくような「定住性」の高いものであるとは言い切れないこと、当地において東日本のような祭祀装置が発達しなかった理由には上記のような背景があったこと、墓制もこれと連動している可能性があることなどを繰り返し主張してきた（山田1999b・2000・2002a・2004b）。彦崎貝塚における生業形態および居住形態については今後の検討課題であるが、通年的な集落であったのか、それともある程度季節によって移動を行

なうような居住形態を有していたのか十分な吟味を行なう必要があるだろう。

以前にも述べたように筆者は、墓制とは個々の集団の主体性を認めながらも、「環境適応行動戦略」の一環として捉えられるべきものであると考えている（山田2003）。中国地方の縄文墓制に関しては、定着性の高い集団と遊動性の高い集団とでは墓のあり方が異なることはないのか、墓のあり方と集落のあり方はどのように対応しているのか、一つの集落構成員全員が一つの墓地に埋葬されるのか、異なる場所に埋葬されることはないのか、一つの墓地に複数の集落の構成員が埋葬されることはないのか、そもそも一つの集落構成員全員が埋葬されたのか、などといった多岐にわたる一方で非常に根本的な問題が未解決のままこれまで残されてきたことになる。彦崎貝塚の発掘調査およびその後の分析によってこれらの疑問点を解決する手がかりが得られることを切に願う。

＜註＞

1）中国地方の縄文墓制については、すでにこれまでにも何回か述べたことがある（山田1998、2000、2001c、2001dなど）。各論の詳細についてはそれらの文献を参照されたい。

2）梅沢太久夫氏の挙げた認定条件は以下のとおりである（梅沢1971）。

1　土葬される姿勢は後期を中心として関東地方に伸展葬が多く認められると言われているが、縄文時代全般を通してみると普遍的なものは「屈葬」である。

2　土壙のもつ形態は平面形が円あるいは楕円形を呈し、底の状態は平底あるいは皿状底である。

3　土壙の規模は口径の長径が100～150センチ位が一般的で、その中には稲荷洞穴のように30センチというのもある。

4　土壙内や上部より「火にまつわる」炭化物・焼土・灰等が認められる傾向がある。

5　埋葬人骨の近くに焚火痕が認められる場合もある。

6　中期以降になると土器・土製品が副葬品として納められている例が出現する。

7　後期以降になると貝輪・玉類等装飾品が着装の結果として、あるいは副葬品として認められる場合がある。

8　後期には埋葬人骨が集中して発見され、墓地の存在が認められる場合もある。

9　墓地の中で集落の形態に似せて作られた様子が認められるものもある。

10　中期末以降墓地と集落の位置関係については、明確にしえないが、ある程度のへだたりは持っていたものと考えられる。

また、中村大氏の挙げた認定条件は以下のとおりである（中村1998）。

1　人骨が検出される。

2　副葬品が発見される。つまり、貝輪・玉類・耳飾りなどの装身具や石棒・石剣などの第２の道具が、底面や覆土下部から出土する。

3　赤色顔料が土壙の底面や上面に散布されている。

4　土壙の上面に、配石や集積など墓標と考えられる施設を有する。あるいは土壙の底や壁に礫を並べる。

5　土壙の上面に礫を立てるか置く土壙。

6　上面に黄褐色土層を有する土壙。

7　底面に溝やピットを有する土壙。

8　底面から覆土下部にかけて数個の礫を置く土壙。

9　底面から覆土下部にかけて精製土器が出土する土壙。

3）ただし、この認定方法でも貯蔵穴と土壙の峻別は困難な場合がある。後述するが、貯蔵穴が墓坑に転用された場合、人骨の遺存が確認できなければ、墓としての認定は、単独では基本的に不可能であろう。化学的な判定方法の確立が希求される所以である。

4）ただし、大田貝塚出土とされる人骨が全て縄文時代のものであるのか、今後詳細な検討が必要であると筆者は考える。

5）山口県土井ヶ浜遺跡や島根県堀部第一遺跡、鳥取県長瀬高浜遺跡などはその典型例である。詳しくは山田2000を参照されたい。

＜引用文献＞

池葉須藤樹　1971『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告』、私家本

梅沢太久夫　1971「縄文時代の葬制について（1）－その性格と意義についての試論－」『台地研究』第19号

江見正己編　2004『久田原遺跡・久田原古墳群』、岡山県教育委員会

岡崎雄二郎編　2000『九日田遺跡発掘調査報告書』、松江市教育委員会

小野　昭・春成秀爾・小田静夫編　1992『図解・日本の人類遺跡』、東京大学出版会

鍵谷守秀編　1999『船倉貝塚』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第8集、倉敷市埋蔵文化財センター

角田徳幸編　1998『板屋Ⅲ遺跡』、島根県教育委員会

角田徳幸　2000「西中国山地帯の遺跡の様相－三瓶火山灰と縄文時代遺跡の関係を中心として－」『縄文時代における山間地域の諸問題』、第11回中・四国縄文研究会資料

川越哲志　1976a「帝釈名越岩陰遺跡の調査」『帝釈峡遺跡群』、亜紀書房

川越哲志　1976b「豊松堂面洞窟遺跡の調査」『帝釈峡遺跡群』、亜紀書房

川越哲志　1978「帝釈猿神岩陰遺跡の調査」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報Ⅰ』、広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室

河瀬正利　1988「帝釈峡遺跡群の埋葬」『日本民族・文化の生成１』永井昌文教授退官記念論文集、六興出版

鎌木義昌　1955「岡山県中津貝塚発掘の縄文文化後期の屈葬人骨」『石器時代』第１号

神柱靖彦編　2002『貝谷遺跡』、島根県教育委員会

北浦弘人編　1986『上福万遺跡Ⅱ』、鳥取県教育文化財団

清野謙次　1918「備中国浅口郡大島村津雲貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告第五冊』、京都帝国大学

清野謙次　1946『日本民族生成論』、日本評論社

清野謙次　1969『日本貝塚の研究』、岩波書店

倉敷考古館編　1971『里木貝塚』倉敷考古館研究集報第７号、倉敷考古館

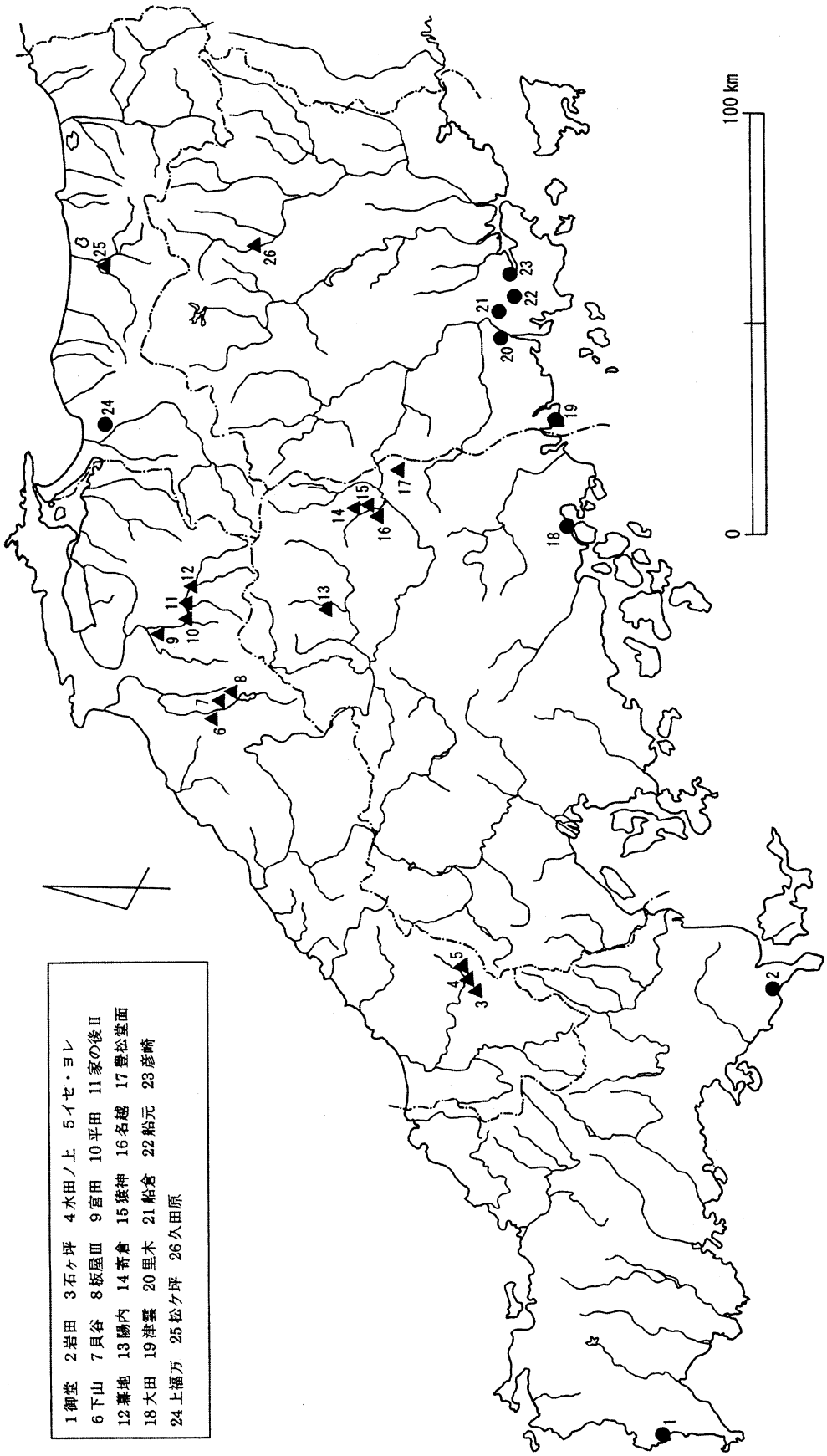
近藤義郎編　1995『南方前池遺跡』、山陽町教育委員会

酒詰仲男　1951「岡山県児島郡彦崎貝塚」『日本考古学年報』1、日本考古学協会

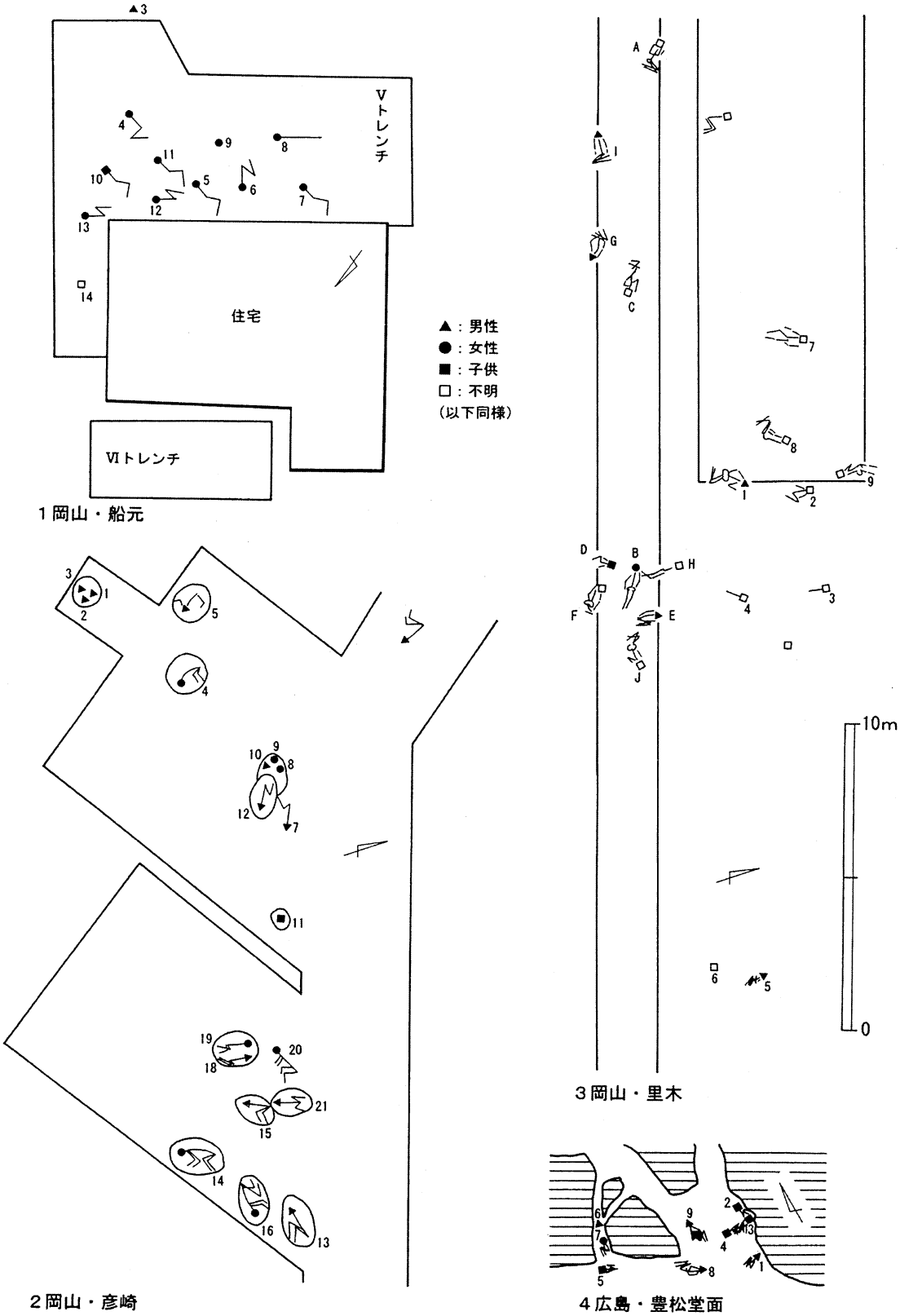
佐々木謙・小林行雄　1937「出雲国森山村崎ケ鼻洞窟及び権現山洞窟遺蹟」『考古学』第８巻10号
潮見　浩・藤田　等　1955「山口県熊毛郡平生町岩田遺跡の調査」『私たちの考古学』第６号
潮見　浩編　1971『広島県文化財調査報告第９集』、広島県教育委員会
潮見　浩・藤田　等・川越哲志　1976「帝釈観音堂洞窟遺跡の調査」『帝釈峡遺跡群』、亜紀書房
瀬川拓郎　1980「環状土籬の成立と解体」『考古学研究』第27巻第３号
田嶋正憲編　2006『彦崎貝塚』岡山市教育委員会
田中良之　1993「古代社会の親族関係」『原日本人－弥生人と縄文人のナゾ－』、朝日新聞社
戸沢充則・堀部昭夫　1976「帝釈寄倉岩陰遺跡の調査」『帝釈峡遺跡群』、亜紀書房
中越利夫　2000「岩田遺跡」『山口県史－資料編考古１－』、山口県
中村　大　1998「亀ヶ岡文化における葬制の基礎的研究（１）－東北北部の土壙墓について－」『國學院大學考古学資料館紀要』第14輯
長岡充展編　1985『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第１遺跡・石州府古墳群』鳥取県教育文化財団
春成秀爾　2002『縄文社会論究』、塙書房
深田　浩編　2002『下山遺跡（２）』、島根県教育委員会
間壁葭子　1987「考古学から見た女性の仕事と文化」『女性の力』日本の古代第12巻、中央公論社
松村博文　2000「瀬戸内、東海および関東地方出土の縄文人の歯牙計測値における時期間、遺跡間および個体間変異」『国立科学博物館専報』第32集
水島稔夫編　1991『御堂遺跡』、下関市教育委員会
南川雅男　1995「炭素・窒素同位体に基づく古代人の食生態の復元」『新しい研究法は考古学に何をもたらしたか』（改訂版）、クバプロ
森下哲哉　1996「第二章　縄文時代」『新編倉吉市史』第１巻、倉吉市
森田　茂・服部恒明・河野　徹　1973「日本人胎児の長骨長による頭殿長の推定」『東京慈恵医科大学雑誌』第88号
山田康弘　1996「縄文時代の子供の埋葬」『日本考古学』第４号
山田康弘　1998「交流と墓制（後晩期を中心に）」『本州西部地域における文化交流の諸問題』第９回中四国縄文研究会資料
山田康弘　1999a「縄文人骨の埋葬属性と土壙長」『筑波大学先史学・考古学研究』第10号
山田康弘　1999b「縄文から弥生へ－動植物の管理と食糧生産－」『食糧生産社会の考古学』現代の考古学第３巻、朝倉書店
山田康弘　2000「山陰地方における列状配置墓域の展開」『島根考古学会誌』第17集
山田康弘　2001a「山陰地方における縄文時代遺跡研究の展望」『島根考古学会誌』第18集
山田康弘　2001b「縄文人の埋葬姿勢（上）（下）」『古代文化』第53巻第11・12号
山田康弘　2001c「中国地方の土器埋設遺構」『島根考古学会誌』第18集
山田康弘　2001d「縄文人骨の形質と埋葬属性の関係－頭蓋形態小変異と埋葬位置、抜歯型式について－」『日本考古学協会第67回総会研究発表要旨』
山田康弘　2001e「東北アジアの石製装身具集成－中国」甲元眞之編『環東中国海沿岸地域の先史文化　第４編』
山田康弘　2001f「縄文時代の人骨頭部の取り扱いについて」『祭祀考古』第20号

山田康弘　2002a「中国地方の縄文時代集落」『島根考古学会誌』第19集
山田康弘　2002b『人骨出土例の検討による縄文時代墓制の基礎的研究』平成12・13年度科学研究費補助金（奨励研究A）研究成果報告書
山田康弘　2003「頭位方向は社会組織を表すのか」『立命館大学考古学論集」』
山田康弘　2004a「縄文時代の装身原理－出土人骨にみられる骨病変等と装身具の対応関係を中心に－」『古代』第115号
山田康弘　2004b「島根県における縄文時代石器の様相－石器組成を中心に－」『島根考古学会誌』第20・21集
山田康弘　2004c「墓制からみた山地域と沿岸域」『日本考古学協会2004年度広島大会研究発表資料集』、日本考古学協会
山本　清　1967「美保関町サルガ鼻・権現山洞窟遺跡について」『島根県文化財調査報告書』第三集、島根県教育委員会
渡辺友千代編　1990『石ヶ坪遺跡』、匹見町教育委員会
渡辺友千代編　1991『水田ノ上A遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』、匹見町教育委員会
渡辺友千代編　1993『ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡』、匹見町教育委員会
渡辺　誠　1973「埋葬の変遷」江坂輝彌編『縄文土器と貝塚』古代史発掘第２巻、講談社

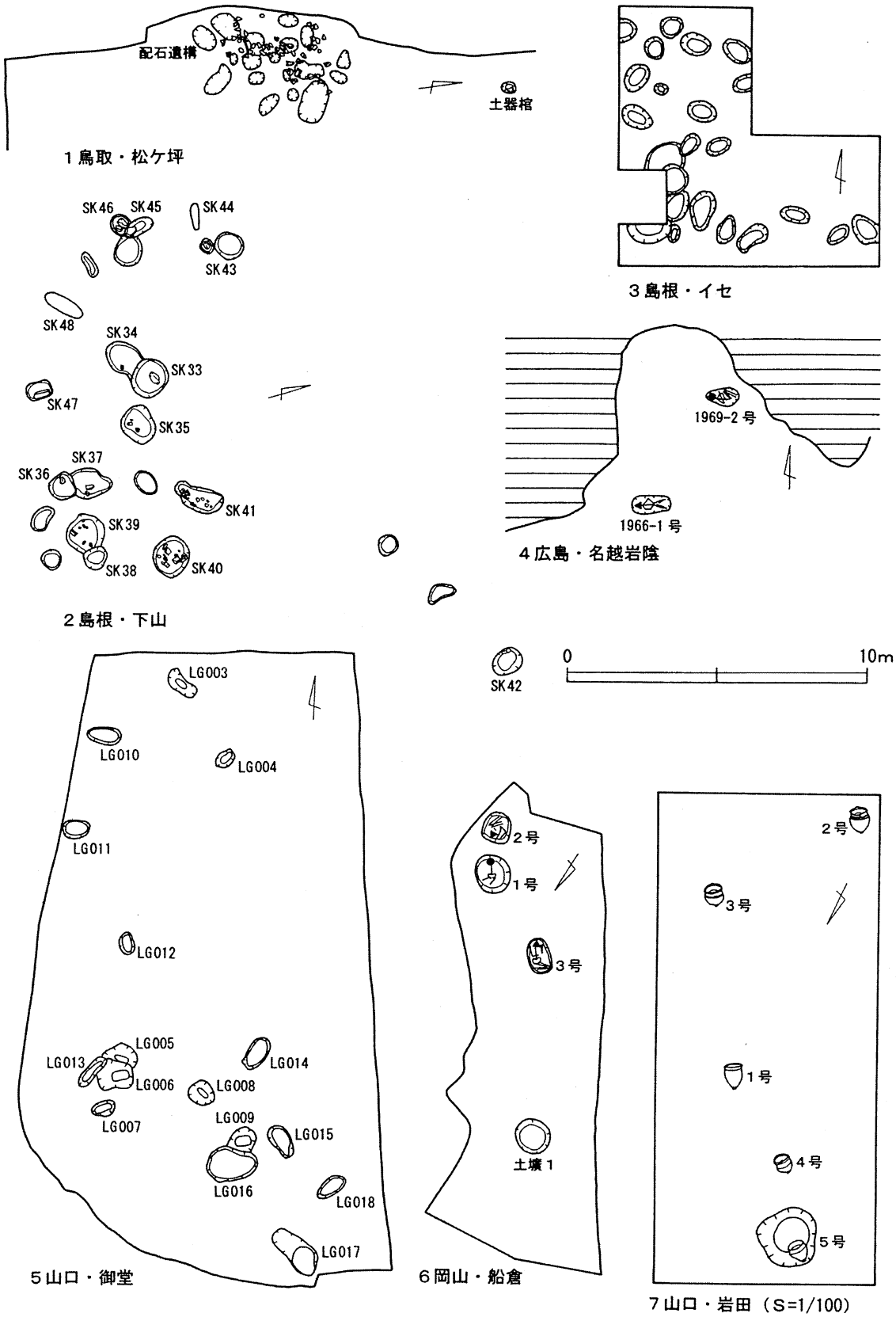
（各図の出典は上記文献より。一部改変。）



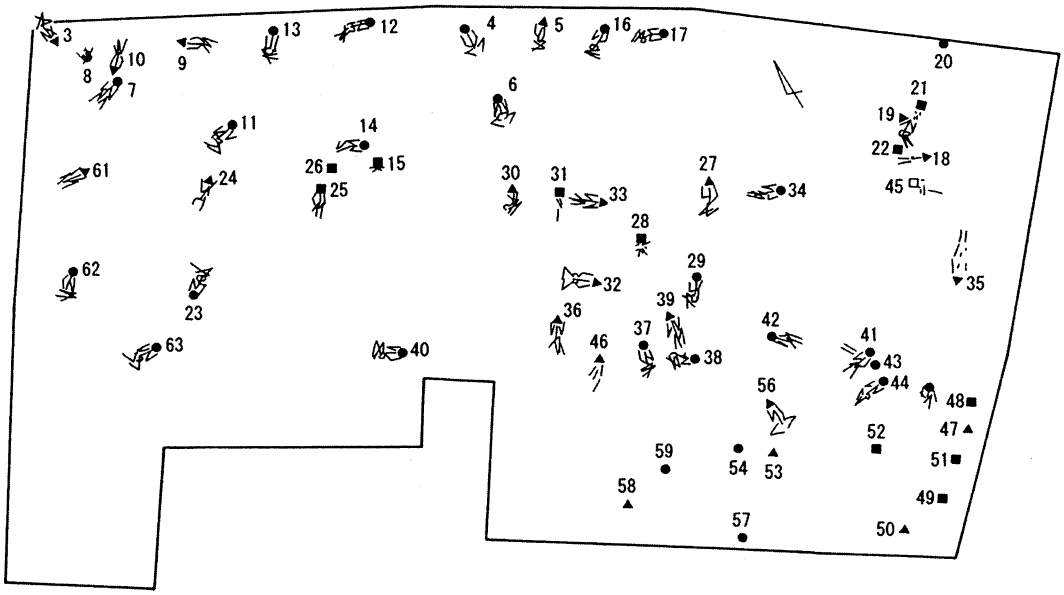
第１図　中国地方における主な縄文墓地遺跡
（●：沿岸域の遺跡、▲：山地域の遺跡）



第２図　中国地方の縄文墓地（１）

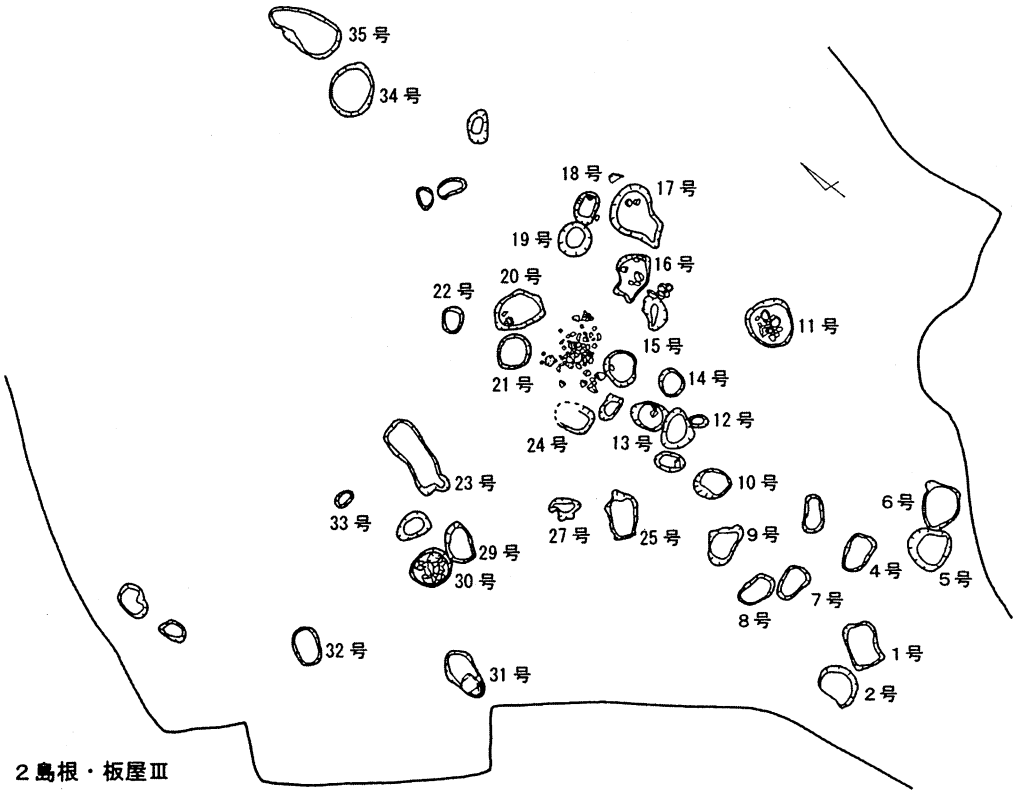


第３図　中国地方の縄文墓地（２）



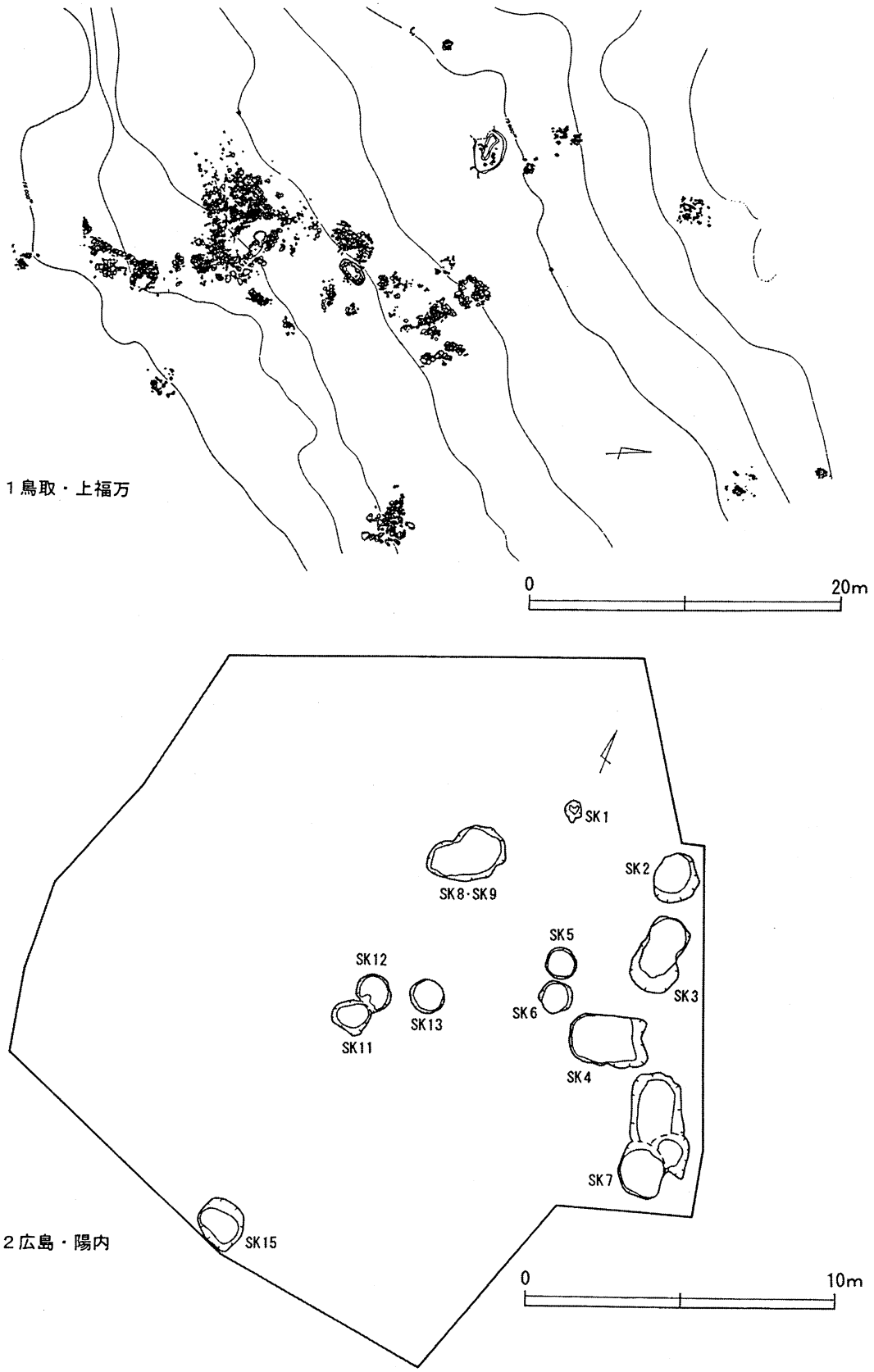
１岡山・津雲

0　10m

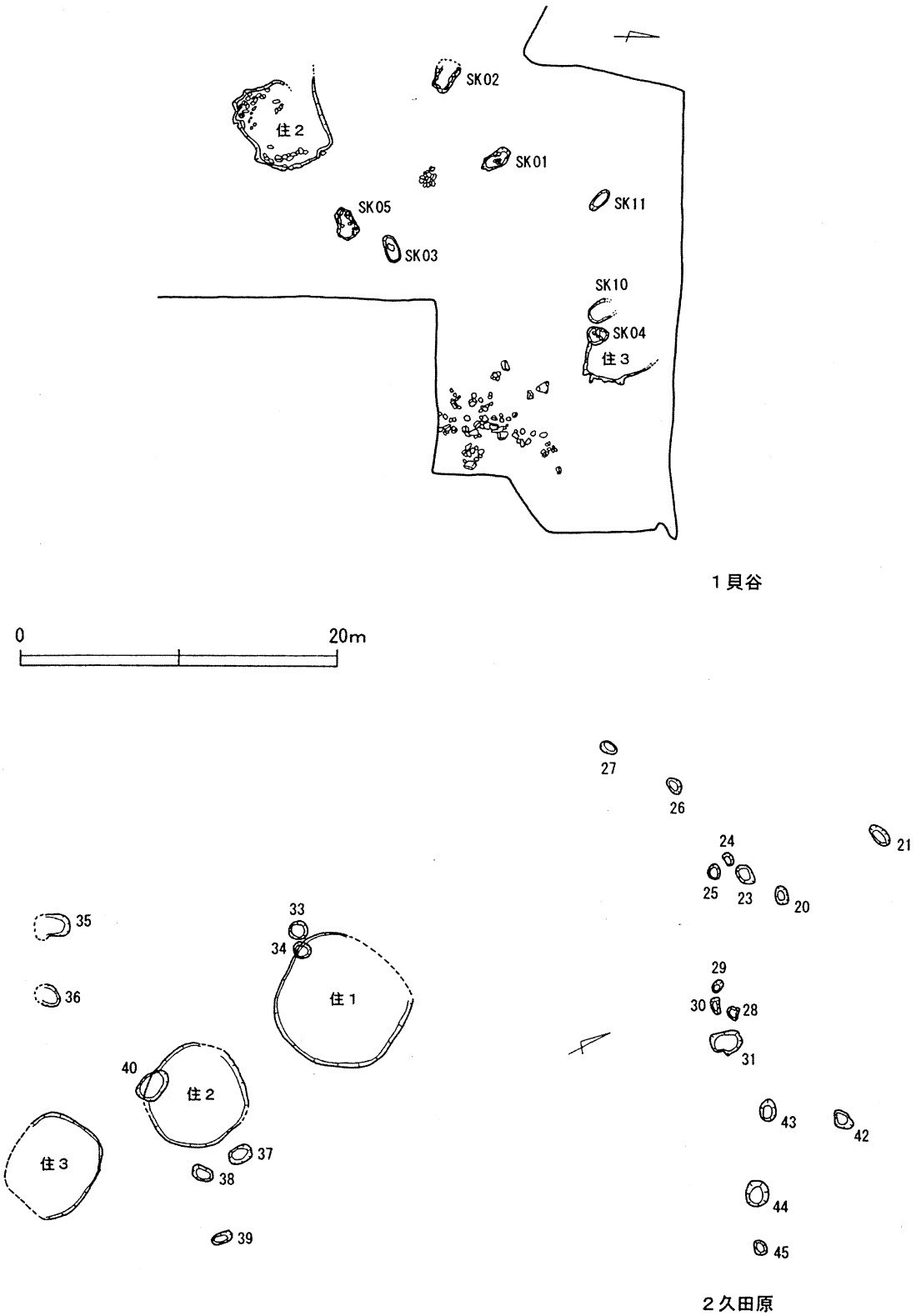


２島根・板屋Ⅲ

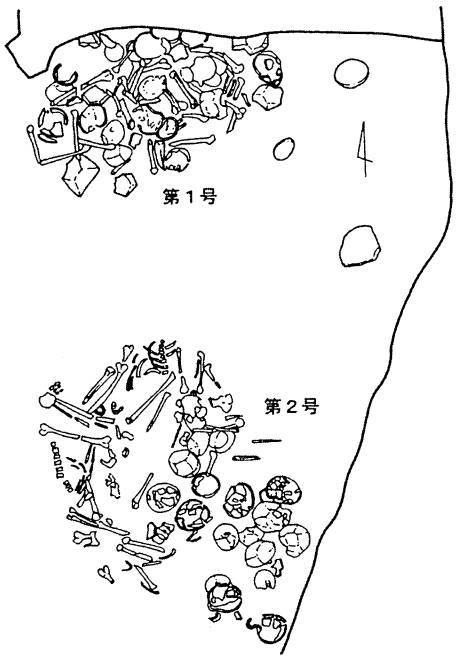
第４図　中国地方の縄文墓地（３）



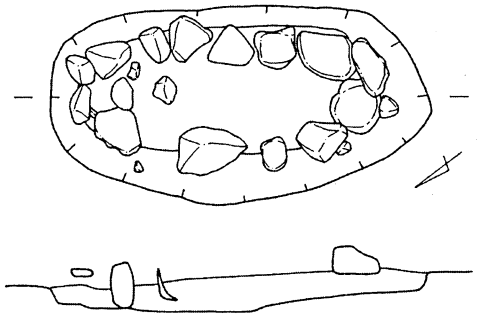
第５図　中国地方の縄文墓地（４）



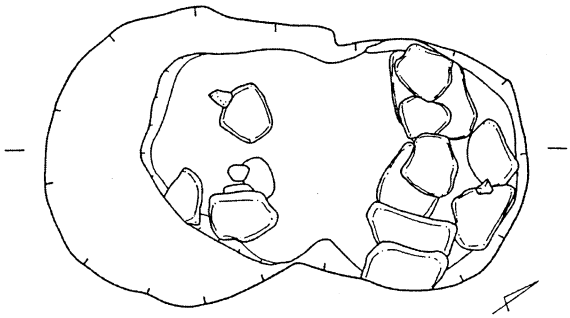
第６図　中国地方の縄文墓地（５）

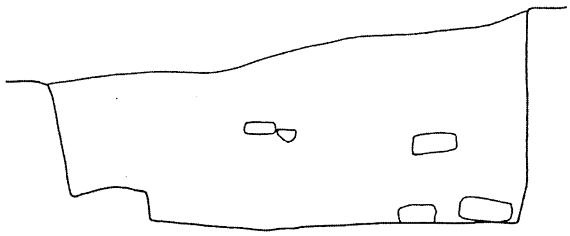


１広島・寄倉岩陰第１・２号埋葬人骨群

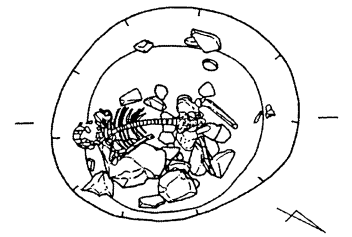


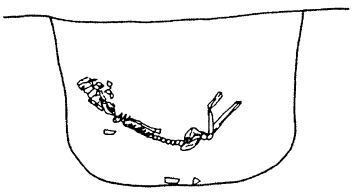
２鳥取・上福万集石 32



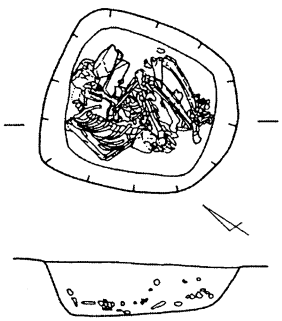


３広島・陽内 SK3

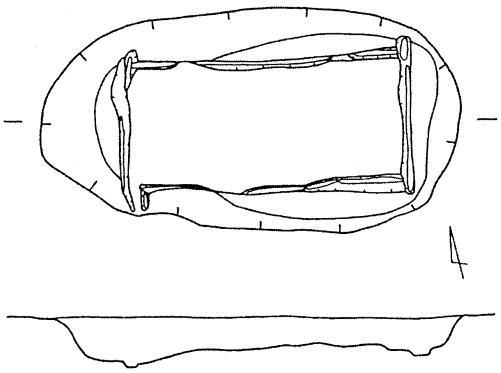




４岡山・船倉１号土坑墓



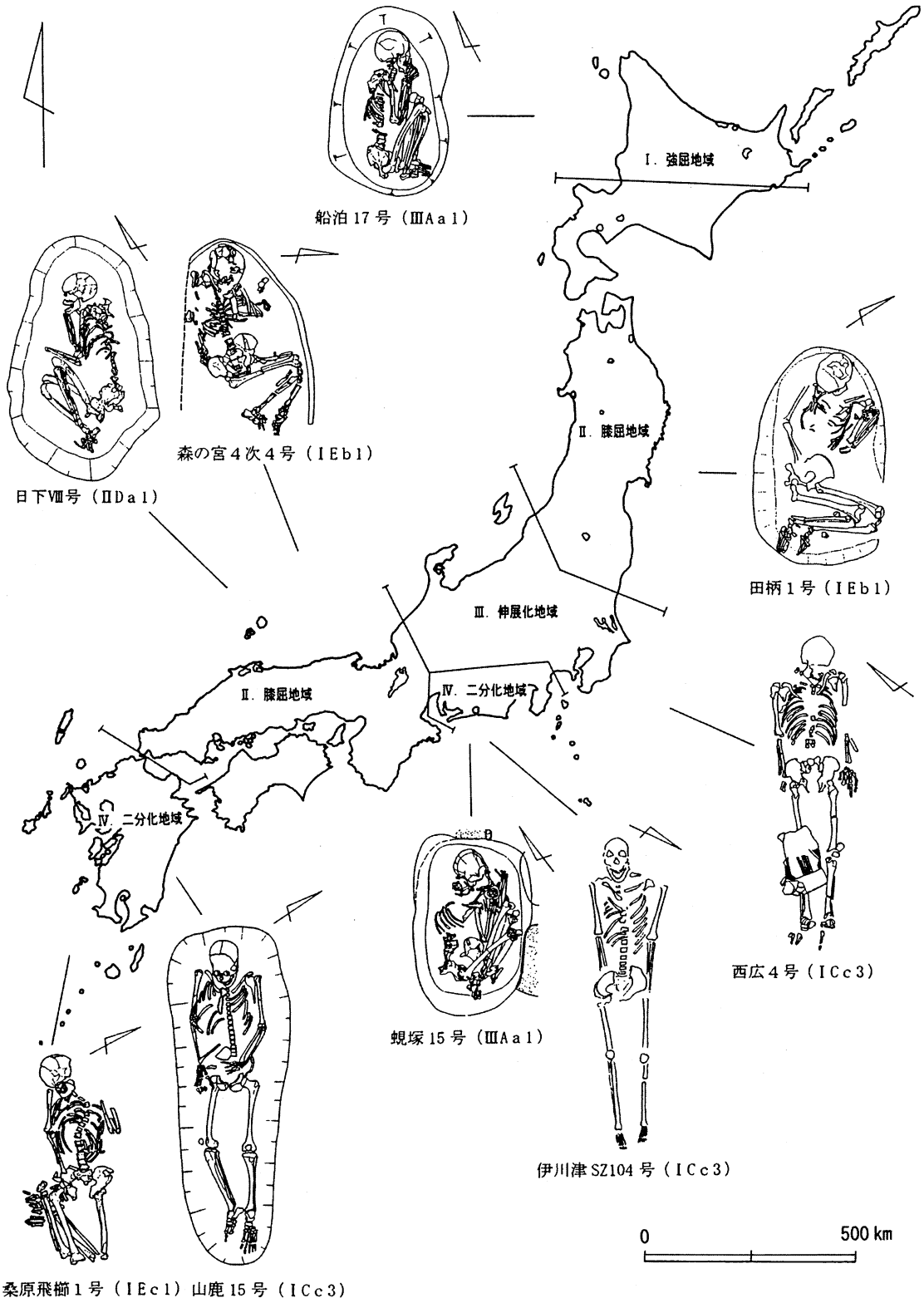
５岡山・船倉２号土坑墓



６山口・御堂 LG010

0　2m

第７図　各遺跡検出の埋葬例



第８図　埋葬姿勢の地域性

附章２　彦崎貝塚における動物資源の利用

－彦崎ＺＩ式期からＺⅡ式期の様相－

石丸恵利子（京都大学大学院　人間・環境学研究科　博士後期課程）
富岡直人（岡山理科大学　総合情報学部）

１．はじめに

彦崎貝塚は、岡山県岡山市灘崎町に所在し、多くの縄文貝塚が分布する旧児島湾に位置する縄文時代早期から晩期の貝塚遺跡である。これまでに2003年から2004年度に実施された範囲確認調査のトレンチ14とトレンチ９出土の動物遺存体の概要についての報告がなされている（石丸・富岡2006）。本稿では、同発掘調査におけるそれ以外のトレンチでの出土様相を概観するとともに、彦崎貝塚における縄文時代前期の動物資源の利用について彦崎ＺＩ式期からＺⅡ式期を中心に考察する。

２．彦崎貝塚の出土動物遺存体

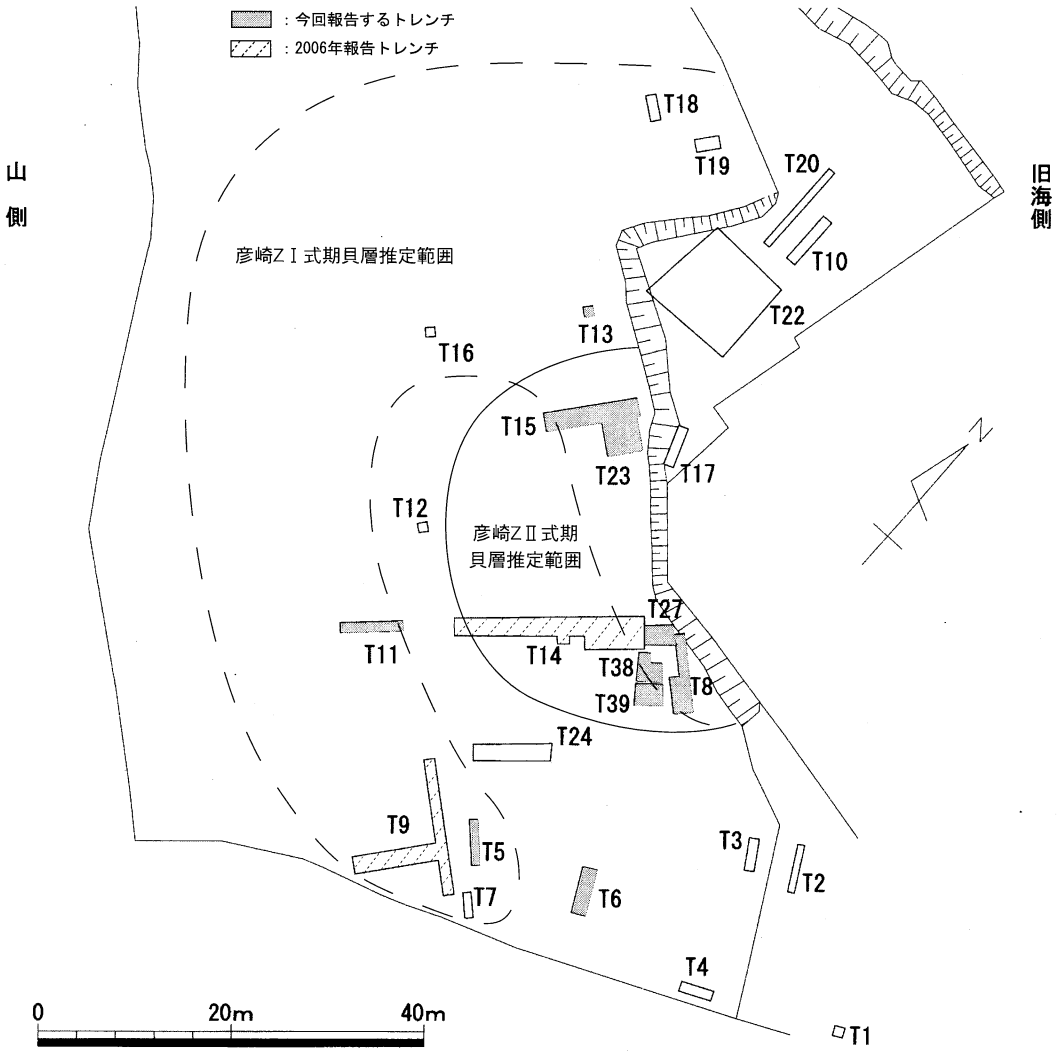
彦崎貝塚では、南北約150m、東西約400mの調査範囲内に39地点のトレンチを設定し、トレンチ14を中心とした中区の縄文前期段階から晩期に形成された貝層で動物遺存体が確認されている[(1)]。今回報告を行うのは、トレンチ５、６、８、11、13、15、23、27、38、39（第１図）出土の貝類２綱10科17種類（第１表）の総数181点、脊椎動物門５綱14科17種類（第２表）の総数698点であり[(2)]、以下各トレンチの出土動物遺存体の概要について記載する。

トレンチ５

トレンチ５は、台地の東端を確認するために設定されたもので、トレンチ９の北側で一段下がった場所に位置する。彦崎ＺＩ式の貝層からは多量の炭化物（種子など）も確認されているが、動物遺存体も比較的多く採集されている。

ＺＩ式古段階の粘質土からは、アカエイと考えられるエイ類の尾棘、ハモ属の歯骨と主鰓蓋骨、ボラ科の主鰓蓋骨、マダイの前頭骨、クロダイ属の舌顎骨、スズキの前鰓蓋骨、主鰓蓋骨、擬鎖骨など多くの魚種と部位を確認することができた。哺乳類としては、イノシシの下顎骨、肩甲骨、上腕骨、中足骨など、またニホンジカの中手骨、橈骨、踵骨、距骨などが確認できた。イノシシの肩甲骨には、肩甲頸の後縁に鋭く長軸に対して垂直方向に刻まれた複数の切創（D1aタイプ）が確認でき（写真図版９ No.１）、ニホンジカの距骨には、関節面の内側後方面に鋭くやや深く刻まれた複数の切創（D1aタイプ）が確認できた（写真図版９　No.２）[(3)]。また、イノシシ上腕骨の骨幹部外側面に打ち割った際に生じる打割痕が確認できた。

ＺＩ式新段階の純貝層や混土貝層からは、魚類ではエイ類の尾棘、ナマズの胸鰭棘、ハモ属の頭骨、コチ属の舌顎骨、クロダイ属の歯骨や前上顎骨、マダイの前頭骨などが出土し、哺乳類は、ノウサギの尺骨、寛骨、脛骨、大腿骨、踵骨など、タヌキあるいはアナグマと考えられる小型哺乳類の橈骨、イノシシの頭蓋骨、下顎骨、肩甲骨、橈骨、腓骨など、ニホンジカの下顎骨、肩甲骨、上腕骨、脛骨、中足骨などが確認できた[(4)]。ノウサギの四肢骨は端部が未化骨のものが多く、同一個体のものと考え



第１図　彦崎貝塚トレンチ配置図（Ｔはトレンチを示す）　（田嶋2006）より作成

られる幼獣を含めて複数個体を確認することができた。マダイの前頭骨の上方に、何かを叩きつけたような痕跡（D2bタイプ）が確認でき（写真図版９　No.３）、イノシシの距骨には、踵骨と接する面の下方に浅い切創（D1aタイプ）が確認できた。また、ニホンジカの下顎骨には、関節突起から下顎角にかけての後方外側面にやや鋭く幅広で深めの横方向の切創（D1aタイプ）が観察でき（写真図版９ No.４）、脛骨には遠位部の内外両面に鋭く深め横方向の切創（D1aタイプ）が複数確認できた（写真図版10　No.５）。イノシシ橈骨の骨幹部破片や腓骨の端部に、イヌなどに咬まれたような痕跡が確認でき、イノシシ脛骨の遠位部内側面に打ち割られた打割痕が、またニホンジカ中足骨の近位端近くの前面もしくは後面が打ち割られた痕跡が確認できた（写真図版10　No.６）。火を受けたと思われる破片も多く認められ、イノシシの下顎骨、ニホンジカの下顎骨や肩甲骨には一部黒色あるいは灰色を呈する部分が認められた。

貝類は、彦崎ＺＩ式古段階では、アカニシ、マガキ、ヘナタリ、イボウミニナなどが、また彦崎ＺＩ式新段階では、アカニシ、イシダタミ、イボウミニナ、イボニシ、ウネナシトマヤガイ、カリガネ

第１表　彦崎貝塚出土貝類種名一覧

腹足綱　Gastropoda
古腹足目　Vetigastropoda
ニシキウズガイ科　Trochidae
イシダタミ　*Monodonta labio* form *confusa*
盤足目　Discopoda
ウミニナ科　Batillariidae
ウミニナ　*Batillaria multiformis*
ホソウミニナ　*Batillaria cumingii*
イボウミニナ　*Batillaria zomalis*
フトヘナタリ科　Patamididae
クロヘナタリ　*Cerithidea largillierti*
ヘナタリ　*Cerithidea cingulata*
カワアイ　*Cerithidea djadjariensis*
新腹足目　Neogastropoda
アッキガイ科　Muricidae
イボニシ　*Thais clavigera*
アカニシ　*Rapana venosa*

＊学名表記は、（奥谷2000）に従った。

二枚貝綱　Bivalvia
フネガイ目　Arcoida
フネガイ科　Arcidae
カリガネエガイ　*Barbatia virescens*
ハイガイ　*Tegillarca granosa*
カキ目　Ostreoida
ナミマガシワ科　Anomiidae
ナミマガシワ　*Anomia chinensis*
イタボガキ科　Ostreidae
マガキ　*Crassostrea gigas*
イタボガキ科の一種　Ostreidae gen. et sp. indet.
マルスダレガイ目　Veneroida
ニッコウガイ科　Tellinidae
イチョウシラトリ　*Merisca capsoides*
フナガタガイ科　Trapezium
ウネナシトマヤガイ　*Trapezium liratum*
マルスダレガイ科　Veneridae
ハマグリ　*Meretrix lusoria*
オキシジミ　*Cyclina sinensis*

エガイ、ナミマガシワ、ハイガイ、マガキなど多くの種類を確認した。

トレンチ５は、トレンチ９の北側に近接し、ともに彦崎ＺＩ式期に形成された包含層であり、同時期の平面的な出土状況をとらえるために、イノシシとニホンジカの出土部位を両トレンチで比較した。彦崎ＺＩ式古段階では、いずれのトレンチにおいてもイノシシは頭蓋部分と比較して、上腕骨、橈骨、脛骨などの主要四肢骨は少ない傾向がうかがえる（第２図）。ニホンジカにおいては、出土する部位の種類も少なく、両トレンチ合わせても主要四肢骨は少ない傾向が認められる（第３図）。彦崎ＺＩ式新段階になると、全体の出土量も若干増加するが、部位も増加する傾向が認められる（第４・５図）。限られた調査範囲であるにもかかわらず、同一トレンチ内あるいは近接するトレンチと合わせてみた場合にほぼ全身部位を確認できるということは、解体調理後に投棄する際は一定の範囲内にまとめて捨てられた可能性が指摘できる。出土部位がまとまっているのはイノシシで顕著であり、ニホンジカは破片数と個体数ともに少ない上に、出土する部位もそろっていない様相がうかがえる。

トレンチ６

トレンチ６は、トレンチ５の貝層が西側にどこまで伸びるのかを調べるために設定されたものであ

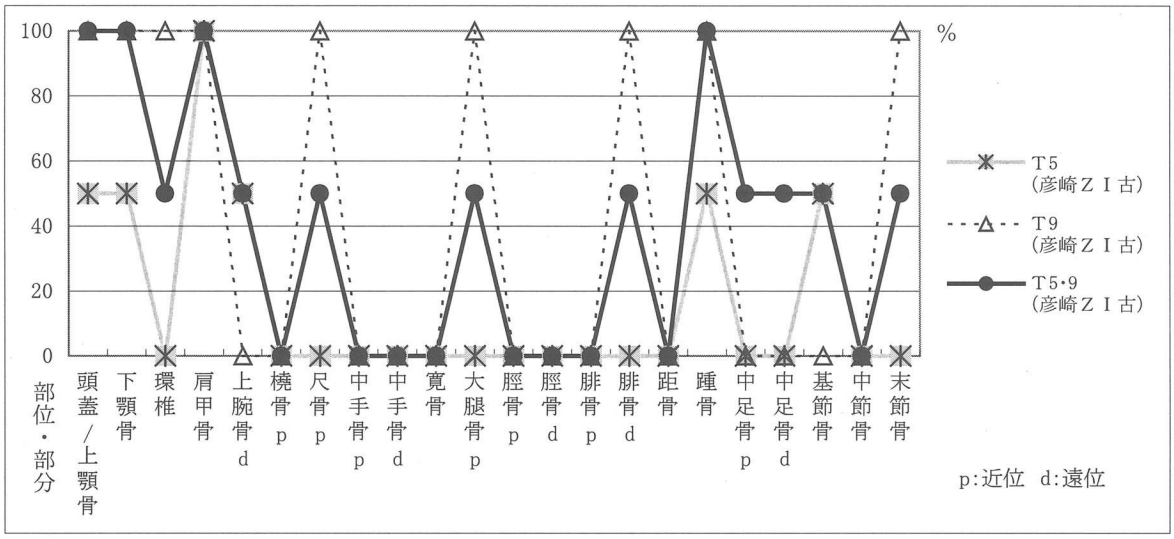
第２表　彦崎貝塚出土動物骨種名一覧

節足動物門　ARTHROPODA
甲殻綱　Crustacea
十脚目の一種　Decapoda fam. indet.
脊椎動物門　VERTEBRATA
軟骨魚綱　Chondrichtyes
エイ目　Rajiformes
トビエイ上科の一種　Myliobatidoidea fam. indet.
硬骨魚綱　Osteichthyes
ウナギ目　Anguilliformes
ハモ科　Muraenesocidae
ハモ属の一種　*Muraenesox* sp.
ナマズ目　Siluriformes
ナマズ科　Siluridae
ナマズ　*Silurus asotus*
カサゴ目　Scorpaeniformes
コチ科　Platycephalidae
コチ属の一種　*Platycephalus* sp.
スズキ目　Perciformes
スズキ科　Percichthyidae
スズキ　*Lateolabrax japonicus*
ハタ科の一種　Serranidae gen. et sp. indet.
タイ科　Sparidae
クロダイ属の一種　*Acanthopagrus* sp.
マダイ　*Pagrus major*
タイ科の一種　Sparidae gen. et sp. indet.
ボラ科の一種　Mugilidae gen. et sp. indet.
フグ目　Tetraodontiformes
ギマ科　Triacanthidae
ギマ　*Triacanthus biaculeatus*
鳥綱　Aves
キジ目　Callpformes
キジ科の一種　Phasianidae gen. et sp. indet.
哺乳綱　Mammalia
ウサギ目　Lagomorpha
ウサギ科　Leporidae
ノウサギ　*Lepus brachyurus*
食肉目　Carnivora
イヌ科　Canidae
イヌ？　*Canis familiaris*?
タヌキ　*Nyctereutes procyonoides*
偶蹄目　Artiodactyla
イノシシ科　Suidae
イノシシ　*Sus scrofa*
シカ科　Cervidae
ニホンジカ　*Cervus nippon*

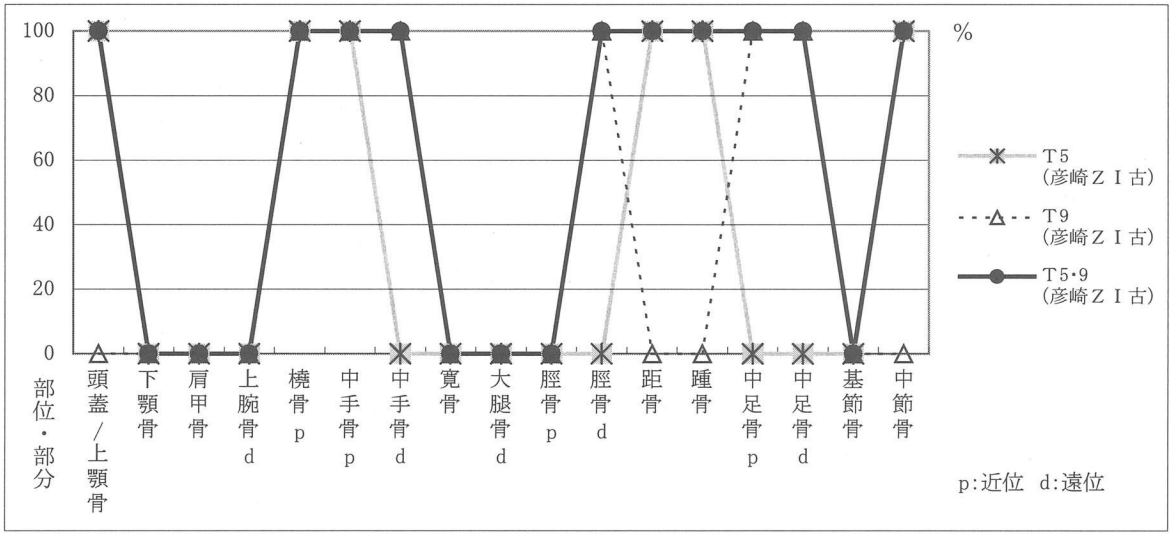
るが、７層より上層は二次堆積の状況を示しているとされる。彦崎ＫⅡ式期の混貝土層から少量の動物骨が出土しており、クロダイ属の前上顎骨、イノシシの肩甲骨と腓骨、ニホンジカの角と肩甲骨を確認することができた。貝類は、アカニシとマガキが出土している。破片のため種は不明であるが、大きさ的にはイノシシもしくはニホンジカと考えられる上腕骨の遠位端に、イヌなどの食肉目に咬まれたと考えられる痕跡がみられた。

トレンチ８

トレンチ８は、トレンチ14の西側、昭和24年の東大による調査で多くの埋葬人骨が検出された地点付近にあたり、旧調査区の場所を確認するために設定された。少量ではあるが、彦崎ＺⅡ式段階の混



第２図　イノシシの部位別出現頻度（彦崎ＺⅠ式古段階）[5]

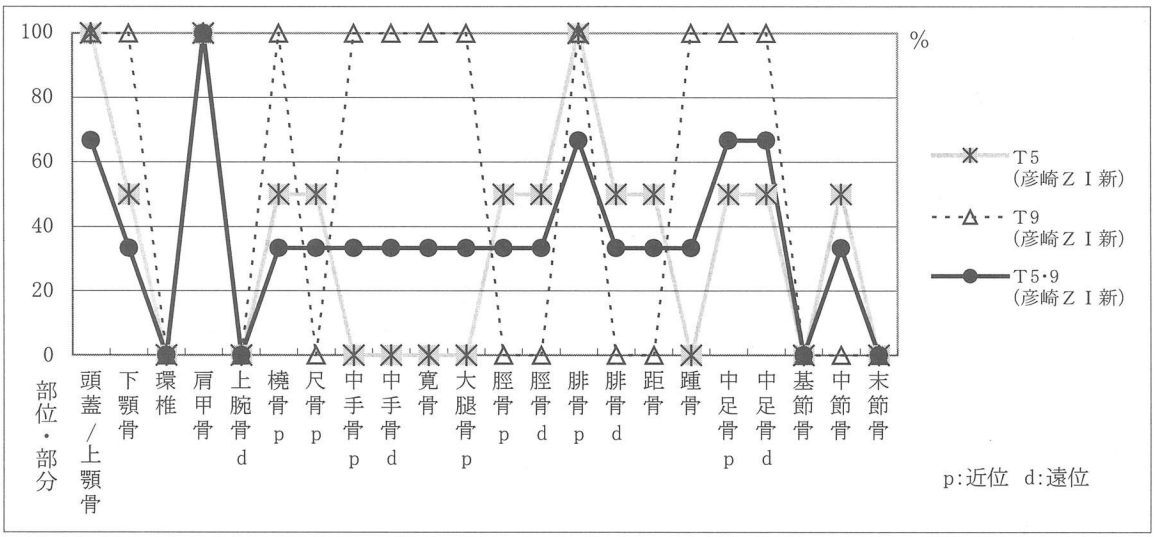


第３図　ニホンジカの部位別出現頻度（彦崎ＺⅠ式古段階）

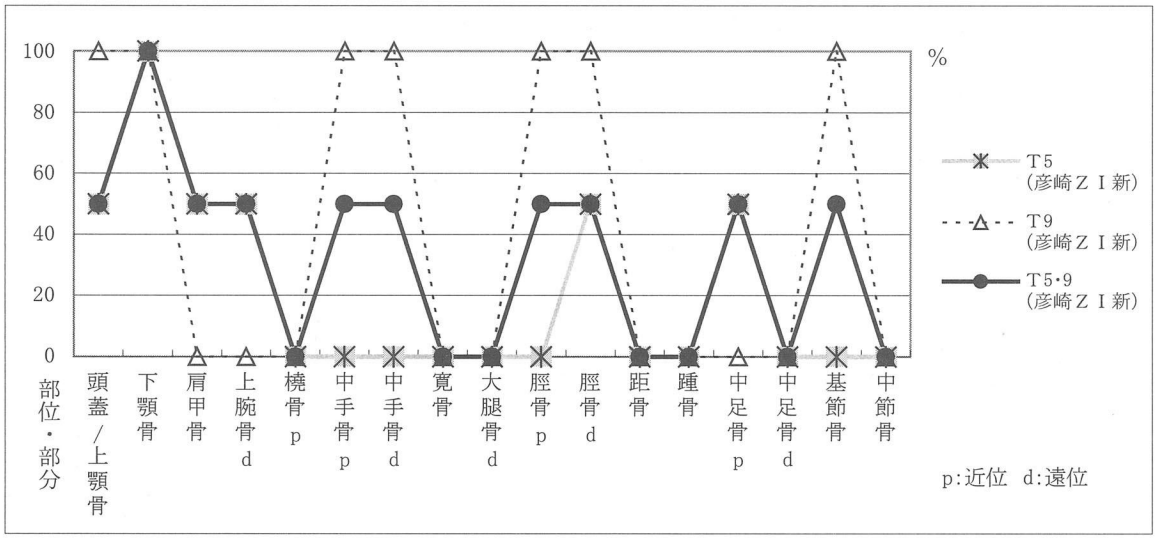
貝土層で硬骨魚綱の棘を、彦崎ＺⅠ式期の砂質土混土貝層でニホンジカの角、大きさからイヌの可能性のある中手骨などを確認した。鹿角には加工の痕跡が認められ、対称的な２ヶ所から刻みを入れた後に折り取ったような状態（Abタイプ）を確認した。

トレンチ11

トレンチ11は、トレンチ14の南西方向に現在の段丘上での南端を確認するために設定されたものである。晩期や前期の貝層も確認されているが、実際の調査範囲が狭いため動物骨の出土量も少ない。彦崎ＺⅠ式古段階の混貝土層でニホンジカの距骨、種目不明哺乳類の四肢骨の骨幹部破片を確認した。



第４図　イノシシの部位別出現頻度（彦崎ＺⅠ式新段階：Ｔ５・９）



第５図　ニホンジカの部位別出現頻度（彦崎ＺⅠ式新段階：Ｔ５・９）

トレンチ13

トレンチ13は、後述するトレンチ15およびトレンチ23で確認した貝層の西側への広がりを調べるために設定された１m四方の小さなトレンチである。貝層が西側に延びることが確認できたため、貝層の表面をわずかに掘削したのみであるが、彦崎ＺⅠ式新段階の混土貝層でキジもしくはヤマドリと考えられるキジ科の脛足根骨、種目不明哺乳類の四肢骨の骨幹部破片を確認した。

トレンチ15・トレンチ23

トレンチ15とトレンチ23は、東大による調査の西端の調査区を確認するために設定されたものであり、彦崎ＺⅠ式期の貝層では複数の炉址が確認されている。トレンチ15においては保存状態の良好な貝層が検出されていることや調査範囲も広いため、動物の骨格と貝殻は多く採集されている。

トレンチ15では、彦崎ＺＩ式新段階の混土貝層からエイ類の尾棘、ノウサギの下顎骨、イノシシの頭蓋骨、肩甲骨、橈骨、大腿骨、寛骨など、ニホンジカの踵骨が確認できた。イノシシ脛骨の近位端と中手骨の遠位端が化骨しておらず、これらは42ヶ月から30ヶ月未満と判断される（Yamazaki et al. 2005）。また、イノシシ側頭骨の下方面（腹側面）に鋭く深い幅広の複数の切創と（写真図版10 No. 7）、脛骨の近位部前方面に切り口は鈍いが垂直方向（長軸に対して）に深く刻まれた複数の切創（D1aタイプ）が確認できた。貝類は、アカニシ、ハイガイ、ハマグリ、イタボガキ科の一種などが採集されている。

トレンチ23では、彦崎ＺＩ式新段階の混土貝層から比較的大型のカニ類の可動指、魚類ではエイ類の尾棘、ハモ属の歯骨、ギマの胸鰭棘、スズキの主鰓蓋骨と主上顎骨、マダイの前頭骨などが出土しており、哺乳類ではイノシシの下顎骨、上腕骨、尺骨、脛骨、踵骨などほぼ全身の部位が確認でき、ニホンジカは角、下顎骨、中手骨などが確認できた。イノシシの四肢骨には骨端が化骨していないものが多く、42ヶ月から30ヶ月以下の個体が多い傾向が認められる。また、肋骨の外側面と尺骨の橈骨との関節部分に複数の切創（D1aタイプ）（写真図版10 No. 8）、下顎骨の筋突起立ち上がり部分に前方から外側面に刻まれた複数の切創（D1aタイプ）が確認できた（写真図版10 No. 9）。さらに、踵骨の先端部や中手骨の近位側にイヌなどに咬まれたような痕跡が認められ、肩甲骨の後縁の破片は火を受けたため黒色を呈する。また、脛骨の外側面が数ヶ所打ち割られたものも確認することができた。ニホンジカでは距骨の内側面下方のやや前方に、斜め方向からやや深めに刻まれた痕跡が認められた。また多くの鹿角破片に端部を削り出すあるいは切断のためか先細に加工した痕跡（Abタイプ）も確認できた（写真図版10 No.10）。

貝類は、アカニシ、ハイガイ、マガキ、イボニシ、ウミニナ、カワアイ、イシダタミなど多くの種類が出土している。

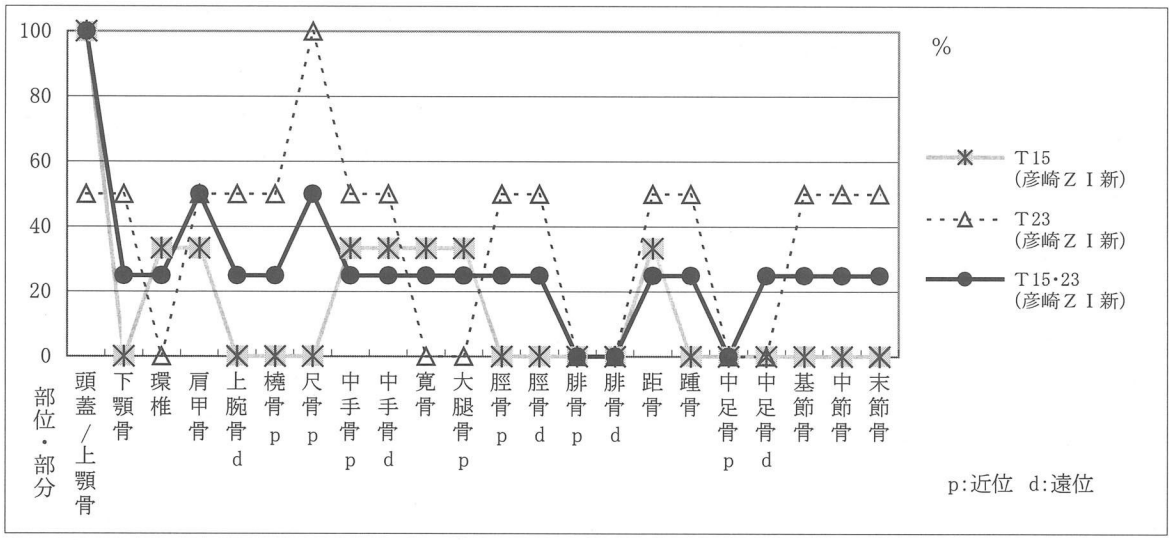
トレンチ５と９同様に、トレンチ15と23の隣接する両トレンチでの彦崎ＺＩ式新段階のイノシシとニホンジカの出土部位の関係をみてみると、イノシシはトレンチごとに出土部位がやや異なる状況がうかがえるが、両トレンチを合わせるとほぼ全身の部位を確認することができる（第６図）。一方、ニホンジカは、両トレンチを合わせても一部の部位に限られており、イノシシとは全体の出土量、出土部位ともに異なる特徴がうかがえる（第７図）。

トレンチ27

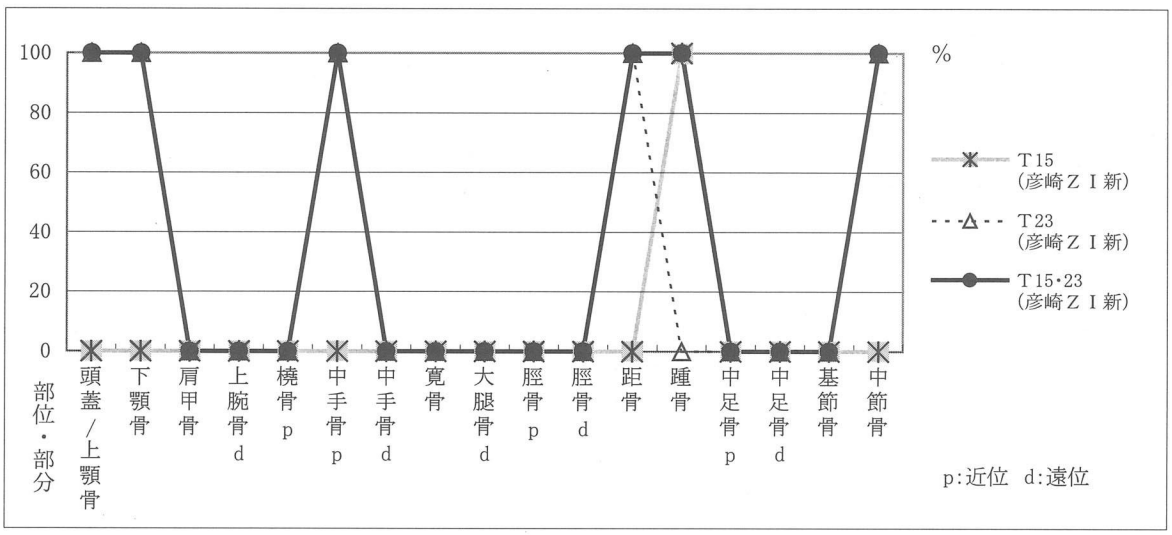
トレンチ27は、トレンチ14の北側の状態を確認するために設定されたトレンチである。彦崎ＺＩ式期の柱穴状遺構群が検出されている。彦崎ＺＩ式期の混土貝層で、ニホンジカの鹿角や不明哺乳類の椎骨を、また彦崎ＺＩ式期の混貝土層で、イノシシの頭蓋骨、下顎骨、肩甲骨、中手骨や、ニホンジカの鹿角、橈骨、尺骨、寛骨などを確認した。ニホンジカの尺骨の近位端にはイヌなどに咬まれたような痕跡が認められ、イノシシもしくはニホンジカの脛骨と思われる近位部の破片には、人為的に打ち割られたであろう打割痕が認められた。貝類ではアカニシが採集されている。

トレンチ38・トレンチ39

トレンチ38および39は、トレンチ８同様に東大調査区の掘り方を確定するために、トレンチ27の東に設定されたものである。トレンチ38では、彦崎ＺＩ式期の混貝土層から魚類では種不明の棘や肋骨



第６図　イノシシの部位別出現頻度（彦崎ＺⅠ式新段階：Ｔ15・23）



第７図　ニホンジカの部位別出現頻度（彦崎ＺⅠ式新段階：Ｔ15・23）

あるいは鰓条骨の破片、哺乳類ではイノシシの下顎骨、下顎遊離歯、肩甲骨、腓骨、寛骨、踵骨など多くの部位を確認し、ニホンジカの脛骨と中足骨も確認することができた。イノシシの下顎骨と橈骨には解体痕が認められる。下顎骨は筋突起立ち上がり部の外側面に横方向の複数の浅い切創を確認することができ（D1aタイプ）、橈骨は近位端の前方面に斜めで幅広の浅い切創（D2aタイプ）を確認することができた（写真図版10　No.11）。同一の橈骨には近位端近くの前方面が打ち割られた痕跡も確認できた（写真図版10　No.12）。また、ニホンジカの中足骨は近位端近くの外側面に打ち割られた痕跡が確認できた。貝類はフネガイ科の一種と考えられる殻頂部破片が採集されている。

トレンチ39では、彦崎ＺⅠ式期の混土貝層からタヌキの尺骨、イノシシの基節骨、ニホンジカの下顎骨破片などが出土しており、イノシシの基節骨は、近位端と遠位端ともに骨端部が化骨済であり、成獣と考えられる。また、彦崎ＺⅡ式期の混貝土層からはイノシシの上腕骨と中足骨、ニホンジカの

角、寛骨、脛骨などが出土している。ニホンジカの中節骨も近位端と遠位端ともに骨端部が化骨済であり、成獣と判断できる。さらに、中・後期の混貝土層からは、イノシシの距骨と目・種不明哺乳類の肋骨や四肢骨の骨幹部を確認することができた。ニホンジカ脛骨の骨幹部後方面の破片には、外側面を打ち割られた痕跡が確認できた。貝類は、破片のため種は明らかでないが、腹足綱の一種が数点採集されている。

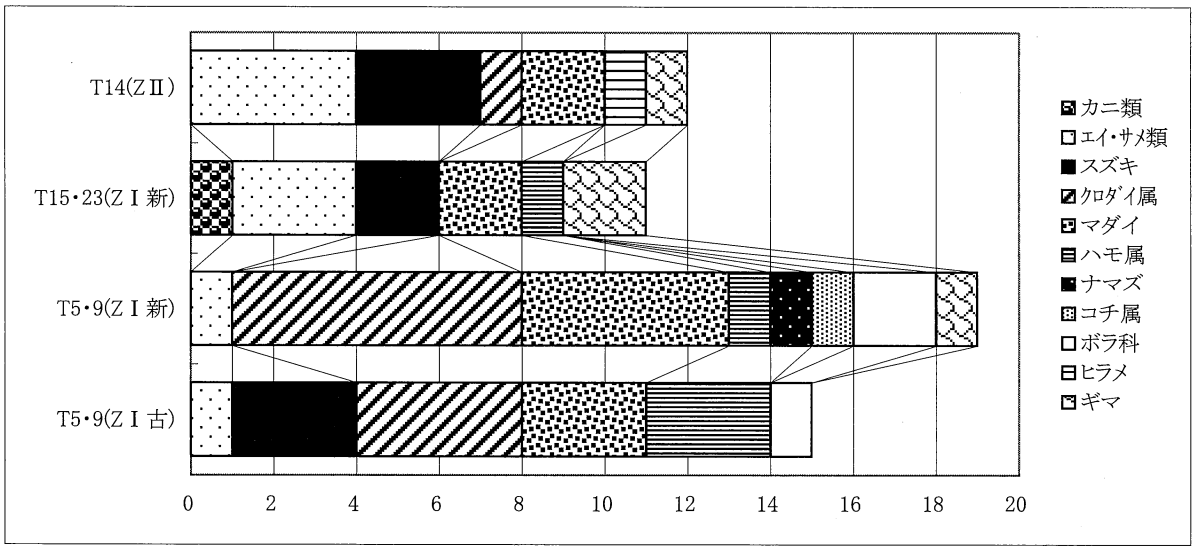
３．考　察　－彦崎ＺＩ式期からＺⅡ式期の様相－

これまでの発掘調査によって、ＺＩ式期にはトレンチ５、９、15、23などを中心に孤を描くように貝層が広がり、ＺⅡ式期になるとトレンチ８、14、27、38、39を中心に貝層が形成されたことが明らかになっている。今回、トレンチ５・15・23で彦崎ＺＩ式期の出土動物遺存体の資料が増加したことから、トレンチ９と14の出土資料とあわせて彦崎ＺＩ式期から彦崎ＺⅡ式期への変化について若干の考察を試みた。

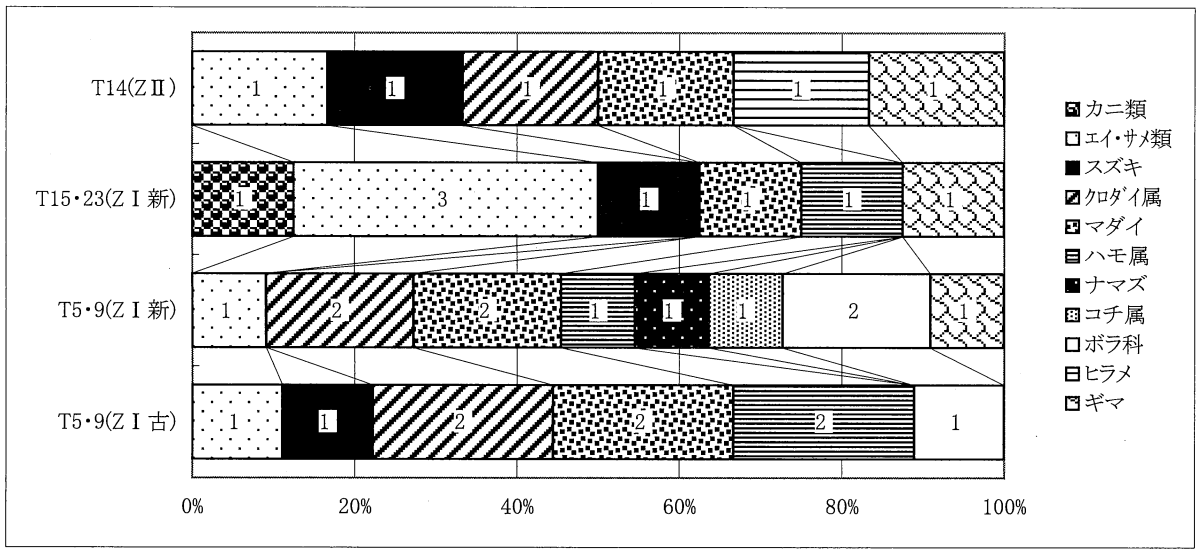
魚類では、ＺＩ式古段階から新段階にかけて、新たにギマ、ナマズ、コチ属やカニ類が加わり、出土量、出土魚種にやや増加が認められる（第８図）。この時期には漁労具も多く出土しており（田嶋2006）、遺跡利用の定着化あるいは活発な漁労活動の表れととらえることができる。その後ＺⅡ式期になると、魚類の出土量は減少するが、エイ・サメ類、スズキ、クロダイ属、マダイなどの基本的な組成には変化は認められない（第９図）。エイ・サメ類の椎骨を利用した垂飾品は、ＺＩ式段階は１点のみであるが、ＺⅡ式段階では６点報告されている（田嶋2006）。

哺乳類においても、ＺＩ式古段階から新段階にかけてイノシシを主体とし、それにニホンジカが次ぐ特徴は変わらないが、全体の出土量にやや増加傾向がうかがわれる（第10図）。特にノウサギが多く出土している点が挙げられ、成獣に加えて寛骨の腸骨と坐骨が癒合していないものや四肢骨の骨端部が化骨していない未成獣が複数出土している点が注目される。４月から８月に産まれて数ヶ月経過したものであるならば、夏から秋に捕獲された可能性がある[6]。ＺⅡ式期も出土する個体数は著しく減少せず、種類も豊富になり、狩猟活動は盛んであった状況がうかがえる（第11図）。また、個体数はさほど変わっていないのに、部位はイノシシ、ニホンジカともに主要部位がほぼそろって出土している（第12・13図）。

以上のことから、限られた調査範囲内の資料ではあるが、トレンチが全体の状況を反映しているという仮説の上で以下のように、彦崎ＺＩ式期からＺⅡ式期への変化についての傾向性を整理した。漁労活動の活発化は彦崎ＺＩ式新段階にみられ、ＺⅡ式期に安定して行われた様相がうかがえる。狩猟活動においては、イノシシが主な対象であった傾向には変化はないが、四肢骨の骨端部が未化骨の個体が多くを占め、幼・若獣が多く捕獲された様相がうかがえる。この特徴はニホンジカにおいても同様で、両者ともに彦崎ＺⅡ式段階で化骨済の個体が増える傾向が認められ、また動物の種類も豊富になることから、ＺⅡ式段階に狩猟活動の活発化した様相がうかがえる。また、トレンチ内での出土する部位の頻度を比較することによって、当遺跡を利用した人々が、捕獲した魚類および哺乳類を一個体すべて集落もしくは解体調理場に持ち帰り、その後残滓を一定の範囲内に適宜投棄した可能性が高い。その傾向は、特にイノシシで顕著に認められる。当然同一個体であるかどうかの判断は、サンプリングエラーあるいはタフォノミーの関係等を考慮する必要はあるが、ほぼすべてのトレンチでイノ

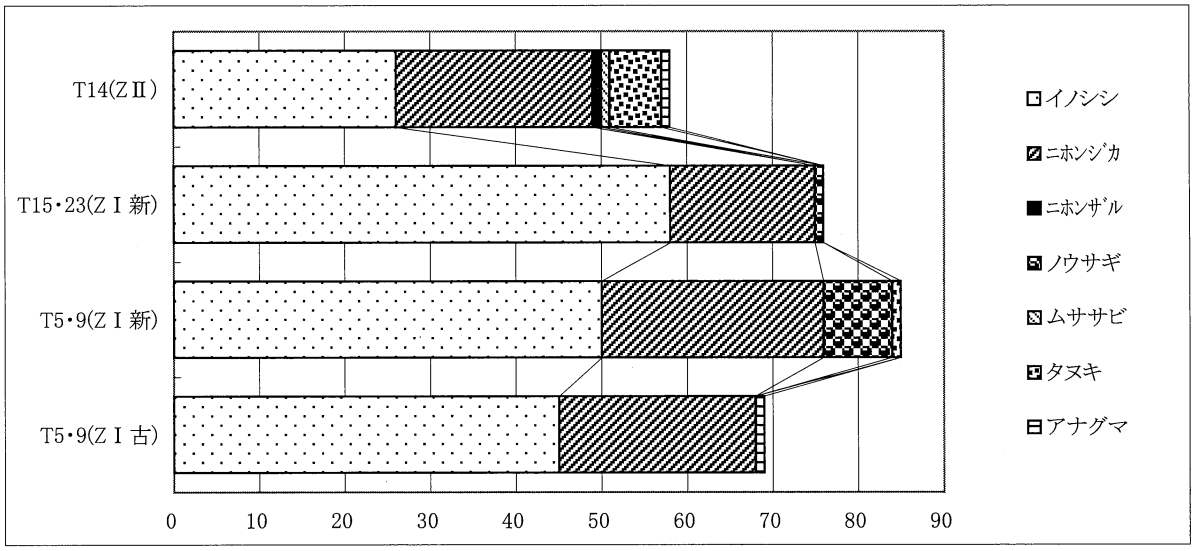


第８図　出土魚類の時期別同定点数

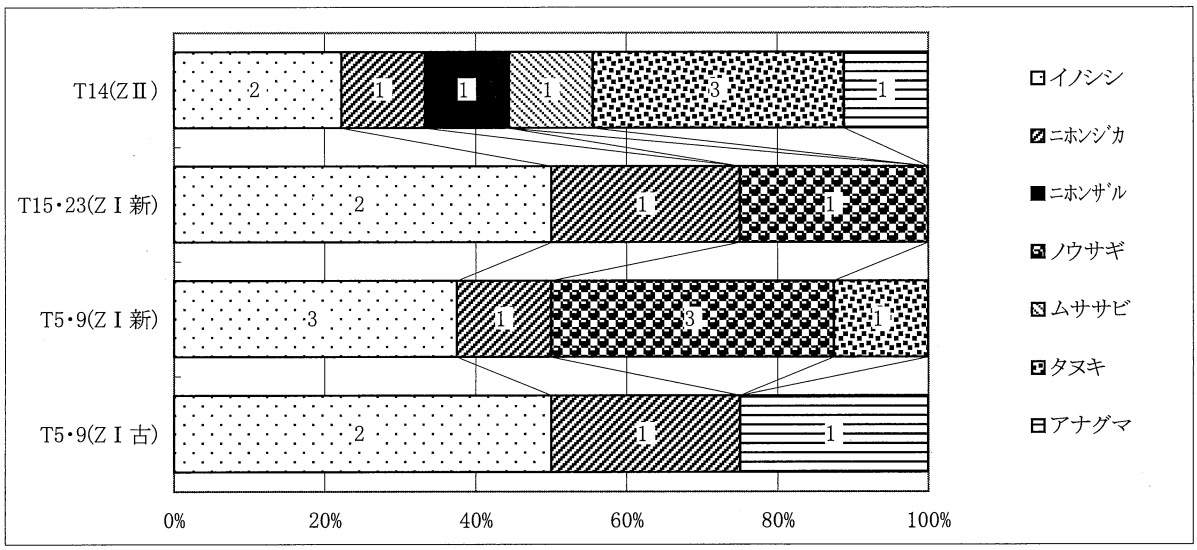


第９図　出土魚類の時期別個体数比率

シシとニホンジカが出土し、トレンチ内で多くの部位が確認されるということは、特定の部位が特別な扱いをされていない様相としてとらえることができる。例えば、骨角器の素材として利用されることの多いイノシシの脛骨や腓骨、ニホンジカの角、中手骨あるいは中足骨なども、加工が施された後の端も同様に貝塚に投棄されたと考えられる。彦崎ＺＩ式期のニホンジカの上腕骨や大腿骨などの主要四肢骨が少ない点は、現段階では隣接する未調査区に残されている可能性や別の場所に運ばれた可能性あるいは、それ以外の部位が偏って搬入された可能性なども指摘できる。さらに破損の状態から、イノシシとニホンジカでは上腕骨、橈骨、脛骨に打割の痕跡が認められ、また頭蓋骨や下顎骨も破片となっているものが多いことから、骨髄や脳の採取を目的とした部位への選択意識がうかがわれ、



第10図　出土哺乳類の時期別同定点数

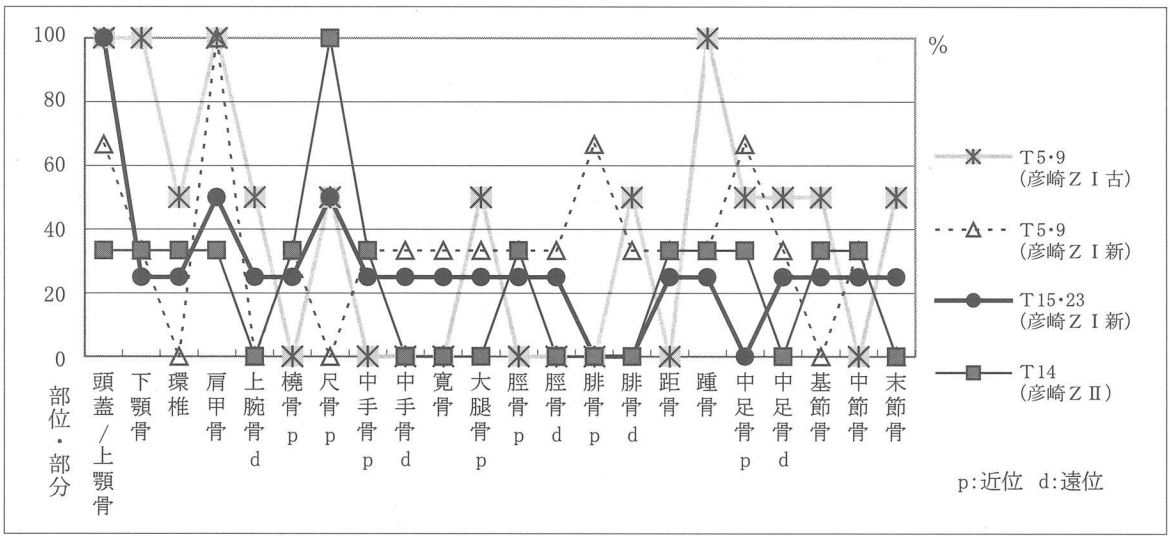


第11図　出土哺乳類の時期別個体数比率

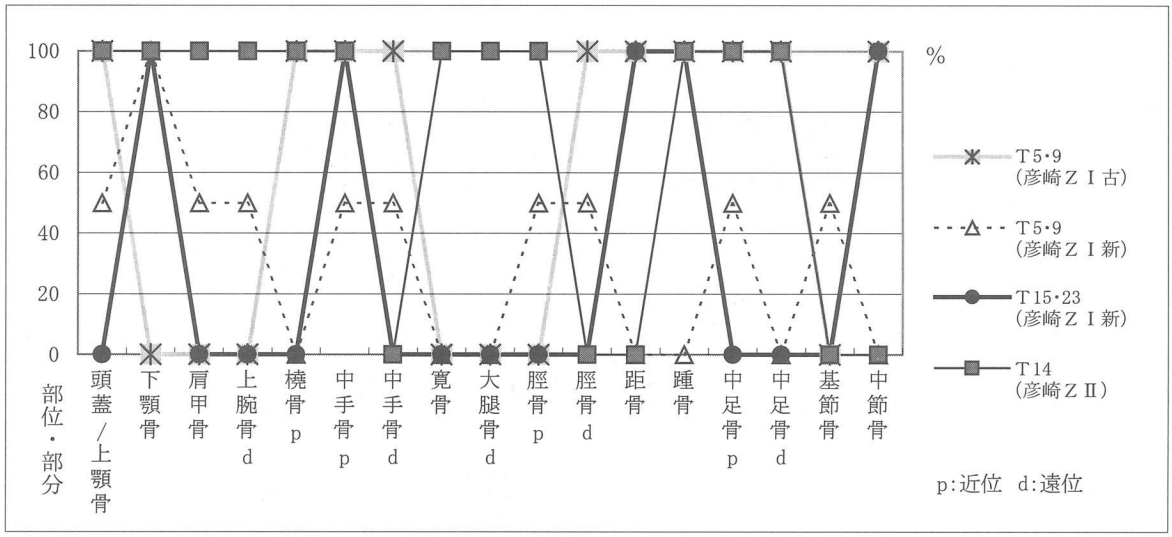
ニホンジカの中手骨と中足骨の打割の痕跡からは、骨角器の素材として特別に扱われたことが指摘できる。

4．おわりに

本稿で報告したトレンチ出土の動物遺存体を把握することによって、範囲確認調査区全体での動物遺存体の様相を確認することができた。ただし、昭和23・24年の東京大学による発掘調査ではブリやサワラも確認されており（池葉須1971）、今後水洗選別資料の整理作業が進むことによって、さらに



第12図　イノシシの部位別同定点数（彦崎ＺⅡ式期）



第13図　ニホンジカの部位別出現頻度（彦崎ＺⅡ式期）

小型魚類の資料も期待でき、瀬戸内海における漁労活動の変遷をより具体的に復元するために、本遺跡の出土動物遺存体調査への期待は大きいといえる。

また、未だ種を同定することができていないが、トレンチ14でも多く出土している魚類と考えられる背鰭棘と部位不明破片が、トレンチ15・38・39の複数の場所で確認できた。広い範囲で出土していることや出土量も多いことから、当時は極めて稀なものでもなかった魚種だと推測され、この種の解明も今後の課題である。

第３表　彦崎貝塚出土動物骨の時期別・部位別集計および個体数一覧

トレンチ			T5・9		T15・23	T14
時期			前　期		前期	前期
種名		部位	ＺⅠ古	ＺⅠ新	ＺⅠ新	ＺⅡ
甲殻綱	カニ類	可動指			1	
		個体数	0	0	1	0
魚上綱	板鰓亜綱	椎骨				1
		歯板				2
		尾棘	1	1	3	1
	ハモ属	頭骨		1		
		歯骨	0/2		0/1	
		主鰓蓋骨	1/0			
		個体数	2	1	1	0
	ナマズ	胸鰭棘		1/0		
		個体数	0	1	0	0
	コチ属	角舌骨		0/1		
		個体数	0	1	0	0
	スズキ	前上顎骨			1/0	
		角骨				0/1
		主鰓蓋骨	(1)		0/1	0/1
		擬鎖骨	0/1			
		前鰓蓋骨	1/0			
		第1血管間棘				1
		個体数	1	0	1	1
	クロダイ属	歯骨		1/2		
		主上顎骨		1/0		
		前上顎骨	2/0			
		角骨		1/0		
		舌顎骨	1/0			
		第1血管間棘		1		1
		第2臀鰭棘	1	1		
		個体数	2	2	0	1
	マダイ	前頭骨	2	3	1	
		歯骨		0/1		0/1
		前上顎骨	1/0	0/1	0/1	0/1
		個体数	2	2	1	1
	タイ科	椎骨	2			
		角骨			1/0	
	ボラ科	主鰓蓋骨	1/0	2/0		
		個体数	1	2	0	0
	ヒラメ	椎骨				1
		個体数	0	0	0	1
	ギマ	背鰭棘		1		1
		胸鰭棘			1/1	
		個体数	0	1	1	1
	不明魚類	棘			1	3
両生綱	カエル類	脛骨・腓骨		(1)		
		個体数	0	1	0	0
哺乳綱	ニホンザル	頭蓋骨				0/1
		個体数	0	0	0	1
	ノウサギ	下顎骨			1/0	
		尺骨		0/1		
		中手骨		0/1		
		寛骨		1		
		大腿骨		1		
		脛骨		1		
		踵骨		0/2		
		中足骨		(1)		
		個体数	0	3	1	0
	ムササビ	大腿骨				1/0
		個体数	0	0	0	1
	タヌキ	下顎骨				3/2
		遊離歯				0/1
		橈骨		1/0		
		個体数	0	1	0	3

トレンチ			T5・9		T15・23	T14
時期			前　期		前期	前期
種名		部位	ＺⅠ古	ＺⅠ新	ＺⅠ新	ＺⅡ
哺乳綱	アナグマ	遊離歯				0/1
		上腕骨	1/0			
		個体数	1	0	0	1
	イノシシ	頭蓋骨	4/2	6/3/(1)	6/1/(1)	0/2
		下顎骨	4/6	3/5/(2)	3/1/(2)	0/1
		遊離歯	2/1	0/1	7/3	2/0/(1)
		環椎	1		1	1
		椎骨	2	4	6	
		胸骨		1		
		肋骨	1/0	1/0	1/0	
		肩甲骨	3/1	0/3/(1)	0/2	2/1
		上腕骨	0/1		1/0	
		橈骨		1/1	0/1	1/0
		尺骨	1/1		0/2	0/3
		中手骨		2/1	2/2	1/2
		寛骨		0/1	1/0	
		大腿骨	1/1	1/0	1/0	
		脛骨		0/1	0/1	1/1
		腓骨	1/0/(1)	1/2		
		中足骨	0/3	2/1	(1)	0/1
		踵骨	1/1	1/0	1/1	1/0
		距骨		0/1	1/1	1/0
		基節骨	2		1	1
		中節骨		1	2	3
		末節骨	1		3	
		中手/中足骨	(1)	(1)	(2)	
		手根/足根骨	1/0(1)	1/0		
		個体数	2	3	2	2
	ニホンジカ	角	4	3	9	2
		頭蓋骨	(1)	1/1	0/1	(1)
		下顎骨		1/5	0/2	0/2/(1)
		遊離歯		0/1		
		環椎				
		椎骨	1	2		
		肋骨				
		肩甲骨	1/1	0/1		1/0
		上腕骨		0/1		2/1
		橈骨	1/0/(1)			0/1
		尺骨				0/1
		中手骨	1/0/(1)	1/0/(1)	(1)	0/1/(2)
		寛骨				1/0
		大腿骨				1/0
		脛骨	0/1	2/1/(1)		0/2
		中足骨	(2)	0/1		0/2
		膝蓋骨		0/1		
		踵骨	1/2		1/0	1/0
		距骨	1/0		0/1	
		基節骨		2		
		中節骨	1		2	
		末節骨				
		中手/中足骨	(3)			
		手根/足根骨				1/0
		個体数	1	1	1	1

＊ 部位の数値の表記は、左/右（不明）を示す。数値のみのものは、もともと左右のないものまたは同定が困難なものの数を示す。
＊ マダイの歯骨と前上顎骨はマダイ亜科を含む

－注－

（１）トレンチの位置と規模および貝層の分布については、田嶋正憲2006「発掘調査の概要」（23－175頁）、「まとめ」（176－224頁）『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会を参照した。

（２）貝類については、全点集計していないため、本稿では全体の出土量や出土比率は捉えることができない。また、貝類および骨類の同定は、岡山理科大学の谷村彩さん、畑山智史君、冨坂亞由さん、佐藤遥さんをはじめとする学生の協力を得た。記して感謝申し上げる次第である。

（３）ヒトによる加工の可能性がある解体痕の破損分類基準は、以下の（富岡2002）に従い表示した。アンダーラインが付された部分が分類名。

Aタイプ切断（対象を完全に切断している切創）		
Bタイプ切創（５㎜以上の深さ）	1 線状に伸びた痕跡	a 溝面が平滑　切創・切削痕跡
Cタイプ切創（１～５㎜の深さ）	2 刺突状に止まった痕跡	b 溝片面が破断　打撃叩切痕跡
Dタイプ切創（１㎜未満の深さ）	3 水平状に削いだ痕跡	c 断面に多数の平行線状痕跡

（４）ウシやウマなどを大型哺乳類、イノシシやニホンジカなどを中型哺乳類、タヌキやイヌなど、あるいはそれより小さな哺乳類を小型哺乳類に分類した。

（５）Ｔはトレンチを示す。出土層位ごとにもっとも多い部位で算出した最小個体数に対するその他の部位の出土率を示す。Ｔ５・９は両トレンチの出土量を合計して最小個体数を算出した場合の比率を示す。以下、第３～７および12・13図も同様である。

（６）ノウサギの出産期は４から８月で、生後８から10ヶ月で性成熟するとされる（日高ほか1996）。また、１週間ほどで草を食べ始め、約１ヶ月で独立して生活するようになるとされる（広島哺乳類談話会編2000）。

－参考文献－

池葉須藤樹　1971『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告』（私家版）

石丸恵利子・富岡直人　2006「彦崎貝塚出土の動物遺存体」『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会　259－296頁

奥谷喬司編著　2000『日本近海海産貝類図鑑』東海大学出版会

田嶋正憲　2006『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会

富岡直人　2002「百間川米田遺跡出土動物遺存体の分析」『百間川米田遺跡４－旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査ＸⅣ－』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　164　国土交通省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会　327－354頁

Angela von den Driesch 1976 *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites.* Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Harbard University

中坊徹次編　2000『日本産魚類検索』全種の同定（第二版）東海大学出版会

日高敏隆監修・川道武男編集　1996『日本動物大百科』１哺乳類Ⅰ・２哺乳類Ⅱ　平凡社

広島哺乳類談話会編著　2000『広島県の哺乳類』中国新聞社

Kyomi Yamazaki, Osamu Takahashi, Hiroki Sugawara, Naotaka Ishiguro and Hideki Endo 2005 Wild boar remains from the Neolithic (Jomon Period) sites on the Izu Islands and in Hokkaido Island, Japan *First Steps of Animal Domestication New archaeozoological approaches* pp.160-176

第６表　彦崎貝塚出土貝類観察表

No.	トレンチ	区	層位	時期	種名	左右	個数	部分	破損	色調	殻長	殻高	殻厚	殻径	重量	備考
959	5		3	ＺⅠ(新)	イシダタミ	－	2								4.7	
964	5		3	ＺⅠ(新)	イタボガキ科	L	4			灰					12.1	受熱1点
965	5		3	ＺⅠ(新)	イタボガキ科	－	5			灰					4.0	受熱2点
962	5		3	ＺⅠ(新)	イボウミニナ	－	1								3.1	
969	5		3	ＺⅠ(新)	ウネナシトマヤガイ	R	1								1.9	
966	5		3	ＺⅠ(新)	ウミニナ	－	1								1.3	
961	5		3	ＺⅠ(新)	カリガネエガイ	L	1								0.8	
970	5		3	ＺⅠ(新)	クロヘナタリ?	－	1								1.7	
960	5		3	ＺⅠ(新)	ナミマガシワ	－	1								4.9	
967	5		3	ＺⅠ(新)	カワアイ	－	5								6.2	
968	5		3	ＺⅠ(新)	ホソウミニナ	－	1								1.4	
963	5		3	ＺⅠ(新)	マガキ	R	4								11.6	
935	5		5	ＺⅠ(新)	アカニシ(有棘)	－	1					79.43		57.12	57.8	
936	5		5	ＺⅠ(新)	アカニシ(有棘)	－	1								31.2	
937	5		5	ＺⅠ(新)	アカニシ(有棘)	－	1					63.07		45.05	29.3	
950	5		5	ＺⅠ(新)	アカニシ(有棘)	－	1					67.21		56.38	51.3	
951	5		5	ＺⅠ(新)	アカニシ(有棘)	－	1					79.80		55.79	58.5	
942	5		5	ＺⅠ(新)	イボウミニナ	－	1			灰					5.0	
939	5		5	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1				36.06			14.65	6.7	
940	5		5	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1				31.80	2.73		13.26	2.7	
941	5		5	ＺⅠ(新)	ハイガイ	L	1				35.91	31.51		14.69	7.4	
952	5		5	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1				71.67	57.23	26.67		41.5	952と合わせ貝
953	5		5	ＺⅠ(新)	ハイガイ	L	1				71.19	56.03	28.67		43.8	953と合わせ貝
938	5		5	ＺⅠ(新)	マガキ	L	8	礫つき							28.1	レキ付着(レキ含む重量)
944	5		6	ＺⅠ(新)	アカニシ(無棘)	－	1					59.42		41.02	20.1	
943	5		6	ＺⅠ(新)	アカニシ(有棘)	－	1					72.37		58.23	73.7	
948	5		6	ＺⅠ(新)	イシダタミ	－	1								1.9	
949	5		6	ＺⅠ(新)	イチョウリラトリ?	LR	1				49.46	37.96	7.96		11.9	合わせ貝
947	5		6	ＺⅠ(新)	イボニシ	－	1								5.9	
945	5		6	ＺⅠ(新)	ハイガイ	L	1				69.01	62.55	2.34		58.2	
946	5		6	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1				66.47	63.80	31.00		68.9	
958	5		7	ＺⅠ(古)	アカニシ	－	2	破片		灰					4.7	
912	5		7	ＺⅠ(古)	アカニシ(無棘)	－	1					58.16		44.92	24.1	
957	5		7	ＺⅠ(古)	アカニシ(無棘)	－	1			灰		46.89			9.5	
913	5		7	ＺⅠ(古)	アカニシ(有棘)	－	1							30.72	12.9	
911	5		7	ＺⅠ(古)	イタボガキ科	－	1								1.1	
916	5		7	ＺⅠ(古)	イボウミニナ	－	1								2.9	
971	5		7	ＺⅠ(古)	フネガイ科	L	1	破片							1.4	
972	5		7	ＺⅠ(古)	フネガイ科?	L	1	破片							2.1	
910	5		7	ＺⅠ(古)	ヘナタリ	－	1								0.8	
914	5		7	ＺⅠ(古)	マガキ	R	1								9.2	
915	5		7	ＺⅠ(古)	マガキ	L	1								8.1	レキに付着
954	14	G区	不明	不明	マガキ	L	1								3.8	
955	14	G区	不明	不明	マガキ	L	1								2.3	
956	14	G区	不明	不明	マガキ	L	1								1.2	
922	15		9	ＺⅠ(新)	アカニシ(無棘)	－	1					69.11		47.72	35.3	
931	15		9	ＺⅠ(新)	アカニシ(無棘)	－	1							25.63	5.3	
920	15		9	ＺⅠ(新)	アカニシ(有棘)	－	1					70.59		59.24	48.9	
921	15		9	ＺⅠ(新)	アカニシ(有棘)	－	1					69.91		55.12	48.5	
928	15		9	ＺⅠ(新)	アカニシ(有棘)	－	1					84.79		65.45	81.9	
929	15		9	ＺⅠ(新)	アカニシ(有棘)	－	1					70.20		59.17	48.3	
930	15		9	ＺⅠ(新)	アカニシ(有棘)	－	1					67.62			32.8	
923	15		9	ＺⅠ(新)	イタボガキ科	L	1								3.1	
924	15		9	ＺⅠ(新)	イタボガキ科	L	1								2.7	
925	15		9	ＺⅠ(新)	イタボガキ科	L	1								1.4	
926	15		9	ＺⅠ(新)	イタボガキ科	L	1								1.9	
927	15		9	ＺⅠ(新)	イタボガキ科	R	1			灰					3.0	
850	15	B-10	9	ＺⅠ(新)	ハイガイ	L	1	完形			73.18	65.70	31.14		67.4	
851	15	B-10	9	ＺⅠ(新)	ハイガイ	L	1	完形			66.81	67.00	31.78		78.7	
852	15	B-10	9	ＺⅠ(新)	ハイガイ	L	1	完形			63.75	54.52	26.74		39.2	
853	15	B-10	9	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1	完形			64.48	58.66	28.72		55.4	
854	15	B-10	9	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1	完形	一部欠損		66.07	58.87	28.71		52.7	
855	15	B-10	9	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1	完形			68.74	55.63	27.99		50.1	
856	15	B-10	9	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1	完形			65.74	53.59	26.64		35.7	
857	15	C	9	ＺⅠ(新)	ハイガイ	L	1	完形			65.14	60.30	29.69		51.0	
858	15	C	9	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1	完形			74.08	66.01	31.07		68.2	
859	15	C	9	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1	完形			69.63	62.40	28.83		55.6	
860	15	C	9	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1	完形			67.65	58.25	26.95		43.5	
932	15		9	ＺⅠ(新)	ハイガイ	L	1		殻頂部欠損						1.2	
933	15		9	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1				27.96	21.35	10.12		2.8	
934	15		9	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1				24.58	21.97	9.49		2.4	
861	15	B-10	9	ＺⅠ(新)	ハマグリ	－	1	腹縁部	破片						2.1	
898	23		7	ＺⅠ(新)	アカニシ	－	1	縁辺破片							8.1	
I-025	23		7	ＺⅠ(新)	アカニシ(有棘)	－	1	完形				69.31		57.63	80.8	表面摩滅顕著?
863	23	旧12区	7	ＺⅠ(新)	アカニシ(無棘)	－	1	完形	一部欠損						27.5	
873	23	旧12・13区	7	ＺⅠ(新)	アカニシ(無棘)	－	1	完形				82.83		59.17	60.8	
896	23	旧12区北ホリ肩生	7	ＺⅠ(新)	アカニシ(無棘)	－	1		1						31.1	打ち欠きか？
862	23	旧13区	7	ＺⅠ(新)	アカニシ(有棘)	－	1		殻頂部欠損						101.7	
871	23	旧12・13区	7	ＺⅠ(新)	アカニシ(有棘)	－	1	完形				83.93		68.36	79.6	
872	23	旧12・13区	7	ＺⅠ(新)	アカニシ(有棘)	－	1	完形	一部欠損						52.3	
892	23	旧東大トレンチ埋土	7	ＺⅠ(新)	イシダタミ	－	1	完形							1.1	
909	23	旧13区	7	ＺⅠ(新)	イシダタミ	－	1								2.5	
894	23	旧12・13区	7	ＺⅠ(新)	イタボガキ科	－	1								1.3	
902	23	旧12・13区	7	ＺⅠ(新)	イタボガキ科	－	5		小破片						5.0	
904	23	旧12・13区	7	ＺⅠ(新)	イタボガキ科	－	2		小破片						1.5	
866	23	旧12区	7	ＺⅠ(新)	イボウミニナ	－	3	完形1	殻頂部欠損2						7.4	
893	23	旧東大トレンチ埋土	7	ＺⅠ(新)	イボウミニナ	－	1	完形							2.9	
895	23	旧12・13区	7	ＺⅠ(新)	イボウミニナ	－	5	完形							13.9	
899	23	旧12・13区	7	ＺⅠ(新)	イボウミニナ	－	2								7.1	
I-029	23		7	ＺⅠ(新)	イボウミニナ	－	1	ほぼ完形	殻唇欠損						2.5	
I-019	23	旧12区	7	ＺⅠ(新)	イボニシ	－	1	ほぼ完形	殻頂欠損			(45.75)		31.75	13.3	
I-028	23	旧12区	7	ＺⅠ(新)	イボニシ	－	1	ほぼ完形	殻唇欠損			38.10		19.98	5.1	
903	23	旧13区	7	ＺⅠ(新)	ウミニナ	－	1								1.0	
908	23	旧12・13区	7	ＺⅠ(新)	ウミニナ	－	6								8.2	
I-033	23	旧12区	7	ＺⅠ(新)	オキシジミ	R	1	完形			46.07	49.16	18.13		11.9	

No.	ﾄﾚﾝﾁ	区	層位	時期	種名	左右	個数	部分	破損	色調	殻長	殻高	殻厚	殻径	重量	備考
869	23	旧12区	7	ＺⅠ(新)	カリガネエガイ	L	1								1.7	
891	23	旧東大トレンチ埋土	7	ＺⅠ(新)	カリガネエガイ	R	1	完形							2.9	
I-027	23	旧12区	7	ＺⅠ(新)	カリガネエガイ	R	1	完形			48.65	21.51	9.30		3.6	
897	23	旧13区	7	ＺⅠ(新)	カワアイ	－	1	完形							2.2	
900	23	旧12･13区	7	ＺⅠ(新)	カワアイ	－	1								0.8	
I-018	23	旧12･13区	7	ＺⅠ(新)	ナミマガシワガイ	L	1	完形			(63.78)	59.64			15.1	
868	23	旧12区	7	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1	腹縁部	破片						7.1	
870	23	旧12区	7	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1	縁辺破片		灰					3.0	
874	23	旧12･13区	7	ＺⅠ(新)	ハイガイ	L	1	完形			64.42	58.88	29.13		48.9	875と合わせ貝
875	23	旧12･13区	7	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1	完形			63.91	57.50	28.35		48.4	874と合わせ貝
876	23	旧12･13区	7	ＺⅠ(新)	ハイガイ	L	1	完形			75.00	65.86	31.75		75.3	
877	23	旧12･13区	7	ＺⅠ(新)	ハイガイ	L	1	完形			34.13	27.65	12.72		5.0	
878	23	旧東大トレンチ埋土	7	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1	完形			64.55	56.08	27.13		53.8	
879	23	旧東大トレンチ埋土	7	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1	完形			59.09	51.03	26.25		36.0	
880	23	旧東大トレンチ埋土	7	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1	完形			59.48	50.49	25.09		39.9	
881	23	旧東大トレンチ埋土	7	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1	完形			33.20	27.52	12.85		5.7	
882	23	旧12区	7	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1	完形			20.16	18.04	7.49		1.2	
906	23	旧13区北ほり肩(生)	7	ＺⅠ(新)	ハイガイ	L	1	欠損あり				24.58			1.7	
907	23	旧13区	7	ＺⅠ(新)	ハイガイ	R	1				21.41	18.55	8.17		1.3	
867	23	旧12･13区	7	ＺⅠ(新)	ハマグリ	L	1	殻頂部	破片						10.1	
883	23		7	ＺⅠ(新)	ハマグリ	L	1	完形			71.88	59.40	21.89		26.6	
884	23		7	ＺⅠ(新)	ハマグリ	L	1	完形			51.30	43.25	15.88		11.3	
885	23		7	ＺⅠ(新)	ハマグリ	L	1	完形				42.99	15.45		9.8	
886	23		7	ＺⅠ(新)	ハマグリ	L	1	完形				45.35	15.17		10.9	
887	23		7	ＺⅠ(新)	ハマグリ	R	1	完形			49.20	40.52	13.90		9.7	
888	23	旧12区	7	ＺⅠ(新)	ハマグリ	L	1	腹縁部破片							1.9	
864	23	旧12･13区	7	ＺⅠ(新)	腹足綱	－	1	殻軸破片							6.9	
865	23	旧12区	7	ＺⅠ(新)	腹足綱	－	1	殻軸破片							6.6	
905	23	旧12･13区	7	ＺⅠ(新)	腹足綱	－	1	殻軸破片		灰					1.0	
901	23	旧13区	7	ＺⅠ(新)	ヘナタリ	－	1								1.2	
889	23	旧東大トレンチ埋土	7	ＺⅠ(新)	マガキ	R	1	完形							2.0	
890	23	旧東大トレンチ埋土	7	ＺⅠ(新)	マガキ	L	1	完形							0.8	
I-023	23		7	ＺⅠ(新)	マガキ	L	1	完形							14.5	
I-024	23		7	ＺⅠ(新)	マガキ	R	1	完形							7.7	
I-032	23		7	ＺⅠ(新)	マガキ	L	1	完形							－	ﾚｷに付着.小型
I-020	27		－	－	アカニシ(有棘)	－	1	殻体	殻頂欠損					80.35	136.5	
919	38		3	ＺⅡ	フネガイ科	R	1	殻頂部破片							1.7	
917	39		3	ＺⅡ	腹足綱	－	1	殻軸破片							5.9	
918	39		3	ＺⅡ	腹足綱	－	1	破片							2.5	
I-049	－	－	－	－	マルスダレガイ科	R	1	殻頂後縁破片							0.4	
I-022	?		－	－	ｲﾀﾎﾞｶﾞｷ科の一種	L	6								－	ﾚｷに付着

*殻長・殻高・殻厚・殻径の単位はmm.　重量の単位はg

第７表　彦崎貝塚出土動物遺存体観察表

NO	ﾄﾚﾝﾁ	区	層	時期	分類名	部位	部分	左右	重量	破片数	歯列	成長	解体痕	噛/咬痕	火熱痕	打点	加工	備考
2316	5		3	ZⅠ(新)	イノシシ	頭蓋骨	上顎骨	L	43.1	1	P4～M3							M3萌出中
2317	5		3	ZⅠ(新)	イノシシ	下顎骨	下顎体	R	10.2	1	*P3							
2444	5		3	ZⅠ(新)	イノシシ	腓骨	近位部～遠位部	R	2.4	1				1				骨角器. 両端噛み
2435	5		3	ZⅠ(新)	エイ類	尾棘	基部	M	0.3	1								
2443	5		3	ZⅠ(新)	クロダイ属	第1血管間棘		M	0.9	1								
2434	5		3	ZⅠ(新)	硬骨魚綱	肋骨	他棘あり	－	0.4	2								
2436	5		3	ZⅠ(新)	硬骨魚綱	棘		－	0.2	1								
2284	5		3	ZⅠ(新)	ニホンジカ	中足骨	近位～骨幹部	R	10.3	1						1?		近位端の前or後面打点あり
2413	5		3	ZⅠ(新)	ニホンジカ	肩甲骨	遠位	R	16.9	1		f			1			黒. GLP:35.24,LG:30.27,BG:26.47
2418	5		3	ZⅠ(新)	ノウサギ	踵骨		L	0.3	1		uf						幼獣
2419	5		3	ZⅠ(新)	ノウサギ	脛骨	近位～遠位	L	1.1	1		uf,uf						幼獣
2420	5		3	ZⅠ(新)	ノウサギ	脛骨	骨幹部～遠位部	L	0.4	1								幼獣
2421	5		3	ZⅠ(新)	ノウサギ	脛骨	近位～骨幹部	R	0.9	1		uf						幼獣
2422	5		3	ZⅠ(新)	ノウサギ	脛骨	近位部～遠位	R	1	1		uf						幼獣
2423	5		3	ZⅠ(新)	ノウサギ	大腿骨	近位～遠位	R	1.2	1		uf,uf						幼獣
2424	5		3	ZⅠ(新)	ノウサギ	大腿骨	遠位	L	0.6	1		uf						幼獣
2425	5		3	ZⅠ(新)	ノウサギ	寛骨	腸骨	L	0.5	1								幼獣
2426	5		3	ZⅠ(新)	ノウサギ	寛骨	腸骨	R	0.3	1								幼獣
2427	5		3	ZⅠ(新)	ノウサギ	中手骨	第5	R	0.1	1		f,uf						幼獣
2428	5		3	ZⅠ(新)	ノウサギ	踵骨		R	0.3	1								幼獣
2429	5		3	ZⅠ(新)	ノウサギ	寛骨	坐骨	R	0.3	1								幼獣
2432	5		3	ZⅠ(新)	ノウサギ	尺骨	近位部	R	0.3	1								幼獣
2433	5		3	ZⅠ(新)	ノウサギ	中足骨	他あり	－	0.6	10								幼獣
2430	5		3	ZⅠ(新)	ノウサギ?	椎骨		M	0.5	2								幼獣
2285	5	南サブトレ	3	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	1.2	1								
2310	5		3	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	2.3	1								
2417	5		3	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	3.4	2								
2431	5		3	ZⅠ(新)	哺乳綱	不明		－	1.2	2								
2442	5		3	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	0.4	1								
2414	5		3	ZⅠ(新)	マダイ	前頭骨		M	4.2	1			1?					Bd:20.08. 上方に何箇所か叩いたような痕あり
2437	5		3	ZⅠ(新)	マダイ亜科	前上顎骨		R	0.3	1								
2308	5		5	ZⅠ(新)	イノシシ	橈骨	近位部～骨幹部	L	7.8	1				1				両端噛み痕あり
2312	5		5	ZⅠ(新)	イノシシ	下顎骨	下顎角	L	5.5	1					1			黒、灰
2416	5		5	ZⅠ(新)	クロダイ属	角骨		L	0.2	1								
2415	5		5	ZⅠ(新)	硬骨魚綱	棘	破片	－	0.5	11								
2439	5		5	ZⅠ(新)	ノウサギ	脛骨	骨幹部～遠位	L	2.1	1		uf						
2296	5		5	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	3.1	1								
2297	5		5	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	3.1	1								
2438	5		5	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	0.9	1								
2378	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	距骨		R	17.8	1			1					GLl:46.65,GLm:41.0
2382	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	下顎骨	下顎角	－	8.4	1								
2388	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	第5中足骨		L	2.3	1		f						Bp:6.98
822	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	頭蓋骨	後頭顆	LR	10.3	1								
823	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	頭蓋骨	後頭顆	L	10.9	1								822とは別個体(重複部分ありのため)
824	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	肩甲骨	骨幹部～遠位部	R	10.6	1								
825	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	椎骨	胸椎	－	11.3	1								
828	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	頭蓋骨	前頭骨?破	－	2.0	1								
1940	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	下顎骨	下顎体先端部	LR	134.7	1	R:I1I2**、L:I1I2(I3～P3)							オス
2073	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	頭蓋骨	頭頂骨・後頭骨	M	57.8	1								
2075	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	椎骨	頚椎	M	18.2	1								
2077	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	第3中足骨		R	10.2	1		uf						Bp:18.07
2079	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	椎骨	頚椎	M	16.0	1								
2080	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	肩甲骨	遠位	R	17.8	1		f						BG:25.87
2086	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	腓骨	近位部	R	1.8	1								
2088	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ	脛骨	近位部～遠位部	R	15.6	1						1		
1248	5		6	ZⅠ(新)	イノシシ/ニホンジカ	肩甲骨?	遠位端	－	2.4	1		f		1?				
2076	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱大型	椎骨	椎体破片	M	3.1	1								中型
2082	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱大型	椎骨	突起破片	M	3.2	2								中型
2083	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱大型	下顎骨	下顎体破片	－	3.8	1								中型
2084	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱大型	肩甲骨	近位部後縁	－	8.8	1					1			中型
2092	5		6	ZⅠ(新)	クロダイ属	前上顎骨		L	1.9	1								
2093	5		6	ZⅠ(新)	クロダイ属	歯骨		R	2.1	1								
2094	5		6	ZⅠ(新)	クロダイ属	歯骨		L	2.3	1								
2095	5		6	ZⅠ(新)	硬骨魚綱	棘		－	1.0	2								
2390	5		6	ZⅠ(新)	硬骨魚綱	棘	破片	－	0.1	1								
2391	5		6	ZⅠ(新)	硬骨魚綱	不明		－	0.7	1								
2441	5		6	ZⅠ(新)	硬骨魚綱	棘		－	0.3	1								
2389	5		6	ZⅠ(新)	コチ属	角舌骨		R	0.7	1								
2096	5		6	ZⅠ(新)	食肉目	橈骨	近位～骨幹部	L	1.5	1		f						タヌキ/アナグマに似る
2392	5		6	ZⅠ(新)	ナマズ属	胸鰭棘		L	0.2	1								
2309	5		6	ZⅠ(新)	ニホンジカ	遊離歯	上顎後臼歯	R	5.3	1	M1							TL:17.35,TB:17.65
2379	5		6	ZⅠ(新)	ニホンジカ	脛骨	骨幹部～遠位	L	25.5	1		uf	1					
2380	5		6	ZⅠ(新)	ニホンジカ	上腕骨	遠位	R	35.2	1		uf						
2381	5		6	ZⅠ(新)	ニホンジカ	下顎骨	筋突起立ち上がり部	R	5.8	1								
2384	5		6	ZⅠ(新)	ニホンジカ	胸椎	棘突起	M	3.6	1			1					

NO	ﾄﾚﾝﾁ	区	層	時期	分類名	部位	部分	左右	重量	破片数	歯列	成長	解体痕	噛/咬痕	火熱痕	打点	加工	備考
826	5		6	ZⅠ(新)	ニホンジカ	脛骨	遠位端	L	5.8	1		uf						Bd:33.75
827	5		6	ZⅠ(新)	ニホンジカ	膝蓋骨		R	7.2	1								標本より大
2074	5		6	ZⅠ(新)	ニホンジカ	下顎骨	下顎体	R	28.5	1	P2～M2							
2078	5		6	ZⅠ(新)	ニホンジカ	下顎骨	下顎体	R	24.1	1	*M3				1			
2081	5		6	ZⅠ(新)	ニホンジカ	頭蓋骨	前頭骨	R	8.2	1								
2097	5		6	ZⅠ(新)	ニホンジカ	下顎骨	下顎体	R	5.8	1	(P2～P4)				1			
2099	5		6	ZⅠ(新)	ニホンジカ	下顎骨	下顎角	R	3.1	1			1					
829	5		6	ZⅠ(新)	ノウサギ	脛骨	遠位	R	1.8	1		f						Bd:17.28
2090	5		6	ZⅠ(新)	ハモ属	頭骨		M	1.2	1								
1249	5		6	ZⅠ(新)	鳥綱	大腿骨	近位～遠位部	L	0.3	1								大きさ・形態的にはｳﾐﾈｺ標本に似る
1250	5		6	ZⅠ(新)	鳥綱	四肢骨	骨幹部	－	0.9	1								
2287	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	2.2	1								
2292	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱	肋骨	破片	L	2.4	1								
2383	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱	椎骨	突起部基部	M	0.9	1								
2385	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱	肋骨		R	2.1	1								
2386	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱	椎骨?	突起?	M	1.5	1					1			黒褐色
2387	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	4.1	2								
2440	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	0.6	1								
830	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱	肋骨		R	2.9	1								
831	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	4.5	3								
1247	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	8.7	2								
2085	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	5.9	3					1			
2087	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	25.9	9								
2089	5		6	ZⅠ(新)	哺乳綱	不明	破片	－	3.3	3								
2091	5		6	ZⅠ(新)	マダイ	前頭骨	右破片	M	0.9	1								
2098	5		6	ZⅠ(新)	マダイ	前頭骨	左破片	M	1.1	1								2091と接合しないが同一個体か？(大きさ一致)
2298	5		6	ZⅠ(新)	マダイ亜科	歯骨		R	0.2	1								
2286	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	下顎骨	下顎角	R	15.9	1								
2288	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	頭蓋骨	前上顎骨	R	3.6	1								
2295	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	頭蓋骨	前上顎骨	R	5.9	1	(I2I3)							
2299	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	下顎骨	下顎体	L	8.8	1								後方立ち上がり部破片
2303	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	肩甲骨	骨幹部～遠位	L	7.5	1								前縁
2313	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	下顎骨	関節突起	R	20.3	1								
2318	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	下顎骨	筋突起立ち上がり部	R	11.3	1								
2320	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	第2中足骨	近位～遠位部	R	1.9	1		f						Bp:4.34
2321	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	踵骨	幼獣	R	5.6	1		uf						GB:17.9
2323	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	胸椎		M	7.6	1								突起部
2394	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	第3or4基節骨		－	7	1		ff						GL:39.36,Bp:16.84,Bd:15.38
2398	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	遊離歯	下顎切歯	L	4.4	1	I2							
2402	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	上腕骨	近位部～遠位部	R	17.3	1						1		骨幹部の外側面打点あり
2405	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	第4中足骨		R	11	1		f,uf						Bp:16.43,Bd:18.45
2410	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	下顎骨	下顎角破片	R	8.5	1								
2412	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	第3or4中手/中足骨	骨幹部～遠位	－	8.1	1		f						
2100	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	足根骨	①	L	7.6	1					1?			
2101	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	肩甲骨	遠位部	L	9.9	1			1					
2105	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	第2or5基節骨		－	2.8	1								GL:27.44,Bp:13.32,Bd:9.64
2106	5		7	ZⅠ(古)	イノシシ	第5中足骨		R	2.0	1								Bp:6.14
2325	5		7	ZⅠ(古)	エイ類	尾棘		M	0.9	1								
2118	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱大型	肋骨		－	12.2	3					1?			黒いが焼けかどうか不明
2305	5		7	ZⅠ(古)	クロダイ属	舌顎骨		L	0.6	1								
2108	5		7	ZⅠ(古)	硬骨魚綱	椎骨	尾椎棘	M	0.7	1								
2115	5		7	ZⅠ(古)	硬骨魚綱	棘		－	0.3	2								
2306	5		7	ZⅠ(古)	硬骨魚綱	棘		－	0.2	1								
2294	5		7	ZⅠ(古)	スズキ	主鰓蓋骨	破片	－	0.4	1								
2301	5		7	ZⅠ(古)	スズキ	擬鎖骨		R	1	1								
2111	5		7	ZⅠ(古)	スズキ	前鰓蓋骨		L	0.4	1								
2307	5		7	ZⅠ(古)	タイ科	椎骨	尾椎	M	0.3	1								恐らくクロダイ属
2107	5		7	ZⅠ(古)	タイ科	椎骨	尾椎棘	M	1.2	1								瘤
2291	5		7	ZⅠ(古)	ニホンジカ	中手/中足骨	遠位端	－	3.9	1		f						一方の滑車のみ
2302	5		7	ZⅠ(古)	ニホンジカ	踵骨		L	13.2	1								後方端部欠損のため化骨不
2319	5		7	ZⅠ(古)	ニホンジカ	中足骨	骨幹部	－	3.9	1								
2395	5		7	ZⅠ(古)	ニホンジカ	距骨		L	12.9	1			1					GLl:41.62,GLm:39.09
2400	5		7	ZⅠ(古)	ニホンジカ	踵骨	後方端部	R	3.1	1								
2406	5		7	ZⅠ(古)	ニホンジカ	踵骨		R	11.7	1								後方欠損.GB:22.9
2409	5		7	ZⅠ(古)	ニホンジカ	中節骨		－	3.9	1		ff						GL:33.31,Bp:12.91,Bd:10.35
2102	5		7	ZⅠ(古)	ニホンジカ	頭蓋骨	後頭骨	M	7.6	1								
2103	5		7	ZⅠ(古)	ニホンジカ	橈骨	近位	L	14.8	1		uf						
2104	5		7	ZⅠ(古)	ニホンジカ	腰椎		M	14.3	1								
2114	5		7	ZⅠ(古)	ニホンジカ	中手骨	近位	L	1.1	1								
2113	5		7	ZⅠ(古)	ニホンジカ?	上腕骨		R	0.6	1		uf,uf						幼獣
2300	5		7	ZⅠ(古)	ハモ属	歯骨		R	0.8	1								
2109	5		7	ZⅠ(古)	ハモ属	主鰓蓋骨		L	0.6	1								
2110	5		7	ZⅠ(古)	ハモ属	歯骨		R	0.5	1								
2112	5		7	ZⅠ(古)	硬骨魚綱	椎骨		M	0.1	1								
2290	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	6.5	1								
2293	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	4	2								
2304	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	不明		－	5.1	6								
2314	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	肋骨	破片	－	1.5	1								
2315	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	不明		－	4	2								
2322	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	不明		－	3.8	4								
2324	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	不明	不明破片	－	0.9	1								
2399	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	椎骨	突起破片	－	2.7	1								
2401	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	椎骨	突起破片	－	3	1								
2403	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	2	1						1		骨幹部の内or外側面打点あり
2404	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	肋骨		R	2	1								
2407	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	21.5	5								内1点に内外面の打点あり
2408	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	7.2	4								

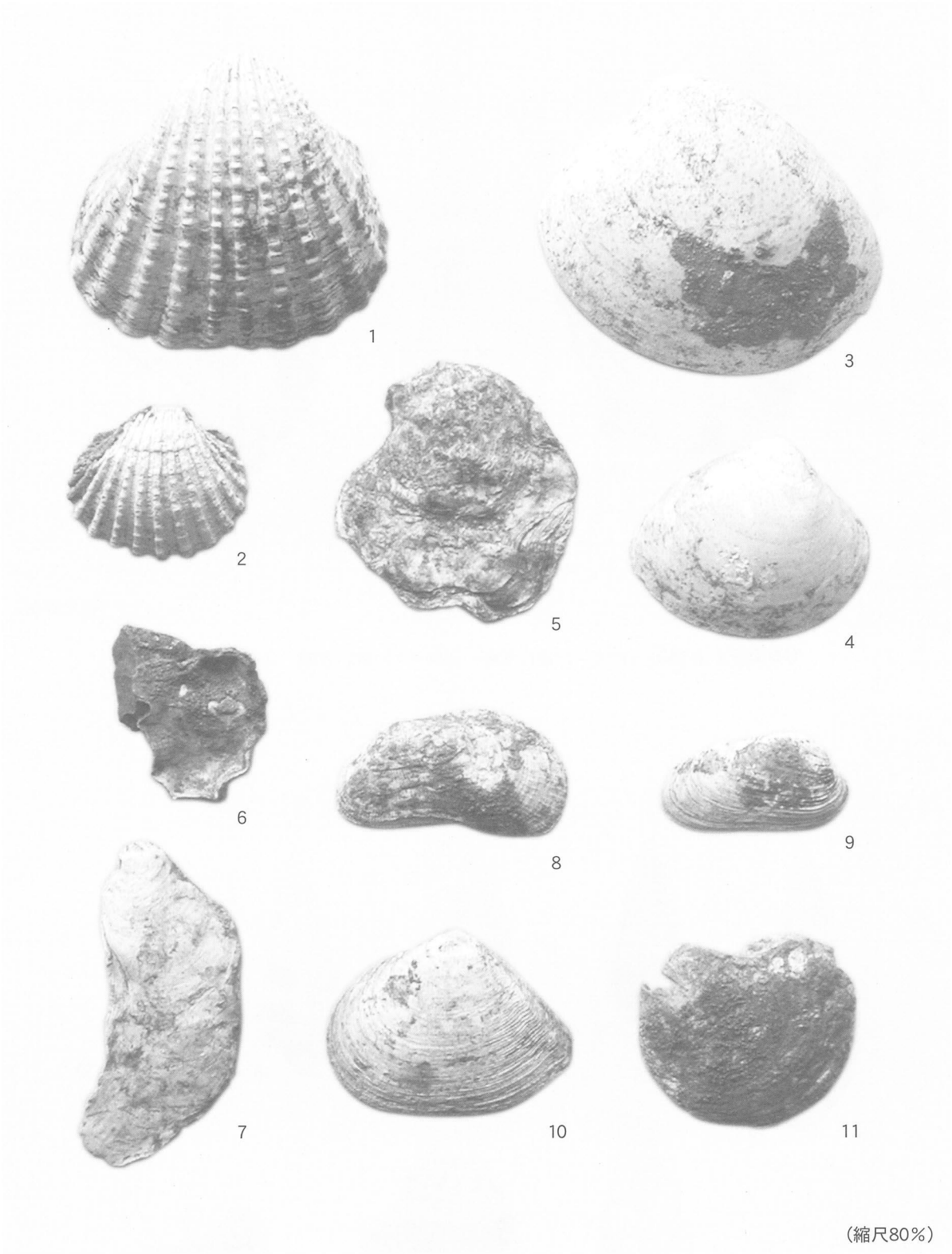
NO	ﾄﾚﾝﾁ	区	層	時期	分類名	部位	部分	左右	重量	破片数	歯列	成長	解体痕	噛/咬痕	火熱痕	打点	加工	備考
2411	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	不明		－	7.3	1								
2116	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	14.6	5								
2117	5		7	ZⅠ(古)	哺乳綱	不明	破片	－	12.0	11								
2393	5		7	ZⅠ(古)	ボラ科	主鰓蓋骨		L	2.7	1								
2289	5		7	ZⅠ(古)	マダイ	前頭骨		M	1.3	1								
55	5		－	－	哺乳綱	肋骨		－	2.7	1								大型
1069	5		－	－	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	5.7	1				1				骨角器
1106	5		－	－	哺乳綱	不明	破片	－	3.4	1					1			
2311	5		5･6	ZⅠ(新)	イノシシ	第3or4中節骨		－	1.5	1		uf,f						Bp:15.28,Bd:14.24
1009	6	上層貝層	7	彦崎KⅡ	イノシシ	腓骨	遠位部	－	1.1	1								
1036	6	上層貝層	7	彦崎KⅡ	イノシシ	肩甲骨	遠位部	R	26.2	3								接合しないが恐らく同一個体
1039	6	上層貝層	7	彦崎KⅡ	クロダイ属	前上顎骨		R	1.2	1								
1033	6	上層貝層	7	彦崎KⅡ	ニホンジカ	角	破片	－	2.9	1								表面破片
1035	6	上層貝層	7	彦崎KⅡ	ニホンジカ	肩甲骨	骨幹部～遠位	R	25.7	1		f						3点接合,GLP:40.66,LG:31.31,BG:28.76,SLC:23.64
1038	6	上層貝層	7	彦崎KⅡ	脊椎動物門	不明	破片	－	1.1	1								
1010	6	上層貝層	7	彦崎KⅡ	哺乳鋼	四肢骨	骨幹部	－	1.9	1								
1034	6	上層貝層	7	彦崎KⅡ	哺乳鋼	四肢骨	骨幹部	－	14.2	2								
1037	6	上層貝層	7	彦崎KⅡ	哺乳鋼	上腕骨	遠位部	L	5.8	1				1				
2396	8	旧7区	2	ZⅡ	硬骨魚綱	棘		－	0.2	1								
2397	8	旧7区	2	ZⅡ	硬骨魚綱	棘	破片	－	0.1	1								
2018	8	旧9区	2	ZⅡ	哺乳綱中型	四肢骨	骨幹部	－	0.9	1								小型
2014	8	旧東理(旧7区)	2	ZⅡ	硬骨魚綱	不明特殊骨		－	11.6	1								
2017	8	旧9区	2	ZⅡ	硬骨魚綱	不明特殊骨		－	6.9	1								
2001	8		8	ZⅠ(新)	ニホンジカ	角	先端部	－	13.7	1							1	
1235	8		10	ZⅠ(新)	イヌ?	第4中手骨	近位	L	0.6	1								
1591	11	C	5	ZⅠ(古)	ニホンジカ	距骨		R	16.2	1								GLl:39.46,GLm:35.98
1081	11	C	5	ZⅠ(古)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	6.1	1								
1918	13		4	ZⅠ(新)	キジ/ヤマド	脛足根骨	遠位	L	0.7	1								
860	13		4	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	7.5	2					1			
2230	14	E	6	鷹島	脊椎動物門	不明		－	5.3	1								
2234	14	旧3区S	10	ZⅡ(古)	硬骨魚綱	肋骨	破片	－	0.2	1								
2193	14	D-4-5	10	ZⅡ(古)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	1.2	1								
2235	14	旧3区S	10	ZⅡ(古)	哺乳綱	不明		－	1.4	1								
2213	15	E-10	9	ZⅠ(新)	イノシシ	大腿骨	近位部～骨幹部	L	19.6	1		uf	1?					
2218	15	E-10	9	ZⅠ(新)	イノシシ	肩甲骨	遠位部	R	21.1	1								
2219	15	E-10	9	ZⅠ(新)	イノシシ	環椎		M	7.9	1								
2220	15	E-10	9	ZⅠ(新)	イノシシ	第2中手骨		R	2.1	1		f,uf						Bp:6.04,Bd:8.54
2221	15	E-10	9	ZⅠ(新)	イノシシ	第2or5中手/中足骨		－	1.4	1								
2228	15	D-10	9	ZⅠ(新)	イノシシ	遊離歯	下顎切歯	L	0.5	1	I3							
2251	15	B-10	9	ZⅠ(新)	イノシシ	寛骨	寛骨臼	L	37.9	1								LA:39.29
2252	15	B-10	9	ZⅠ(新)	イノシシ	距骨		R	15.1	1								下方やや消化状態.GLl:41.66,GLm:37.8
2255	15	A-10	9	ZⅠ(新)	イノシシ	頭蓋骨	頭頂骨・前頭骨	R	49.6	1								2257～2259のいずれかと同一個体であろう
2256	15	A-10	9	ZⅠ(新)	イノシシ	頭蓋骨	前頭骨	L	8.5	1								
2257	15	A-10	9	ZⅠ(新)	イノシシ	頭蓋骨	側頭骨	L	37.9	1								2257～2259は同一部分3個体分
2258	15	B-10	9	ZⅠ(新)	イノシシ	頭蓋骨	側頭骨	L	29.2	1			1					下方面に複数の傷
2259	15	A-10	9	ZⅠ(新)	イノシシ	頭蓋骨	側頭骨	L	30.6	1								
2226	15	D-10	9	ZⅠ(新)	エイ類	尾棘		M	0.8	1								
2253	15	A-10	9	ZⅠ(新)	ニホンジカ	踵骨		L	20.2	1								GB:28.3
2262	15	B-10	9	ZⅠ(新)	ノウサギ	下顎骨	下顎体	L	3.9	1								
2227	15	D-10	9	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	2.2	2								
2254	15	A-10	9	ZⅠ(新)	哺乳綱	脛骨	骨幹部	－	8.6	1								
2260	15	B-10	9	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	4.4	1								
2261	15	B-10	9	ZⅠ(新)	哺乳綱	肋骨		－	4.2	1				1				噛み
2138	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	距骨		L	15.5	1								GLl:42.59,GLm:37.37
2139	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	踵骨		L	12.6	1				1?				先端部噛み、後方端部は欠損あり.GB:21.12
2140	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	第3or4基節骨		－	3.1	1		uf,f						Bp:15.85,Bd:15.32
2141	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	第3or4中節骨		－	3.8	1		ff						GL:27.03,Bp:,17.66Bd:15.50
2142	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	第3or4末節骨		－	2.3	1		ff						左側.DLS:29.35,Ld:28.74
2143	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	第3or4末節骨		－	2.9	1								右側.DLS:31.56,Ld:30.8
2144	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	第3or4末節骨		－	1	1								左側
2145	23		7	ZⅠ(新)	イノシシ	第4中手骨		R	3.1	1		f						Bp:15.74
2146	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	第5中手骨		L	2.7	1		f,uf		1				近位側噛み.Bp:7.04,Bd:10.84
2147	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	遊離歯	上顎犬歯	R	3.2	1	C							メス
2149	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	遊離歯	下顎切歯	L	1.5	1	I1							未萌出もしくは萌出中
2150	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	遊離歯	下顎乳切歯	R	1.2	1	di2							
2151	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	頭蓋骨	後頭骨	－	12.8	1								
2152	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	下顎骨	下顎体後方破片	L	7.2	1								
2154	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	胸椎		M	10.1	1								突起部破片
2155	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	胸椎		M	6.9	1								突起部破片
2157	23		7	ZⅠ(新)	イノシシ	尺骨	骨幹部	R	5	1								
2158	23		7	ZⅠ(新)	イノシシ	第4中手骨?	近位	L	1.3	1								破片
2159	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	肩甲骨	後縁破片	R	7.9	1					1			黒
2166	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	腰椎		M	37	1		uf						
2168	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	腰椎		M	14.4	1		uf						
2169	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	腰椎		M	18.8	1		uf						
2170	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	頭蓋骨	側頭骨・突起	L	14.4	1								
2172	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	第3or4中節骨		－	2.4	1		ff		1?				平坦面あぼた状が全体的に.GL:26.95,Bp:15.75,Bd:13.71. 噛み?
2173	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	踵骨		R	4.8	1				1?				両端欠損. 先端噛み?

NO	トレンチ	区	層	時期	分類名	部位	部分	左右	重量	破片数	歯列	成長	解体痕	噛/咬痕	火熱痕	打点	加工	備考
2175	23		7	ZⅠ(新)	イノシシ	下顎骨	下顎角	L	10.6	1								
2176	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	胸椎	棘突起	M	7.9	1								
2178	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	肋骨		L	6.6	2			1					外側面のやや後方に複数の傷
2182	23	旧13区北ほり肩(生)	7	ZⅠ(新)	イノシシ	第3or4中手/中足骨	遠位端	－	2.3	1		uf						Bd:18.17
2183	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	橈骨	近位	R	33	1								
2184	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	遊離歯	下顎切歯	L	5.1	1	I2							
2185	23	旧13区北ほり肩(生)	7	ZⅠ(新)	イノシシ	尺骨	近位～骨幹部	R	12.5	1		uf	1					DPA:29.63,SDO:23.7,BPC:19.58.橈骨との接合する関節部の外側面と前方面に複数の傷
2186	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	第2or5中足骨	骨幹部～遠位	－	1.1	1		uf						Bd:8.79
2187	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	遊離歯	上顎後臼歯	L	5.5	1	M2							TL:22.55,TB:17.32
2192	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	遊離歯	下顎乳切歯	R	1	1	di1							
2197	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	遊離歯	上顎前臼歯	L	1.4	1	P4							TL:11.97,TB:12.13
2198	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	遊離歯	下顎切歯	L	0.7	1	I2							破片
2199	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	頭蓋骨	上顎骨	L	3.5	1								破片
2204	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	下顎骨	下顎角	L	1.7	1								破片
2206	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	上腕骨	遠位部	L	5.2	1								
2210	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	脛骨	近位～遠位部	R	51.8	1		uf				1		Bp:45.57
2222	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	下顎骨	下顎角	－	9.6	2								破片
2225	23		7	ZⅠ(新)	イノシシ	下顎骨	下顎角	－	7.6	1								
2229	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ	遊離歯	下顎切歯	L	0.6	1	I3							
1936	23	旧12	7	ZⅠ(新)	イノシシ	下顎骨	下顎体	R	27.8	1	*M2		1					動物遺存体埋納土器2内出土
2124	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ/ニホンジカ	脛骨	骨幹部	R	6.5	1								
2127	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	イノシシ/ニホンジカ	脛骨	近位部	R	8.8	1								
2209	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	エイ類	尾棘	両端欠損	M	0.5	1								
2245	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	エイ類	尾棘		M	0.4	1								
2120	23	旧東大トレンチ	7	ZⅠ(新)	カニ類	可動指		－	1.1	1								
2181	23	旧13区北下ほり肩(生)	7	ZⅠ(新)	ギマ	胸鰭棘		－	0.6	1								
2232	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	ギマ	胸鰭棘		－	0.4	1								
2160	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	硬骨魚綱	棘		－	1.4	8								
2161	23		7	ZⅠ(新)	硬骨魚綱	棘	破片	－	0.2	1								
2162	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	硬骨魚綱	棘		－	0.4	1								
2163	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	硬骨魚綱	棘		－	0.3	1								
2211	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	硬骨魚綱	棘		－	0.7	5								
2233	23	拡張区	7	ZⅠ(新)	硬骨魚綱	棘		－	0.9	1							1?	表面光沢,やや擦痕
2244	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	スズキ	主鰓蓋骨		R	0.4	1								
2246	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	スズキ	主上顎骨	中央破片	L	0.2	1								
2165	23		7	ZⅠ(新)	タイ科	角骨		L	0.3	1								
2200	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	タイ科	棘		－	0.6	1								
2136	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	第3or4中節骨		－	3.4	1		ff						GL:32.68,Bp:12.68,Bd:9.67
2137	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	中手骨	骨幹部	－	3.8	1								
2148	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	下顎骨	下顎体	R	5.9	1	P2P3							
2153	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	頭蓋骨	後頭骨･後頭顆	R	8.6	1								
2171	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	距骨		R	11.9	1			1					GLl:35.63,GLm:33.25.内側面の下方やや前方に深めの傷
2174	23	旧13東大埋土	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	第3or4中節骨		－	5.6	1		ff						GL:33.45,Bp:15.19,Bd:12.24
2179	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	角	破片	－	10.3	1								
2191	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	角		－	8.4	1								
2203	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	下顎骨	関節突起基部	R	1.1	1								破片
2236	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	角		－	4	1							1	表面をすったような痕跡
2237	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	角		－	19.4	1							1	両端を削りだすように切断か?
2238	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	角		－	21.2	1								
2239	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	角		－	7.1	1							1	一端先細に加工か？
2240	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	角		－	7.1	2					1		1	灰色:焼けは1点のみ. 一端先細に加工?
2241	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	角		－	15.3	1							1	研磨あり
2249	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	ニホンジカ	角	破片	－	0.7	1								
2164	23		7	ZⅠ(新)	ハモ属	歯骨		R	0.3	1								
2223	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	脊椎動物門	不明		－	2.8	2								
2224	23		7	ZⅠ(新)	脊椎動物門	不明		－	2.5	1								
2242	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	脊椎動物門	不明		－	12.9	16								
2243	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	脊椎動物門	不明		－	3.7	3					1			黒,灰
2121	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	2	1								
2122	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	11.5	1						1		近位か遠位の海綿質近くに打点あり
2123	23	東大旧12区埋土	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	4.5	1								
2125	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	8.5	1						1		
2126	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	上腕骨	近位部	－	6.6	1								
2128	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	31.7	13								

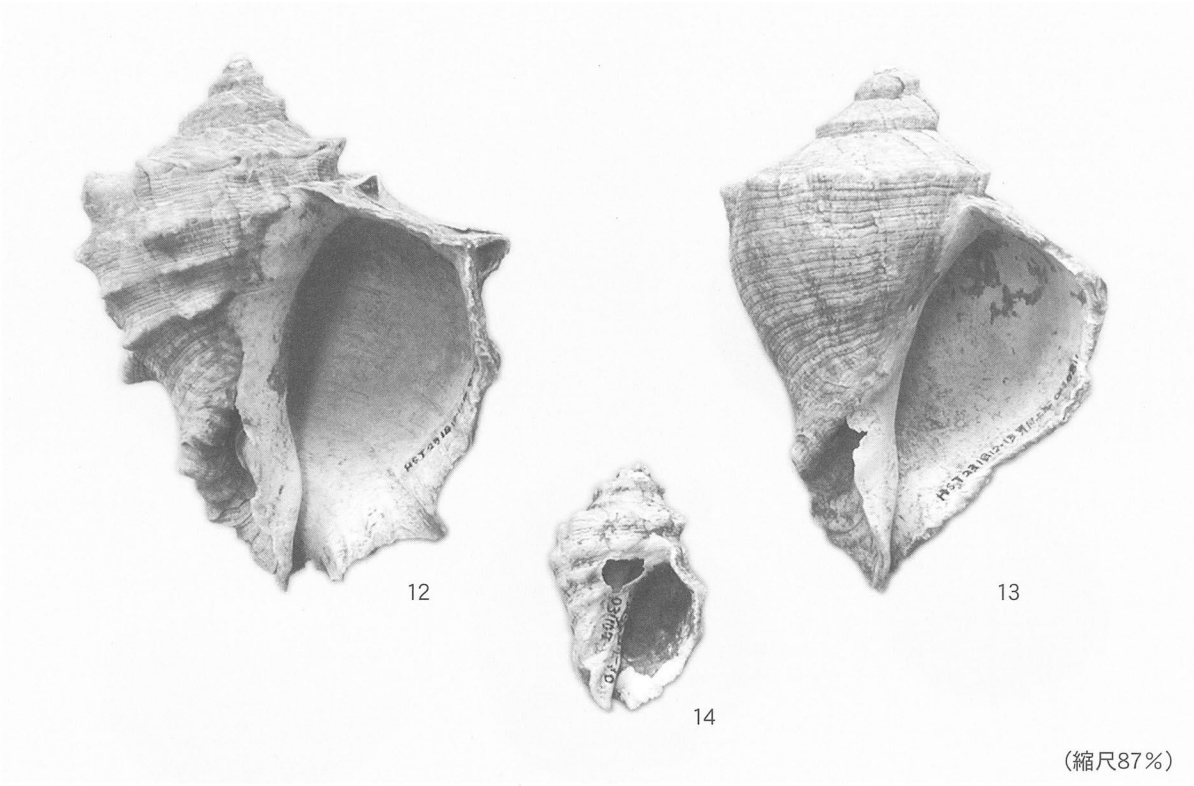
NO	ﾄﾚﾝﾁ	区	層	時期	分類名	部位	部分	左右	重量	破片数	歯列	成長	解体痕	噛/咬痕	火熱痕	打点	加工	備考
2129	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	46.1	16								
2130	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	9.8	6								
2131	23		7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	3.4	2								
2132	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	9	3								
2133	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	椎骨	椎体	M	5.4	1		uf						
2134	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	1.1	1								
2135	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	1.6	1					1			黒、褐色
2156	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	肋骨?	破片	－	1.3	1			1					やや斜め方向から刃物が入ったような傷
2177	23		7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	8.9	1								
2180	23	旧13区北下ほり肩(生)	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	8	2								
2188	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	椎骨	仙椎	M	2.1	1		uf						
2189	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	不明		－	4.4	1					1			黒、褐色
2190	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	肋骨	破片	－	1.4	1								
2194	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	2.4	1								
2195	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	椎骨	突起	－	1.7	1								
2196	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	不明		－	1.4	1								
2201	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	2.4	1								
2202	23		7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	2.1	2								
2205	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	5.5	5								
2207	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	11.1	1						1		
2208	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	不明		－	4.4	2								
2214	23		7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	4.9	1								
2215	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	椎骨	突起破片	－	2	1								
2216	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	3.4	2								
2217	23	旧13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	不明		－	3.9	3								
2231	23	旧12区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	不明		－	6.1	3								
2247	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	66.5	26								
2248	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	不明		－	2.2	2								
2250	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	哺乳綱	不明		－	1	1					1			黒
2167	23		7	ZⅠ(新)	マダイ	前頭骨		M	19.6	1								大型
2212	23	旧12･13区	7	ZⅠ(新)	マダイ亜科	前上顎骨		R	0.2	1								
2263	27		2	ZⅡ	イノシシ	第3中手骨	近位～遠位部	L	7.2	1		f						Bp:19.52
2275	27		2	ZⅡ	イノシシ	頭蓋骨	鼻骨	L	11	1								
2276	27		2	ZⅡ	イノシシ	肩甲骨	骨幹部	L	5	1								
2277	27		2	ZⅡ	イノシシ	下顎骨	先端部破片	－	6.4	1								
2268	27		2	ZⅡ	イノシシ/ニホンジカ	肩甲骨	後縁	－	6.2	1								
2264	27		2	ZⅡ	ニホンジカ	尺骨	近位部	R	7	1				1				近位側噛み
2265	27		2	ZⅡ	ニホンジカ	橈骨	遠位	R	13.5	1		uf						
2266	27		2	ZⅡ	ニホンジカ	寛骨	寛骨臼～坐骨	R	4.8	1								
1232	27		2	ZⅡ	ニホンジカ	角	分岐部	－	14.9	1								
2267	27		2	ZⅡ	哺乳綱	脛骨	近位部	R	6.7	1						1		近位部内側打点あり
2269	27		2	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	23.4	5								
2270	27		2	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	3.2	3								
2271	27		2	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	3.3	1								
2272	27		2	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	3.9	3								
2273	27		2	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	13	4								
2278	27		2	ZⅡ	哺乳綱	不明		－	6.7	1								
2279	27		2	ZⅡ	哺乳綱	不明		－	1.6	1								
2280	27		2	ZⅡ	哺乳綱	不明		－	3.5	1								
2281	27		2	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	0.4	1								
2282	27		2	ZⅡ	哺乳綱	不明		－	3.9	2								
2274	27	旧4区	8	ZⅠ(新)	ニホンジカ	角		－	2.3	1			1					
2283	27	旧4区	8	ZⅠ(新)	哺乳綱	椎骨	破片	M	1.9	1								
1236	27		－	－	硬骨魚綱	棘	先端部	－	0.5	1								
2357	38		3	ZⅡ	イノシシ	中手骨	近位～骨幹部	L	2.3	1		f						Bp:16.01
2358	38		3	ZⅡ	イノシシ	踵骨		R	8.7	1								GB:21.95
2359	38		3	ZⅡ	イノシシ	橈骨	近位	L	6.9	1		f	1			1		近位端の前面打点あり
2360	38		3	ZⅡ	イノシシ	第3or4中手/中足骨	遠位	－	4.6	1		f						Bd:18.4
2361	38		3	ZⅡ	イノシシ	遊離歯	下顎乳臼歯	L	1.6	1	dp4							摩滅指数:f,TL.19.18:,TB:9.57
2367	38		3	ZⅡ	イノシシ	遊離歯	下顎切歯	L	2.8	1	i2							
2368	38		3	ZⅡ	イノシシ	腓骨	近位部	R	1.6	1								
2370	38		3	ZⅡ	イノシシ	寛骨	寛骨臼内側	L	6.7	1								
2371	38		3	ZⅡ	イノシシ	下顎骨	筋突起立ち上がり部	L	5.7	1			1					横方向に長く浅い線が認められるがその中央部分に縦方向に削られた(齧り？)のような傷もある
2372	38		3	ZⅡ	イノシシ	肩甲骨	近位～骨幹部	R	9.8	1								後縁
2376	38		3	ZⅡ	硬骨魚綱	棘		－	0.1	1								
2356	38		3	ZⅡ	ニホンジカ	脛骨	近位端	L	7.5	1		f						
2369	38		3	ZⅡ	ニホンジカ	中足骨	近位端	L	2	1						1		近位端の外側打点あり
2362	38		3	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	28.8	10								
2363	38		3	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	36.8	13								
2364	38		3	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	6	1								
2365	38		3	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	1.2	1								
2366	38		3	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	3.6	3								
2373	38		3	ZⅡ	哺乳綱	肋骨		－	1.8	2								
2374	38		3	ZⅡ	哺乳綱	不明		－	12.1	5								
2375	38		3	ZⅡ	哺乳綱	不明		－	3.1	2								
2377	38	南カベ	4	ZⅡ	硬骨魚綱	肋骨/鰓条骨	破片	－	0.3	2								
2326	39		2	中後期	イノシシ	距骨		R	11.2	1								GLl:40.12,GLm:35.91
2339	39		2	中後期	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	45.7	15								
2346	39		2	中後期	哺乳綱	肋骨		－	0.6	1								

NO	ﾄﾚﾝﾁ	区	層	時期	分類名	部位	部分	左右	重量	破片数	歯列	成長	解体痕	噛/咬痕	火熱痕	打点	加工	備考
2352	39		2	ZⅡ	哺乳綱	不明		－	4.1	2								
2331	39		3	ZⅡ	イノシシ	第5中足骨		L	1.6	1		f						Bp:5.78
2335	39		3	ZⅡ	イノシシ	上腕骨	遠位部	R	5.9	1								
2355	39		3	ZⅡ	硬骨魚綱	棘	破片	－	0.2	1								折れたものが癒合した
2327	39		3	ZⅡ(古)	ニホンジカ	第3or4中節骨		－	4.5	1		ff						GL:34.4;Bp:14.88,Bd:11.91
2329	39		3	ZⅡ(古)	ニホンジカ	角		－	5.6	1								
2333	39		3	ZⅡ	ニホンジカ	脛骨	骨幹部	L	14.3	1						1		
2334	39		3	ZⅡ	ニホンジカ	寛骨	寛骨臼外側破片	L	4.8	1								
2338	39		3	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	47	12								
2340	39		3	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	3.6	1								
2341	39		3	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	2.7	1								
2342	39		3	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	1.3	1								
2343	39		3	ZⅡ	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	11.3	6								
2345	39		3	ZⅡ	哺乳綱	肋骨		－	2.8	2								
2347	39		3	ZⅡ	哺乳綱	肋骨		－	1.4	1								
2348	39		3	ZⅡ	哺乳綱	肋骨		－	0.5	1								
2350	39		3	ZⅡ	哺乳綱	椎骨	突起破片	－	3.9	1								
2351	39		3	ZⅡ	哺乳綱	不明		－	7.1	2								
2353	39		3	ZⅡ	哺乳綱	不明		－	1.6	1								
2328	39		5	ZⅠ(新)	イノシシ	第2or5基節骨		－	2	1		ff						GL:24.75,Bp:12.38,Bd:8.17
2330	39		5	ZⅠ(新)	タヌキ	尺骨	近位部～骨幹部	R	1.4	1								DPA:,12.93,BPC:5.52
2332	39		5	ZⅠ(新)	哺乳綱中型	指骨		－	0.2	1								GL:16.71,Bp:6.44,Bd:5.3　小型
2336	39		5	ZⅠ(新)	ニホンジカ	下顎骨	下顎角上部(関節突起下部)	L	4.1	1								
2337	39		5	ZⅠ(新)	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	34.4	13								
2344	39		5	ZⅠ(新)	哺乳綱	肋骨		－	4.2	3								
2349	39		5	ZⅠ(新)	哺乳綱	椎骨	突起破片	－	5	1								
2354	39		5	ZⅠ(新)	哺乳綱	不明		－	8.5	9								
1345	－	J	－	－	エイ類	椎骨		－	0.9	2								うち1点未成品?穿孔途中?
2006	－	－	－	－	脊椎動物門	不明		－	10.5	1								
2007	－	－	－	－	脊椎動物門	不明		－	3.6	1								
1096	－	－	－	－	哺乳綱	四肢骨	骨幹部	－	0.6	1								
1226	8?		－	－	イノシシ	橈骨	近位	L	11.1	1		f						Bp:27.86

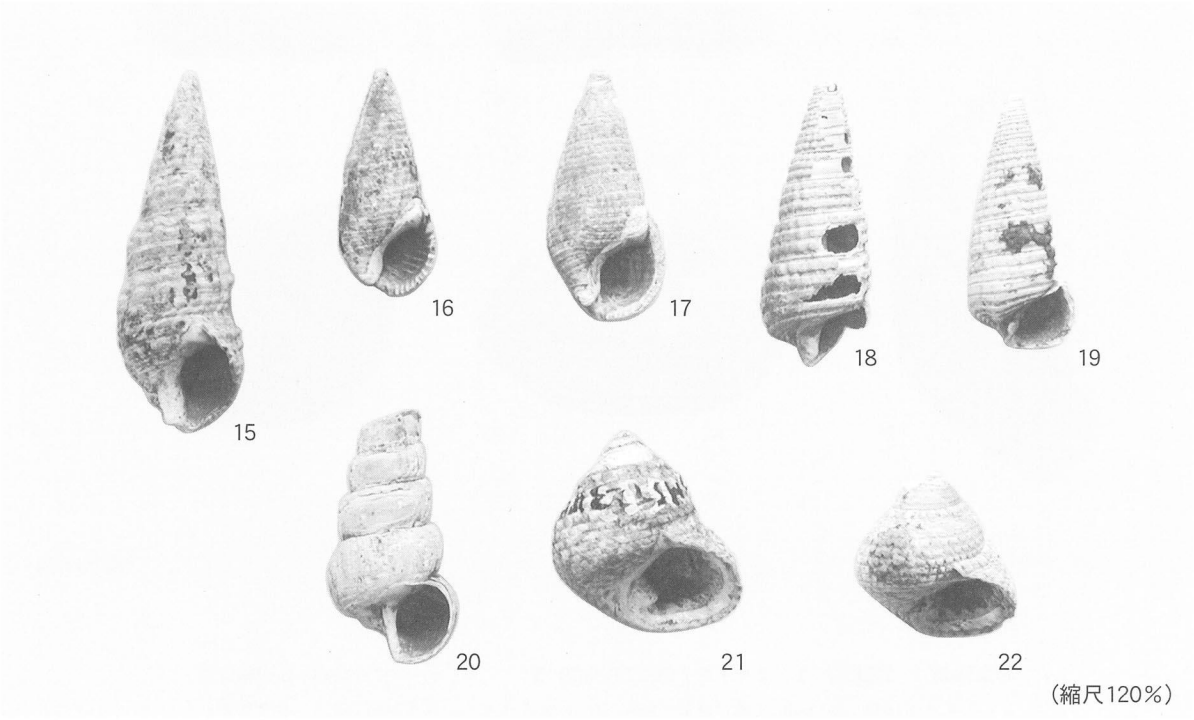
＊Noは、集計の際に設定した個体番号
＊左右:L=左、R=右、M=中央部　重量の単位:g　成長:f=化骨済、uf=未化骨
＊備考欄の数値は計測値. 計測場所と記号は、(Driesch 1976)に従った.



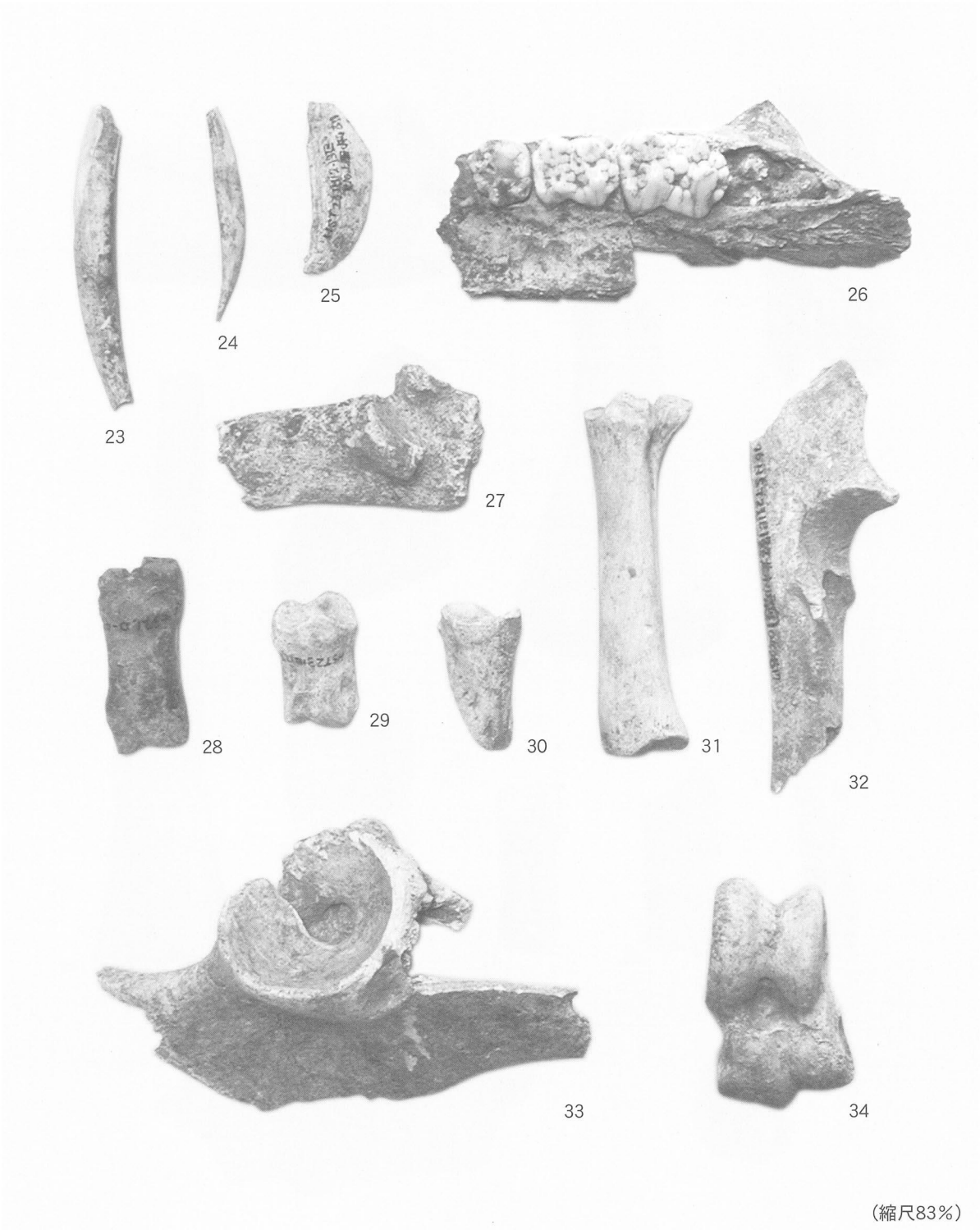
写真図版１　貝類①　１・２ハイガイ（875：R・939：R）　３・４ハマグリ（883：L・887：R）
５～７マガキ（914：R・915：L礫に付着・963：R）　８カリガネエガイ（891：L）　９ウネナシトマヤガイ（969：R）　10イチョウシラトリ（949：L）　11ナミマガシワ（960）



写真図版２ 貝類②　12アカニシ（871：有棘）　13アカニシ（873：無棘）　14イボニシ（947）



写真図版３ 貝類③　15イボウミニナ（866）　16・17ウミニナ（903・908）　18・19カワアイ（897・967）　20クロヘナタリ（970）　21・22イシダタミ（909・948）

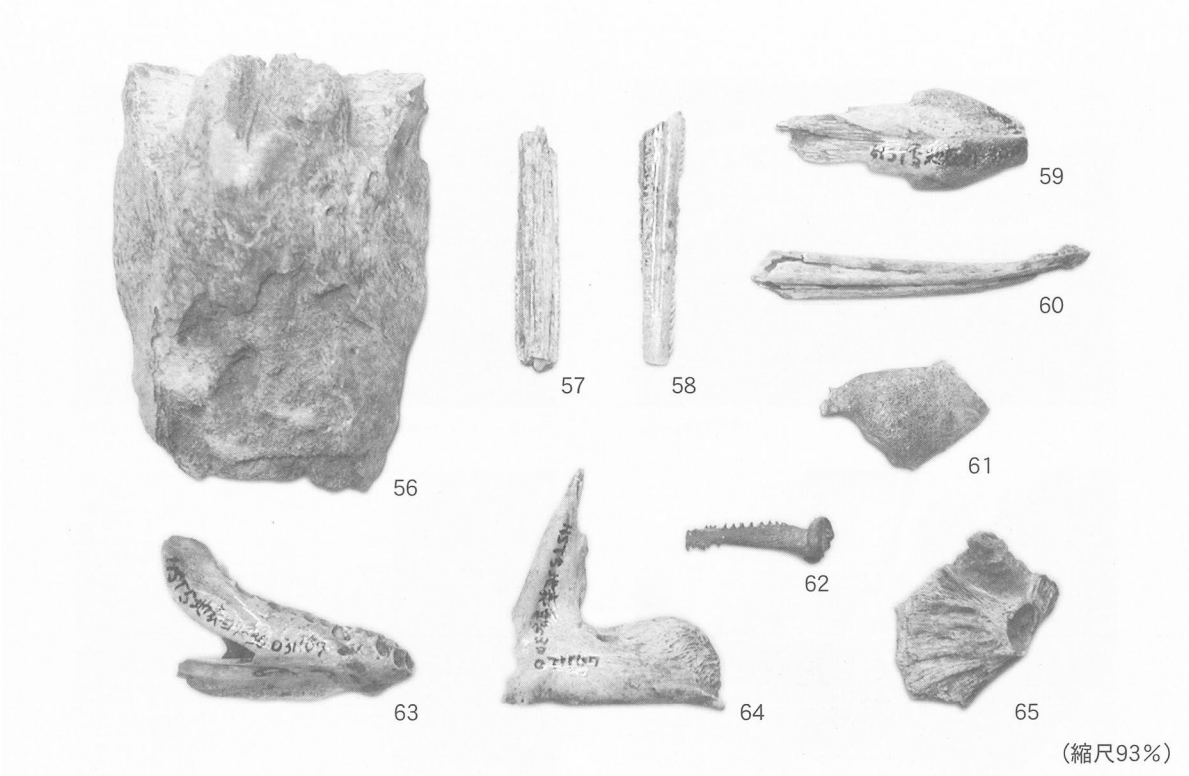


（縮尺83％）

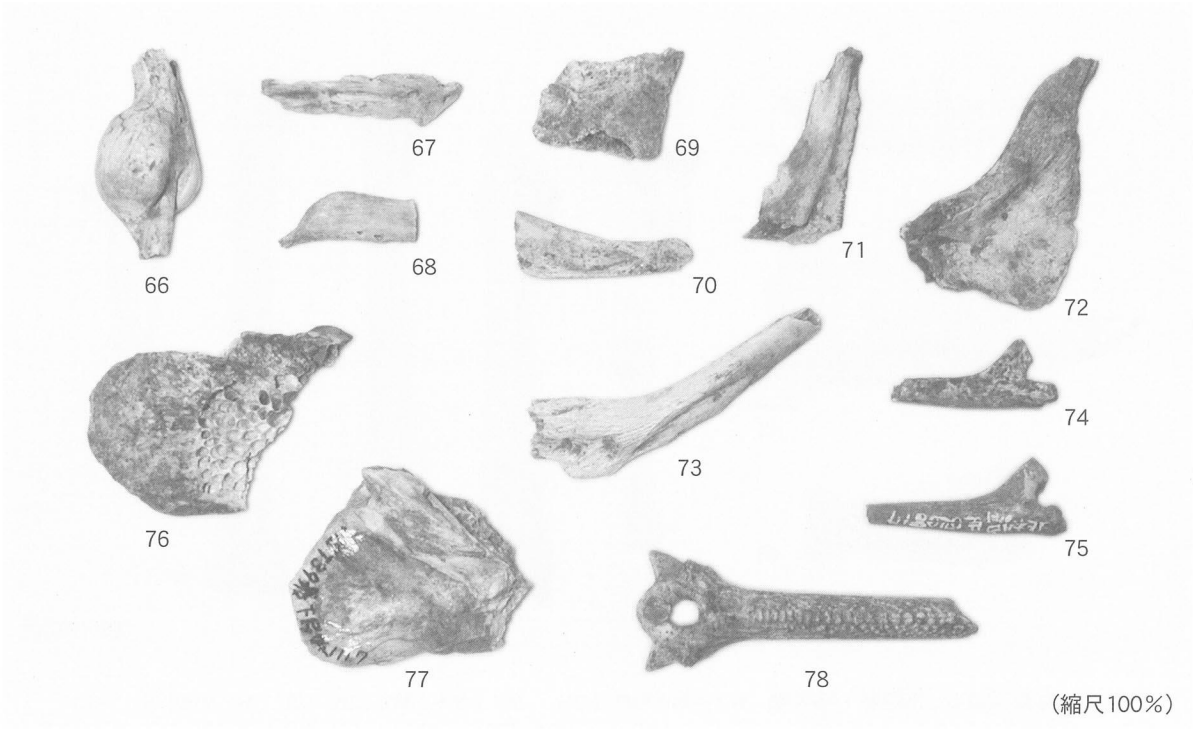
写真図版４ イノシシ　23下顎切歯（2184：L、I２）　24下顎乳切歯（2150：R、di2）　25上顎犬歯（2147：R、メス）　26上顎骨（2316：L、P４～M３）　27踵骨（2138：L）　28基節骨（2394）　29中節骨（2141）　30末節骨（2143）　31第３中足骨（2077：R）　32尺骨（2185：R）　33寛骨（2251：L）　34距骨（2378：R）

写真図版５　ニホンジカ　35鹿角（2237）　36上顎後臼歯（2309：R、M１）　37下顎骨（2074：R、P２～M２）　38上腕骨（2380：R）　39肩甲骨（2413：R）　40中足骨（2284：R）　41中手骨（2137）　42中節骨（2174）　43距骨（2395：L）　44脛骨（2379：L）　45中手骨もしくは中足骨（2291）　46踵骨（2253：L）

写真図版６　甲殻類・哺乳類　47カニ類可動指（2120）　48ノウサギ下顎骨（2262：L）　49ノウサギ腸骨（2425：L）　50ノウサギ踵骨（2418：L）　51ノウサギ中手骨（2427：R、第５）　52ノウサギ大腿骨（2423：R）　53ノウサギ脛骨（2421：R）　54ノウサギ脛骨（2419：L）　55タヌキ尺骨（2330：R）



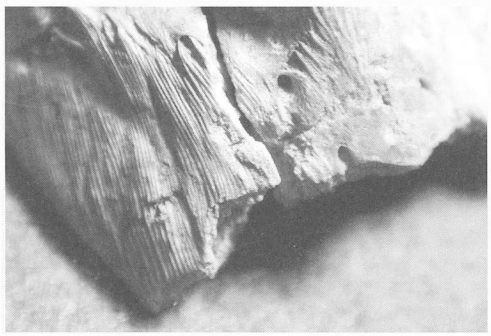
写真図版７　魚類①　56マダイ前頭骨（2167）　57・58トビエイ上科尾棘（2226・2209）　59ハモ属頭骨（2090）　60ハモ属歯骨（2300：R）　61ハモ属主鰓蓋骨（2109：L）　62ナマズ胸鰭棘（2392：L）　63クロダイ属歯骨（2093：R）　64クロダイ属前上顎骨（2092：L）　65ボラ科主鰓蓋骨（2393：L）



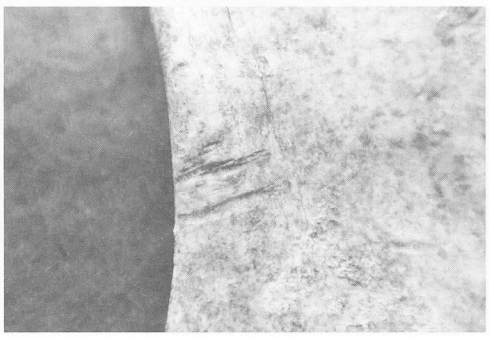
写真図版８ 魚類②・その他　66タイ科椎骨（2107）　67マダイ亜科歯骨（2298：R）　68マダイ亜科前上顎骨（2437：R）　69スズキ主鰓蓋骨（2244：R）　70スズキ主上顎骨（2246：L）　71スズキ前鰓蓋骨（2111：R）　72スズキ擬鎖骨（2301：R）　73コチ属角舌骨（2389：R）　74・75ギマ胸鰭棘（2232・2181）　76・77不明魚類　78不明魚類背鰭棘

No. 1 イノシシ肩甲骨の解体痕　（個体No.2101）

No. 2 ニホンジカ距骨の解体痕　（個体No.2395）



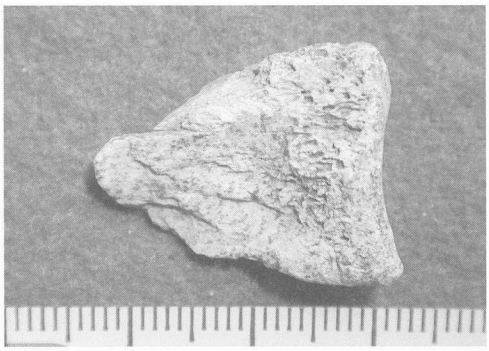
No. 3 マダイ前頭骨の解体痕　（個体No.2414）



No. 4 ニホンジカ下顎骨の解体痕　（個体No.2099）

写真図版９ 人為的痕跡観察写真１

No. 5 ニホンジカ脛骨の解体痕　（個体No.2379）



No. 6 ニホンジカ中足骨の打割痕　（個体No.2369）

No. 7 イノシシ側頭骨の解体痕　（個体No.2258）

No. 8 イノシシ尺骨の解体痕　（個体No.2185）

No. 9 イノシシ下顎骨の解体痕　（個体No.1936）

No.10 ニホンジカ鹿角の加工痕　（個体No.2237）

No.11 イノシシ橈骨の解体痕　（個体No.2359）

No.12 イノシシ橈骨の打割痕　（個体No.2359）

写真図版10 人為的痕跡観察写真２

附章３　彦崎貝塚および岡山城出土魚類の炭素・窒素同位体分析

石丸恵利子（京都大学大学院　人間・環境学研究科　博士後期課程）
米田　穣（東京大学大学院　新領域創成科学研究科）
柴田康行（独立行政法人国立環境研究所）
松井　章（独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所）
陀安一郎（京都大学　生態学研究センター）

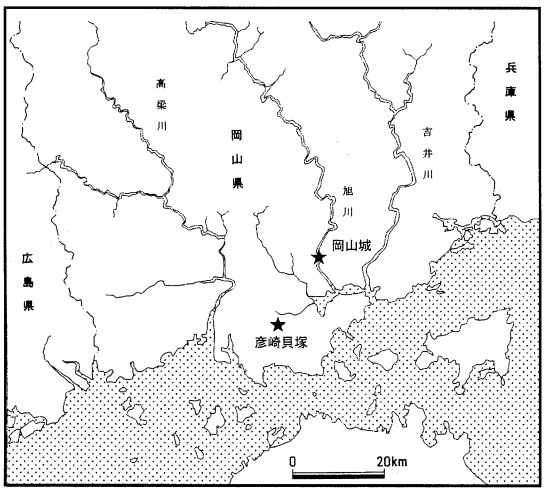
１．はじめに

彦崎貝塚は、岡山市灘崎町に所在する縄文時代の貝塚遺跡であり、岡山城は、岡山市丸の内に所在する近世の城館遺跡である。両遺跡からは豊富な海産魚類が出土しており、当時の漁労活動の様相や海産資源の流通に関する情報を我々に与えてくれる。本稿では、彦崎貝塚および岡山城出土魚類の炭素・窒素同位体分析の結果について報告する。

２．分析の目的

炭素・窒素同位体分析は、生命活動の営みの中で食事をとることなどにより食物に含まれているタンパク質が、その食物を摂取した動物の体組織の形成のために利用され、同位体組成はその動物の体組織に残存する原理を利用して、ヒトの食性の復元研究に利用されている（南川1993・2001、米田2002・2006など）。

本研究は、海域や時代によって魚類の食生態に影響する食物連鎖に同位体組成の相違が存在するならば、魚の体組織にも差が認められるであろうことを期待して試みているものであり、魚類の運搬ルートや交流地域の特定などについて具体的な議論を可能にするために、海産魚類の産地を推定するひとつの方法として取り組んでいる研究である。これまでに行った現生骨格標本（マダイ、クロダイ、スズキ）による分析の結果、瀬戸内海、日本海、太平洋の各海域で値が異なり、特にδ^{15}N値の高低が海域を特定する指標にできる可能性を指摘しており（石丸・海野・陀安2005・2006など）、今後は遺跡出土のサンプルでの分析データの蓄積による追究が必要である。今回、彦崎貝塚出土魚類の分析をする機会を得たため、その結果について報告する。また、時代は異なるが近接する岡山城本丸下の段出土資料の分析結果についても比較資料として合わせて報告したい（第１図）。



第１図　遺跡分布図　（田嶋2006）より作成

３．試料と方法

分析を行った魚種は、マダイ、クロダイ、スズ

第１表　炭素・窒素同位体分析試料一覧

NO	遺跡名	魚種	部位	左右	出土地点	時期	重量(g)
1	彦崎貝塚	マダイ	前頭骨	中央	T14　3層	縄文後期後葉	0.70
2	彦崎貝塚	クロダイ	前上顎骨	左	T14　5層	縄文中期	0.65
3	彦崎貝塚	スズキ	角骨	左	T14　4層	縄文後期中葉～後葉	0.48
4	岡山城	マダイ	歯骨	右	井戸 SE3	江戸(慶長後半～寛永)	0.54
5	岡山城	マダイ	前上顎骨	左	井戸 SE3	江戸(慶長後半～寛永)	0.58
6	岡山城	マダイ	前上顎骨	左	井戸 SE3	江戸(慶長後半～寛永)	0.56
7	岡山城	クロダイ	前上顎骨	左	井戸 SE3	江戸(慶長後半～寛永)	0.89
8	岡山城	スズキ	歯骨	左	井戸 SE3	江戸(慶長後半～寛永)	0.66
9	岡山城	スズキ	主鰓蓋骨	右	井戸 SE3	江戸(慶長後半～寛永)	0.49

＊重量は、骨コラーゲン抽出に使用した分量

キの３種の合計９サンプルである（第１表）。分析を行うには、まずサンプルより骨コラーゲンの抽出処理を行う必要があり、独立行政法人国立環境研究所にて実施した。まず、サンプル0.4gから0.9gを純水でよく洗浄した後、水酸化ナトリウムを加えてアルカリ可溶性の土壌有機物を取り除いた。次に、凍結乾燥および粉砕した後、セルロースチューブ内で塩酸と穏やかに反応させ、無機分画および酸とアルカリに溶けない土壌有機物を取り除く。さらに、残存分画をブロックヒーターにて90℃に加熱し、ゼラチン化させてコラーゲンを抽出した。その後、ろ過したものを真空凍結乾燥した（Yoneda et al. 2002を一部改変）。上述の手順に従って抽出したコラーゲン約１mgをスズカップに採取し、京都大学生態学研究センターにおいて元素分析計を前段にそなえた同位体比質量分析装置（Finnigan MAT Delta-S）を使用して炭素・窒素同位体分析を行った。通常の測定にともなう誤差は、炭素で0.08（SD）‰、窒素で0.12（SD）‰である。

４．結果

分析の結果、いずれのサンプルのC／N比も現生動物のコラーゲンが示す範囲（2.9～3.6）から外れておらず、変成を受けていない良好な資料であるといえる（第２表）。両遺跡のδ^{13}C値とδ^{15}N値を現生標本の分析で得られた値と魚種ごとに比較すると、マダイでは現生資料と比べてδ^{15}N値はほぼその範囲内であるが、δ^{13}C値がやや高い傾向がうかがえる（第２図）。クロダイでは、δ^{13}C値とδ^{15}N

第２表　遺跡出土魚類のδ^{13}C、δ^{15}N分析結果

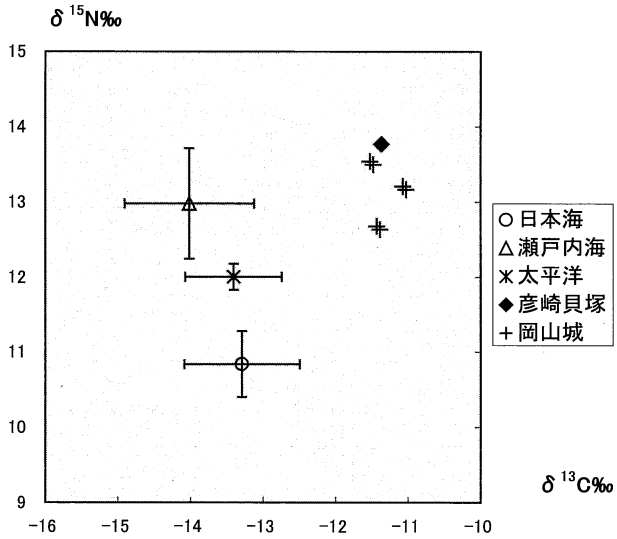
NO	遺跡名	魚種	C/N	δ^{13}C(‰)	δ^{15}N(‰)
1	彦崎貝塚	マダイ	3.5	−11.4	13.8
2	彦崎貝塚	クロダイ	3.3	−12.3	12.7
3	彦崎貝塚	スズキ	3.5	−8.7	12.9
4	岡山城	マダイ	3.2	−11.4	12.7
5	岡山城	マダイ	3.3	−11.5	13.5
6	岡山城	マダイ	3.3	−11.1	13.2
7	岡山城	クロダイ	3.4	−11.4	11.0
8	岡山城	スズキ	3.3	−12.0	15.2
9	岡山城	スズキ	3.3	−11.7	14.6

＊NOは第４表と一致
＊δ値の‰は千分率

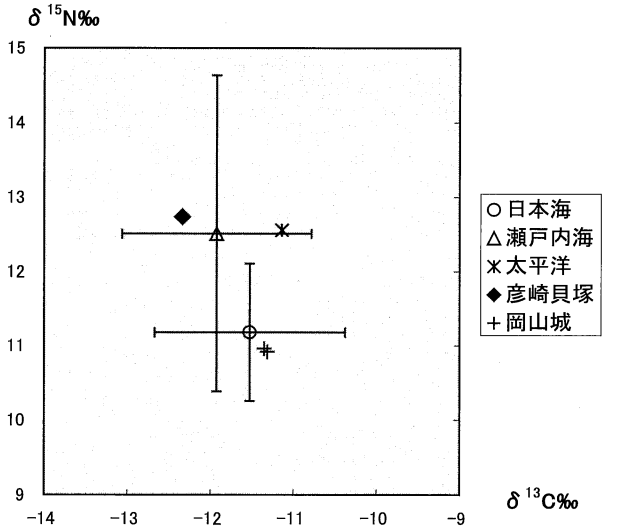
値ともに現生資料の値の範囲内であった（第３図）。スズキでは、彦崎貝塚がややδ^{13}C値が高い傾向が認められるが、その他の点においては現生資料の値の範囲内であるといえる（第４図）。δ^{15}N値に関しては、時代とともに海域の富栄養化などの影響で現生のほうが高いことが想定されたが、いずれの魚種においてもδ^{15}N値は現生資料の値の範囲内であり、縄文時代から近世、現代にかけての長い時間経過の中で瀬戸内海に生息する魚類の栄養段階はあまり大きな変化をしていないことが指摘できる。また、δ^{13}C値に関しても、海水温の差や栄養段階によって値が異なるとされるが、マダイでは彦崎貝塚、岡山城ともに近い値が得られたが、クロダイでは彦崎貝塚のほうが１‰程度低く、スズキでは３‰程度高い値が得られた。これらの差は、漁獲の季節差などを示している可能性も指摘できるが、今後分析データを増加するとともに様々な研究分野からの検討が必要である。

今回の分析資料は、いずれの遺跡のものも恐らく瀬戸内海産の魚であると考えられるが、マダイに関しては、海域の指標になるδ^{15}N値はともに瀬戸内海の値に近く、スズキに関しても岡山城のものは瀬戸内海の値に近いことが指摘できる。彦崎貝塚の資料は各魚種１サンプルのみの分析であるため、今後分析データの増加が必須である。クロダイに関しては、現生標本においてもδ^{15}N値は瀬戸内海の値にはひらきが大きく、日本海との区別が困難であるが、岡山城のものも瀬戸内海の値の範囲内ではあるが、彦崎貝塚のものに関しては瀬戸内海のものであるといえよう。

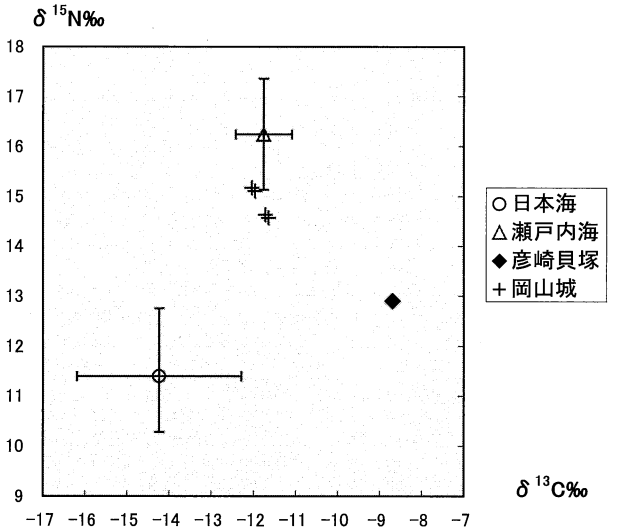
以上のことから、マダイに関しては、分析値からいずれも瀬戸内海産のものであることが指摘できる。中世以降の交通網の発



第２図　マダイの現生および遺跡サンプルのδ^{13}C、δ^{15}N



第３図　クロダイの現生および遺跡サンプルのδ^{13}C、δ^{15}N



第４図　スズキの現生および遺跡サンプルのδ^{13}C、δ^{15}N

達によって、海産魚類は遠隔地にまで運ぶことが可能となり、内陸部の遺跡でも多く出土するようになる。特に大型のマダイの出土が目立つ傾向がうかがえる。岡山城のマダイやスズキは、分析値からみても瀬戸内海で漁獲されたものであったといえる。また、縄文時代の彦崎貝塚出土の魚類については、いずれも瀬戸内海産の魚であったと考えられ、マダイとクロダイについては分析値からもそのことがうかがえる。しかし、スズキについてはδ^{15}N値が瀬戸内海の値より低いため、岡山城のクロダイを含めて、使用した資料の体長や現生標本の値の再評価など、各地域および各時代の分析データの増加とともに再検討していきたい今後の課題である。

５．おわりに

これまで魚類の産地同定のために基礎研究として行ってきた現生標本による炭素・窒素同位体分析の結果に、今回遺跡サンプルを分析する機会を得たことによって、その有効性を確認することができた。遺跡サンプルの分析結果から、縄文時代から現代にかけてのδ^{13}Cとδ^{15}N値には富栄養化などによる大きな変化は認められず、瀬戸内海産の現生魚類の分析値と近似するデータが得られた。しかし、日本海や太平洋沿岸の遺跡との比較や、時間的な細かい値の変動の有無など、時間的にも地域的にも、また別の魚種についても遺跡資料の分析データを増加する必要があり、炭素・窒素同位体分析による産地同定研究については今後さらに追究していきたい。

最後に、炭素・窒素同位体分析のために貴重な魚類サンプルの提供を快く承諾していただいた、岡山市教育委員会の草原孝典氏、田嶋正憲氏に記して心より感謝申し上げる次第である。なお、本稿における遺跡出土魚類の炭素・窒素同位体分析は、財団法人三島海雲記念財団平成17年度学術奨励賞の研究助成による研究成果の一部である。

－参考文献－

石丸恵利子・海野徹也・陀安一郎　2005「動物遺存体の産地同定に関する研究－魚類の炭素・窒素同位体分析の試み－」第９回動物考古学研究集会研究発表

石丸恵利子・海野徹也・陀安一郎　2006「動物遺存体の産地同定に関する基礎研究－現生魚類の炭素・窒素同位体分析－」日本文化財科学会第23回大会研究発表

Ishimaru E., Umino T., Yoneda M., Tayasu I. 2006 Identification of origin of faunal remains : carbon and nitrogen isotope analysis of marine fishes ICAZ (International Council for Archaeozoology) 10th Conference

石丸恵利子・米田穣・柴田康行・陀安一郎　2006「海産魚類の産地同定－西日本出土遺存体の分析結果（その１）－」第10回動物考古学研究集会研究発表

田嶋正憲ほか編著　2006『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会

南川雅男　1993「アイソトープ食性解析法」『第四紀学試料研究法』第四紀学会編　東京大学出版会　404-414頁

南川雅男　2001「炭素・窒素同位体分析により復元した先史日本人の食生態」『国立歴史民俗博物館研究報告』第86集　333-357頁

米田穣　2002「古人骨の化学分析からみた先史人類集団の生業復元」『先史狩猟採集文化研究の新しい視野』国立民族学博物館調査報告33　249-255頁

米田穣　2006「古人骨の化学分析による先史人類学－コラーゲンの同位体分析を中心に－」*Anthropological Science*（*Japanese Series*）Vol.114, pp5-15

Minoru Yoneda, Atsushi Tanaka, Yasuyuki Shibata and Masatoshi Morita 2002 Radiocarbon Marine Reservoir Effect in Human Remains from the Kitakogane Site, Hokkaido, Japan *Journal of Archaeological Science* 29. pp529-536.

附章４　彦崎貝塚出土石器石材について

白石　純（岡山理科大学　自然科学研究所）

１．はじめに

彦崎貝塚から出土している石器石材のうち90%がサヌカイト（安山岩）を使用して石器製作が行われている。そして、このサヌカイトの原産地としては、西日本にいくつかの産地が現在までにわかっている。この分析では、彦崎貝塚で用いられているサヌカイト製石器の石材がどこの原産地原石を使用して製作されたか理化学的な石材分析を実施し産地推定を行った。また、石棒の石材として使用されている結晶片岩の原産地についても検討した。なお、この石材は遺跡内で0.3%の使用頻度である。

２．分析方法および試料

分析は蛍光Ｘ線分析法で実施した。この分析法は石器石材に含まれる成分（元素）量を測定するもので、その成分量の違いから石材の産地を推定する方法である。また、分析装置の特徴は、分析試料の作製が簡単で、測定も短時間のため、多量に試料を分析するのに有効である。なお、サヌカイト製石器の表面は風化がある程度進んでいると、その石材の定量性が劣ることがあるため表面の風化部分をエアーブラシにより削る必要がある。また、結晶片岩製石器は、乳鉢により粉末にしたものを測定試料とした。そのため一部破壊分析である。

測定装置は、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、SiO_2・TiO_2・Al_2O_3・Fe_2O_3・MnO・MgO・CaO・Na_2O・K_2O・P_2O_5の10元素を測定した。表１の出土試料分析値一覧表からTiO_2（チタン）、Fe_2O_3（鉄）、CaO（ｶﾙｼｳﾑ）、K_2O（カリウム）の各元素に顕著な違いがみられる。そこでFe_2O_3/TiO_2比、K_2O/TiO_2 比、K_2O/CaO比をとりXY散布図を作成し、産地推定を行った。

彦崎貝塚出土石器の分析試料は表１に示した142点で、そのうちサヌカイトが140点、結晶片岩が２点である。時期はサヌカイトが前期から晩期まで、結晶片岩は前期と中期の試料である。

また、結晶片岩の産地推定では、原産地試料として表２に示した４ヶ所の原産地を分析した。

３．分析結果

第１図$K_2O/TiO_2-Fe_2O_3/TiO_2$散布図は、サヌカイトの原産地分布域を示している。この散布図に彦崎貝塚出土の前期から晩期までの石器をプロットすると、すべて香川県坂出市金山東の原産地分布範囲に分布した。したがって、貝塚出土のサヌカイト製石器は、時期に関係なくすべて金山東産と推定される。

第２図K_2O/CaO－Fe_2O_3/TiO_2散布図は、結晶片岩の原産地分布域を示している。この散布図では、原産地が大きく３つに分類できる。それは、三重県宮川柳原原産地、三重県櫛田川栃川橋原産地、徳島県貞光原産地と三重県櫛田川栃川橋原産地、三重県櫛田川七日市原産地、和歌山県海南市且来原産地、橋本市原産地、徳島市眉山原産地、貞光原産地と徳島市眉山原産地である。したがって、各地域（三重、和歌山、徳島の各地域）でまとまる傾向はみられなかった。次に、この原産地の散布図に彦

崎貝塚出土の石器をプロットすると、第３図$K_2O/CaO-Fe_2O_3/TiO_2$散布図のように、141（中期前半）は三重・徳島の分布域に、142（彦崎ＺＩ）は三重・和歌山・徳島分布域に分布した。

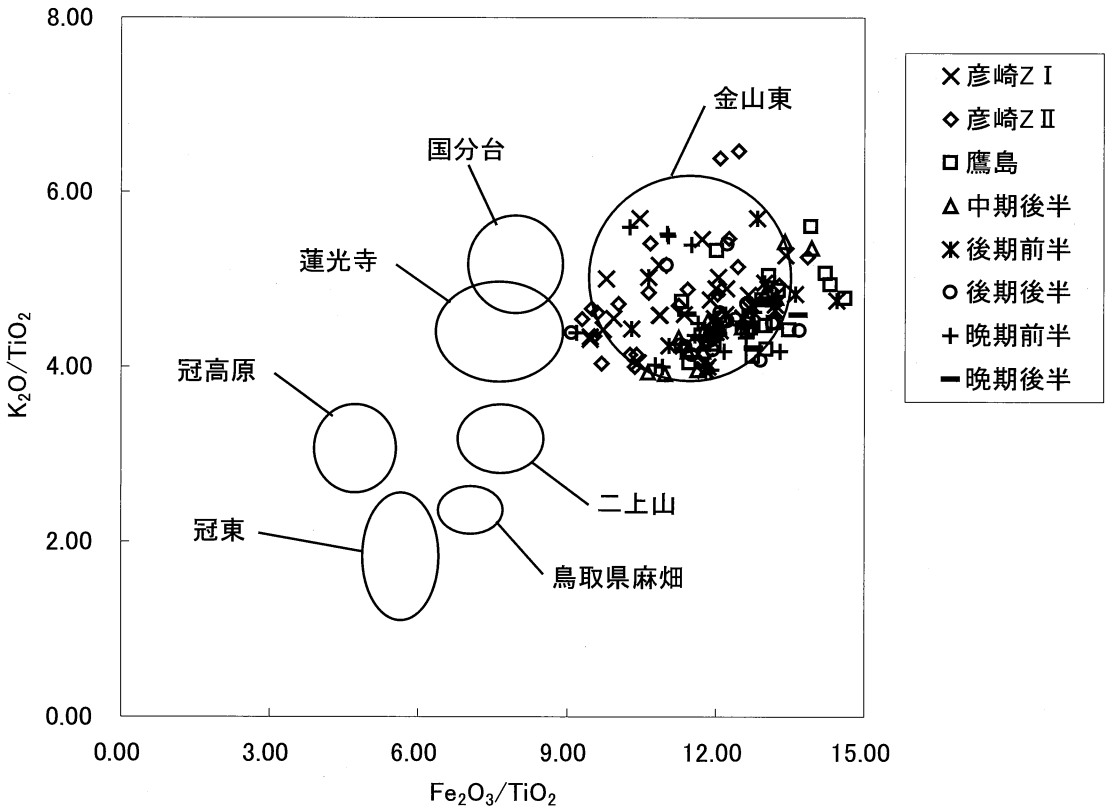
４．おわりに

彦崎貝塚出土のサヌカイトおよび結晶片岩製石器石材の原産地推定を実施したところ、サヌカイトに関しては、石器の時期に関係なくすべて金山東産と推定された。また、結晶片岩の産地推定では、原産地（三重県、和歌山県、徳島県）が各地域でまとまらず原産地の分類が困難であった。そのため、彦崎貝塚出土石器の産地を推定することができなかった。その他の分析方法（Ｘ線回折法、偏光顕微鏡観察法）により再検討する必要がある。今後の課題としたい。

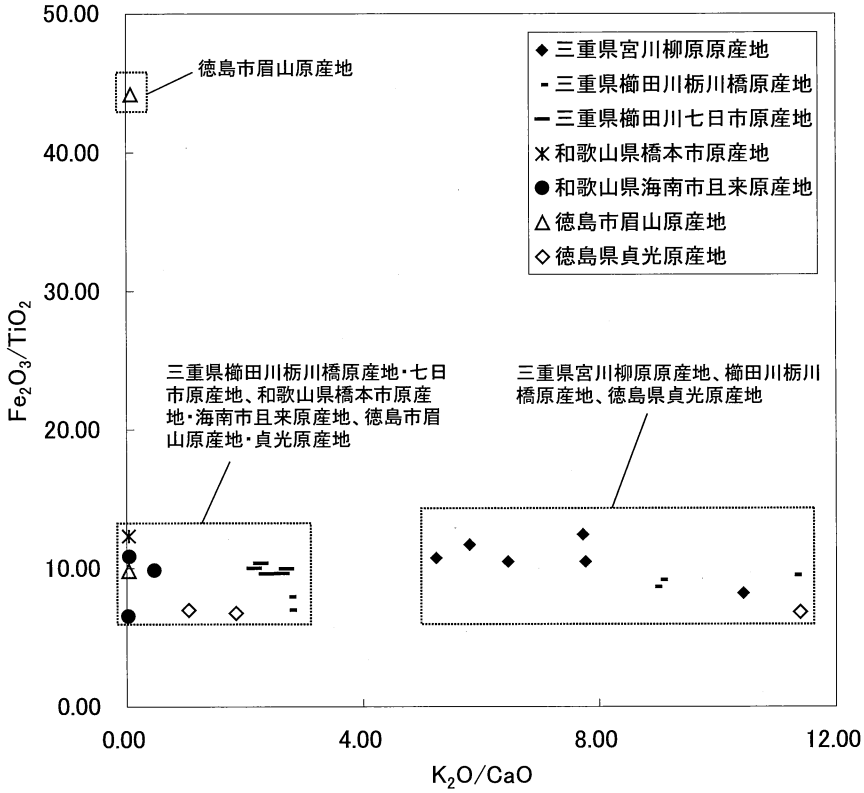
この分析を実施するにあたり、以下の方々や機関にお世話になった。末筆ではありますが記して感謝いたします。

和歌山県教育委員会、和歌山県紀の川市教育委員会

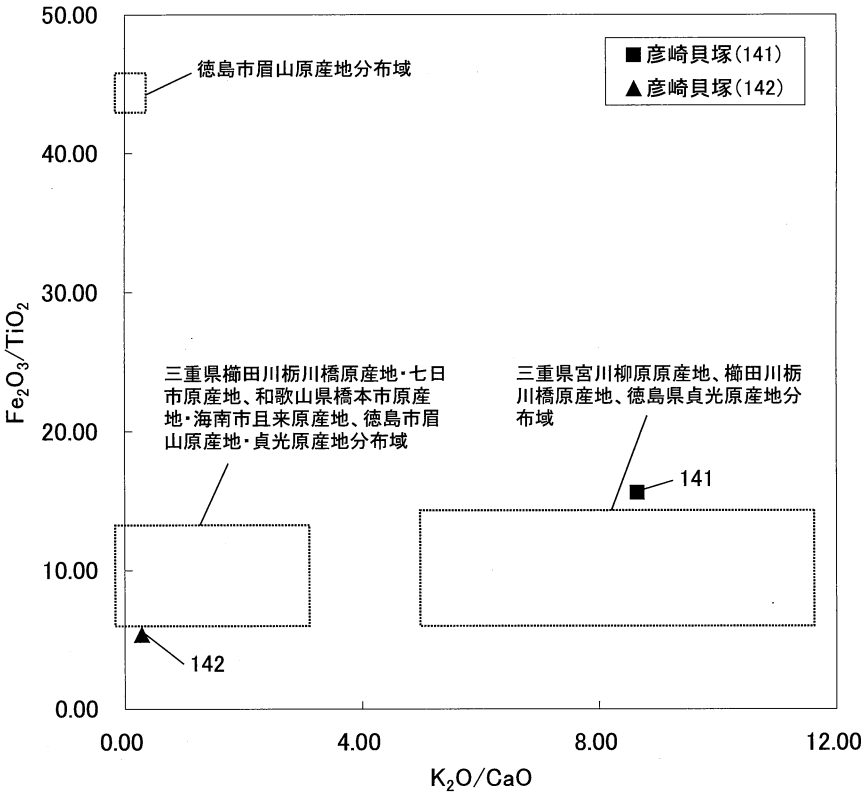
大野　薫氏、小倉徹也氏、田嶋正憲氏、立岡和人氏、中村　豊氏、渡辺今日子氏



第１図　彦崎貝塚出土サヌカイト製石器の原産地推定



第２図　結晶片岩原産地の比較



第３図　彦崎貝塚出土石器の産地推定

表１　彦崎貝塚出土石器の分析値一覧表

単位：SiO_2～P_2O_5（％）

試料番号	トレンチ名	出土遺構・層位	時期	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	材質
1	T9	12	彦崎ZⅠ	63.59	0.44	17.31	5.97	0.15	1.66	4.05	4.37	2.12	0.04	サヌカイト
2	T5	5.6	彦崎ZⅠ	64.12	0.44	17.63	6.33	0.17	1.44	4.25	2.92	2.21	0.08	サヌカイト
3	T5	5.6	彦崎ZⅠ	63.80	0.48	18.32	5.68	0.15	2.45	3.89	3.16	1.92	0.10	サヌカイト
4	T5	5.6	彦崎ZⅠ	64.22	0.59	17.46	5.89	0.17	1.64	3.91	3.73	2.16	0.14	サヌカイト
5	T5	5.6	彦崎ZⅠ	62.01	0.47	17.98	5.94	0.14	2.47	4.17	4.60	1.91	0.01	サヌカイト
6	T5	5.6	彦崎ZⅠ	64.18	0.45	17.32	6.10	0.15	1.47	4.11	3.44	2.20	0.10	サヌカイト
7	T5	5.6	彦崎ZⅠ	63.76	0.52	17.73	5.44	0.13	2.54	3.50	3.96	1.96	0.00	サヌカイト
8	T23	7	彦崎ZⅠ	63.81	0.52	17.84	6.42	0.15	1.48	4.81	2.46	2.10	0.00	サヌカイト
9	T5	5.6	彦崎ZⅠ	64.70	0.41	17.53	6.05	0.15	1.34	4.19	3.00	2.16	0.09	サヌカイト
10	T23	7	彦崎ZⅠ	63.66	0.44	18.01	5.16	0.13	2.51	3.60	3.52	2.40	0.05	サヌカイト
11	T5	5.6	彦崎ZⅠ	64.48	0.46	17.33	6.47	0.17	1.41	4.33	2.79	2.19	0.03	サヌカイト
12	T5	5.6	彦崎ZⅠ	59.62	0.59	18.94	7.85	0.22	1.16	5.68	2.43	2.04	0.20	サヌカイト
13	T5	5	彦崎ZⅠ	64.65	0.57	17.49	6.04	0.15	1.42	3.98	3.25	2.14	0.09	サヌカイト
14	T5	4	彦崎ZⅠ	64.15	0.45	17.55	6.00	0.16	1.60	3.94	3.43	2.20	0.19	サヌカイト
15	T5	5.6	彦崎ZⅠ	64.43	0.58	17.45	6.21	0.16	1.55	4.04	2.95	2.20	0.07	サヌカイト
16	T5	5.6	彦崎ZⅠ	65.47	0.51	15.56	5.54	0.10	2.66	4.00	3.25	2.13	0.03	サヌカイト
17	T5	5.6	彦崎ZⅠ	64.63	0.48	17.24	6.22	0.17	1.54	4.07	3.02	2.20	0.11	サヌカイト
18	T5	5.6	彦崎ZⅠ	64.19	0.56	17.53	6.07	0.15	1.66	4.05	2.89	2.55	0.15	サヌカイト
19	T5	5.6	彦崎ZⅠ	63.01	0.54	17.71	6.29	0.15	1.58	4.03	3.95	2.20	0.17	サヌカイト
20	T5	5.6	彦崎ZⅠ	64.12	0.49	17.49	6.17	0.16	1.54	4.23	3.17	2.25	0.17	サヌカイト
21	T14	8.9	彦崎ZⅡ	63.74	0.56	17.58	6.32	0.16	1.45	4.25	3.22	2.16	0.11	サヌカイト
22	T14	10	彦崎ZⅡ	63.57	0.46	17.46	6.04	0.16	1.31	4.11	4.20	2.22	0.17	サヌカイト
23	T14	8.9	彦崎ZⅡ	64.72	0.55	17.47	6.33	0.16	1.37	4.13	2.63	2.22	0.09	サヌカイト
24	T14	8	彦崎ZⅡ	62.33	0.40	17.97	5.54	0.14	2.09	3.77	5.33	2.10	0.01	サヌカイト
25	T14	10	彦崎ZⅡ	63.87	0.59	17.46	5.67	0.15	1.58	3.95	4.06	2.22	0.05	サヌカイト
26	T8	2	彦崎ZⅡ	64.38	0.52	17.27	6.05	0.14	1.55	4.03	3.54	2.18	0.07	サヌカイト
27	T8	2	彦崎ZⅡ	64.87	0.50	17.53	6.32	0.16	1.36	4.30	2.37	2.24	0.09	サヌカイト
28	T8	2	彦崎ZⅡ	64.17	0.44	17.43	6.23	0.16	1.47	4.17	3.26	2.18	0.17	サヌカイト
29	T14	10	彦崎ZⅡ	64.51	0.45	17.44	6.16	0.16	1.38	4.14	3.21	2.19	0.12	サヌカイト
30	T39	3	彦崎ZⅡ	64.19	0.53	17.49	5.94	0.14	1.57	3.92	3.61	2.12	0.17	サヌカイト
31	T8	2	彦崎ZⅡ	63.80	0.57	17.99	5.30	0.12	2.40	3.61	4.07	1.95	0.05	サヌカイト
32	T39	3	彦崎ZⅡ	64.86	0.58	17.28	6.09	0.14	1.51	4.10	2.78	2.25	0.08	サヌカイト
33	T14	8.9	彦崎ZⅡ	63.95	0.53	17.35	6.01	0.15	1.58	4.08	3.56	2.19	0.17	サヌカイト
34	T8	2	彦崎ZⅡ	64.57	0.53	17.39	5.99	0.15	1.50	3.93	3.37	2.19	0.10	サヌカイト
35	T8	2	彦崎ZⅡ	64.13	0.53	17.79	5.32	0.14	2.32	3.59	3.57	2.00	0.01	サヌカイト
36	T39	3	彦崎ZⅡ	62.71	0.42	17.58	6.58	0.14	1.66	4.65	3.50	2.07	0.07	サヌカイト
37	T38	3	彦崎ZⅡ	64.16	0.49	17.62	5.20	0.12	2.30	3.55	4.15	1.93	0.05	サヌカイト
38	T14	8.9	彦崎ZⅡ	64.94	0.53	17.41	5.96	0.14	1.32	3.96	3.20	2.19	0.11	サヌカイト
39	T14	8.9	彦崎ZⅡ	64.05	0.43	17.81	6.35	0.15	1.61	4.26	2.75	2.11	0.06	サヌカイト
40	T14	10	彦崎ZⅡ	62.55	0.41	18.02	6.83	0.19	1.32	4.40	3.20	2.24	0.00	サヌカイト
41	T14	土坑2	鷹島	64.13	0.55	17.91	6.22	0.16	1.40	4.12	2.99	2.16	0.15	サヌカイト
42	T14	土坑2	鷹島	64.17	0.44	17.99	5.27	0.13	2.54	3.53	3.17	1.87	0.05	サヌカイト
43	T14	土坑2	鷹島	64.16	0.43	17.47	5.99	0.15	1.39	3.98	3.60	2.41	0.09	サヌカイト
44	T14	土坑2	鷹島	65.20	0.53	17.42	6.75	0.19	1.26	4.44	1.48	2.18	0.00	サヌカイト
45	T14	土坑2	鷹島	63.26	0.45	18.76	6.57	0.16	1.27	4.41	2.38	2.15	0.05	サヌカイト
46	T14	土坑2	鷹島	62.90	0.45	18.73	5.86	0.15	2.47	3.02	4.42	1.89	0.02	サヌカイト
47	T14	土坑2	鷹島	63.93	0.55	17.69	6.58	0.24	1.27	3.96	2.35	2.39	0.30	サヌカイト
48	T14	土坑2	鷹島	63.25	0.42	17.81	5.53	0.14	2.35	3.86	4.43	1.89	0.05	サヌカイト
49	T14	土坑2	鷹島	63.99	0.46	17.49	5.95	0.15	1.55	3.90	4.03	2.19	0.07	サヌカイト
50	T14	土坑2	鷹島	64.14	0.52	17.63	6.52	0.17	1.41	4.11	2.87	2.31	0.12	サヌカイト
51	T14	土坑2	鷹島	59.46	0.48	19.81	6.10	0.17	1.53	5.22	4.17	2.13	0.40	サヌカイト
52	T14	土坑2	鷹島	62.88	0.45	18.41	6.44	0.16	1.46	4.16	3.18	2.22	0.07	サヌカイト
53	T14	土坑2	鷹島	63.52	0.50	17.64	6.32	0.16	1.41	4.10	3.47	2.20	0.11	サヌカイト
54	T14	土坑2	鷹島	63.83	0.52	17.69	5.96	0.15	1.42	3.78	4.11	2.10	0.04	サヌカイト
55	T14	土坑2	鷹島	63.46	0.48	17.54	6.27	0.17	1.51	4.12	3.63	2.42	0.12	サヌカイト
56	T14	土坑2	鷹島	63.80	0.50	17.92	6.01	0.16	1.59	4.10	2.99	2.66	0.09	サヌカイト
57	T14	土坑2	鷹島	64.05	0.49	17.44	6.37	0.16	1.22	5.10	2.37	2.19	0.30	サヌカイト
58	T14	土坑2	鷹島	65.15	0.46	17.64	6.10	0.15	1.26	4.07	2.51	2.24	0.07	サヌカイト
59	T14	土坑2	鷹島	64.13	0.43	17.55	6.11	0.16	1.35	4.14	3.53	2.18	0.00	サヌカイト
60	T14	土坑2	鷹島	62.58	1.05	17.69	6.74	0.18	1.50	4.91	2.99	2.21	0.05	サヌカイト
61	T14	5	中期後半	55.11	1.02	22.21	8.85	0.25	1.36	6.14	2.22	2.25	0.04	サヌカイト
62	T14	5	中期後半	64.27	0.26	17.45	6.41	0.17	1.49	4.17	2.57	2.46	0.04	サヌカイト
63	T14	5	中期後半	64.39	0.47	17.35	6.21	0.16	1.41	4.12	3.31	2.25	0.05	サヌカイト
64	T14	5	中期後半	63.69	0.52	17.74	5.94	0.14	1.58	4.00	3.80	2.17	0.11	サヌカイト
65	T14	5	中期後半	64.71	0.59	17.87	6.27	0.16	1.34	4.08	2.40	2.23	0.15	サヌカイト
66	T14	5	中期後半	64.31	0.52	17.33	6.16	0.16	1.64	4.13	3.10	2.35	0.07	サヌカイト
67	T14	5	中期後半	64.85	0.53	17.41	6.22	0.15	1.34	4.05	2.81	2.21	0.08	サヌカイト
68	T14	5	中期後半	64.20	0.49	17.61	6.14	0.16	1.51	4.11	2.98	2.18	0.13	サヌカイト
69	T14	5	中期後半	63.98	0.45	17.62	6.03	0.15	1.40	3.90	3.37	2.44	0.15	サヌカイト
70	T14	5	中期後半	64.04	0.53	17.44	6.16	0.16	1.43	3.90	3.84	2.10	0.10	サヌカイト
71	T14	5	中期後半	63.65	0.56	16.28	10.24	0.16	2.72	0.44	3.24	1.91	0.07	サヌカイト
72	T14	5	中期後半	64.22	0.46	17.74	5.97	0.15	1.41	4.06	3.20	2.22	0.08	サヌカイト
73	T14	5	中期後半	63.70	0.48	17.88	5.27	0.13	2.46	3.44	4.30	1.88	0.06	サヌカイト

表２　彦崎貝塚出土石器の分析値一覧表

単位：SiO_2～P_2O_5（％）

試料番号	トレンチ名	出土遺構・層位	時期	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	材質
74	T14	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	63.27	0.48	17.63	6.93	0.18	1.39	4.35	3.07	2.28	0.02	サヌカイト
75	T14	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	64.23	0.51	17.45	6.12	0.16	1.51	4.01	3.46	2.24	0.08	サヌカイト
76	T14	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	64.21	0.48	17.42	6.11	0.15	1.47	4.09	3.43	2.23	0.14	サヌカイト
77	T20	18直上	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	64.57	0.54	17.66	6.37	0.15	1.37	4.20	2.63	2.14	0.06	サヌカイト
78	T14	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	64.93	0.46	17.48	6.26	0.18	1.47	4.16	2.41	2.22	0.09	サヌカイト
79	T14	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	64.65	0.51	17.41	6.16	0.15	1.38	4.04	2.92	2.25	0.08	サヌカイト
80	T14	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	63.45	0.42	18.04	5.39	0.13	2.26	3.66	3.95	2.39	0.06	サヌカイト
81	T14	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	64.61	0.48	17.45	6.23	0.16	1.36	4.07	2.99	2.38	0.01	サヌカイト
82	T14	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	64.53	0.47	17.57	6.20	0.14	1.46	4.18	2.89	2.18	0.08	サヌカイト
83	T14	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	64.41	0.44	17.97	5.37	0.14	2.54	3.65	3.15	2.02	0.15	サヌカイト
84	T20	18直上	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	64.23	0.50	17.69	5.87	0.18	1.42	3.98	3.57	2.13	0.19	サヌカイト
85	T14	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	63.21	0.54	17.77	6.39	0.15	1.30	4.51	3.64	2.16	0.01	サヌカイト
86	T14	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	64.66	0.55	17.45	6.08	0.16	1.34	4.07	3.15	2.33	0.03	サヌカイト
87	T14	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	64.62	0.50	17.27	6.27	0.17	1.38	4.22	2.93	2.28	0.08	サヌカイト
88	T14	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	63.87	0.57	17.32	6.07	0.15	1.49	3.96	3.43	2.86	0.02	サヌカイト
89	T14	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	64.41	0.48	17.50	6.11	0.17	1.34	4.19	3.21	2.26	0.11	サヌカイト
90	T14	18直上	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	64.58	0.46	17.36	6.00	0.13	1.36	3.98	3.34	2.25	0.13	サヌカイト
91	T20	18直上	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	64.10	0.44	17.98	5.27	0.13	2.43	3.72	3.68	2.00	0.04	サヌカイト
92	T20	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	65.09	0.51	16.56	5.25	0.12	1.53	4.08	3.98	2.26	0.07	サヌカイト
93	T14	4	後期前半(彦崎ＫＩ主体)	63.74	0.47	17.65	6.20	0.15	1.47	4.18	3.33	2.21	0.13	サヌカイト
94	T14	3	彦崎ＫⅡ～元住吉山Ⅰ	62.59	0.49	17.48	6.71	0.18	1.43	4.63	3.91	2.16	0.04	サヌカイト
95	T14	3	彦崎ＫⅡ～元住吉山Ⅰ	63.70	0.50	17.58	5.92	0.15	1.60	4.06	4.00	2.14	0.11	サヌカイト
96	T14	3	彦崎ＫⅡ～元住吉山Ⅰ	64.18	0.49	17.66	6.44	0.18	1.31	4.10	2.88	2.20	0.18	サヌカイト
97	T14	3	彦崎ＫⅡ～元住吉山Ⅰ	63.11	0.44	18.16	5.68	0.13	2.67	4.09	3.39	1.79	0.05	サヌカイト
98	T14	3	彦崎ＫⅡ～元住吉山Ⅰ	64.09	0.52	17.22	6.21	0.15	1.53	4.24	3.50	2.18	0.11	サヌカイト
99	T14	動物遺存体埋納土器4	彦崎ＫⅡ	65.32	0.53	17.47	6.26	0.16	1.39	4.18	2.04	2.32	0.05	サヌカイト
100	T14	動物遺存体埋納土器3	彦崎ＫⅡ	64.08	0.49	17.34	6.19	0.16	1.60	4.07	3.45	2.20	0.08	サヌカイト
101	T14	動物遺存体埋納土器4	彦崎ＫⅡ	64.84	0.48	17.69	5.46	0.14	2.38	3.69	3.09	2.03	0.04	サヌカイト
102	T14	3	彦崎ＫⅡ～元住吉山Ⅰ	64.43	0.50	17.36	6.20	0.15	1.42	4.02	3.29	2.27	0.12	サヌカイト
103	T14	3	彦崎ＫⅡ～元住吉山Ⅰ	64.67	0.50	17.31	6.12	0.16	1.38	4.00	3.14	2.26	0.17	サヌカイト
104	T14	3	彦崎ＫⅡ～元住吉山Ⅰ	63.33	0.44	18.01	5.32	0.13	2.43	3.67	3.77	2.03	0.02	サヌカイト
105	T14	3	彦崎ＫⅡ～元住吉山Ⅰ	63.25	0.45	17.66	5.31	0.13	2.31	3.70	3.95	1.93	0.05	サヌカイト
106	T14	3	彦崎ＫⅡ～元住吉山Ⅰ	64.19	0.49	17.59	6.19	0.16	1.42	4.09	3.14	2.31	0.14	サヌカイト
107	T14	3	彦崎ＫⅡ～元住吉山Ⅰ	65.05	0.50	17.06	6.12	0.14	1.33	4.01	2.75	2.70	0.09	サヌカイト
108	T14	3	彦崎ＫⅡ～元住吉山Ⅰ	64.70	0.53	17.55	6.14	0.15	1.41	4.14	2.69	2.25	0.04	サヌカイト
109	T14	3	彦崎ＫⅡ～元住吉山Ⅰ	66.12	0.45	16.72	4.95	0.13	1.49	3.86	3.26	2.32	0.12	サヌカイト
110	T14	3	彦崎ＫⅡ～元住吉山Ⅰ	64.27	0.50	17.31	6.04	0.15	1.68	3.98	3.57	2.28	0.00	サヌカイト
111	T14	動物遺存体埋納土器4	彦崎ＫⅡ	63.28	0.57	17.82	5.18	0.13	2.57	3.37	3.90	1.90	0.10	サヌカイト
112	T14	動物遺存体埋納土器3	彦崎ＫⅡ	63.78	0.57	17.57	6.44	0.16	1.45	4.31	3.15	2.20	0.14	サヌカイト
113	T14	動物遺存体埋納土器3	彦崎ＫⅡ	64.21	0.52	17.48	5.99	0.15	1.46	4.00	3.78	2.15	0.02	サヌカイト
114	T14	2	晩期前半～中葉	64.89	0.54	17.31	6.10	0.16	1.31	3.90	3.21	2.25	0.12	サヌカイト
115	T14	2	晩期前半～中葉	61.32	0.53	18.35	7.05	0.20	1.34	4.46	2.54	2.21	1.04	サヌカイト
116	T14	2	晩期前半～中葉	64.56	0.50	17.30	6.03	0.15	1.43	4.17	3.23	2.21	0.14	サヌカイト
117	T14	2	晩期前半～中葉	64.20	0.50	17.63	5.97	0.16	1.44	4.04	3.42	2.16	0.13	サヌカイト
118	T14	2	晩期前半～中葉	63.30	0.55	17.48	5.93	0.15	1.67	3.91	4.48	2.12	0.02	サヌカイト
119	T14	2	晩期前半～中葉	63.67	0.49	17.39	6.18	0.15	1.54	4.11	3.69	2.12	0.15	サヌカイト
120	T14	2	晩期前半～中葉	64.45	0.51	17.82	5.94	0.14	1.43	3.99	3.00	2.29	0.16	サヌカイト
121	T14	2	晩期前半～中葉	64.43	0.51	17.60	6.06	0.15	1.45	4.05	3.24	2.22	0.05	サヌカイト
122	T14	2	晩期前半～中葉	64.44	0.54	17.21	5.95	0.15	1.46	3.99	2.85	2.98	0.08	サヌカイト
123	T14	2	晩期前半～中葉	64.60	0.57	17.86	5.24	0.12	2.47	3.51	3.40	1.95	0.09	サヌカイト
124	T14	2	晩期前半～中葉	64.43	0.53	17.46	5.85	0.14	1.52	3.81	3.54	2.19	0.13	サヌカイト
125	T14	2	晩期前半～中葉	64.87	0.56	17.40	6.12	0.16	1.44	4.01	2.74	2.24	0.08	サヌカイト
126	T14	2	晩期前半～中葉	64.61	0.52	17.96	5.34	0.13	2.43	3.55	3.22	1.91	0.14	サヌカイト
127	T14	2	晩期前半～中葉	64.91	0.48	17.41	6.13	0.16	1.57	4.03	2.86	2.22	0.01	サヌカイト
128	T14	2	晩期前半～中葉	64.99	0.45	18.02	5.21	0.13	2.45	3.45	3.08	1.96	0.10	サヌカイト
129	T14	2	晩期前半～中葉	63.96	0.52	17.27	5.99	0.14	1.48	4.03	3.42	2.80	0.10	サヌカイト
130	T14	2	晩期前半～中葉	63.57	0.52	17.77	6.33	0.18	1.71	4.13	3.23	2.17	0.00	サヌカイト
131	T14	2	晩期前半～中葉	64.03	0.50	17.88	5.95	0.12	2.40	3.61	3.24	1.98	0.11	サヌカイト
132	T14	2	晩期前半～中葉	63.94	0.50	17.43	5.89	0.14	1.51	3.94	4.00	2.22	0.07	サヌカイト
133	T14	2	晩期前半～中葉	64.18	0.51	17.55	6.07	0.15	1.48	4.00	3.30	2.22	0.09	サヌカイト
134	T14	2直上	晩期後半	64.07	0.47	17.50	6.04	0.16	1.48	4.07	3.02	2.23	0.20	サヌカイト
135	T12	4	晩期後半	64.12	0.47	17.48	6.14	0.15	1.58	4.00	3.29	2.24	0.06	サヌカイト
136	T12	4	晩期後半	64.00	0.50	17.55	6.02	0.15	1.40	4.17	3.41	2.18	0.17	サヌカイト
137	T12	4	晩期後半	64.33	0.46	17.72	6.28	0.17	1.36	4.26	2.77	2.11	0.05	サヌカイト
138	T12	4	晩期後半	63.55	0.47	18.23	5.49	0.15	2.12	3.68	3.94	2.03	0.07	サヌカイト
139	T12	4	晩期後半	63.05	0.49	17.91	6.25	0.16	1.49	4.41	3.74	2.06	0.15	サヌカイト
140	T12	4	晩期後半	65.73	0.44	16.11	5.02	0.07	1.95	4.42	3.36	2.02	0.20	サヌカイト
141	T14	6	中期前半	64.72	0.52	18.13	8.11	0.23	2.36	0.37	2.04	3.20	0.10	結晶片岩
142	T9	4	彦崎ＺＩ	46.02	2.56	16.32	13.68	0.30	2.13	13.28	1.49	3.82	0.14	結晶片岩

表３　結晶片岩原産地原石試料の胎土分析結果一覧表

単位：SiO_2～P_2O_5（％）

試料番号	遺跡名	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	Total
01－1	三重県大台町宮川柳原	64.07	0.72	18.76	7.73	0.26	2.30	0.63	2.05	3.30	0.00	99.82
01－2	三重県大台町宮川柳原	59.68	0.70	21.32	7.34	0.23	2.49	0.59	2.81	4.58	0.00	99.74
01－3	三重県大台町宮川柳原	56.23	0.53	22.01	6.59	0.20	3.34	0.57	5.81	4.40	0.00	99.68
01－4	三重県大台町宮川柳原	62.32	0.87	19.74	7.14	0.21	2.48	0.40	2.51	4.17	0.00	99.84
01－5	三重県大台町宮川柳原	58.86	0.69	19.59	8.06	0.23	2.96	0.60	5.23	3.48	0.01	99.71
01－6	三重県大台町宮川柳原	61.03	0.77	19.94	8.07	0.23	2.47	0.60	2.69	3.87	0.00	99.67
02－1	三重県櫛田川栃川橋	72.71	0.41	15.64	3.76	0.07	1.97	0.21	3.08	1.90	0.08	99.83
02－2	三重県櫛田川栃川橋	72.73	0.47	15.33	3.74	0.07	1.96	0.51	3.58	1.41	0.03	99.83
02－3	三重県櫛田川栃川橋	71.86	0.45	15.74	3.88	0.07	2.14	0.21	3.51	1.88	0.08	99.82
02－4	三重県櫛田川栃川橋	71.53	0.47	16.37	4.45	0.08	1.95	0.19	2.60	2.15	0.06	99.85
02－5	三重県櫛田川栃川橋	72.68	0.50	15.43	3.49	0.06	2.10	0.61	3.32	1.69	0.00	99.88
03－1	三重県櫛田川七日市	65.90	0.64	17.80	6.38	0.13	1.98	1.45	0.61	3.91	0.80	99.60
03－2	三重県櫛田川七日市	65.85	0.62	17.78	5.97	0.10	2.27	1.34	2.20	3.51	0.11	99.75
03－3	三重県櫛田川七日市	71.35	0.45	15.15	4.67	0.11	1.90	0.80	3.38	1.81	0.12	99.74
03－4	三重県櫛田川七日市	71.40	0.49	15.35	4.90	0.09	1.80	0.84	3.06	1.81	0.08	99.82
03－5	三重県櫛田川七日市	71.36	0.46	15.32	4.41	0.09	1.98	0.77	3.51	1.82	0.11	99.83
1	徳島市眉山	53.11	1.79	12.18	17.58	0.32	3.37	9.54	1.42	0.32	0.02	99.65
2	徳島市眉山	53.85	0.50	10.02	22.10	1.66	3.85	3.41	4.11	0.26	0.01	99.77
1	和歌山県橋本市	48.74	1.03	11.69	12.70	0.24	5.06	15.29	4.64	0.49	0.00	99.88
1	和歌山県海南市且来	46.11	2.11	16.65	20.77	0.33	4.17	5.85	0.97	2.75	0.00	99.71
2	和歌山県海南市且来	53.55	1.96	14.42	12.84	0.26	3.23	11.53	0.38	0.34	0.08	98.59
3	和歌山県海南市且来	50.68	1.47	14.80	15.92	0.29	3.92	10.18	2.00	0.46	0.06	99.78
1	徳島県貞光川	70.34	0.47	15.82	3.18	0.05	1.75	1.55	3.79	2.86	0.05	99.86
2	徳島県貞光川	72.84	0.36	15.25	2.46	0.04	1.75	0.33	2.96	3.76	0.11	99.86
3	徳島県貞光川	52.77	1.93	17.87	13.46	0.21	3.13	2.95	4.45	3.10	0.00	99.87

附章５　彦崎貝塚発掘の思い出

池葉須 藤樹（元岡山市立犬島中学校 校長）

平成になって彦崎貝塚周辺は、急速に開発が進み、破壊される心配が出てきた。そこで旧灘崎町（現岡山市）で埋蔵文化財にたずさわる田嶋正憲さんが、何とか国指定の遺跡にしてもらうよう活動をはじめ、今回の発掘調査（平成15・16年度実施）となった。先般その結果が一冊の本にまとまった（平成18年３月刊行）。旧灘崎町（現岡山市）内に国指定に相当する縄文時代の重要な遺跡があることを市民に知ってもらい、その保存・保護の一環として「彦崎貝塚２」として発刊する計画があるので、何か発掘についての思い出を書いて欲しいと依頼があり、半世紀も前の事、その際のメモもなく思い出すまま書くことにした。

私が彦崎貝塚に関係するようになったのは、旧灘崎町立（現岡山市立）灘崎中学校（以下、旧町立、現市立とうことは省略する）に勤務したことが第一の理由です。昭和22年４月に発足したばかりの灘崎中学校に内田保男校長が第一代校長として着任され、学校を卒業したばかりの私に声をかけてくださったのがそもそものはじまりでした。第二の理由は、新しく学習指導要領ができ、社会科が誕生したのです。これは、以前の国史（歴史）・地理・公民等をあわせて一つの教科としたものです。私は、社会科と国語の免許状があった為に社会科を担当することになりました。私達の習った国史では、国のはじまりは、古事記や日本書紀に基づく神話を中心としたもので、天孫降臨にはじまる国史でしたが、これは指導要領から削除され、新しく考古学・人類学などによる成果をもとにした「人類の起源」や遺跡・遺物をもとにした「大昔の人々のくらし」を教えるようにと示されたのです。

当時は、岡山県には玉井さんや大本琢寿さんを中心とした吉備考古学会というものがあって、県内の遺跡めぐりが盛んに行われた。私も毎回参加していました。昭和24年10月20日に大本琢寿さんによって「吉備地方先史時代遺物発見地名表」が発行され、私はそれをもとに遺跡を訪ねたものです。それによると旧灘崎町内には、168灘崎村彦崎木戸口貝塚（西土井を改めて木戸口とす）縄文・弥生。169同村彦崎馬場包含層縄文・弥生。170同村城山トンキ山散布弥生。171同村彦崎西寺単独。172同村彦崎不詳。173灘崎村片岡里谷包含層弥生等の遺跡が記載されている。

岡山市灘崎町片岡里谷に小柳靖さんという人がいて、私は、学生の頃から彼の家にある蔵書を借りるためにしばしば行き来していました。その本は、靖さんの妹（静枝さん）が奈良女子高等師範学校に在学中に読んだもので、西田哲学に関するものが多く、わからぬまま読んでいました。この静枝さんが酒詰仲男先生と結婚され、先生は戦中は飛騨の方へ疎開され、終戦と同時に三鷹にもどっておられましたが、そこも引き払って静枝さんの実家片岡に来られ、児島湾沿岸の貝塚の調査をされていました。月一回位東京大学のほうへ行かれていたようです。たまたま、小柳家に行っていた時、酒詰先生は、邑久郡牛窓町（現瀬戸内市牛窓町）黄島貝塚の発掘を計画しているので行かないかと誘われ、昭和22年の夏休みに行き、先生のご指導を受けたのが発掘のはじめでした。その時、隣では立命館の島田さんも発掘に来ていました。それから、旧灘崎町内の遺跡を調査し、その結果を酒詰先生に報告したところ、先生編集の『貝塚』に「児島湾周辺の貝塚の分布」として載せていただきました。それが『灘崎町史』（昭和31年刊行）に載っている町内の貝塚分布図です。

酒詰先生は、東京大学人類学教室で彦崎貝塚の発掘調査を計画しているので地権者へ発掘許可や宿舎の手配を交渉して欲しいと言われ、私は内田校長と共に彦崎の地主三竿市右衛門氏、三竿香氏と話をまとめ、また貝塚のすぐそばにある若林酒造を先生方の宿舎に決め、いよいよ発掘に取りかかることになったのです。

当時の発掘は、今と違って調査のための費用は、少なく同好の人の労力をもってしなければなりません。そこで前にも申しましたが、その頃中学校では、「大昔の人々のくらし」という単元で社会科学習を進めていた関係もあって、実地に貝塚を発掘することは、生きた学習になるというので、内田校長の了解を得て、灘崎中学校の生徒を授業にさしつかえないよう配慮して、毎回10人ほど連れて発掘に参加したのです。その外有志の者は、当時操山高校生であった間壁忠彦氏、武田（現間壁）葭子氏、井上兼夫氏、天城高校生高橋護氏、関西高校生三杉兼行氏、荘内中学校名合照亀先生と生徒、清心中学校平田英文先生と生徒若干が参加されました。

第一回目の発掘は、昭和23年５月30日と31日の二日間、第二回目は、昭和23年11月、第三回目は、昭和24年８月に実施されました。特に暑い最中の発掘は大変な苦労でした。貝塚だから貝が約50種類ほど出たが、それぞれの貝の名前を酒詰先生は一つ一つ丁寧に教えてくださり、ハイガイとアカニシの違いはどこで見分けるか、それぞれの貝の特徴を手にとって教示されました。珍しい石器が出ると大声をあげて皆を呼んで見せ合った。特に人骨が出た時はほんとうにびっくりした。人骨の発掘には鈴木尚先生が付き添って指導され、私は穴の中に入って言われるまま埋葬された人骨の位置や寸法を計測し、先生がそれをきちんと記録され、最後は先生自身で取り上げられた。この人骨の発掘については生徒は、大昔の埋葬には屈葬・伸展葬・抱石葬等の方法があることを直接見て教える絶好のチャンスでした。大昔の人々の生活用具である遺物の出土については、東大人類から来られた渡辺直経氏、中島寿男氏、田辺義一氏等からそれぞれ詳しく教えていただいた。石匙がでるとこれで獣の皮をはいで料理したとか、マダイ・ブリ・エイ・サワラの骨や釣針や石錘が出ると当時の人々の漁業の方法を知り、イノシシ、シカの骨や石鏃によって狩猟を教えられ、教室では学べないことを直接実物を手に取って学習することができ、生徒は労働を通して生きた学習をすることができたのです。彦崎貝塚から21体の人骨、特に縄文前期の人骨が出土したこと、山内清男先生によって彦崎前期Ⅰ式（ＺⅠ）・彦崎前期Ⅱ式（ＺⅡ）、縄文後期Ⅰ式（ＫⅠ）・後期Ⅱ式（ＫⅡ）の土器編年ができたことは、全国の考古学者の注目する所となったのです。また、当時最新の科学的調査であった電探を利用して渡辺直経氏が貝層の状態やその範囲をしらべられた。その結果については詳しいことは知らない。

私は、昭和25年４月から岡山県教育委員会から東京大学人類学教室へ国内留学することを認められた。そこで、鈴木尚主任教授から、君が過去三回ともたずさわった彦崎貝塚の研究をしてはどうか。指導教官は山内清男先生に指導を受けるようにと言われました。山内先生のご指導を受けながら、大学では文学部考古学教室の駒井先生、石器については八幡先生、人類学教室では鈴木先生、須田先生、民族学の杉浦先生、地理学教室の方へも時々出向いて教えを受けました。考古学の実習では、学生と共に７月７日から一週間、千葉県市川市曽谷貝塚の発掘に参加しました。講義のない時に彦崎貝塚出土遺物の整理にとりかかりました。少ない時間で多量の土器の水洗いから出土地点の記入、土器片の接合、拓本取り、図面づくりと山内先生のご指導をいただきながら一生懸命取り組みました。途中、山内先生が、過去に発掘した笠岡の黒土の整理があるとのことで随行したりしてほんとうに短い時間で十分なまとめ研究もできないまま、12月に人類学教室の定例発表会で報告してやっと終了しました。

それから二十年もたって昭和46年彦崎貝塚の件で山内先生に相談したら、人類学教室では今は、彦崎貝塚にたずさわった人々は退職して発表する予定はないから、君のほうで発表しなさいとの許可をいただき、人類学教室でまとめたものを持って灘崎町長三宅八十一氏（この人は灘崎中学校で共に教鞭を取った人）に相談したところ、予算上印刷発行することは考えられないとのご返事でした。私も岡山県遺跡保護調査団の一員として、こわした遺跡を何とか記録に留めておかねばと思い、自費出版をすることにしました。東大の遺物は実際に手にすることができましたが、発掘当時の写真は無く、実測記録は、私のメモ帳のみで正確なものとは言えないまま昭和46年に『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚報告』として発表したのです。

東大が調査したあと灘崎中学校で昭和24年、独自に一区のみ発掘し、出土した遺物は中学校に保管してあるはずです(編集者注１)。また、その年に広島大学の池田次郎先生も一区画だけ資料集めに発掘されています。

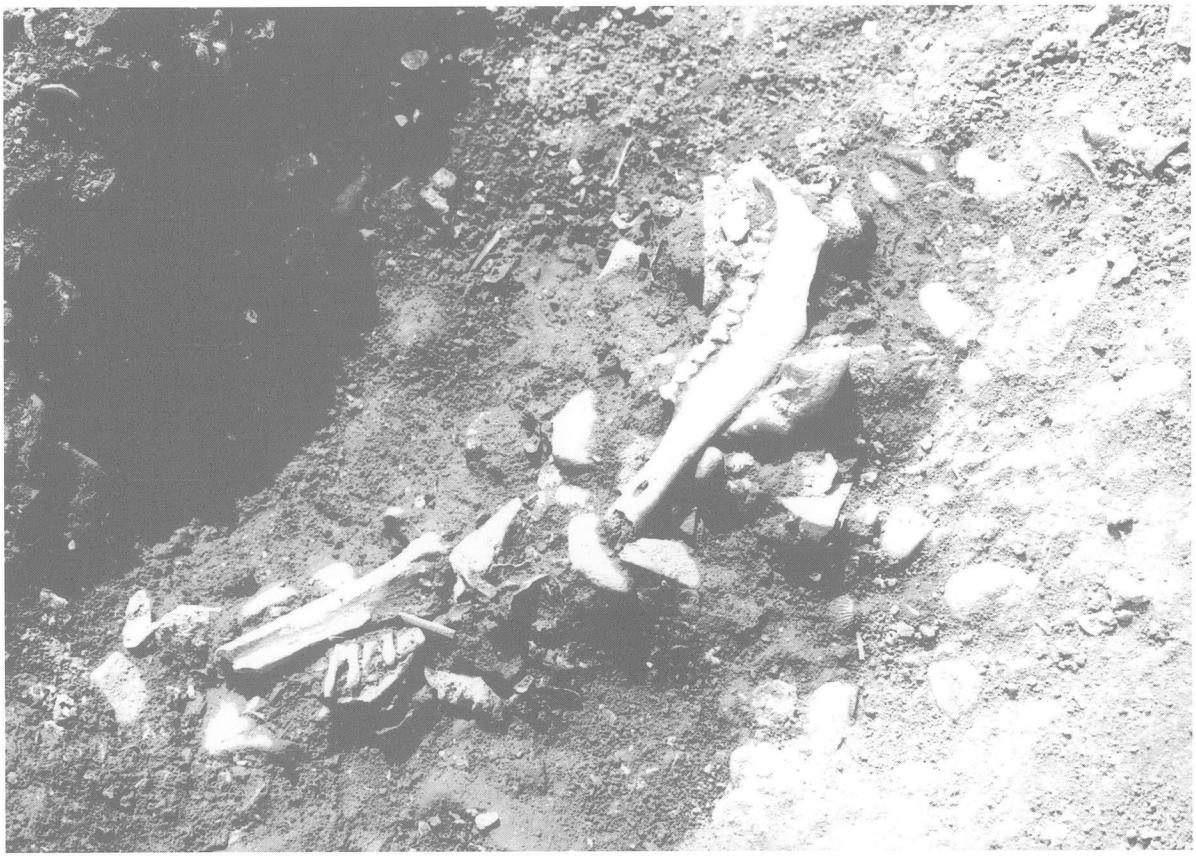
この貴重な彦崎貝塚という遺跡を私達は町内の誇りとしてこれからの子孫に保存し、伝える義務があることを知っていただくために、発掘にたずさわった者の一人としてここに思い出を記したのです。

（編集者注１）現在は、岡山市教育委員会が保管している。

写 真 図 版

（平成19年１月撮影）

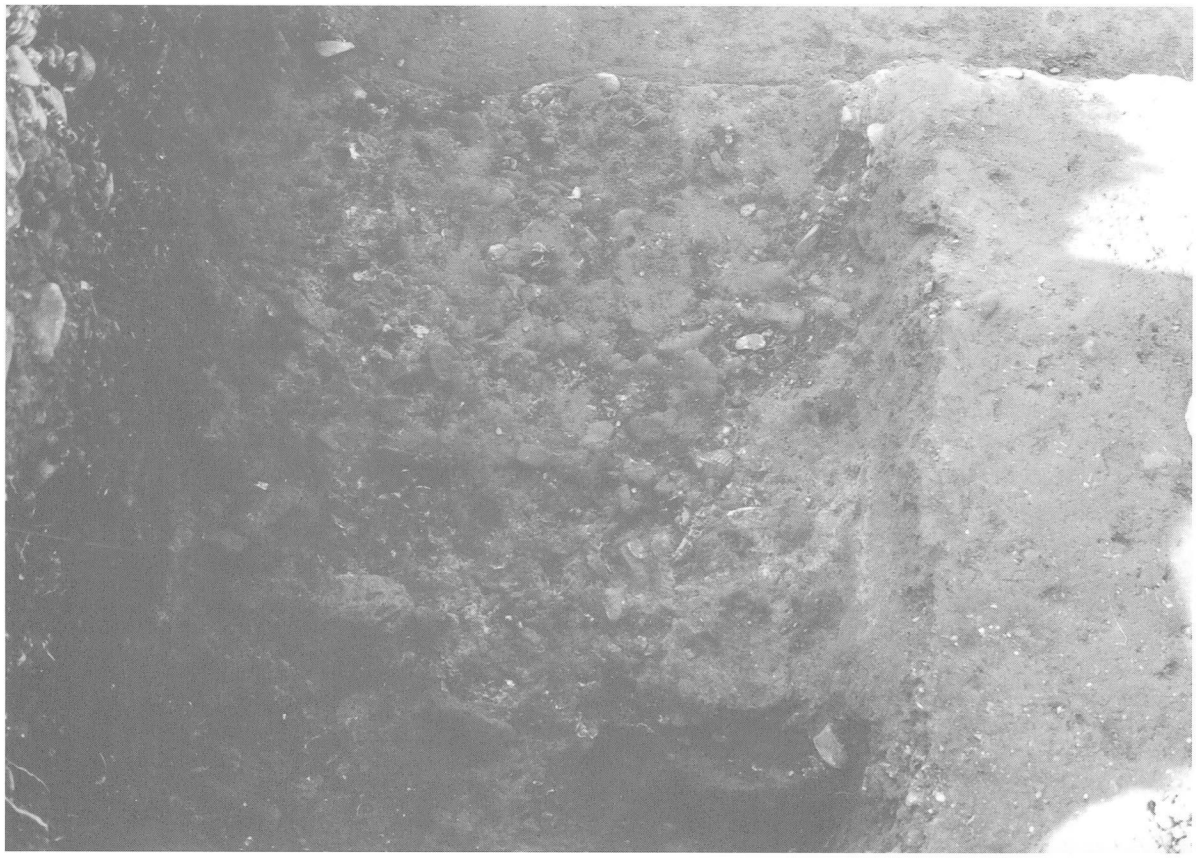
1．平成16年度Ｔ23調査風景（北から）



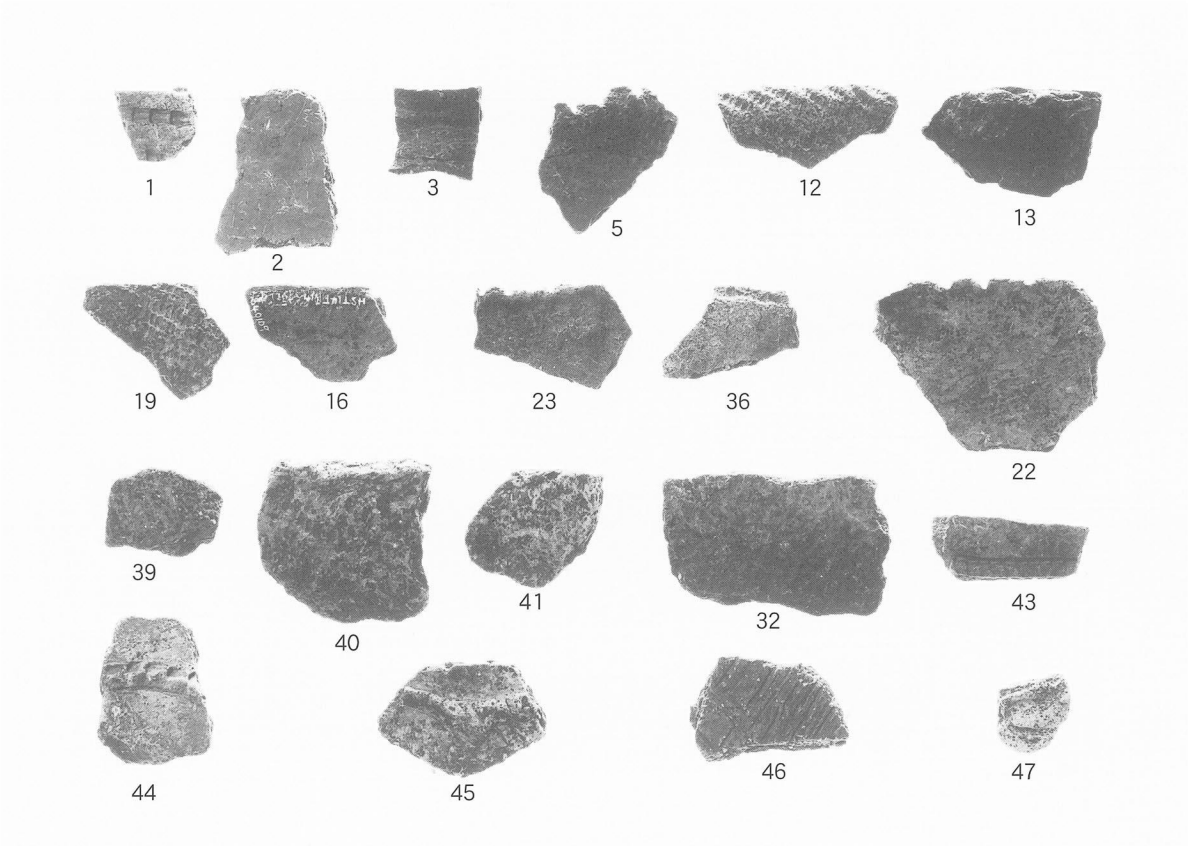
2．平成15年度Ｔ14Ｄ区ニホンジカ検出状況（彦崎Ｋ２式期、北西から）

図版２

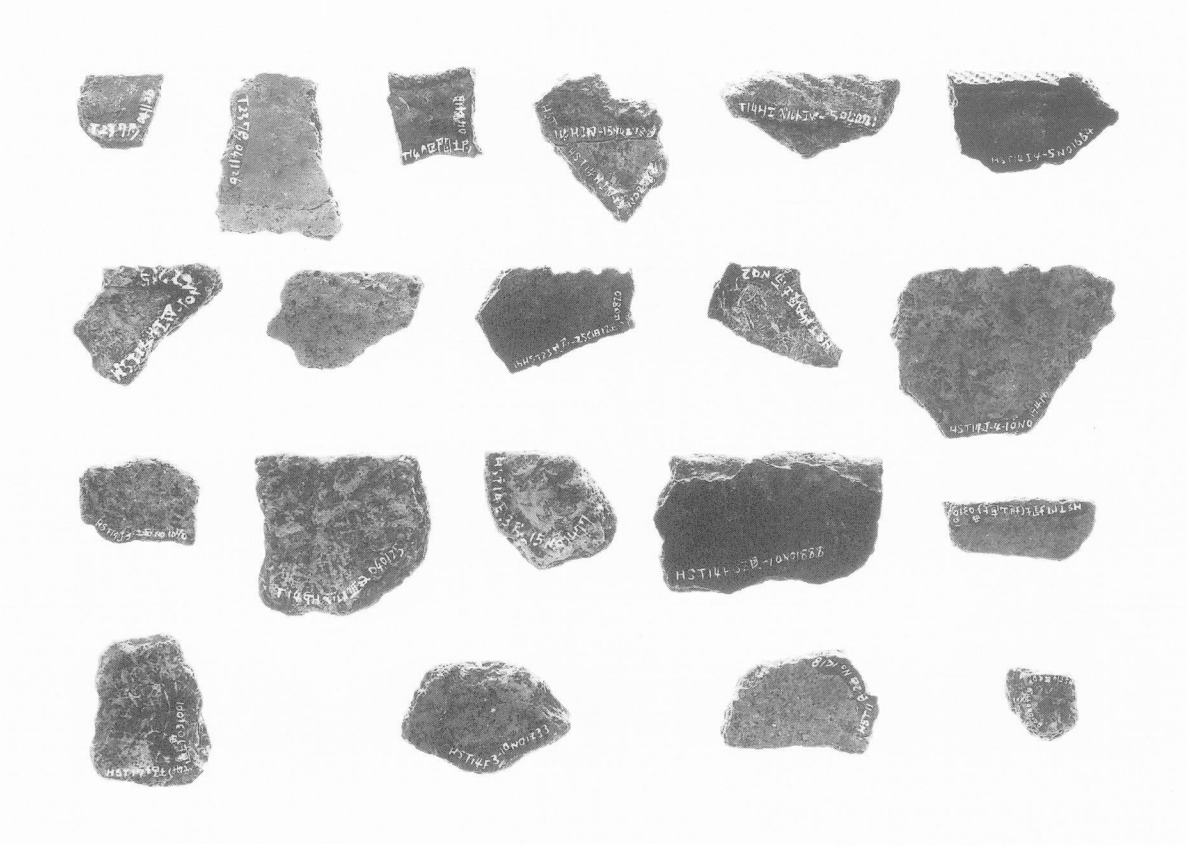
１．平成15年度Ｔ15炉５検出状況（彦崎Ｚ１式期、北東から）



２．平成15年度Ｔ14Ａ区灰・焼土面検出状況（彦崎Ｚ１式期、北東から）

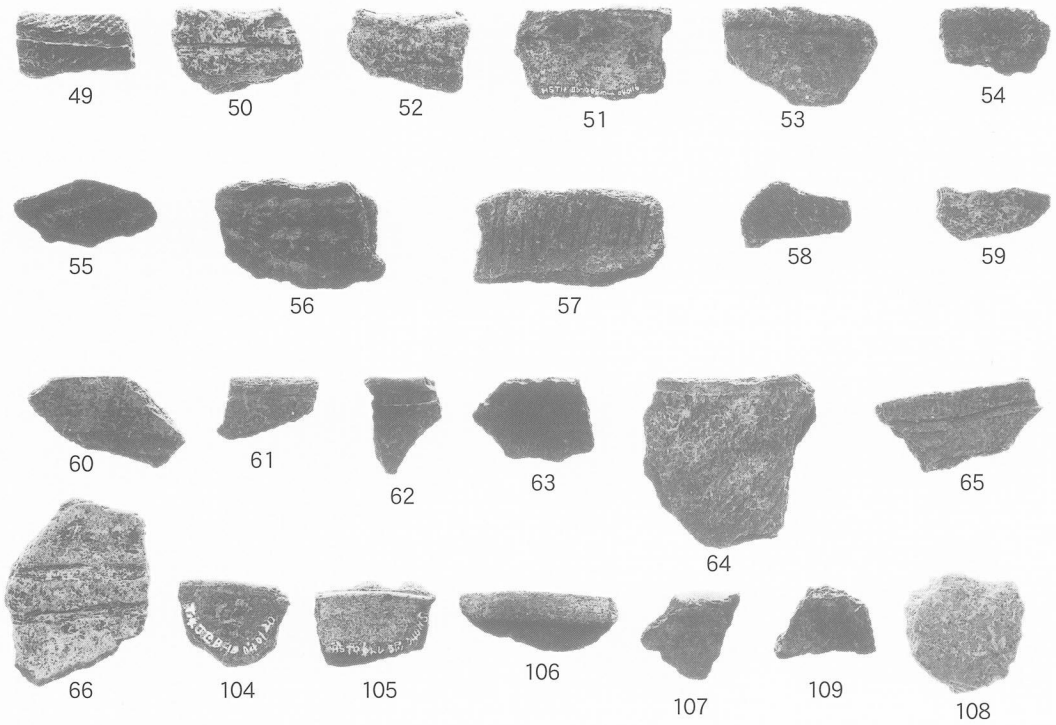


1．前・中期土器（表）

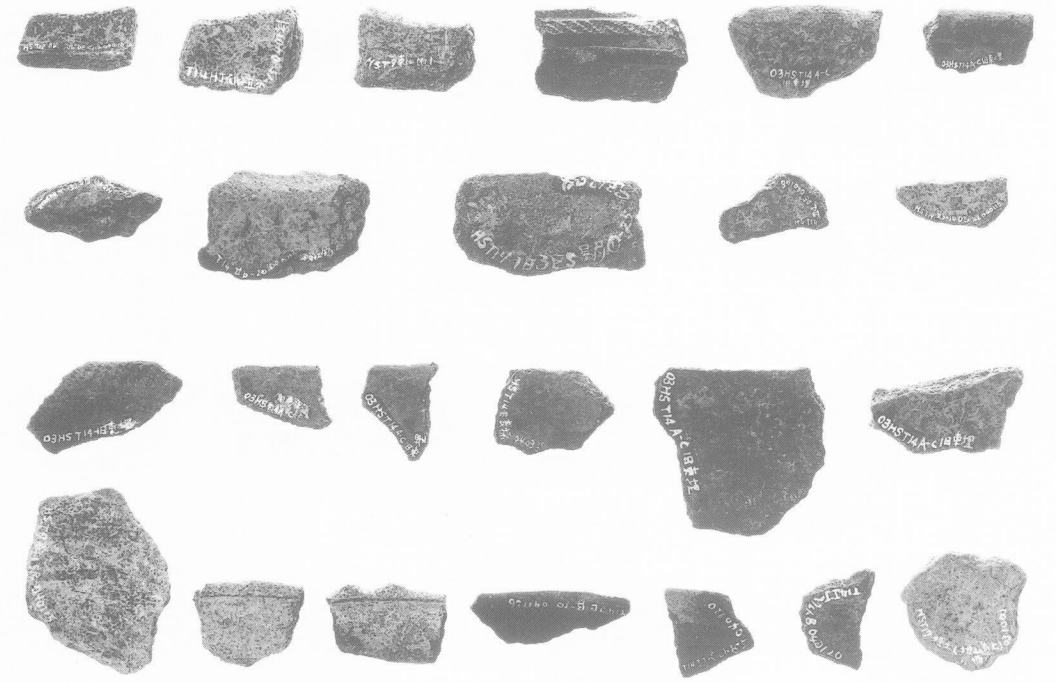


2．前・中期土器（裏）

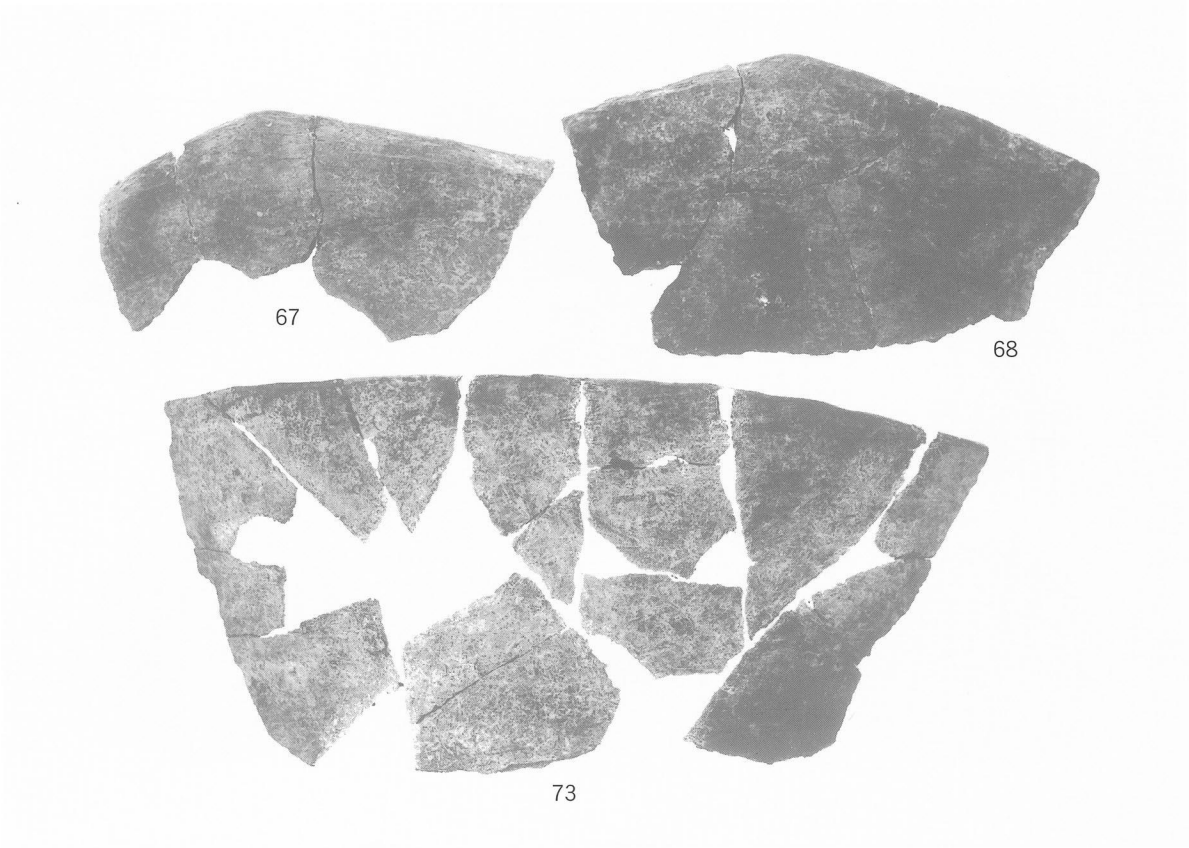
図版４



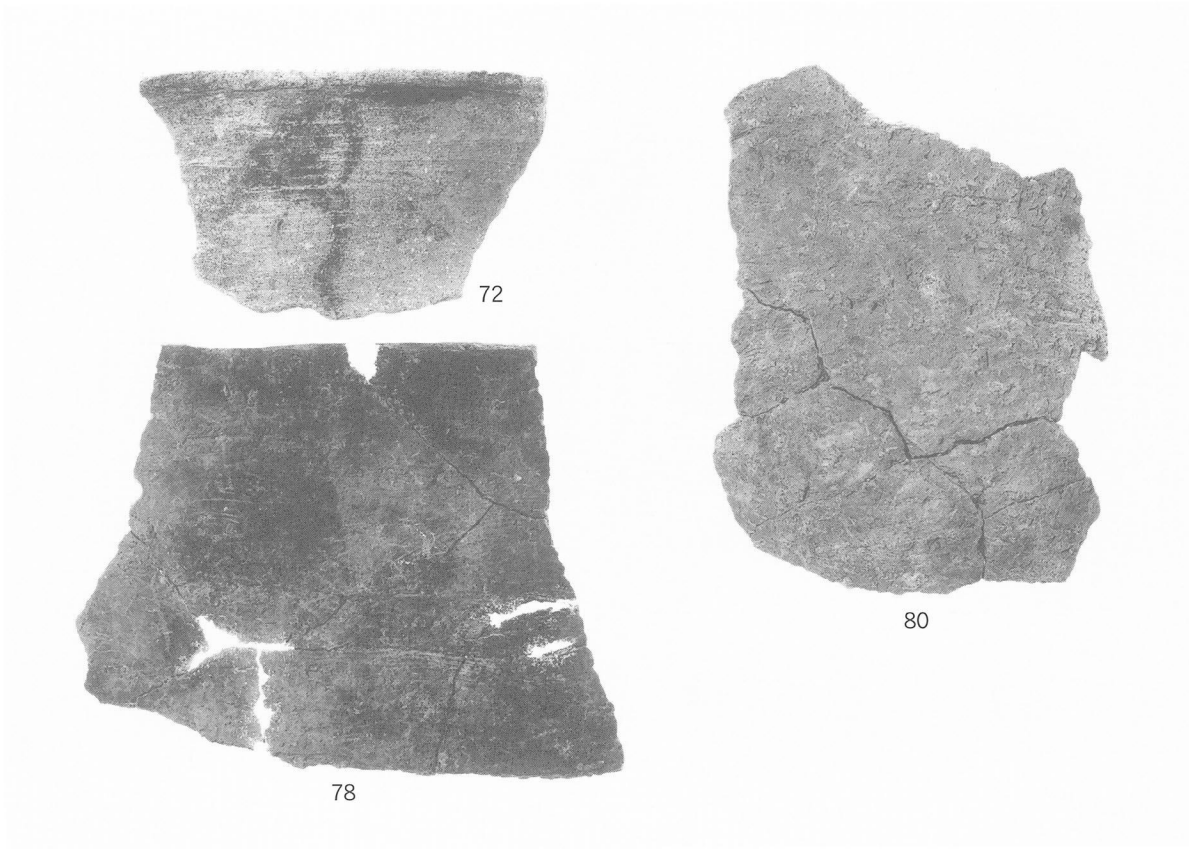
１．後・晩期土器（表）



２．後・晩期土器（裏）



1．後期無文土器①



2．後期無文土器②